

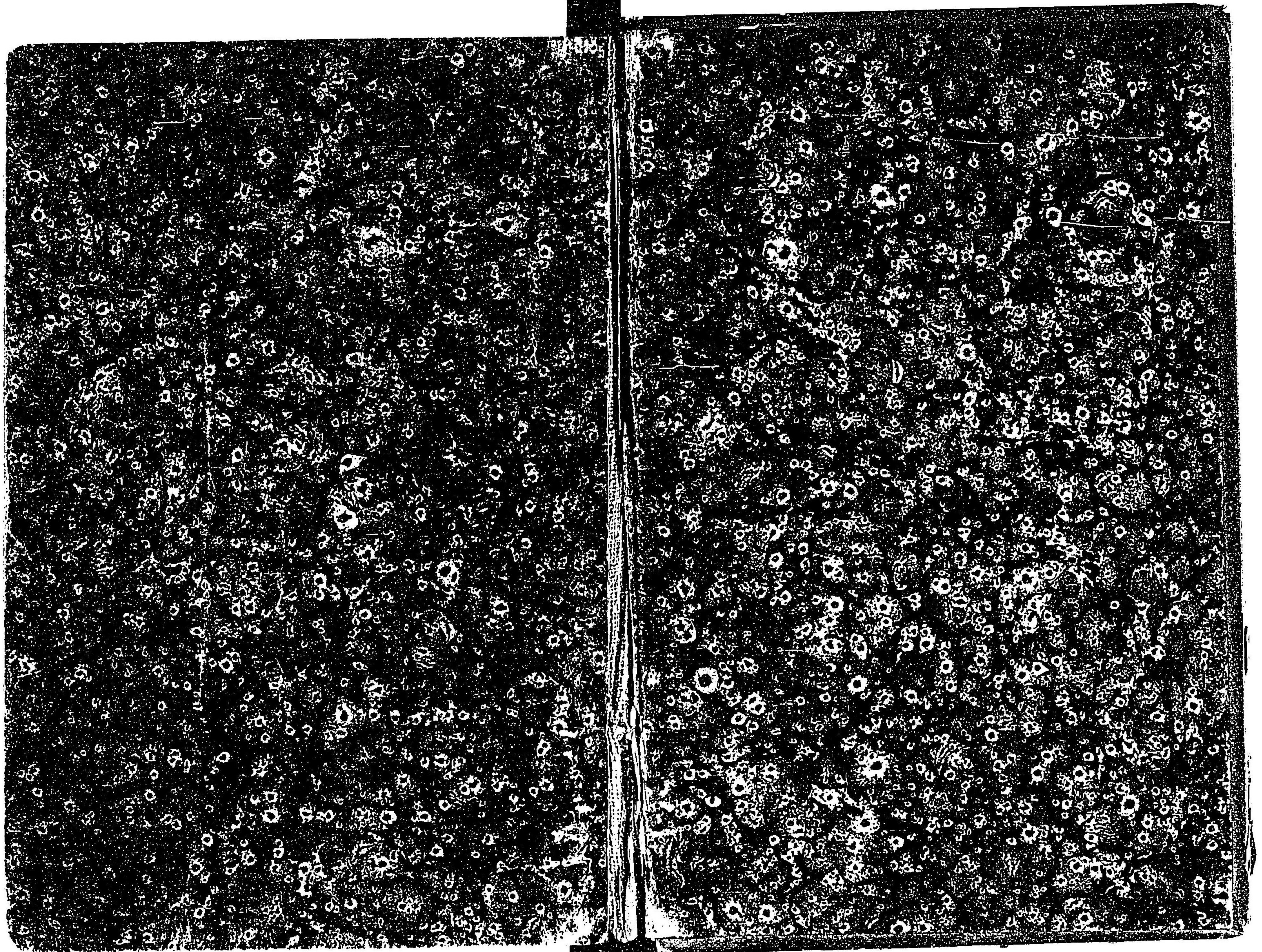
世界各國  
圖書總覽

大日本教育會館			
五	三	九	
五	六	三	九
册	號	架	函

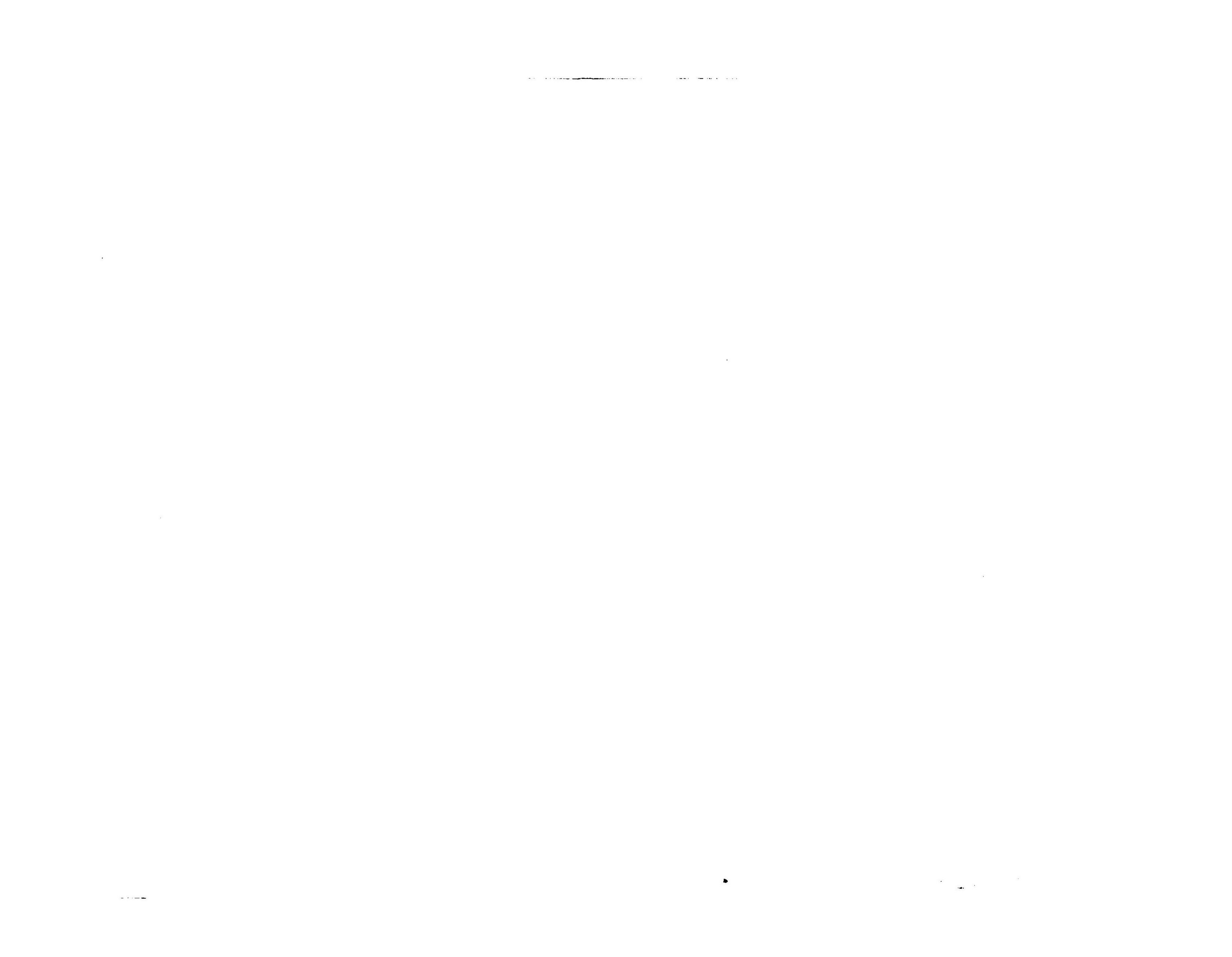


GUIDE BOOK  
ROUND THE WORLD.







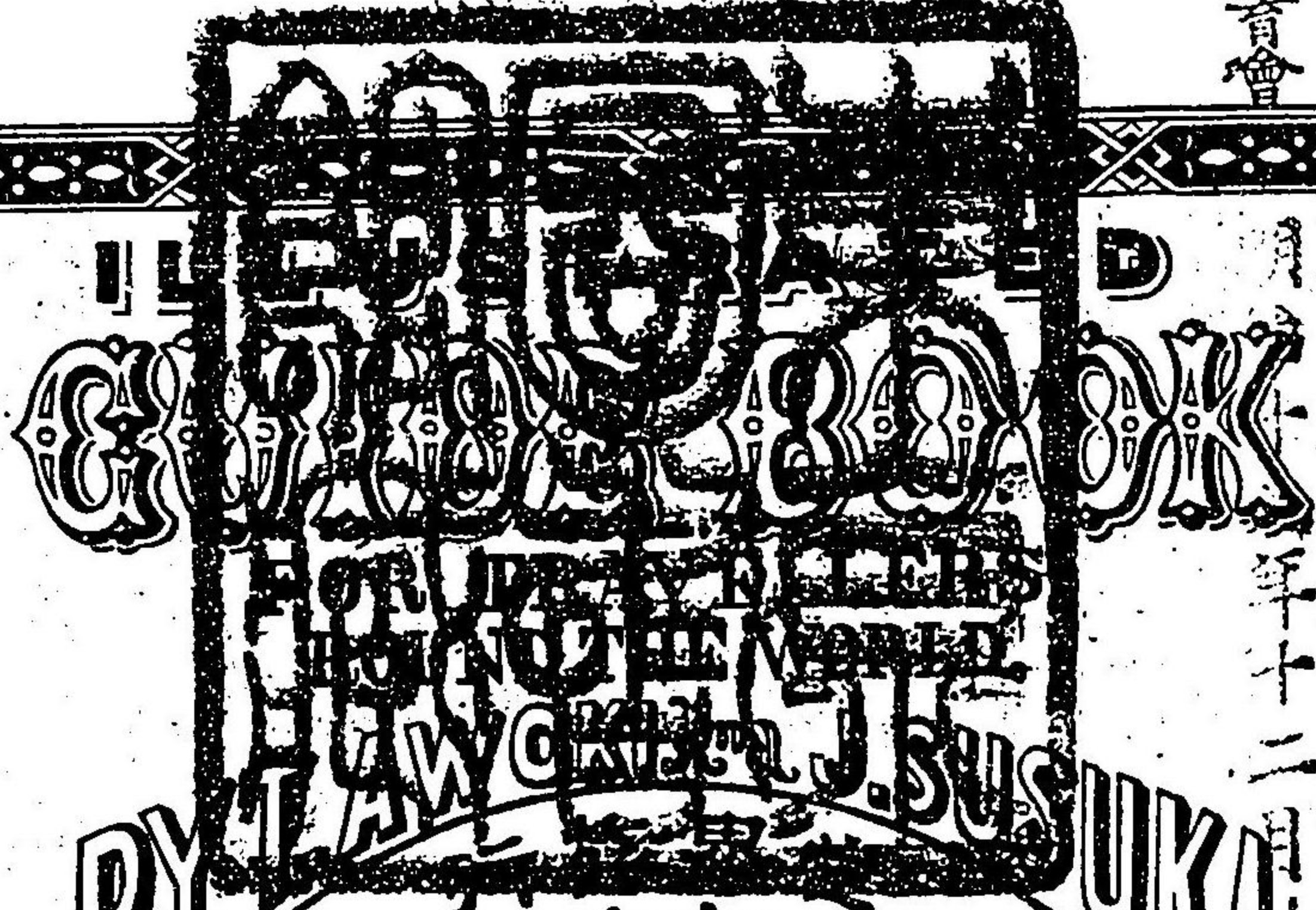




貸教育會

特 62

540



內務省支府

# 萬國名所圖繪

河津祐之先生題字  
 大居通豫先生序  
 南枝醇先生閱  
 青木恒三郎編輯

緬甸、暹羅、東洋、南洋、  
 暹羅、安南、支那、朝鮮、日本

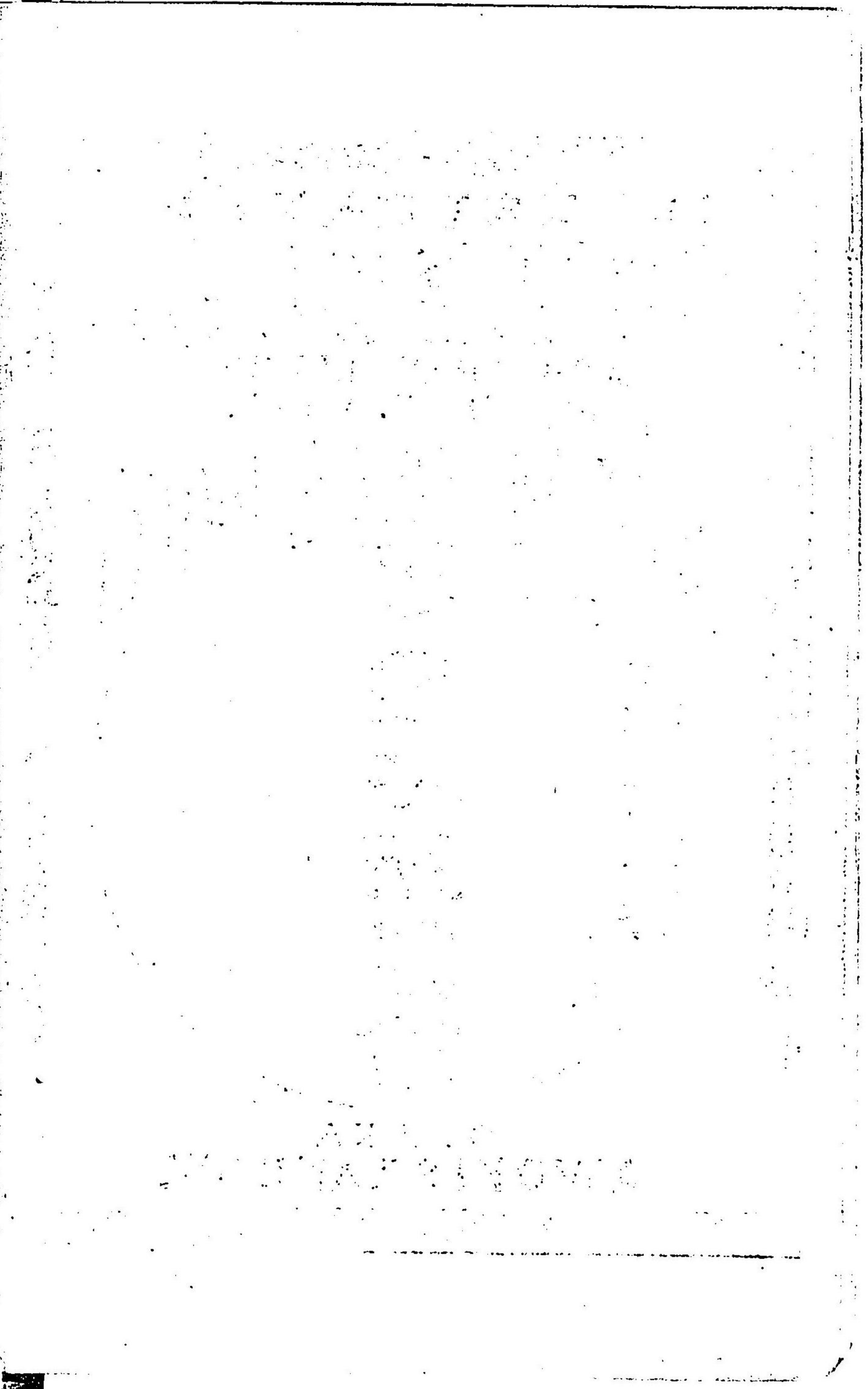
## 嵩山堂梓

OSAKA  
 AWOKISZANDOW.





松盛堂長相傳





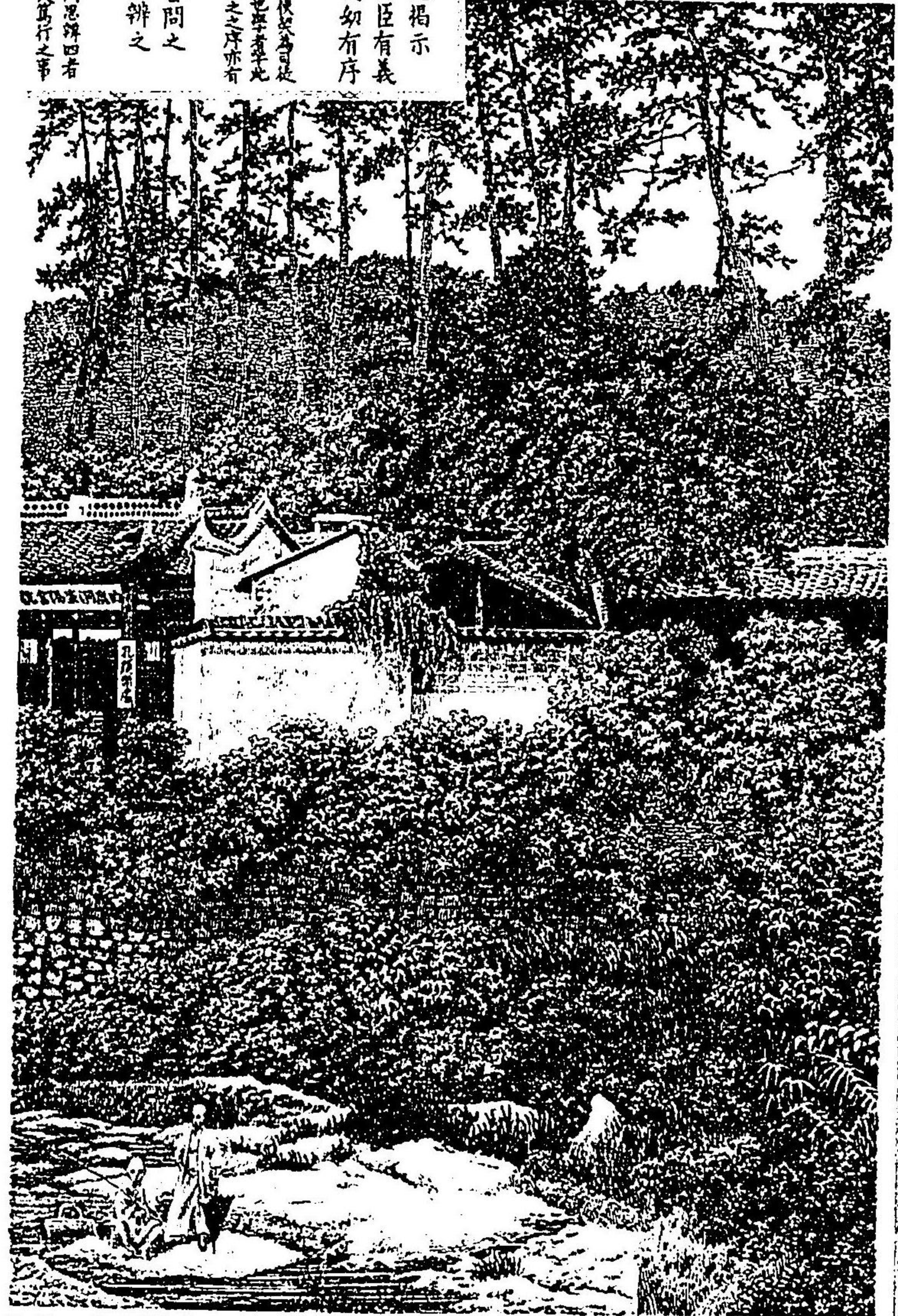
白鹿洞書院揭示

父子有親 君臣有義  
夫婦有別 長幼有序  
朋友有信

右五教之目 堯舜伏於此  
故教五教即此是也 學者此  
而已 而其所以學之序亦有  
五焉 其別如左

博學之 審問之  
謹思之 明辨之  
篤行之

右為學之序 字字思之 詳四者  
所以窮理也 若夫篤行之事



白鹿洞

則自修身以至干履事物  
亦各有要其別如左

言忠信 行篤敬

懲忿窒慾 遷善改過

右修身之要

正其義 不謀其利

明其道 不計其功

右處事之要

已所不欲 勿施於人

行有不得 反求諸己

右接物之要



之圖



日 本 人 支 那 人 運 送



第五圖

卷之七

世界萬國名所圖繪第七卷

緒言

抑も本巻は後印度  
マレー半島南端の  
其より内地は杖を曳き  
是より暹羅の東部なる  
瀾滄江に乗船し  
次で清國南部なる  
淡水等を巡航し  
陸路西湖を遊びつゝ  
北芝罘より上陸し  
順天府に到達し  
蜀の棧道經由して

緬甸國の首府なる  
シンガポールを寄港しつ  
ラオス番部の北の端  
ナンコンワットの古趾を觀て  
安南柴棍府を遊び  
廣東府へ着船し  
福州府を寄港して  
上海港を趣きて  
孔子の廟を訪てつゝ  
其より内地河南省  
漢中府を杖を曳き

マダレーより記を起し  
暹羅バンコックを渡航して  
ルアンヅラバング迄進行し  
カンボヂヤ國に進み入り  
首府順化府に赴きつ  
香港厦門や臺灣の  
其より寧波より上陸し  
是より又も船に乗る  
太沽天津を経て京師なる  
洛陽を経て陝西省  
かほも内地の四川省



成都府まで進入し  
 楊子江上舟より乗り  
 洞庭湖より舟をいせ  
 鎮江南京府を過ぎ  
 其より東北朝鮮の  
 神戸港より上陸し  
 各所畚繪を完結す  
 蓋し世界の旅行たる  
 記し彈し得る業ならず  
 大略蒐め記したきは  
 其一斑を知らせなば

是より東より歸路を取り  
 流き又循ひ湖北の  
 其より又も湖を出て  
 漢州の名所を見終りて  
 京城諸港を通過して  
 我大阪より歸着して  
 實に非常の長途にて  
 さざとむ初巻を約したる  
 或は馬真と照り會し  
 編者の幸福限りなし

重慶府より名も高き  
 各府を通過し湖南省  
 漢陽赤壁等を経て  
 上海港より廻着し  
 長崎港より松を寄せ  
 茲に全く萬國の  
 一小冊子の詳細に  
 各國々の情態は  
 注意熱讀玩味して  
 時又明治十九年

編者識

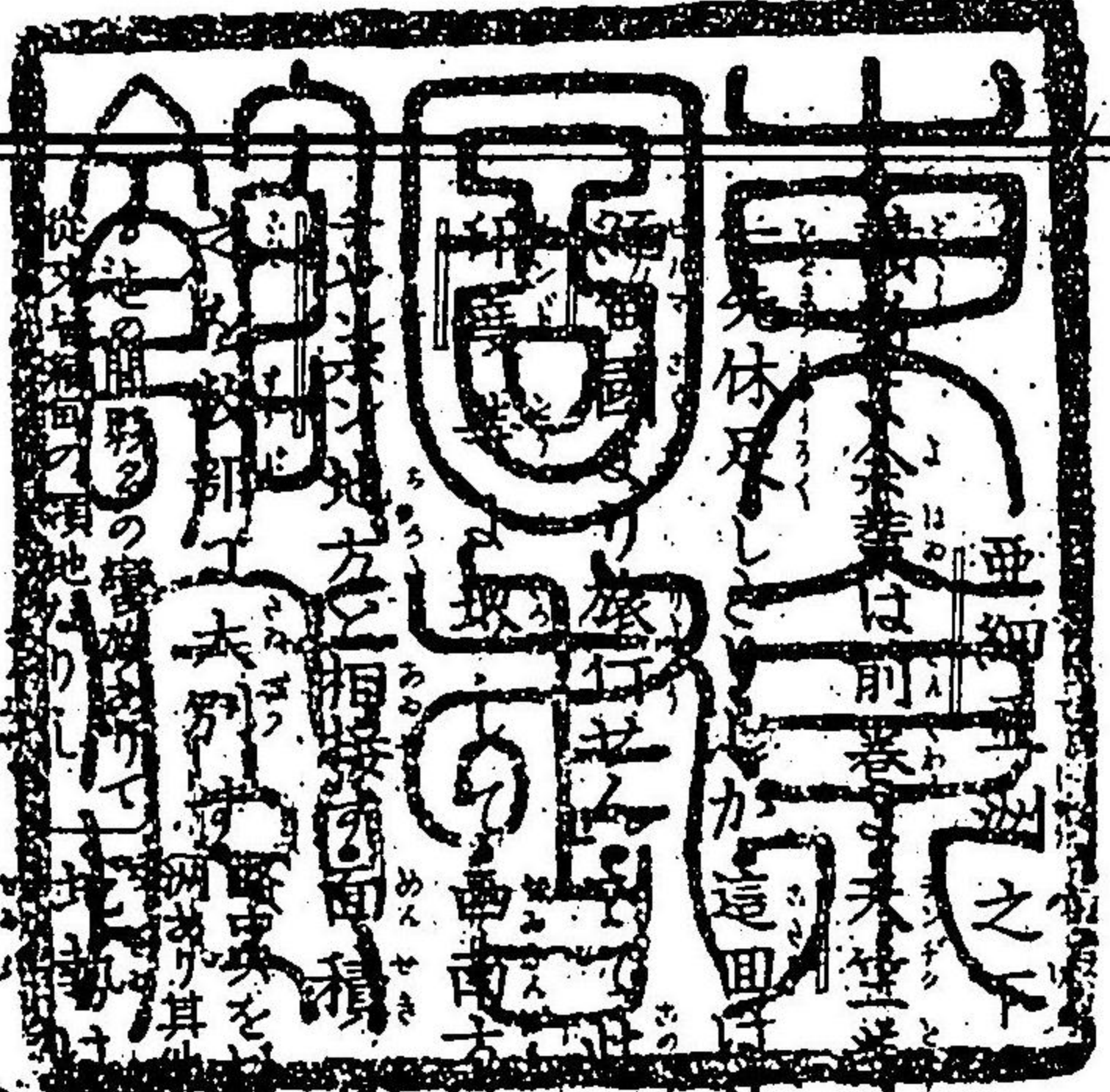
十有二月初七日

二月廿七日内務省交付

卷之七

世界萬國名所圖繪卷之七

南枝醇校閱  
 青木恒三郎編輯



ニーマダング山脈は西部に起伏し其中に一万五千尺乃至八千尺の峯を見る  
 地味は全體肥沃なる砂地の原野等にして東部に至れば岡地あり該脈多くは東より

緬甸國之部  
 旅行して雪山を北に越へ西藏國の都府に着き  
 具より南進し後印度の部に入りて昨冬英は吞きたる  
 國は東方を暹羅と支那とに隣接し西北方は西藏  
 國は孟加拉の灣に瀕し南方はマレー半島北部なる  
 十有七万七千七百方英里人口五百三十万  
 本部と云ひ北にアッサム西にアラカン南にベンガル及びテナッセルムの諸  
 シアンカンエンガチアル及びムニバル等の各州と又東の方にはメコング河に至  
 國の中央にイラワデー大川あり北より南へ貫流し



GENERAL VIEW OF

-十

景全府一



緬甸人は英人を憎悪の余り市街中  
 六ヶ處は火を放ち大に騒擾したる為め  
 破壊に属するもの多く又本末此都府の  
 街衢は甚だ汚穢して市民の家屋は紅色の  
 木材及び最と太き竹を以て造営す  
 各家の棟は多くして床の高さは四尺余  
 入口段階の設けあり毎戸に豕を飼養する  
 甚だ多く街上の汚物は彼の餌食なり  
 市内は格別優きる富商家を見させども  
 又花子や乞丐等貧窮なるもの更だ死し  
 元來緬甸の人民は古來飢饉を知らずといふ  
 偶ま路傍に乞食の徘徊するを見る時は  
 通行人ら跪き厚く之を禮拜す

卷之七

THE CITY OF MANDALAY.

+

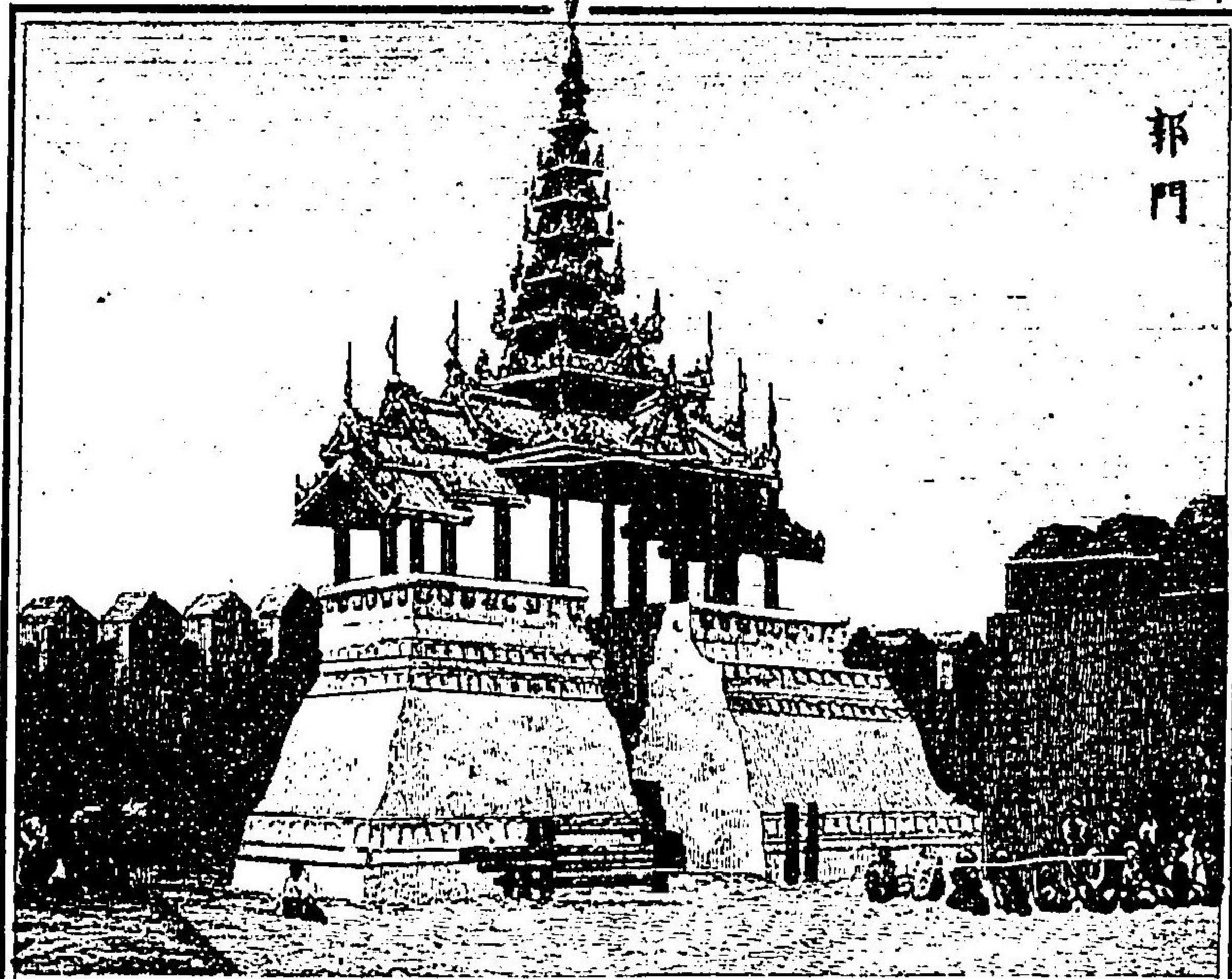
レダンマ



西に向つて盤桓しイラワデーの支流なる  
 分水嶺は接續す生産品は金銀や  
 碧玉紅玉硝石や銅鐵黒鉛石炭油  
 米麥生糸絹木綿砂糖烟草臘漆  
 麝香象牙蜂蜜や木材麻布等多し  
 首府をマンダレーといふ  
 マンダレー府之記 西藏國ラサチ府より  
 東南七百五十英里  
 即ちイラワデー河の中流右岸の都會にて  
 ラングン港より派る四百英里の處なり  
 人口七万二千零三百六十余ありて  
 英國人や支那人の雜居する者まこと多く  
 通商盛んの土地なきと昨冬英兵闖入し  
 屢々戦闘爲したると本年四月十五日



邦門



松屋堂

是き佛教の戒律を守ける者を知せり  
 又通常の人民は工匠或は田園の  
 散工等に従事して瑣細の賃を得る時は  
 即ち之に満足し其勞錢の竭きぬ間は  
 また労働を為さず偶ま巨資を得る者は  
 善事善持するのみならず其出す所は得しより  
 却て多額なりといふ其意は來の世に於て  
 應報を受ん為めなり又國民が種族中  
 貴賤貧富の區別をば層と為さざるは  
 其固有の風俗中着しきの一として  
 即ち國民一般に其言語應接上  
 僧侶と王とに對すは毫も貴賤貧富の  
 區別を除きては一切衆生を平等と  
 區別を為さず是を蓋し一切衆生を平等と

見做す所の佛教が素因を為せる者ならん  
 又此國の婦女子らが自由を享るの大なるは我東洋の諸邦中其比を見ざる所にて  
 凡そ婦人が他の家へ嫁する時持参せる金錢其他の物品は其子或は継嗣者の  
 利益を謀る事の爲め自身之を特有し後日離婚を遭ふ時は右の外婦が結婚中  
 自己の勞力に依て得或は継嗣に由り得たる財産等をも携へて家へ歸るを法とせり  
 蓋しケ様の事柄は既余輩が旅行せし歐洲中最開明の國に於ても未だ曾て  
 見聞せざる所なり又婦女子の結婚は平常已きが好愛の男子に嫁ぐものとして  
 爾後或は夫の爲め怒を惹起事あらば自ら適意を離別せり蓋し離婚の方法は  
 甚だ簡易の者にして即ち婦人は居村なる長老殿の許に行き離婚の理由を告訴せば  
 長老理否を裁判し正當なきは直許せり  
 又婦女子らの教育は男子の如く及ばねど公私百般事務上の道に熟達せる事は  
 實に驚く斗りにて商賣其他萬端の主要なる事は皆妻が自ら任ずる所とす  
 故に一家の全權は殆ど妻の手に在りて所謂牝雞晨をば告る者比々皆然り





松屋堂別



卷之七

右は即ち此國の習慣かき誰一人不平を唱へざるのみか数百万の塔殿は皆婦の尻敷敷きつゝ、頗使面従卑屈も、因循然なる奴隸なり蓋し國民英國の治下立ちて今より後開化の空氣を呼吸しつゝ人智大に進化せば我日本とは反對の女男同權論や亦男權擴張論等を主張するに至らん乎

又人民中滑稽や諧謔等を嗜む者甚多多く隨て俳優藝妓等もあり言語を弄し洒落を為し或は戯曲院本に戯詞を見るは緬甸語の韻字に富める故なりと

まゝ此土地の人民は老若男女抱らず喫煙を嗜むの風ありて余或る街を過る時童男童女隊を成し各自煙草を薫らして歩行するを見請たり其巻煙草は大にして徑一寸も及ぶべく彼の妙齡の別嬪が之を口にし散步るを余儕の眼より視る時は甚だ醜き様なきど鼻下長連は怪まず否も佳人が平常に情婦に對する贈物は己の自ら製したる若干束の巻煙草を釣るの具かりとぞ

婦人嘯は中止して是より名所を見物せん府の東方に小河あり之をスケエチヨングと云ふ橋を渡りて右折せば一の大なる伽藍あり是を佛教の寺院とて國人之をガラムと云ひ



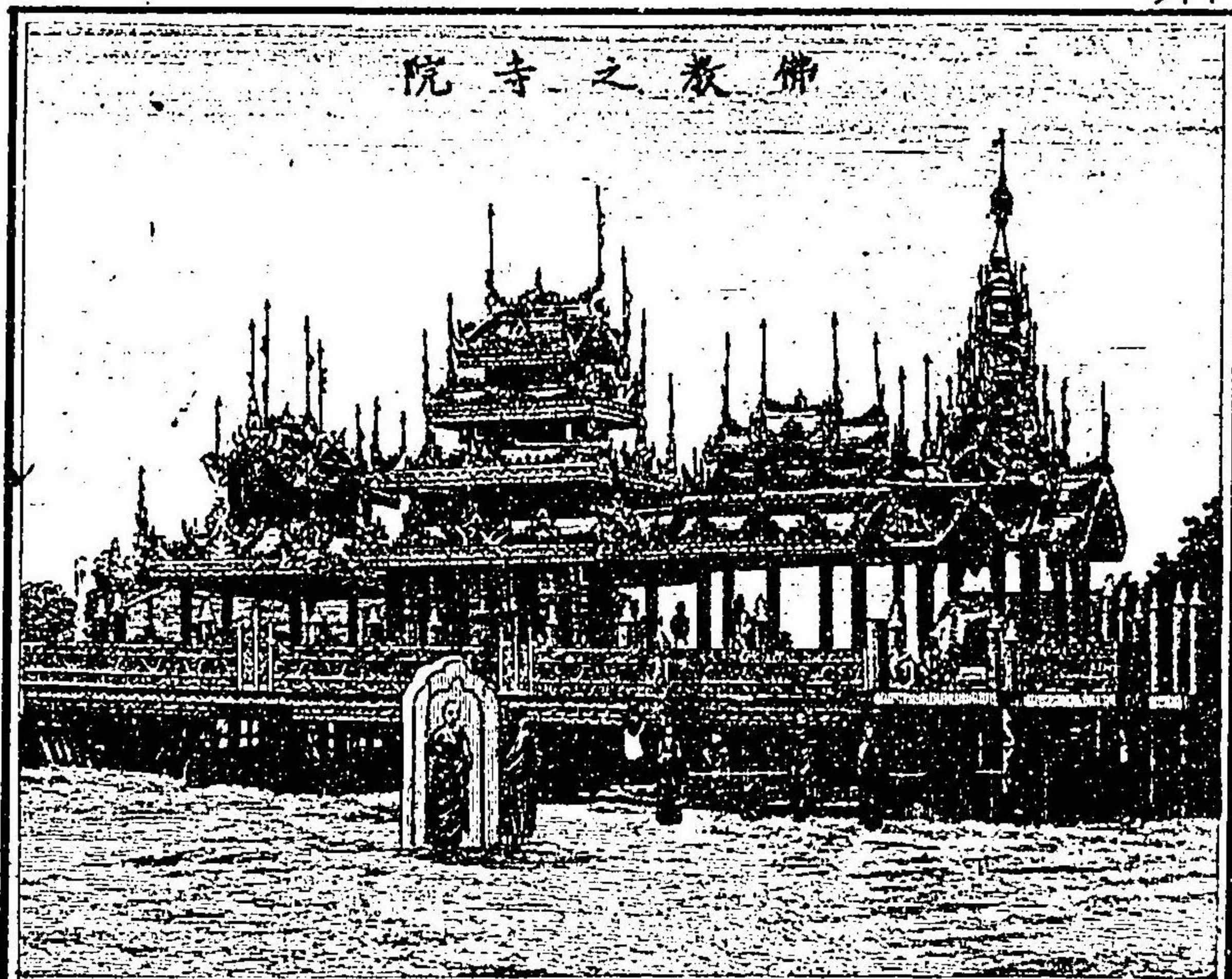


全内景

パヤの號を以てサリパヤは緬甸語の中  
 最も尊き稱號とす又僧侶は尋常の  
 態度動止等迄も俗家用ゆる言語とは  
 全く異なる稱ありて之を崇尊形容は  
 王七及は如所なり

又ポンギーの身體は神聖侵すべからざる  
 最も尊きものとして彼を何事をも為すあるも  
 國の法律以てよく之を制する事を得ず  
 蓋しポンギーなる者は迦毗羅蘇都の支流且つ  
 繼嗣とせらる尊號をサギーウヤン王といふ  
 又國民は月四回新月の第一日第八日満月の日及  
 び満月後の第八日を勤行日とす  
 厚く佛事を営めり此日や耶蘇の教徒らが  
 日曜日を守るより遙かに嚴且つ勝ると云ふ

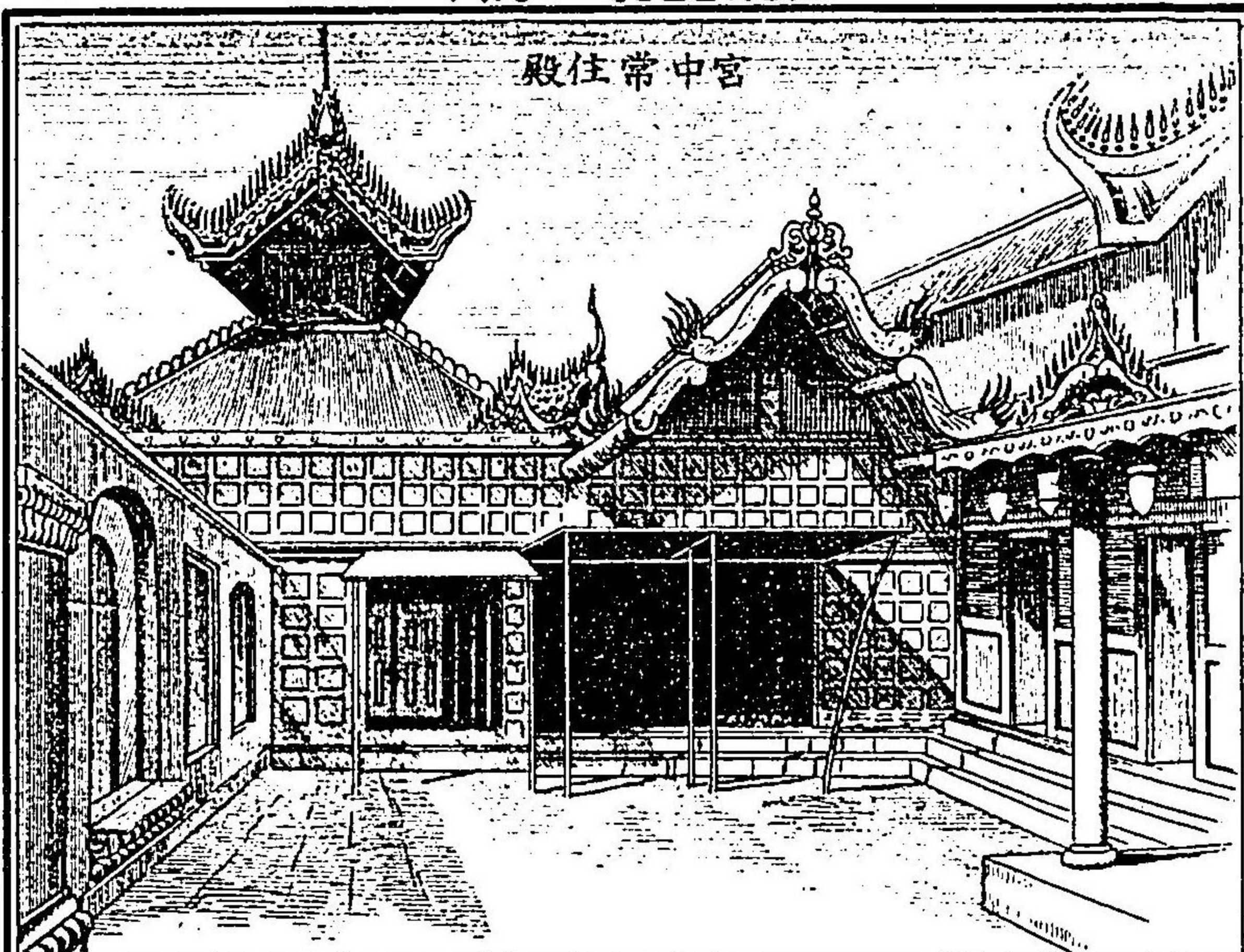
院寺之教佛



構造甚だ美を竭す蓋し緬甸の佛教は  
 釋迦瞿曇氏が布衍せし教義も最も近くして  
 彼の諸派の佛教中極めて純一ものとせり  
 又此國の法として寺院は総て國立の  
 學校を為すのみならず何人なりとも一生中  
 必ぎ一度出家して僧侶と爲るを例とせり  
 而して僧と爲る時は頭髮を剃り黄色の  
 法衣を着せざるを得ず既し法衣を着せざば  
 捨世の儀式を執行し且つ少くも一回は  
 彼の頭頸に鉢を懸け他の常住の僧侶と  
 俱に近郷近在に托鉢するを例とせり  
 又年長の俗家は最近出家せし者の  
 徒弟と爲るの例として之に面稟する時は

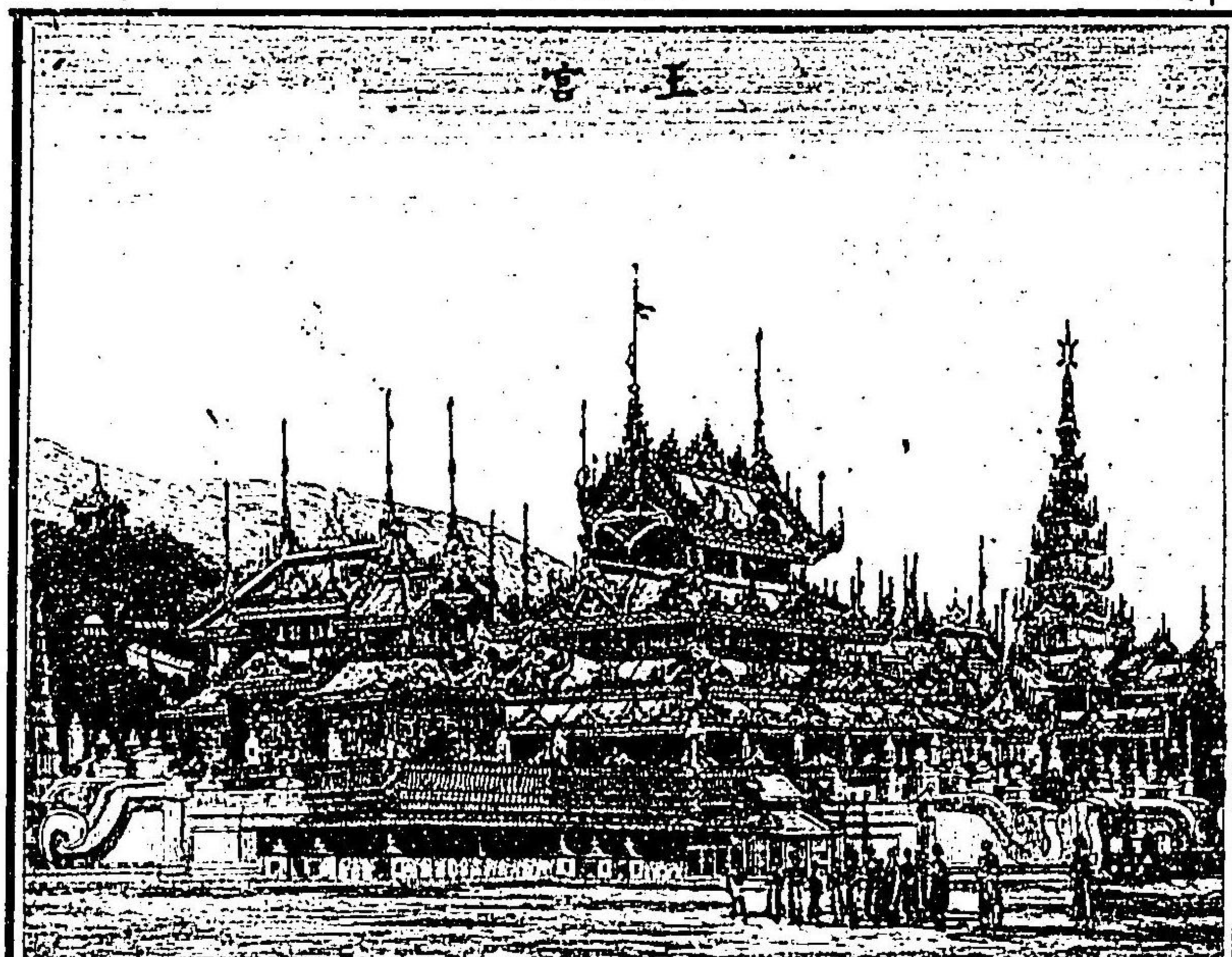


殿住常中宮



癸王ジーポー並に皇后姉妹

宮王



さて此寺院より南方へ歩行する事半英里余こ  
 名高き王の故城あり地形方正其周圍  
 殆ど二英里余ありて且つ其四圍を繞す  
 石墻濼溝を以てせり墻上各所より棟の  
 櫓を點々配置して十二の巨門を備へつ  
 芙蓉橋を之より架きまゝ壕中よりは紅白の  
 蓮花爛漫美を競ひ龍首の筋を浮べたり  
 余や南門より入りたる正面王の巨宮あり  
 用ゆる所の材料は磚石良木等として  
 下方上銳層々と恰も浮屠の如くよて  
 彫鏤精緻を極めたり亦左右には大小の  
 支屋数棟を建て連ね常住殿や政廳や  
 彼の白象の厩等逐一教ふる違まなく

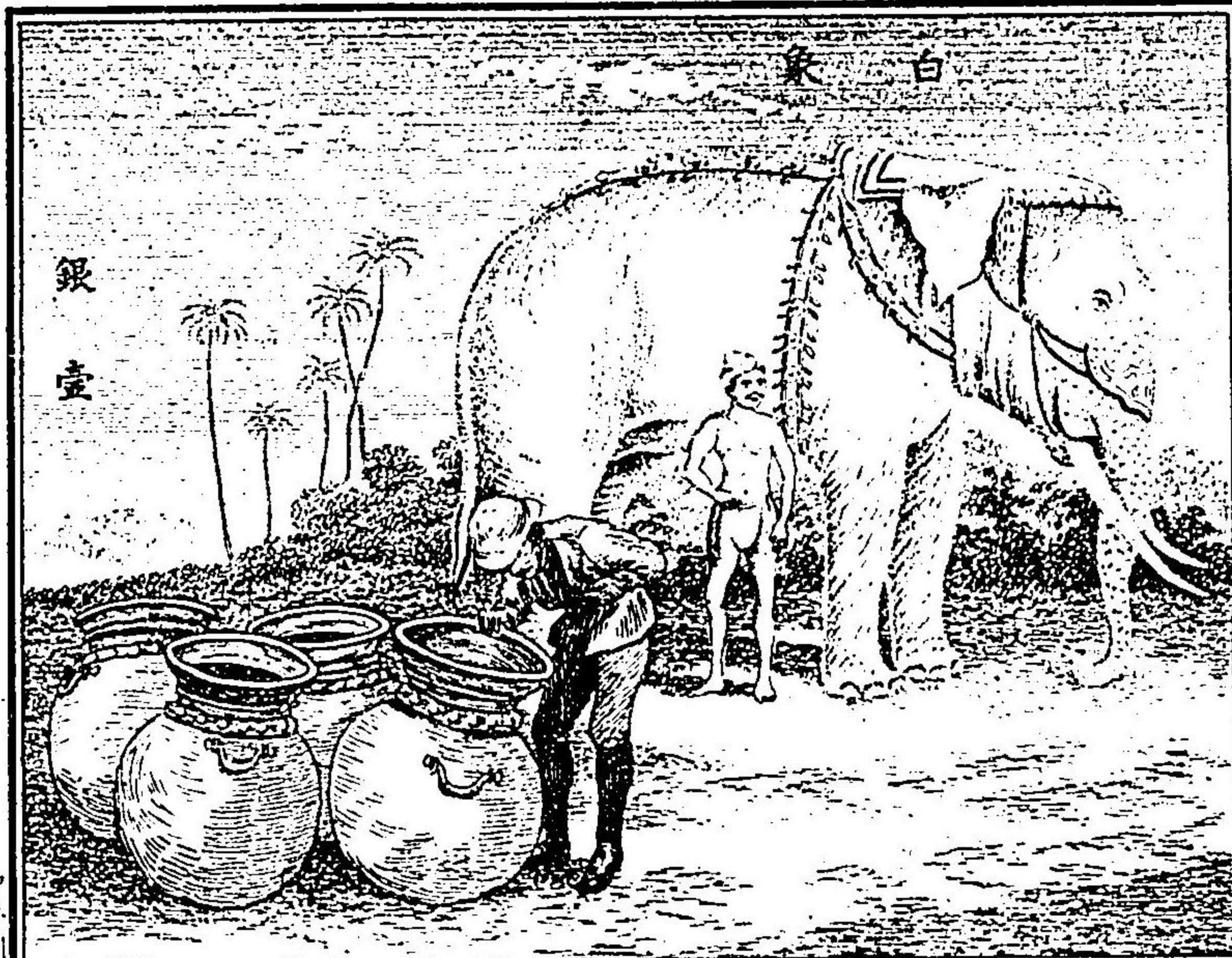


SHWE MAONG AND HIS INFANT CHILD.



メノンギーは生れしが  
 始の程は他の女兒と異なる所もあかりし  
 ニヶ月余を経たる時兩耳の初毛長くなり  
 五ヶ月目には面部より胸部腹部に至る迄  
 一英寸餘延びたをば兩親痛く悲みて  
 屢々之を剃りたるも爾后弥蔓延し  
 満一歳となりし時眼と唇を除く外  
 其全身に充ちこりき然るは言語動作より  
 其他総ての車輛は他人を異なる所なく  
 年齢五歳と成りし時先王之を聞きより  
 アアの都へ召寄て宮室中は養育し  
 廿五歳となりし際王命より故郷なる  
 親戚許より塔を取り中睦しく暮せしが

WHITE ELEPHANT AND SILVER BOWLS.



東北隅には大池あり其三面は小山にて  
 丘上風雅の樓を建つ又池中には浮宮あり  
 水宮を以て構造は陸のものを伯仲し  
 小艇に乗り往來す蓋し此府は今を去る  
 僅々三十三年前遷都したるものかきは  
 総ての建物新らしく實に清潔美觀なり  
 ○上欄に示せる白象は國王始め人民の  
 尊恭したるものにして平常食を與ふるに  
 銀の器物を以てせり。  
 又左に示す毛族は名をシウエモンゴといひ  
 世界無類の人種にて王室秘藏の一となす  
 今其履歷を釋るにシウエモンゴは女にて  
 今より六十三年前マターバンの一市邑



男女四人の子を生めり其内男子一人は右に示せし畜の如く母と同じき毛を生じ本年廿五歳なりきて其毛は柔軟く黄金色にて光澤ありまた現今毛の長さ面部に於ては八英寸首より以下は四英寸乃至五英寸余にして両腕並に太股の裏面に於ては稀薄なり蓋し是らの人種は實に奇異なる者なれば讀者或は怪まんなきせども全く事實にて右に掲げし三畜は英國ドクトルウナリック・ジョン・ロファードの兩人が先年緬甸を行し時馬真に取しを銅版に復寫したる者なれば聊か真を誤らず又本年二月英國より到達せし新聞は據せば先年米國にて珍奇博覽會を企てし有名なるパーナム氏の手代某は緬甸を行きて今の瘴王ジボーの大金を出し右の毛族を二ヶ年間抱へたき旨を申入れさきども彼の白象といふ王室人民の重んずるものなきは其求に應ぜざりし然るに緬甸は今我國の征服する所となりたるが爲めピバルノと云者右の毛族を求め得て是程マンダレーよりラングンに連れ行けるが這は歐米各國へ順航して看せ物と爲す積かり云々とあり而して此事は本年二月我國の各新聞もも記載せるを見たり

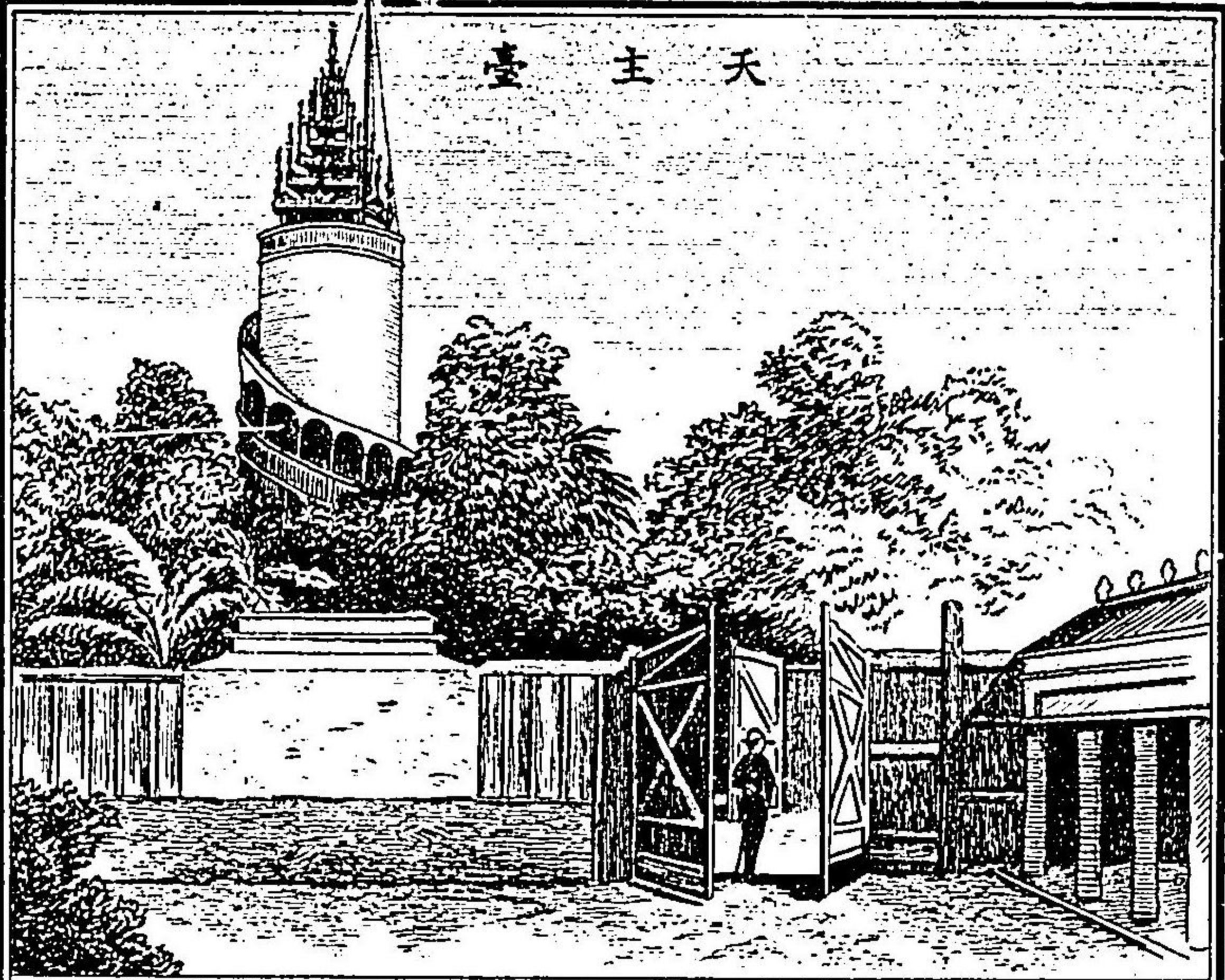
きて王宮中右の外記すべき程の奇觀なり然るに一の漏たるは即ち王家の歴史なり今其略を釋るに隨分奇談も多ければ聊か之を述んとす

蓋し緬甸の古代史は荒唐無稽の説多く記するに足るべき價なし然るに瘴王ジボーが祖先を誰かと尋るにアロムバラてふ王にして王は今を去せる事一百三十六年前

中井列

卷之七

THE BRITISH FLAGS INSIDE THE PALACE.



アヴァ府の西北八十英里・ノヨクメヨウといふ村の獵師の家は生きた其業を執り居りしが是より先き此國は屢々支那に攻めらきて國內大に分裂しビルマ本部やタイピング・ペグリアカン等と成り列候各地に割據して互に君主たらんとし内乱曾て絶へざりし然るに此時アロムバラ・メヨク・ヨウの旗を擧げ衆望を得て將となり聯邦諸州を攻伐し一百十有一年前遂に緬甸を一統し是に覇業を開きしが王又暹羅を征せんと大軍を率き發せし途上を去せしより第二子白象之君嗣て立つ然るに支那は此國の入貢せざるを憤恚り大軍以て寇せしが





英軍緬甸兵の破る

英領印度を侵す等大いに侮辱したる為め  
 一千八百二十年有四年に至り英國は  
 始めて緬甸の軍を遣り兩軍刺戦したりしが  
 英軍大いに敗を取りカルゴッタ府は退きつ  
 翌々六年又發しサーカカハルを將として  
 緬甸の軍を急撃し這面は非常の勝を得て  
 將よりアア府を衝んとす然るに王は和を請ふて  
 マーバンとアラカんとテナツセリムの三州を  
 英に割與しカチア州・インテア及びアッサンを  
 抛棄したるのみならずムニパール州を英國の  
 保護國と爲し媾和せり時は緬甸の人民は  
 倍々英を憎みつゝ一千八百五十有  
 二年に至り英國と又も大いに戦ふて

白象之君之を驅逐する前後四回に及びたり加之先王之遺志を継ぎて隣邦の  
 暹羅を屢々遠征し京城アユシヤを陥没せ王族大半を擄りしシアン諸州を蹂躪り  
 ムニパールを一統し版圖大いに擴張りて勢ひ四隣を震動す  
 然る是より數年前英人フイツと云へる者始めて緬甸に漫遊し地理人情を觀察し  
 之を世間は報じり當時和蘭や英國は既に印度に殖民し將に緬甸に通商を  
 為さんとすの際なればフイツの報を聞や否兩國使を遣して其修好を促しつ  
 幾かにバアモ等の地は掌大の地を借りて二三の驛鋪を開きしも土人の為め破壊させ  
 或は殺戮等遺ひ又往く者も更は先く且白象之君の薨するや國內又も擾亂し  
 外交上の違まかく一千七百八十有二年よりボタウパヤー王位を繼ぎ至りしが  
 英のカヒテンサイムスは印度太守の命を受けアヴァアに來りて國王に自今以後ラングンを  
 開港場とし英人の居留を許さん事を請ふ然るに此時ボタウパヤー英の威權に恐怖して  
 不利の條約を締結し尋で英人來りしが國民王を非難して鎖港攘夷の論を以て  
 駐禁公使を辱め或は英の人民を屠殺したるのみならず暴民私か一致して





緬甸王喬治一人居城英軍渡

再び敗北したりしが、此時英は條約の締結等をも為さずして軍をヘグーを占領し翌年平和を宣布せり。是に於てか緬甸國大半領の領地となる。然るにポドーパヤ王は民の爲に廢せらる。メンダメン王嗣を立て是にジョーボの父として世に賢明の聞あり王の位に登ざるや能く内憂を平定し外各國と條約し、マンダレー府を遷都して稍昌平を得たりしが、一千八百七十有八年十月薨去せり。之に由てジョーボは今日直ち即位せり。

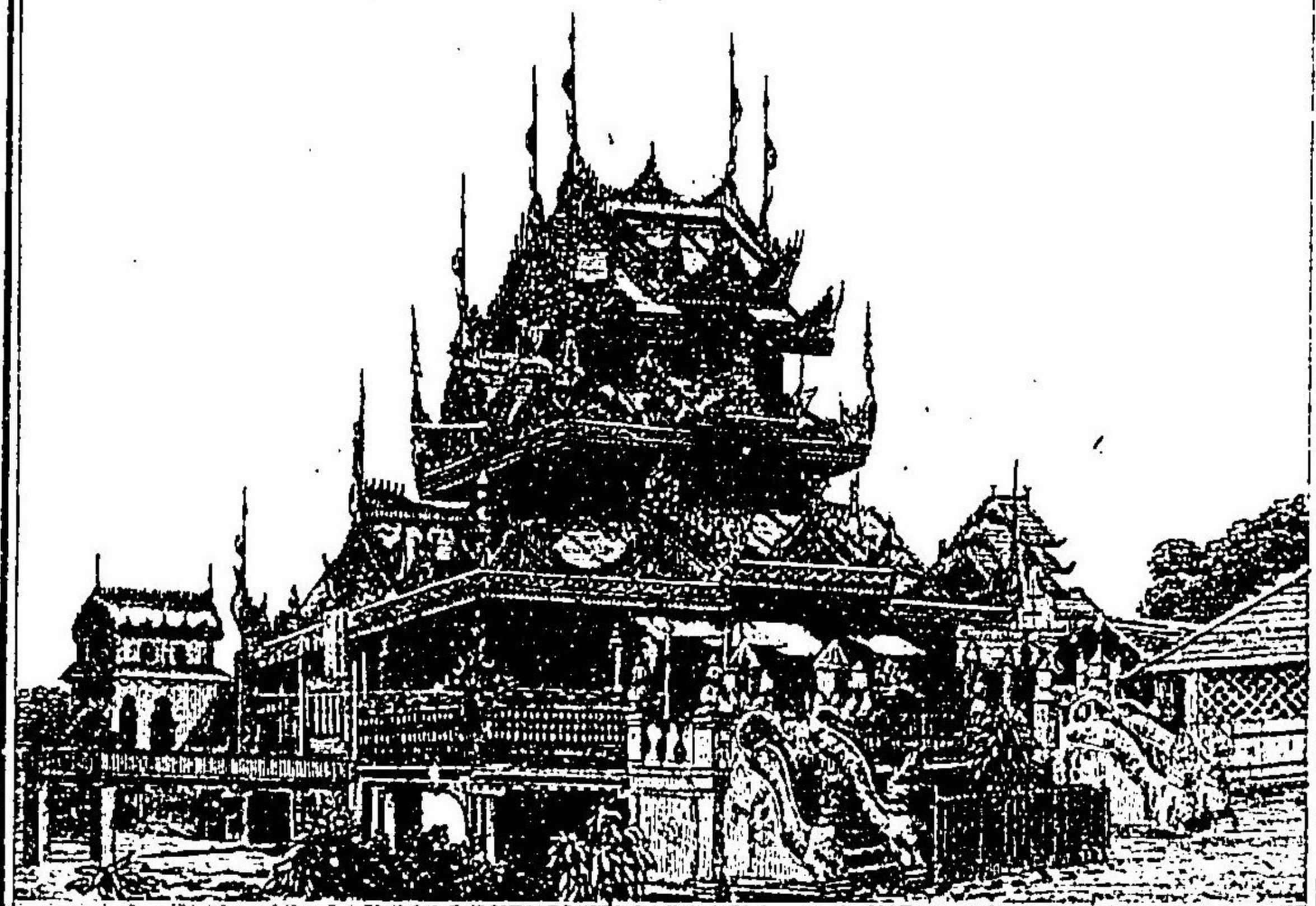
然るに、情弱之常、后妃や太后の箱制を受け内外の政務に過失多くして

民の望みを失へり。

又此國の風として凡る貴頭の人々が、僅が一二の妻妾を配るが如きは民人の尊恭せざる所とす。故に緬甸王室の制度は由きは苟も主なる者は少くも東西南北四宮中各一人の皇后を有さべく且此外は主の望みに従ひて可成許多を養ふを名譽となせり。是故に賢明なりし先王は合して五十三人の后妃を養ひ子を擧る。男子四十八人と女子六十二人あり。又此外に姝女とて數限りなき妾ありて、其子も許多なりしとす。其統計家の説は父王は毎年七人の子女を擧げし割合なりと。然るに癩王ジョーボの后妃は姉妹の二人のみ且つ五ヶ年間只僅づか五人の子女を擧げたるも、内三人は逝去せり。故に國內人民中主の不徳を嘆くあり或は輕蔑するあり。其尊嚴と威權とを全く失ひたりとす。又此國の政體は所謂專制政治にて生殺與奪の大權は皆國王の手にありし。而して政府の官制は古來世襲の貴族なく、人々登庸の制なりし。やがて官吏の任免は全く君主の喜怒あり故に文武の百官中眞の人々なかりしと。



アヴァ大府宮殿



緬甸商社の損害は元來商社か條約を履行せざるの罪にして其曲素より彼にあり我政府はさなきに平常彼の威に怖き責むべき無法の罪惡を黙許し居たる程なるに倍々我を輕蔑し些々たる商社の事件に數万の軍を押し寄せて腕力を頼み蹂躪し民を塗炭に苦めつ遂に宗社を覆へし妄りに併吞せしのみか己の罪禍を蔽ふ為め新紙を以て我國の無實の罪を公言し之を宇内に公布して正義の輿論を防ぐ等放姿暴慢邪惡なる彼を英賊が殘逆は憎んでしる余りあり噫天道は是非か君よ奸賊英人が邪説を迷はず我國の

右より讀者は緬甸國近世の史と王室の景狀並に官制の大略諒知したるを然るに諸君も知る如く昨年十有一月、英吉利國は何故かブレンドンダガスト將軍を元帥としてスレーデン大佐を以て副と爲し大軍を遣り無慘にもジーボー王を捕りし印度マドラス府に送り後ちカルコッタに幽閉し本年一月一日に印度太守ダツフェリンは女王の命を奉じつゝ一の布告を發しより余其文を閱するに

今般印度皇帝陛下即英の命を奉じ從前ジーボー王の支配せる諸州は爾后諛王の統治を止め印度皇帝陛下領地の一部と爲し印度太守を以て之を統治せしむ

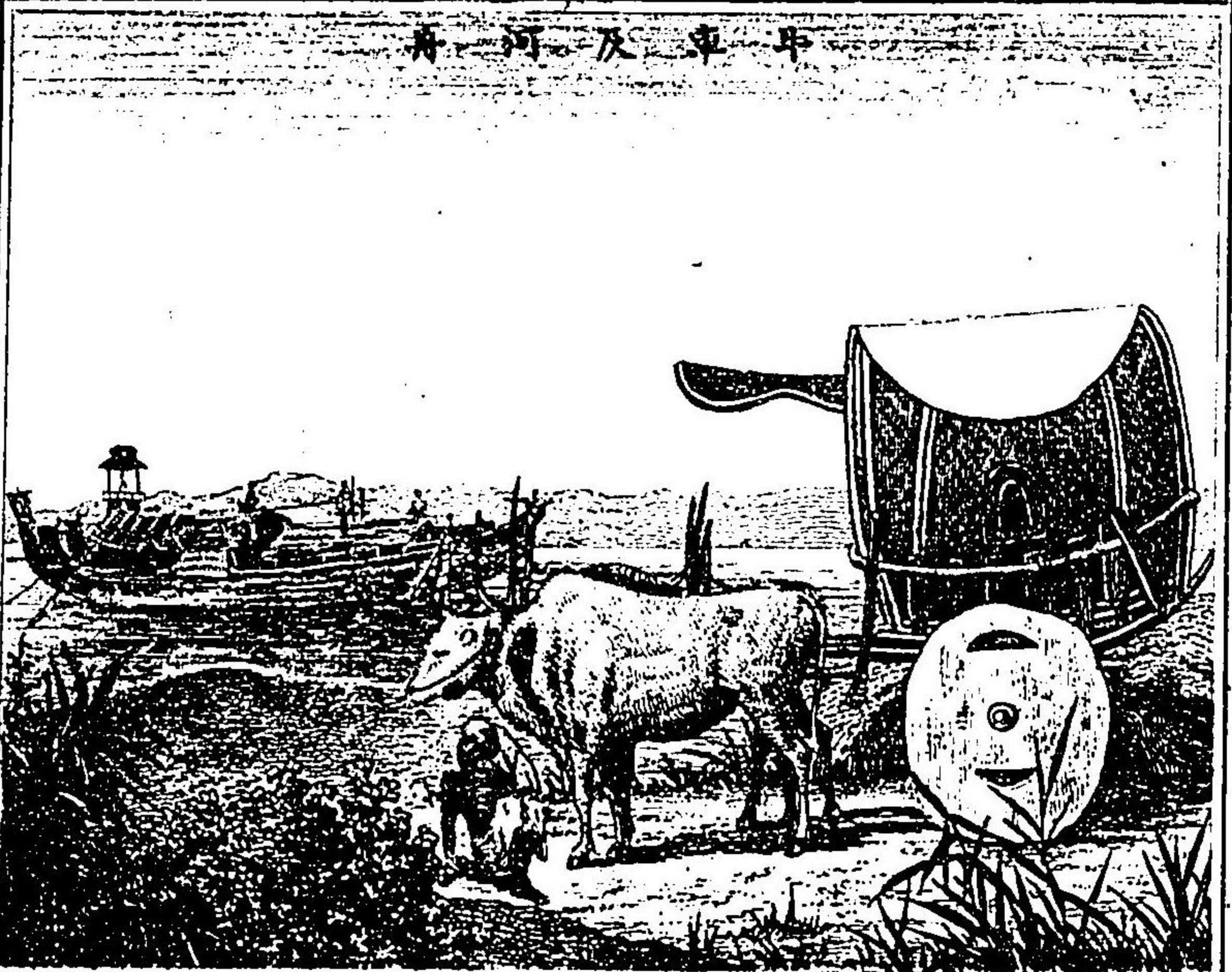
一千八百八十六年一月一日

印度太守ダツフェリン

蓋し英は何故か如此爲せしかを諸人は就て尋るに英國人の語に依ればジーボー王は情弱なり暴逆無道の君主なり彼は印度孟買の緬甸商社に無法なる罰金を課し英民に損害せしめし故なりと由て緬甸の人は就き今其真偽を質るに曰く王は情弱なり然と云ふは英國が之に關する理由なし又彼の英が主張せる



舟一河及車牛



○讀者よ余輩は此府は着き種々の事情を探究し  
 滞在長々なりたれば他府の景状は略記して  
 直ち又次へ渡航せん今其順路を記さん  
 マンダレーより舟に乗り十七英里下流なる  
 アマラプーラより陸上し市街の景況を眺る  
 マンダレー府と大差なく牛車を焼ひ西に奔す  
 道路凹凸狹隘なり又車輪は木片天然圓形の儘にて回轉を要する  
 是隨い漸次摩損して他日圓形となるを待のみ運輸の方法未だ此  
 の如し善良なる道路あるも豈に  
 久しきと堪ふ可けんや 二十英里余にして  
 漸くアウア府に達し九り此地は即ち旧都にて  
 宮殿樓閣等あせど一千八百三十有  
 九年三月廿日より廿三日に至るまで  
 大震災のありし為め主なる建物破壊して  
 見るに足るもの更なく且つ人口も現今は

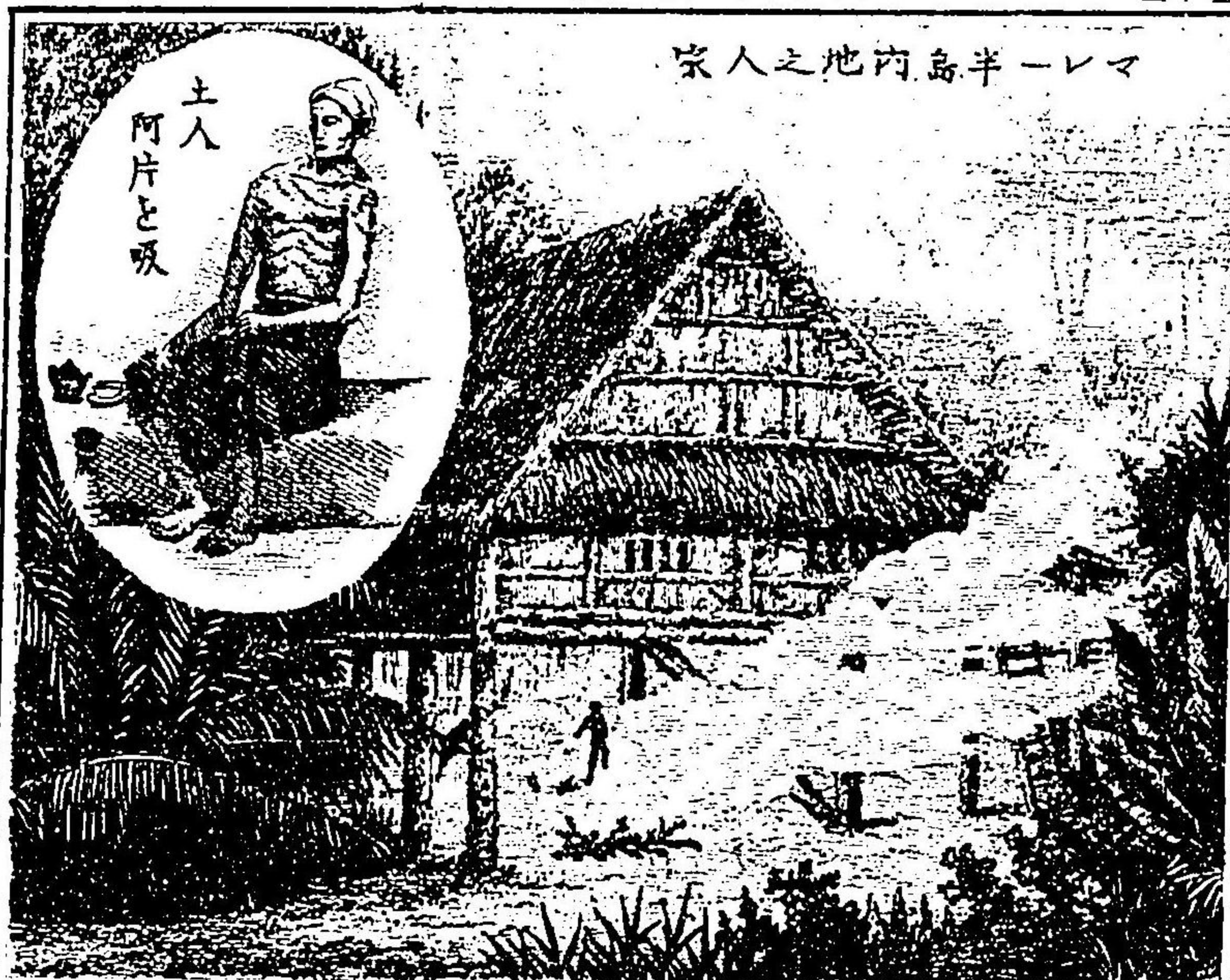
圖之場築建廳政新國英甸緬於



不幸を憫み玉へよと涙を振つて語り  
 蓋し正邪黑白は果して何を在るべきか  
 編者の知らざる所なりさきども右の説を聞き  
 今春以来英國の新紙に記せし事柄は  
 自分味噌の筆加減我僂勝手の説多き  
 又徴するに足りなん乎  
 さて前巻より吾輩が並細亞諸州を漫遊中  
 到る處に歐人の跋跨を見聞せざるなく  
 困頓せざる民あらし噫亞細亞大陸の  
 諸國の民は何故に如斯微弱なる  
 予や見る毎に聞く毎に之を痛嘆せざるなし  
 此事に付愚見をば聊か開陳為し度も  
 余り長くかるを以て暫時く後文に譲るべし



マレー半島内地之人



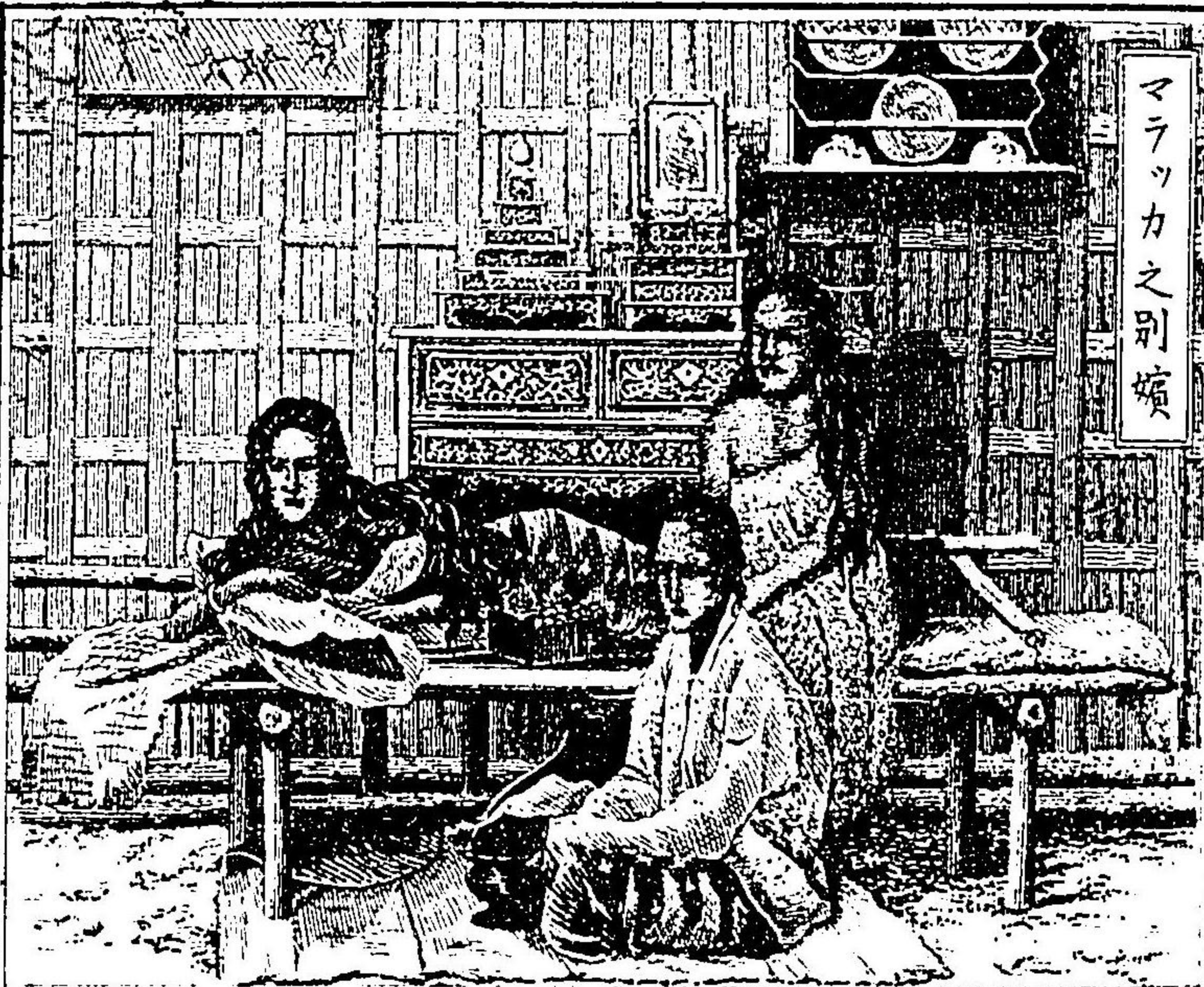
二万五千前後にて市内総ての有様は  
まゝ京城と小異のみ。  
其より再び舟を乗り流き、順ひ南下する  
三百五十余里にしてラングン港に到達す  
此地は即ち緬甸國第一等の開港場  
ペグ州の都會にて人口四万五千余  
以前の英領緬甸中最大繁華の處なり  
又海岸は一十噸乃至一十百噸の  
汽船を直接繋ぐべく通商貿易盛んにて  
緬甸を身體に喻ふれば咽喉の地といひつべし  
市街を離る二英里北の丘上一の伽藍あり  
シヌゴンといふ構造は京師の佛寺と略似たり  
此他観るべき名所なし由て是より汽船を乗り

マラーバンの灣を出でテナッセルムの沖を過ぎマラッカ峽を進航す西は前巻旅行せし  
スマタラ島より東方は即ちマレー半島なり汽船は之をふて駛せ西岸マラッカ港に着く  
ラングン港より走する事一千一百十英里。

マレー半島之部

蓋しマレーは後印度地方よりして南海へ矛首の如く斗出せる一大半島國にして  
西北緬甸に隣接し東北暹羅と交界す此總体の幅員は四万五千方英里  
海灣平坡多くして内地山脈断續し地味は概略肥沃にて土民は稻を耕作し  
常食と為す産物は稻米胡椒咖啡や砂糖獸革木膏や象皮馬鈴薯烟草や  
錫等を多しとす半島中の人口は三十七万余にして一千二百年の頃  
スマタラ島より移住せしマレー人種ありと云ふ其宗教は一般にイスラームを信奉す  
民の性質鷙悍して殺伐抄掠等を為し又報復の念深く耐忍力乏しくて  
生業上は勤むなく工藝の技は只旧き習慣を守りて進歩せず  
國は統一政府無く酋長ありランジャヤといひ又ソルトンといふ酋長はマレー全土の長なきと





マラッカ之別嬪

シンガポール港之記

地勢はマレー半島の南に盡る首に於て長さ二十七英里余横十一英里の島にして本土と僅か二帯の峽を隔つ其幅の最も狭き所では四分一英里に過ぎず云ふ而して西南港前は僅か斗りの海盆を隔てスマタラ島と相對し海面頗る平か印度海と支那海の咽喉として世界中諸國の郵船繫泊す

一千八百十九年英吉利國はマラッカのソルタンチエヤを抵合つ金を出して購求し此の埠頭を建しかり然る地地の利を以て年々歳々繁昌し現今人口十五万

其威權たる微弱なり然して地方は許多なる部落に分ち長を置く各長互ひて權を張り政務協同せぬのみか輒しすきは諍論し相狼戾して鬭爭す且つ法教の惡弊は民の心を盡惑し愚陋の法則亦多く概して文化に程遠き頑俗なりと知きより

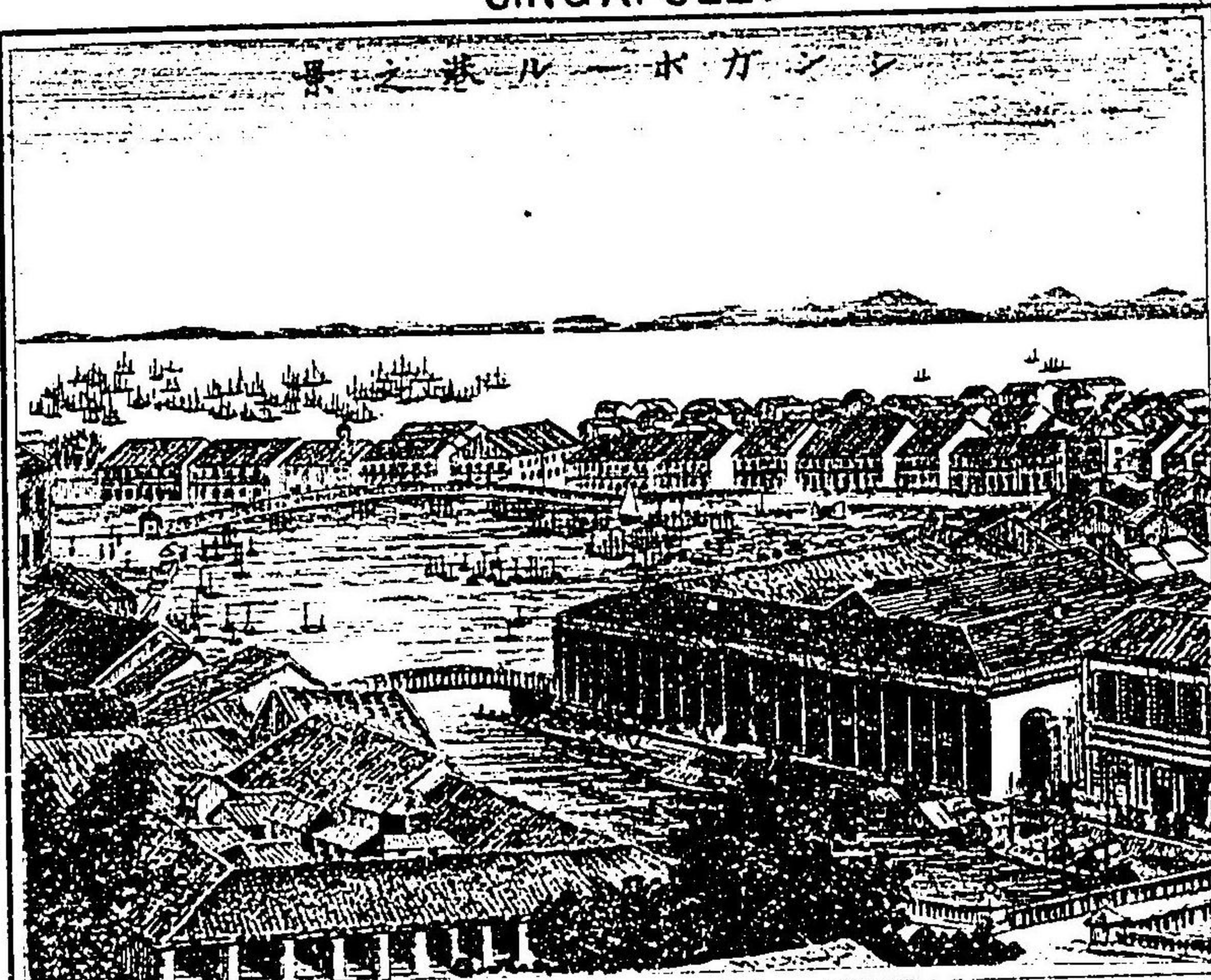
○却て説くマラッカは半島南部同名の河流に跨る都會にて人口一万四千余近年英國領地としシンガポールの港より印度の一大都會なるカルコッタ府へ渡航する

ベンガル灣の驛と為す市街に主なる建物は曾て和蘭國人や葡萄牙の人民が殖民せし時築きたる二三の城郭を始としバラックといふ城郭や英の政廳病院や

アングロチヤイの學校や巫來由學校等より格別名高き名所なしよつて直ちて拔錨し東南方へ進航しバルチニラールの燈臺を後に眺めて行く程に遠近大小夥多なる島嶼星羅し大なるは十数方英里小なるは数方英里あり其他亦不瑣小の嶼を連綴し

平嶼もあせば凸嶼あり各島熱帶地方なる草木四時と翁鬱し花卉爛熳紛披して眺望實に奇絶なり景色を賞して行程に忽ち東又一幕の白烟起るを遙望す即ちシンガポールなり





五千三百有余在り其内九万六千は支那の民にて商業や力役の為め年々移住したる者なりと而して其他はマレー人印度人等にて歐洲人は九千より一万迄は過ぎずとを。

地位赤道に近きと氣候は酷烈ならずして終年快暢なりと云ふまた此島の地味たるや富饒にて平野あり長谷漫坡等ありて民は稻を耕作し椰子や甘蔗等を植へ丁香生姜胡椒等よく豊生せり而して此農業は支那人の専ら作る所とす輸出品は前よりマレー全國生産の諸品を最も多くを輸入品は小銃や

卷之七

銅鐵木綿毛織物石炭金具玻璃類麥酒並に葡萄酒烏糞等を主とせり貨幣はルービー貨を用ひ英領印度の通用貨幣にてルービーは我四十八錢。四毛に當り英のニシルリングは相準蓋し此港は日本より程遠からぬ処にて東西南洋貿易上實に便利の土地なれば我日本の商人は注目すべき所なり。

さて此港を解纜し東の方へ航行す即ち支那の海より五十英里を進む頃更に針路を北折し長きマレーの半島を西に眺めて直進し暹羅灣を駛す數百英里メーナン河口の右岸なるパクナン港を經過して首府バンコックに達したり

暹羅國之部

さて此國は西北を緬甸に境し東南はカンボヤロスに隣り西南マレーに跨り其面積の詳細は境界線の不明より未だ正確ならざるを其概算を尋るに二十五方英里又人口の概数は本土の人種二百万支那の人民一百万ロースの人民二百万マレー人種一百万合計六百万なりと。

また此國の人民は自國をアンセイと呼ぶ即ち自由王國と云へる義にして暹羅の稱は

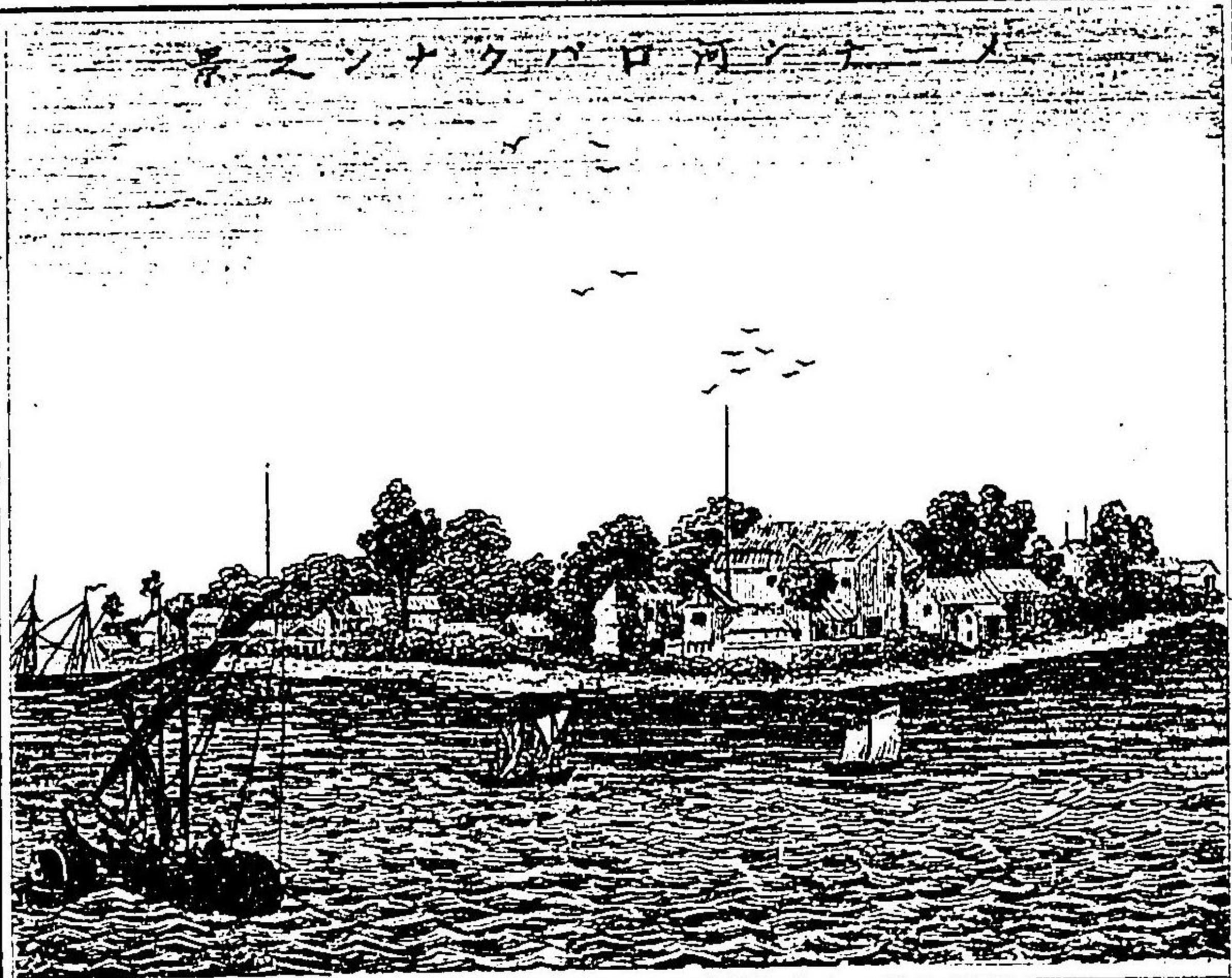


GENERAL VIEW OF BANGKOK



一は河中の市街なり。  
 全市を二區又大別す。一は陸上市街にて  
 河街は教本の丸木にて岸を作り其上に  
 家屋を営むものにして岸上一戸を建るあり  
 数戸連絡するありて自然市街を成せしなり  
 故に舟行頻りて速く河中を眺むべきは  
 伊太利國のヴェニスなる河街に似たることあり  
 而して之は浮居するは支那の人民多しとす  
 又陸街の周圍には堅固の郭を繞らしつ  
 城内王宮政廳や寺院公苑等ありて  
 富家は磚瓦の家を建て中等以下の各人家  
 木材造り多けきど河中の觀とは稍羨なり  
 されども不潔を免せず

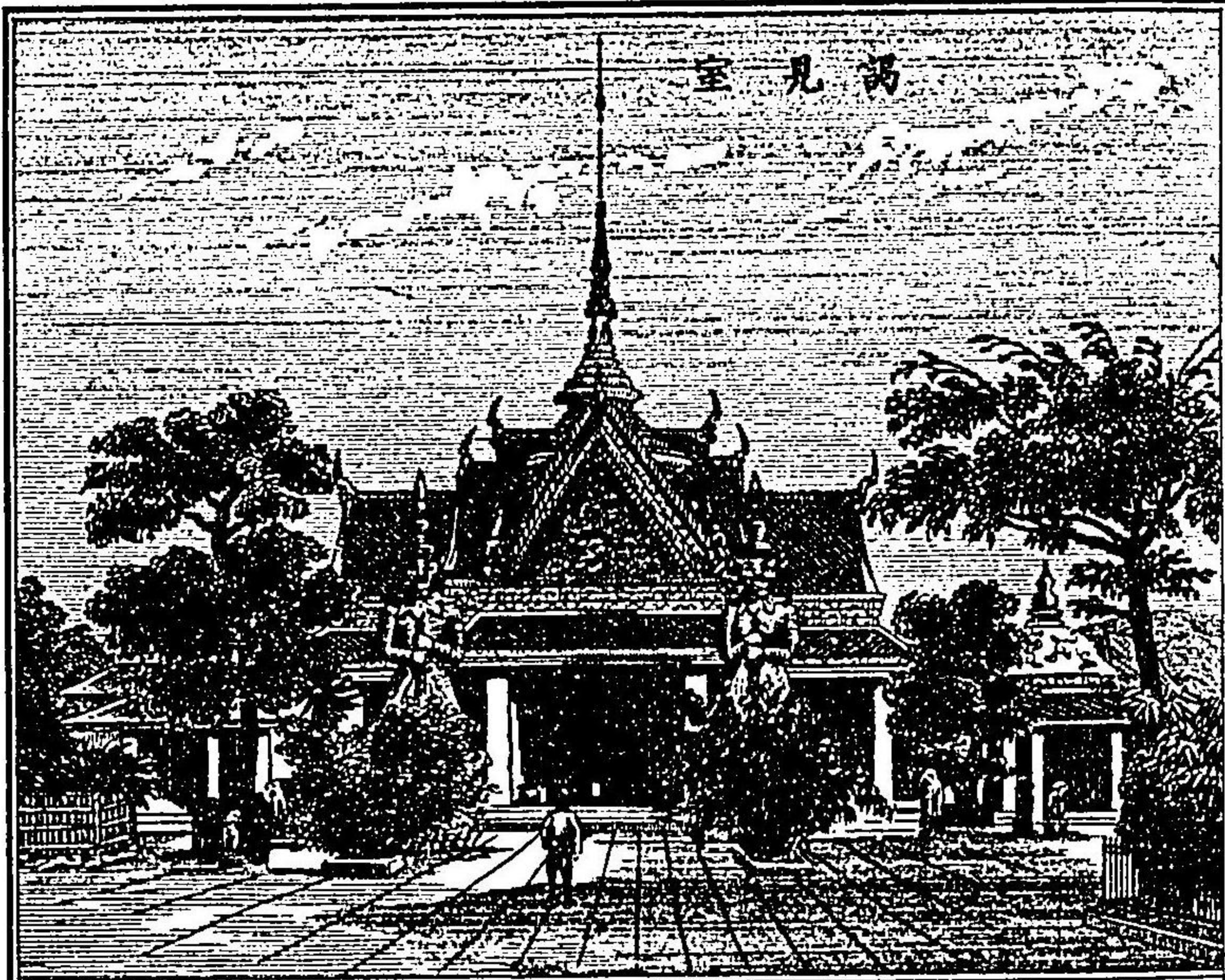
VIEW OF PAKNAM ON THE MENAM. 八十三



マド國語の爲色入種が文字より轉せし者にして  
 土人は自國を暹羅國と稱せらるるを知らざるなり  
 地勢は東西北方より山脈を帯び邦國の  
 中心一の大河あり之をメナム河といふ  
 北より南へ貫流し沿岸諸邦を灌漑し  
 地味は甚だ肥沃なり生産品の主なるは  
 米穀銀鉛犀角や象牙藤蓆獸革類  
 糠枋木胡椒等と爲す。  
 バンコック府之記より八百二十海里  
 即ち王の都にて地位はメナム河口より  
 浜る事二十余英里市街は東西兩岸に  
 跨りて建ち民口は四十万人なりといひ  
 又六十方なりといふ實は繁華の都會なり



HALL OF AUDIENCE.



今其制度を尋るるに立法権は國王と  
 太政官と内閣と共之を執行し  
 太政官は國王の敕任たる議政官  
 十人乃至二十人並に王族六人を  
 以て組成し内閣は分けて六省卿となる  
 即ち陸軍海軍卿司法卿農務卿  
 宮内卿と大藏卿各自之を擔任し  
 全國四十一州に各一人の知事を置き  
 以て管治し郡村は土着の酋長管治す  
 又此國の歳入は毎年大約千五百  
 七十二万五千弗其内主なる税目は  
 分頭税と兵役の免除料を多とす  
 此二税目合すせば總歳入の九部を占む

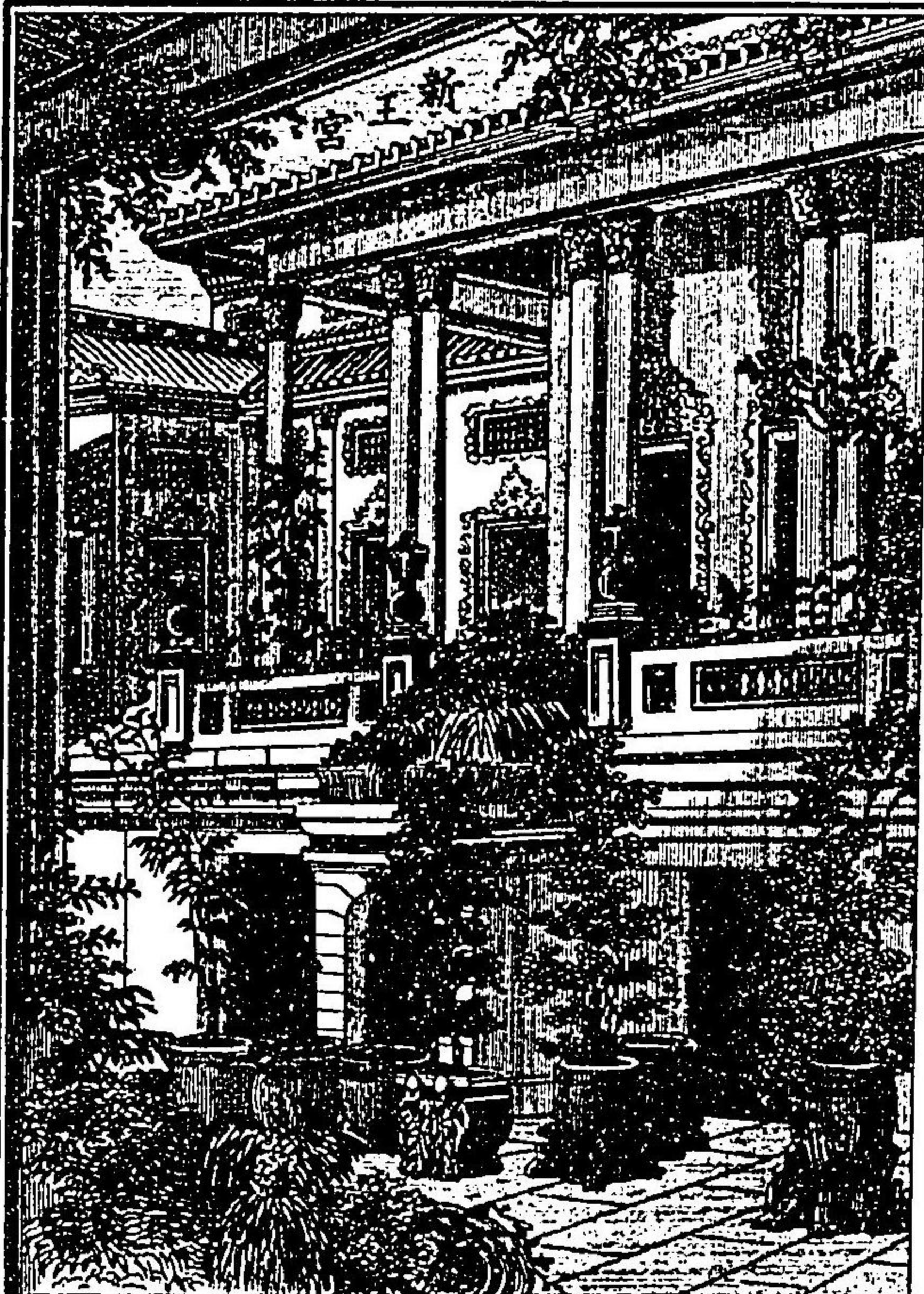
ROYAL PALACE.



さて王宮は当府中第一等の美觀にて  
 形状緬甸の王宮と大差なげき其規模  
 頗る宏大佳麗にて宮闕の敷また多く  
 就中近年新築の歐洲風の宮殿は  
 一層目立て華麗なり  
 土人は就て此國の政治の事を尋るるに  
 君主專治なりといふ其現今の國王は  
 クラロンコン一世といひマモンコットの長子にて  
 一千八百六十有八年十月父王歿し  
 乃ち位を継ぎしと云王は賢明英智にて  
 夙に政治を一新し歐米諸國の長を取り  
 自國の短を補ひて百物大に改良し  
 民を開化の道を歩む

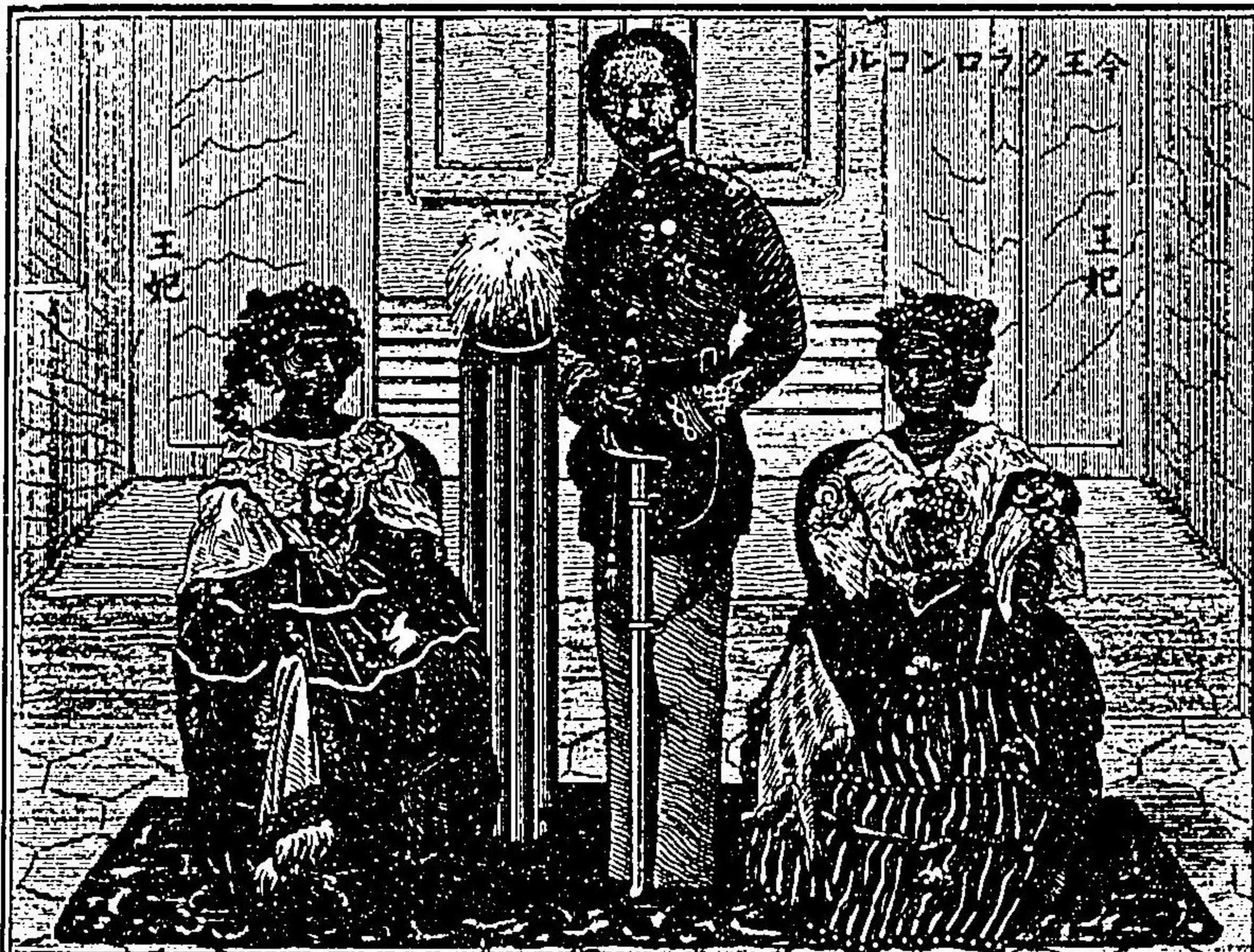


NEW ROYAL PALACE.



然して其餘は博奕税酒税關稅等として以上の歳入歳出を支配するに足ると云ふ  
 また海陸の軍制は常備の外に民兵あり凡そ二十一歳の男子は毎年四ヶ月間  
 服役すべき制にして官吏並に僧侶と免役料を納めたる支那の移民と服役に  
 耐る三子ある者と代役入を出  
 去者は皆兵役を免除せり  
 免役料は一ヶ月六十カルよ  
 りカル一方は日本貨の六十二錢六厘  
 定期の間上納す又政府は許  
 多なる大砲の外小銃を  
 八万余挺所有し歐洲人を士  
 官とす且つ海軍はゴルベット  
 漁艦四艘と大砲艦十二艘まで  
 編成し士官は英國人多く

KING OF SIAM AND HIS TWO WIVES.

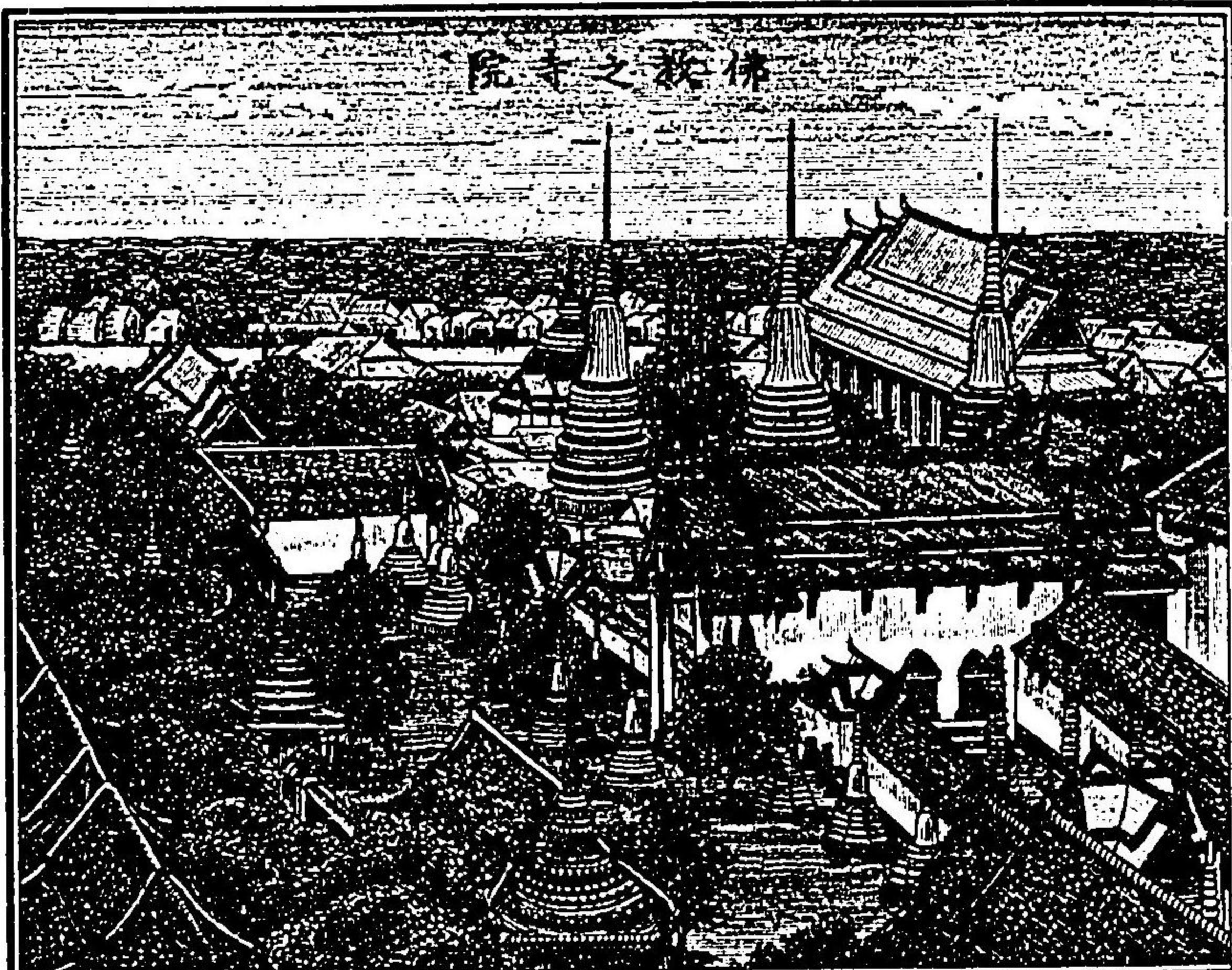


KINGS FEMALE GUARDS.

SUPREME KING OF SIAM IN HIS STATE ROBES.

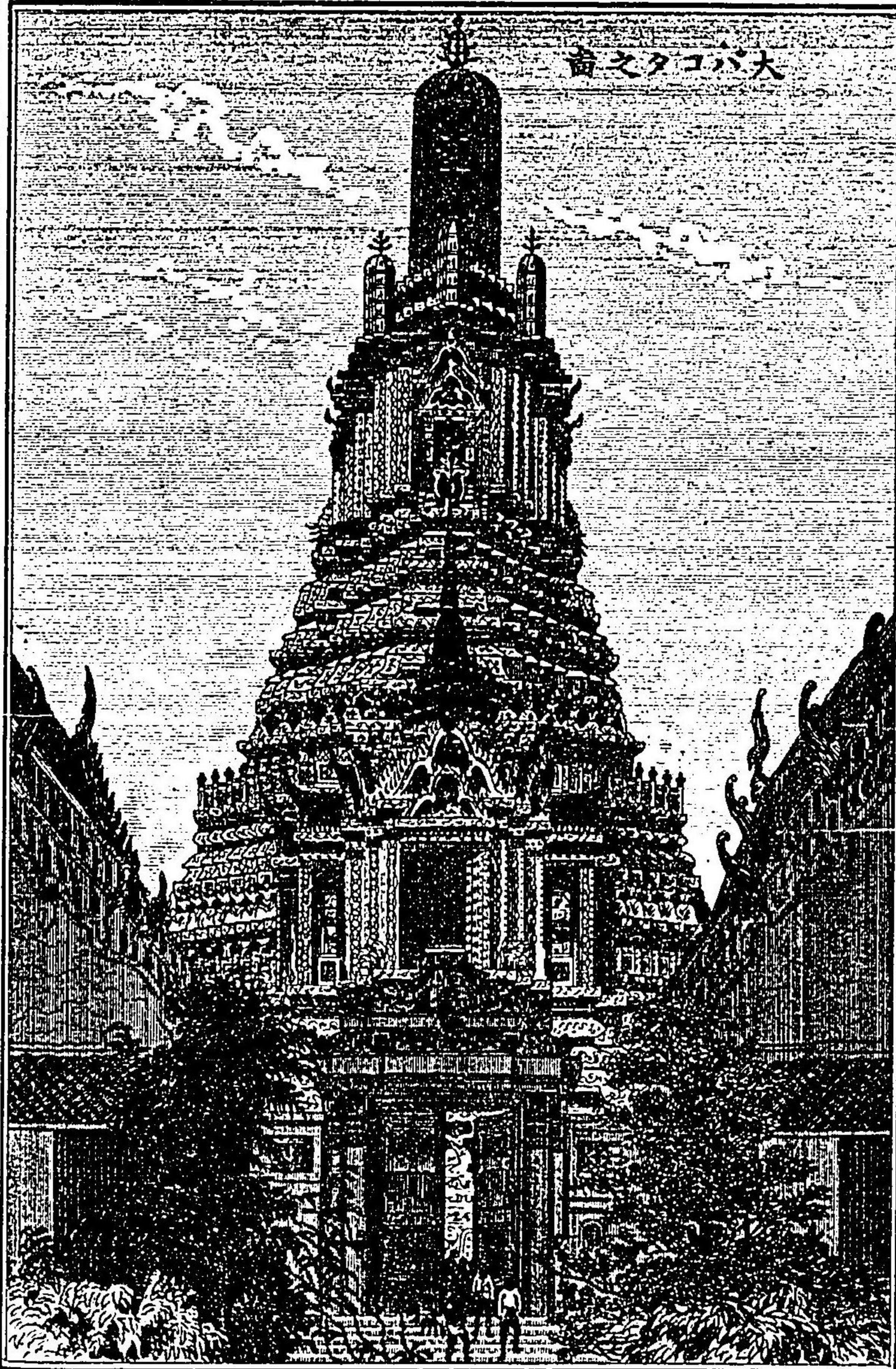


BUDDIST TEMPLE.



其式も亦英模也。  
 ○さて王宮の南方の一の大なるパゴタあり  
 是き佛教の塔にして高さ二百五十英尺  
 内外彫刻精緻なる觀る者驚絶せざるなし  
 又其北の丘上にも教棟の伽藍と數十の  
 パゴタ塔あり此寺は暹羅國內佛教の  
 本山なりと云きはるや堂宇尖塔皆総て  
 金銀珠玉を鑲めつ結構壯嚴美を極む  
 元來暹羅の國教は佛教にして人々は  
 必ず一度得道し法衣を着して托鉢の  
 禮を行はざるを得ず故に古來國王も  
 一生中又は鮮く二兩日或は三日間  
 彼の黄法衣を被りつゝ臣下の家を廻回し

THE GREAT PAGODA.





SIAMESE LADIES AT DINNER.

七十四



中等婦人之喫食

君民共治の政ふどわ殆んど望まざる如く  
 民間上流社會なる人と云ふ此點に  
 注目せる者更に尤一  
 噫廣き亞細亞洲大陸中一として  
 眞の國を愛しつゝ眞の王家を尊びて  
 自治の心に富むと云ふ眞の國民あらざるは  
 痛嘆すべき限りあり  
 唯東端の一孤島我日本は畏くも  
 天皇陛下の敎慮して來る二十三年は  
 民撰議院を開設し我臣民の参政の  
 權利を與へ玉ふてふ最と有難き際なきは  
 凡て日本の臣民は貴賤貧富を拘らず  
 よく謹み慎みて準備を為すは勿論

GENTLEMAN AND LADY OF ARISTOCRACY.



女男之族貴

讀者は右の事實より暹羅國現時の文明は大ひに日本の文明と似たる所ある事を  
 概ね諒知するを爲し然るの一の欠點は政治上の事にして即ち前にも述べ如く  
 國民一般甘んじて君主專治の下に立ち寄り政府に依頼して彼の貴重なる立憲の

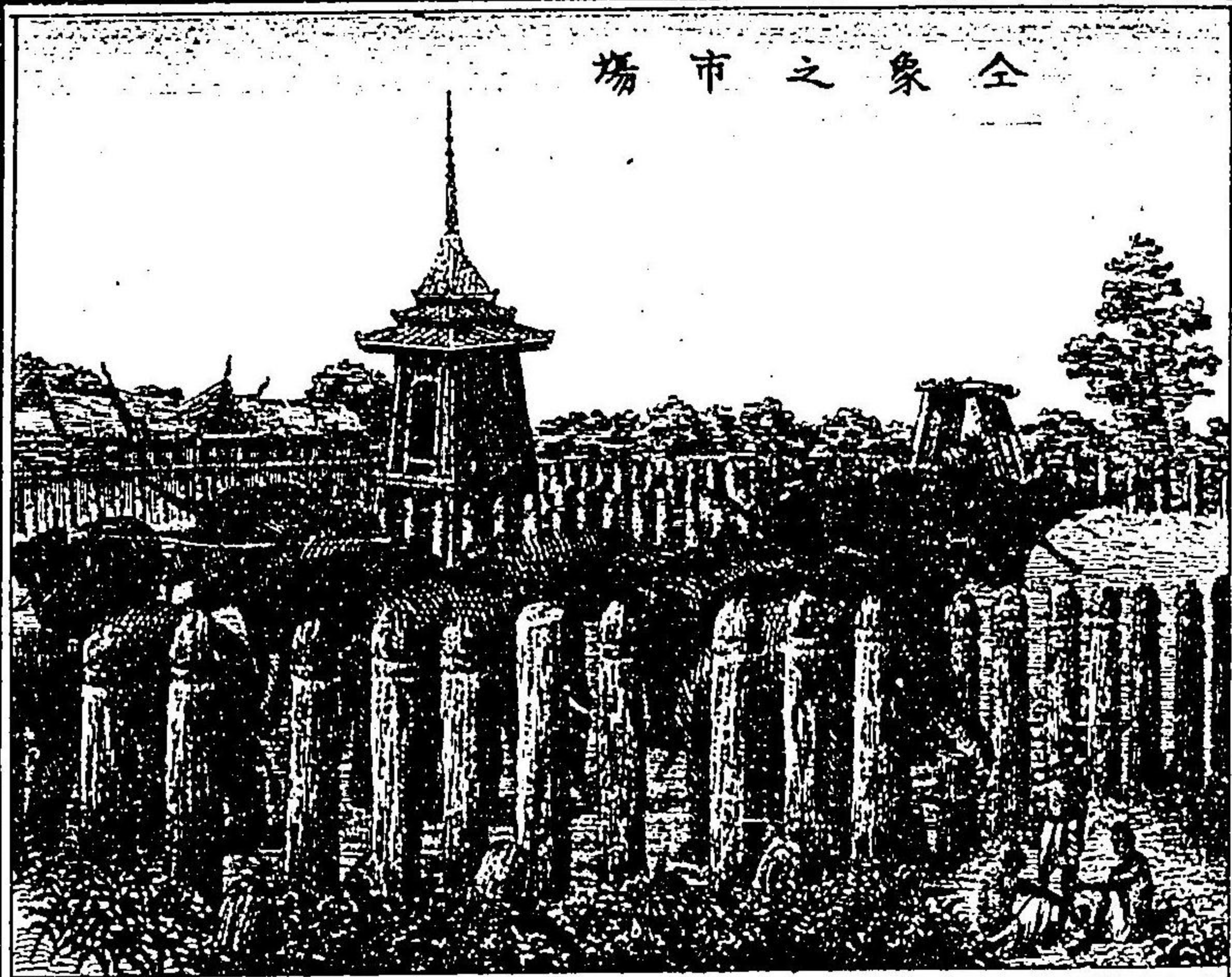
布施を請ふの式を爲す又國民の  
 教育は悉く僧侶の任なりし  
 然るに今の國王は此らの例を  
 全廢し且つ盛んに少年を  
 英佛獨の學校に遊學せしめ  
 學生は歐洲諸國の學生と  
 競争を爲し高尚の地位を占むる  
 者あり或は卒業歸國して  
 政府の要路に當る者又少なからず  
 と云ふ



ELEPHANTS IN AN ENCLOSURE.  
AT AYUTHA

九十四

全象之市場

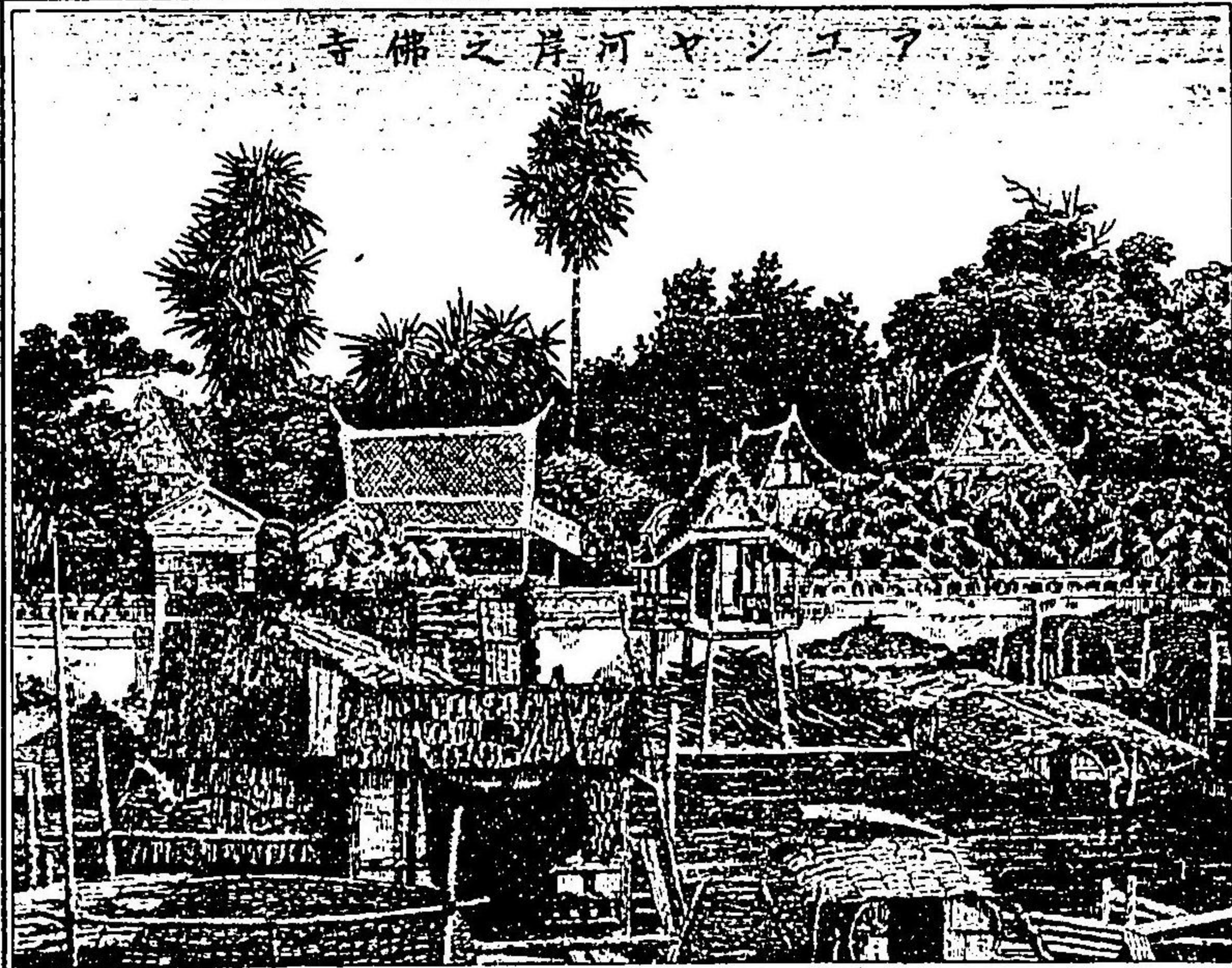


豚尾を断ちて異ならず下等社會の人々は男女とも木綿なる股引様のものを穿き腰より上は裸躰にて中等以下は跣なり其上流の紳士らは絹の筒袖衣を着し短袴を着けり而して婦人は絹を左肩より右腋に巻きて飾りとき其幅廣く我國の婦人の帯に異ならず。

又官賁や民間の閑化めきくる人々は西洋服を着用し中より最も可笑きはマンテルを着け其下は自國の短袴を穿ちつゝ髻見頭を振り立て胸に袂時計を閃かし四辺を睥睨傲然と跣足で進む姿なり此外給て半開の見苦き事多しと

BUDDIST TEMPLE AT THE AYUTHA. 八十四

アユタヤの河岸之佛寺



今より僅々四年の後善義の議會を組織して上は英聖文武なる至尊の勲惠を奉答し外は宇内各國に日本の光を輝かし卑屈頑愚の我亞細亞大陸諸國の兄弟を宜しく先導するべきなり米人曰く日本は亞細亞洲の舵なりと嗚呼親愛なる臣民よ日本責任の重き事夫を又斯の如し矣我兄弟よ姉妹よ奮發激勵勉むるし謹慎以て愁むべし。

○多氣力をき暹羅人の風俗如何を記さん。則ち前の畜の如く男女共ニ頭髮は前頭よりして頂天まで断髪となし兩鬢の後部は全く剃去せり猶不支那人が振り立つる



BIVOUAC OF M. MOUHOT IN THE FORESTS.

モホー博士の森中宿



暹羅の産は其形殊又大なるより世人の賞する所あり。是より一小艇を乗りメーナン河の源派プラバット河を流る凡そ三十英里にて全名村に上陸し二人の案内者を僱ひ山を指して登り一が此辺土人標悍くして盗賊しまく多けきは余は勿論案内者何れも我器を携帶しプラバットの山路をば攀下登る事ハ英里漸く嶺に達すきは一大佛教寺院あり是はバンコックの本山に並ける所の巨刹にて毎年暹羅の人民は必ぎ一度参詣せり。扱て右の畧の如く寺院の前には教階の

THE FOOTPRINT OF BUDDA AT MOUNT PHRABAT.

アバラト山の上佛之教之巨刹



記せる足跡は略して今より此地を出立しメーナン河を流り内地の方へ進むにバンコックを出立しメーナン河の道中之記凡そ四十五英里にしてメーナン河の岸に着たり此地は古一の都にて一時盛んを極めしが一千七百三十年緬甸人に破壊され爾來衰頹し今も人家数千あり河岸は佛刹等ありて首府バンコックと商人の往来絶へず此地は象の一大市場あり近傍諸州の人民ら夥多の象を運来り其優劣を鑑定し賣買甚だ盛んなり蓋し印度各地にて象を産する多けきと





バクレー之婦人

信者の参詣する者は切紙木偶や金銀の  
 コップ及び各種の玩弄物を奉納す  
 ○さて此寺院を竟終り前路を降り象騎り  
 東北方へ進む事一百二十三英里  
 コントとふ邑に着く此地は暹羅本國と  
 属地ロースの境にて人口七千五百あり  
 副王之を統管す此副王はロースなる  
 諸酋長の上より立ち属地の事務を管轄し  
 大い権力あるを以て外人ロースを行く者は  
 此地で通行券を請ひ或は副王官吏より  
 添書を賣ふを例とせり予今ロースの内地をば  
 漫遊するに先ちて其總体を略記せん

ロース之部

獲と犀よ中山氏全



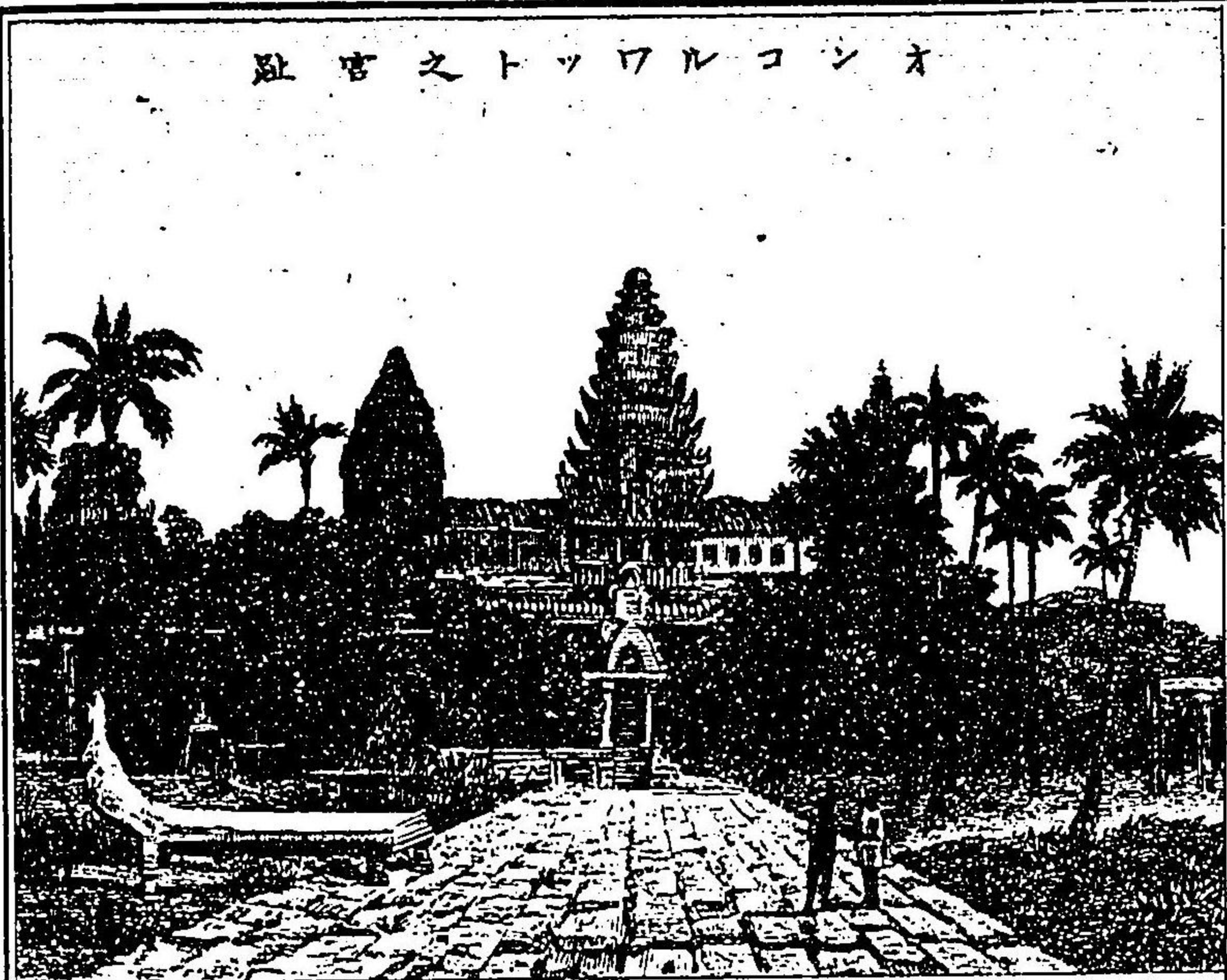
磴道ありて兩側は高岬を建つ此岬の  
 基礎は青色石にて其中央より上部へは  
 紅紫或は白色の玻璃板を嵌め各折は  
 皆黄金の鍍金せり堂宇は一層美麗にて  
 内外柱壁緻密なる彫刻を為し堂内の  
 最も貴き室内は銀線以て編りたる  
 籐簾様のものを敷き柱壁及び天井は  
 黄金板を張つめり。  
 本堂釈迦の立像は所謂黄金佛にて  
 高さ三尺余りあり前には種々の臺を置き  
 之は供物を陳列し又右側には各種の  
 音楽器物を配列し左方の扉の傍らに  
 カタファルクを安置せり（賣野の人が非式の際に用ふる一種の器物なり）



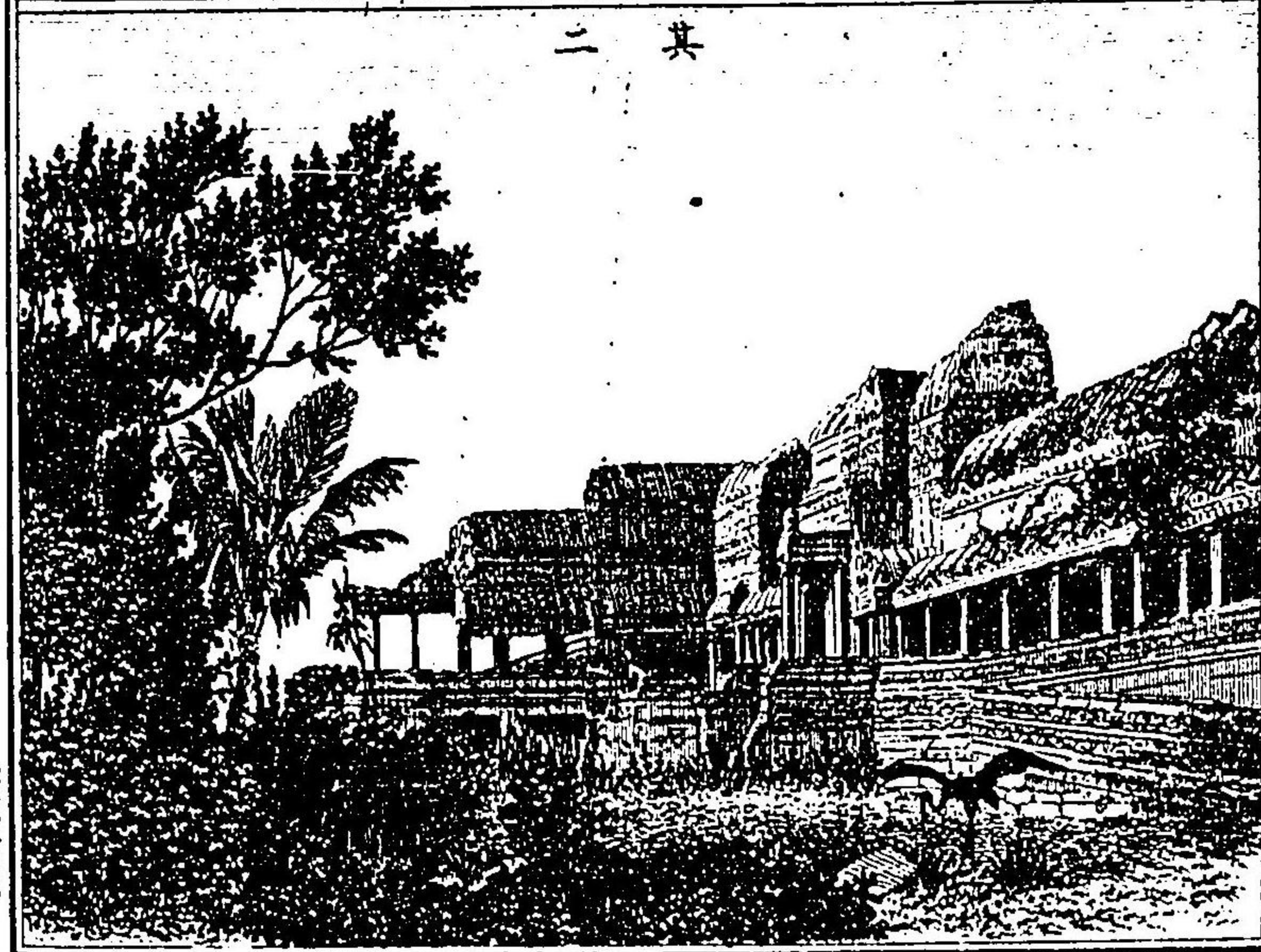




暹羅王宮之景



其二



此地は支那の雲南省・順寧府より流れて来る瀾滄江の彎状をかせる所の西岸に  
 一部落を為さるゝとして二方英里の域内に人家所々散在し民口八十五百餘  
 酋長ありて此州の都とも云ふ處なり市街の背後は小山にて前面左右は着名なる  
 瀾滄江に瀕せきば風景甚だ絶佳なりモート氏は是を見て彼の伊太利も名も高き  
 ゼゾアの湖水も種格蘭のロンゴンドも此湖は三舎を避る所といふ蓋し此地の名所は  
 山上佛刹塔をかきと記するは足るべき美觀を唯だ往昔佛教の熾かりしを想ふのみ  
 又一般の人民は暹羅の民より伶俐にて氣性質朴淡泊に交際厚く生業上  
 最も勉むる種にて卑屈多辯の暹羅人と大ひ異なる所ありきと素より僻地なる  
 一小部落の事なせば其風俗は男女とも外見異なる所なく唯婦人の面貌は  
 稍々丸くして鼻低く唇前より突出し口は少く大ひなり其眼色は男女とも  
 巴且杏に異ならず又男女とも横柳の實を噛むに因り口唇は皆黒く清潔ならず  
 是を猶ほ他邦の人民が良を用ふに比ぶべし  
 モート氏は此土地の酋長某を見へしが即ち前の畜の如く家屋は總て藤竹や



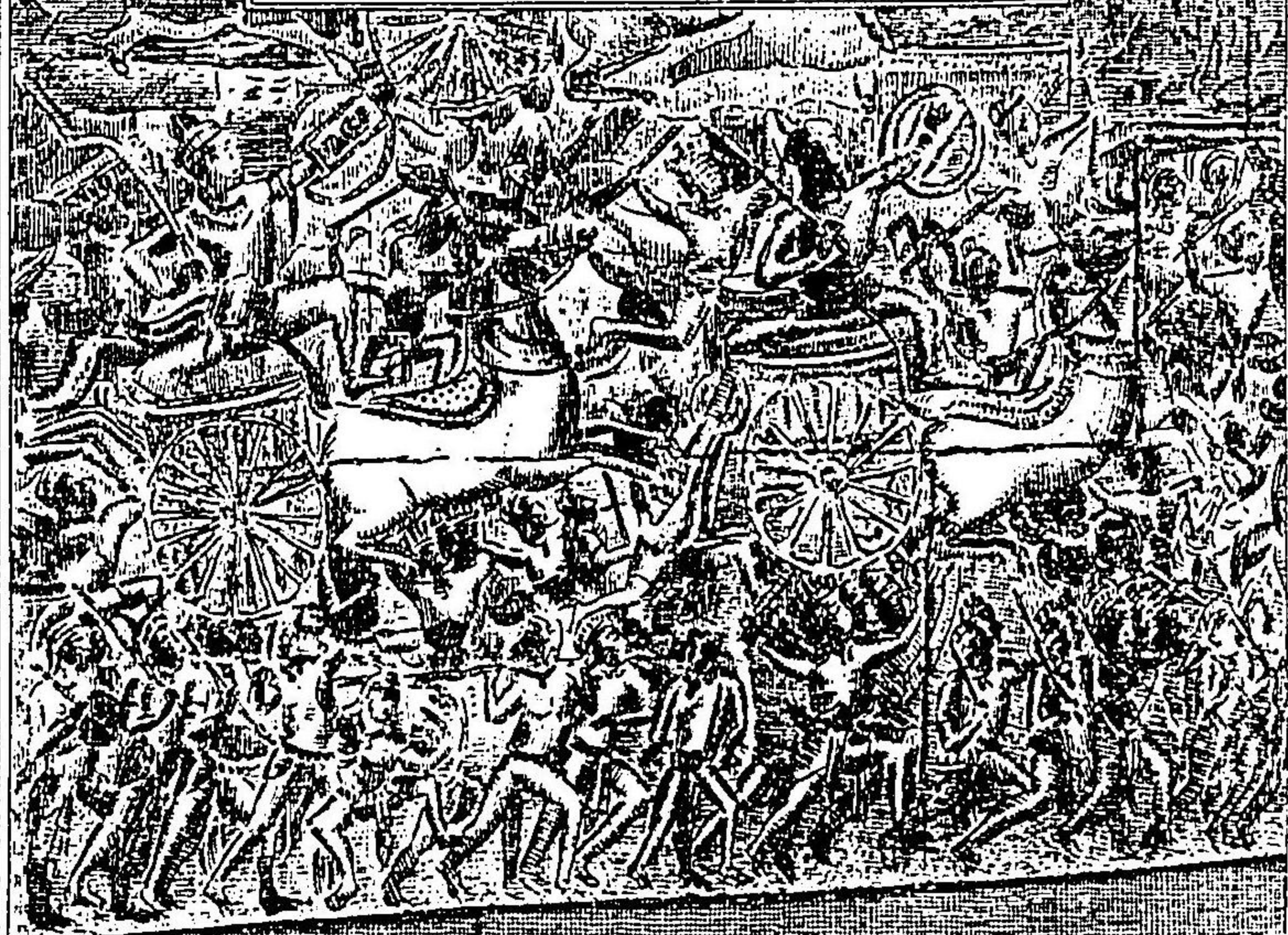
木材等の粗造にて、周圍の事物見苦しく、未開の風を脱せねど、酋長始め群臣が氏に對したる愛情と其懇切なる心とは、彼の文明の名を以て、宇内を誇る英佛の人と、魚どもまた遠く及ばぬ所ありしとぞ。

ルアング、フラバングを出立して、東部暹羅、ナンコンワット及びアンコルワットの古跡に至る記（石造大宮殿の畝は五十六ページに在り）

さて此邑を旅立ちて、先日即ち經過せしコラット驛に歸着し、其より路を異に取リテ、ロム山の脈を越へ、寂寥き道を象より乗り、通計一百拾英里を經、人烟稀なる一寒村ナンコンワットに着たり。蓋し此地の旧跡は、近年宇内は知らせたる最も名高きものにして、彼の佛國の博學者、モーホット氏を始めとし、日耳曼帝國地理學者、ドクトル、ラバツシオン氏、英人、フランク、ピンセント、何れも態々是地に来て、自ら諸物を考究し、古代人智の進めるを驚嘆したる所なり。

今其略を示さん。此宮殿の境内は、東西二千五百英尺、南北二千二百英尺、石壁以て繞らし、此廣潤なる壁面は、只一點の空も無く、印度古代の歴史なる

壁石之トッワコンナ



錫蘭王と猴神の、大戦争を密刺す。余や此工事を目撃し、先づ一驚を喫たり。さて其西を正面とし、諸所は石の門を建て、四隅に圓形塔を建つ。且つ正門の左右には、各々二基の巨塔あり、何れも螺旋形にして、高さ一百英尺、余其正面の門前は、キの字形の石道にて、長さ一百二十英尺、左右に大なる二門あり。

余段階を昇り、右の門より入りたるは、兩側石の巨像あり、之をグリフセンと云ふ。頭は獅子の形にて、鷲の翼をもち、附す。其より進む、數十歩、総て大石道にて、道の左右は湖水あり、湖面は各々五エックル

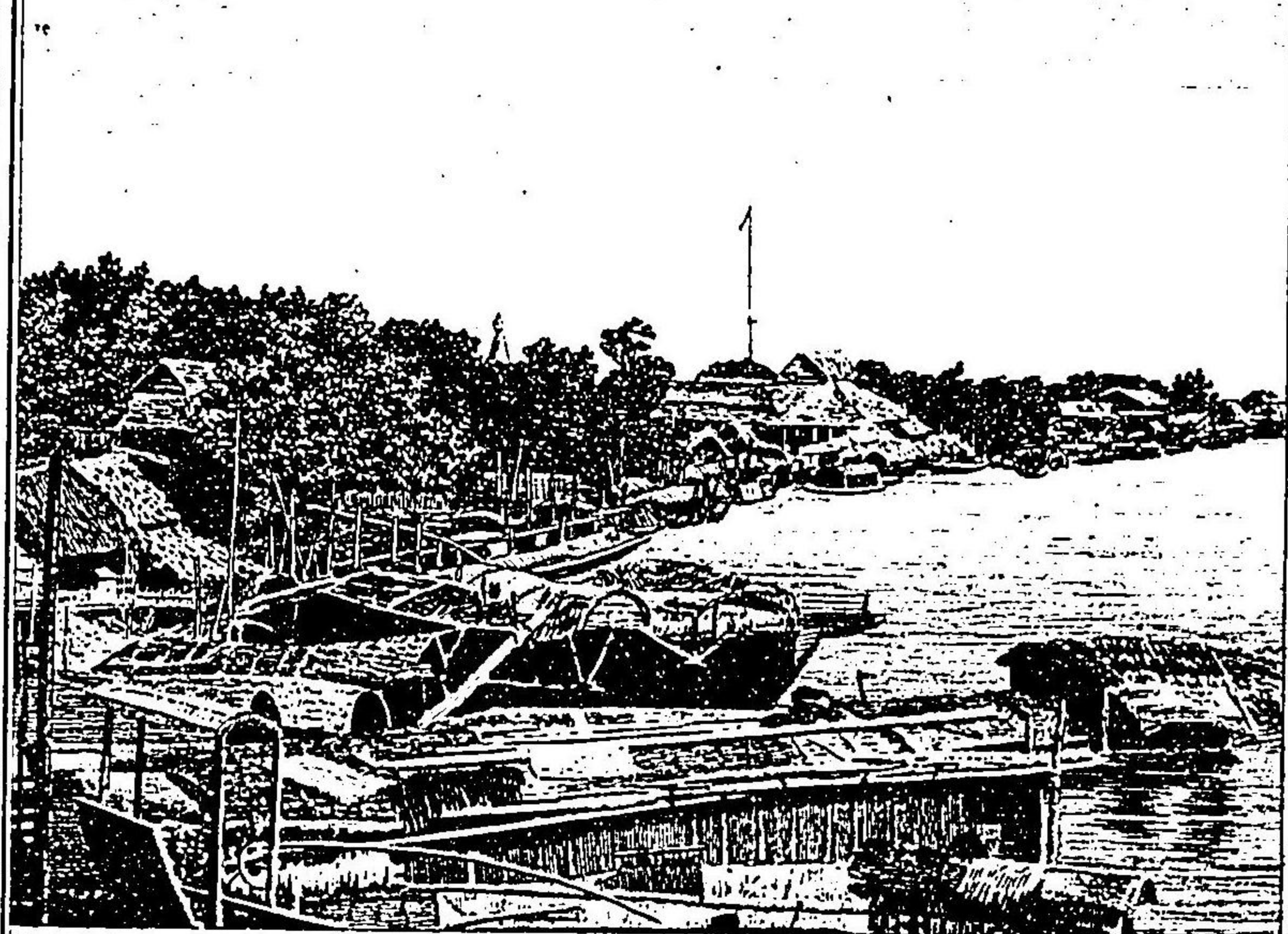


中央噴水機を設く之を眺めて進む事一百二十英尺より礎道を行く十九段  
 登きは大方る巨塔あり其より進む千英尺左右二棟の繪馬堂長方形の大池あり  
 尚心數十英尺を登て一段階を登りおは一の大なる門ありて之を中央門といふ  
 門の左右は回廊より長さ東西千英尺南北六百英尺余四隅はパゴタ塔を建つ  
 総て大石造りて石面僅のすきもなく古史の面畫を密刺きま中門より進む事  
 凡る四百英尺より四棟の堂宇を觀めつ又礎道を登りて第三門に達せしが  
 前の如く回廊あり是回廊は釈迦牟尼や弟子の像や其時の事歴の畫を刺みたり  
 之を熟ら覽むる其構造の巨大なる其工作の巧みなる人の業とも思はざる  
 何きの時代何人か斯くも成功したるか深く心に感ずのみ其より進む二百英尺  
 左右大なる堂ありて是は釈迦を始めとし古代著名の高僧が石像夥多を安置せり  
 尚また進む百英尺余石段數階昇りつ第四の巨門に達せしが回廊前の如くより  
 四隅はパゴタを建立す高さ一百五十英尺此域内の中心は螺旋施の巨塔直立す  
 高さ二百五十英尺之を主なる宮となす段を昇る數十級漸く塔下は達しつ

内に入れば夥多なる石室ありて四邊みな種々異様の彫をなし數百の偶像を安置せり  
 就中最も大より尊嚴あるは釈迦牟尼の石像なまも其外は數多き像ありて  
 前は石の臺を置き燭臺等を配置せり其構造の宏大と工事の巧かる事は  
 十九世紀の技術者が如何に工風を為す進ん遙か及ばぬ所にて何の時代何人か  
 是を建築したるかを深く心に感歎し開化を誇る今人の實に耻る所あり  
 さて此宮の境内は椰子の森あり其内は二三の茅舎を營みて貧僧四五人住居せり  
 依て僧は此寺の創建年紀を尋ぬるに知らざると答へ且つ曰く素より人の力にて  
 建てたるもの非ざるは論を俟ざる所にて必らず天使が築きしか  
 或は地より湧き出しかチヤイント王言が建たる三者の一は居るべし蓋し愚僧の妄言は  
 素より取るに足らざると彼の日耳曼の大博士・パツジョン氏の説くは古代印度の錫蘭島  
 ランカといへる所より聖書を此國へ傳へ來りし大高僧を待遇せん為め殊更に  
 建築したるからんと云ふ又佛蘭西の博學者・モ・ホット氏の説くは元此堂は代々の  
 國王之を増築するが最後の王は佛教を篤く信じ居る為め釈迦を主とせしならん



景之ンビノパ都之ヤデボンカ



而して柱壁及び他の宏大緻密の彫物は  
 彼の古代羅馬國・シラジヨン帝が各國の  
 入種の異風を後世に傳へん為め宮殿へ  
 彫刻したる事柄と大ひに似たる所あり  
 且つ其畫法や築法は彼のヘレニック入種の  
 遺物に髣髴せりと云ふ此外大家の考設は  
 多しと云ふも此國の正しき歴史あらざれば  
 皆想像に止まきり  
南アフリカ國の官殿ありて其  
 建築大考を以て其記述也  
 さて此土地を出立し小河に沿ふて西方へ  
 進行する事二十余英里・テルと云へる湖岸なる  
 コロム驛に到着し小船を僦ひ帆を揚げて  
 瓢の如き湖上を東南方へ走するもと  
 一百四十余英里にして湖口メサンプ河に出で

安南國の西南部カンボヂヤ州の旧都なるオドング等を経由して首府カンボヂヤに達し  
 故に余輩は日本と關係深き安南の事情を今より開陳せん  
 安南國之部

伊勢國松阪氏 角屋七郎次郎氏像



卷尾に詳悉したせども今先づ安南全體の地理人情を記さん  
 支那大陸と疆界し西北老撾に隣して西は暹羅に隣接し東南方は一面に  
 支那海に瀕臨す此面積の総計は二十二万方英里人口概略六百万



之を四部（一）大別し一を東京部と云ひ二を交趾部と云ひ三を真臘部と云ひ四を東捕塞部と云ふ。○其東京は北部（二）東方海は瀕面し内部は平地多くして稻稔綿花果物類・生薬香料等産し・良材多く濕地は野棕生じ山中は礦利備はり金銀や銅鐵等を産出す。他の部は産せぬ所なり。此地に住する人種は勤儉として生業上刻苦黽勉怠らず。海岸に住む人民は専ら澳利を力む。又風俗は日本に似たる所多くして衣服の如きは我風最も似たる。其中婦人の服は殊更に我風俗に髣髴し。食事を為すも漆器にて椀を盆の上で載せ食卓等を用おなく。疊の上で於て食ひ。其他人種の性情や容貌等に至るまで我に似たるもの多く加之。宗教も佛道にして文も又我と異なる所なし。蓋し此地は今を去る數百年前日本人奮然渡航し強勢の大殖民地を開し。此地に於ける百般の事績を徴し西人の推測公報せし事と又旧和歌山藩士なる堀田信氏の報に依り猶且之を探究し我三重縣下伊勢國松坂駅の白粉町角屋七郎次郎氏の祖先が全く安南に開航したる事實を證明するに足りぬを。

女官及、后皇、王



尚詳細ハ巻尾に於る附録を熟読せらるべし。○又交趾部は東京の南に接する所にて上中下は區別せり。歐人フチニヤイナといふ此内部ハ沙漠あり。さきども一般富饒にて海岸盆湾等多々。山峯處々小秀出し且つ清流を送りつ。風景絶佳の地多し。首都を順化府といふ。即ち安南國王の都せらるる處あり。尚不此市街の景情を後文の記行小彙にせし。

◎まご真臘ハ南部にて沙壤多く地味総て肥沃ふらね。草木は甚だ藪ふく耕作上實は不便の處あり。其南方の海岸は數大河の吐口にて。廣且大なる沢藪あり。

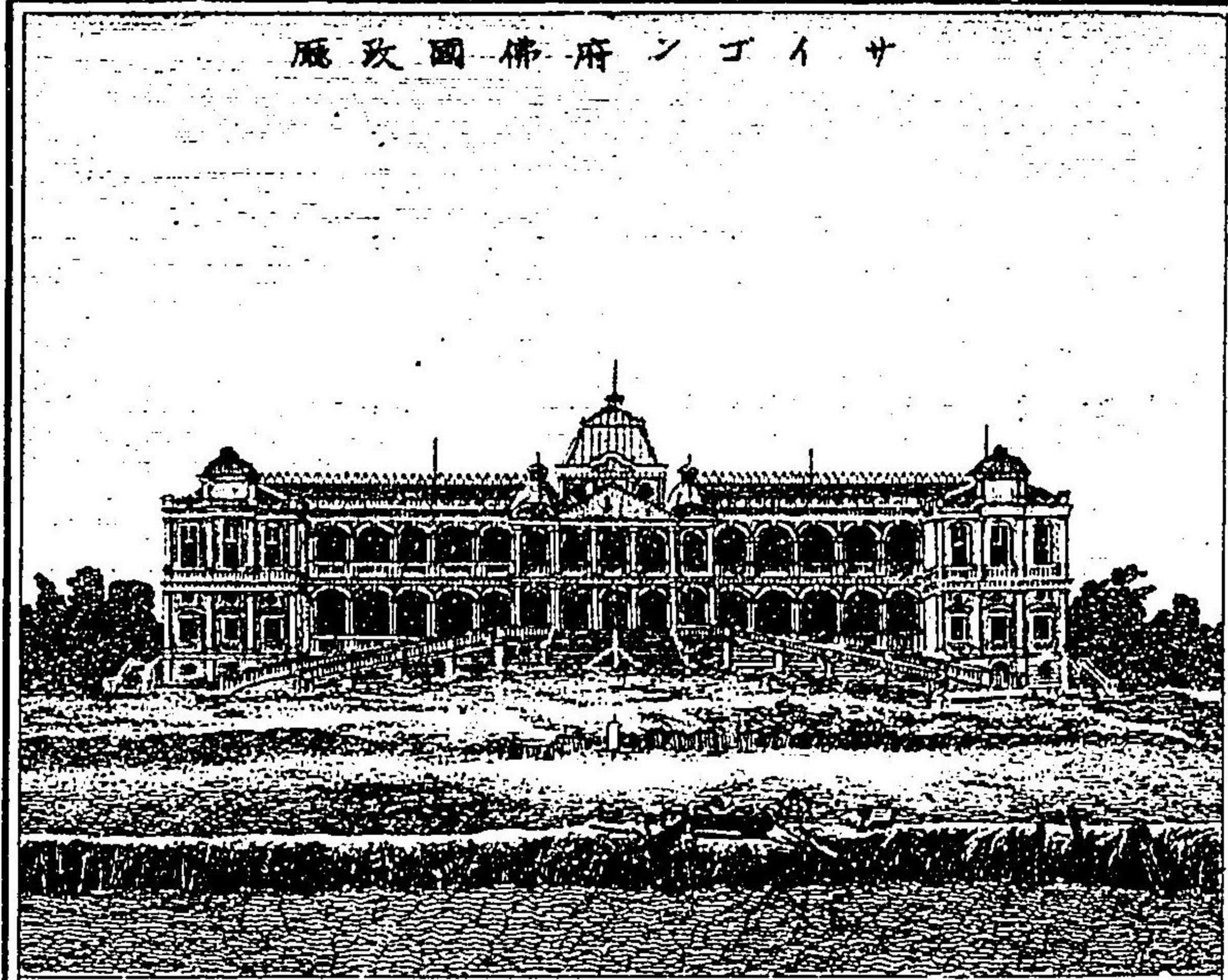


農民之耕作及家屋



運河を多く鑿通し、良港を具す其首府を  
 柴棍と云ふ是も亦と後文の記行不詳説せん  
 ◎又柬埔寨ハ西南小最も肥沃の部分あり  
 耕作の業拙ふきと米穀多く産出し  
 檳榔カータモンズ等染料及び香料や  
 桑樹普ねく産をれば部内の人民一般小  
 蚕絲を製をを生業上第一等の地小置けり  
 而して山野小虎豹や牛馬犀象極多し  
 近年此部の大半ハ暹羅小内附しとる為め  
 疆域大が小縮少し人口一百余万とて  
 都城をカボデヤ府といふ即ち余輩が暹羅より  
 到達しとる土地をバ前文不續ぎ此府より  
 順次記行小移るべし。

カンボデヤ府之記



カンボデヤ府之記 ナンコンワットより東南  
 テル湖上を経て一百八十英里  
 余ハ先づ是地小到達し土人小就て旧来の  
 吏情如何を尋ぬる小当府ハ往昔カンボデヤの  
 獨立王國とりし時名都ふりしが数年前  
 アナムを屬地とし今より廿四年前  
 或る葛藤小因り佛蘭西ハ安南國と戰鬥し  
 爾來カンボデヤ全部を佛の保護地と爲せしより  
 大ひ小衰頹しと云ふ余全市街を通行中  
 堅固の城砦や王城や大造營の居館等  
 觀る小足る者多かりし又佛國の政廳あり  
 王はあせども無き如く佛官之小駐在し  
 部内の政務を統理せり蓋し此地ハ他の部より  
 文化余程上進し民智の開發を見る



街市之府ンゴイサ



其他記すべき奇觀ありしゆつて此地より舟小乗り  
 彼のロスより流せ来る瀾滄江小漕ぎ出して  
 流せ小漕ぎ走せ下る一百二十英里まで  
 真臘部の一市邑ミソ村小上陸せ  
 即ち瀾河の吐口あり是より東小道を取り  
 進行する支三十英里沼沢叢藪通過して  
 柴棍府小達しとり。  
 柴棍府之記  
 此府は前小も云ふ如く真臘部の首府あり  
 然る小今より数年前土民り妄り小暴擧して  
 フランス西國の宣教師数人を殺戮したる為め  
 遂小全部を攻め取り現今佛の領地あり  
 今其地勢を話せん小柴棍河を挟みつゝ

地留居人外全



市街を開き諛河の東の部分を本府とせ  
 蓋し此地の炎熱は非常酷をアラビヤの  
 アデンに垂げる處なり地は曠平にして路を開く  
 濶かせども修らば又街上に樹ありて  
 草を生じ荒蕪せり外國人の居留地は  
 稍修美にして砌石を匝ら一磚瓦等を布き  
 高屋白壁皎然と亜細亞風を錯へたる  
 歐洲建築法にして一般市店は密比せむ  
 河岸土人の小屋は茅舍矮宇櫛比して  
 或は椰葉等を編み以て宇壁戸牖とせ  
 大家は瓦を葺くも何り赤瓦なきども葺法は  
 日本と同じを歐洲の葺き法よりは巧みなり  
 屋内多きは土床まで家も低を河に沿ひ



順化府城郭



河中家を架け出し或は舟を家代ふ  
又陸上の小屋は前後の庭園蕪穢て  
家猪の圈と相接し蹄跡狼籍なる地又  
全家棲止し恬然あり  
全府の人口十八万支那人最も多し  
巫來由暹羅や歐洲人之雜居し通商を  
本土の人の骨格は又我日本に髣髴し  
然るは鼻準みな低く面平き者多し  
頭髮黒く直ぐにして男は鬚は少からず  
下等社會は男女とも檳榔葉を噛む因り  
齒の漆黒なる我國の婦人が鍍漿塗る如く  
又賤民の着服は男女同装なるが故  
辨ずるからず頭髮は梳りて頂結す

安南兵士



別は冠帽あらざる笠を冠るもの多し  
稍上等の婦女子は髮結を為し服制は  
窄袖にして其領は我雨衣に能く似し  
右衽にして肩及び脅は三四の結紐あり  
長を脚に至りつゝ腰下を切り裂き褌襦  
是を男子の服と爲す婦人は袖を長として  
腰下の切裂もろとも縫へり又頭は  
髮結上を戴笠は裸體のものは少きも  
一般跣足多しとす  
府中又於て觀るべきは祠廟にして屋造は  
歐洲風に似しきども瓦宇瓷檐石礎を  
磚を以て畳みつゝ龍など刻み飾りとす  
又天主教會や造船所や病院や



國王大臣等之圖



穀倉等の設けあり。又草木の園ありて  
 區域廣々。修掃は至らざるも熱帶の  
 樹木甚多。天喬は花卉芳菲。異州類  
 遂一牧草は遠まな々榕樹の根は十圍を為し  
 棕葉十歩の地を蔭し。股大の竹を散見す  
 又此府より南方へ三英里を行し。一市なり  
 之を新隆縣と云ふ。数千戸あり然れども  
 市街陋惡不潔。茲は總城會館てふ  
 天后聖母の廟ありて。左は關帝右方は  
 財帛星君を奉祠せり。是は支那人の建つるもの  
 棟は陶製龍を置き。檐は又平面の  
 磁を画を添め附るを以て粧ひ。且つ漢字よく  
 咸茂午粵東沈玉鏡の款あり。堂庭はみふ石甃し。

順化府市街



屋内瓦を密縫。此地は蠶絲の製場あり。佛人之を創建。近年蠶業盛んなり  
 当地は一の美果産す。之をマンジュスタンと云ふ。果中無類の美品なり。其形状外殼は  
 石榴皮に似て色紫黒。之を劈けば其中は白色瓢を包藏し。五瓣轉り。瓣内は  
 漿を蓄ふ甜よりて微酸を帯び  
 且腹よりて口に入せば氷解す  
 さて此地より馬車は衆り。柴棍府は  
 歸館して直ち佛國汽船を乗り  
 四十英里を走せ下り支那海へ  
 乗り出でて北へ進む八十英里  
 交趾部は名も高きヒュー河を  
 泳ぐる。十一英里余よりて  
 首都順化府は達しり。

順化府之記

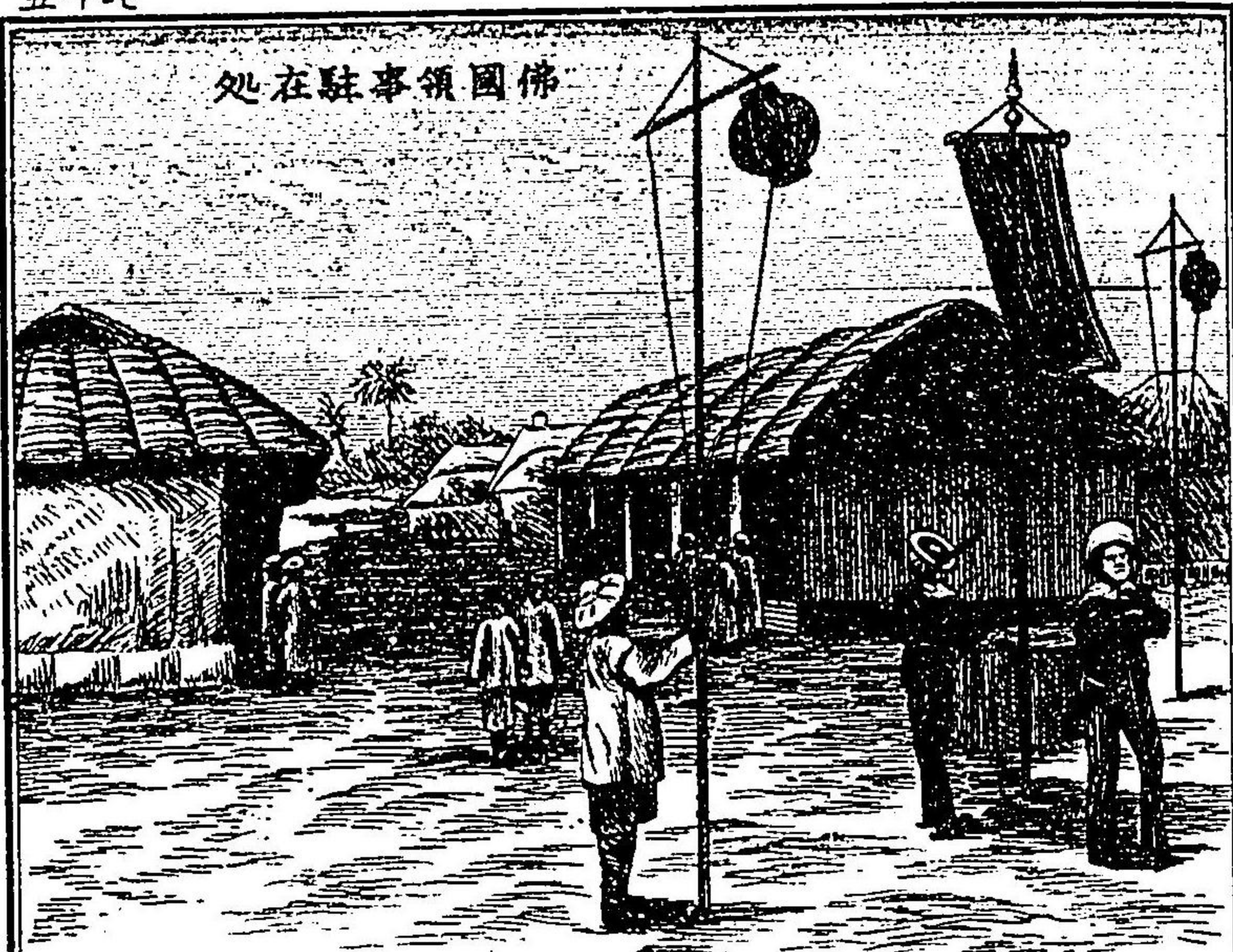


貴族之女



既<sup>す</sup>市街<sup>いちがい</sup>へ上陸<sup>あがり</sup>なは郭壁<sup>くわくへき</sup>ありて堅固<sup>けんこ</sup>なる  
 砲臺<sup>ぱうたい</sup>を築<sup>つ</sup>く其<sup>その</sup>周囲<sup>しゅうい</sup>殆<sup>ほとん</sup>ど五英里<sup>ごえいり</sup>余<sup>よ</sup>ありて  
 中<sup>うち</sup>は王宮<sup>わうきゆう</sup>及び<sup>お</sup>他<sup>た</sup>の公廨<sup>こうえん</sup>夥<sup>おほ</sup>多<sup>た</sup>建<sup>た</sup>て連<sup>つら</sup>ね  
 道<sup>みち</sup>がは安南<sup>アナム</sup>王城<sup>わうじやう</sup>の偉觀<sup>ゐくわん</sup>備<sup>そ</sup>はる盛都<sup>せんと</sup>なり  
 市街<sup>いちがい</sup>総<sup>すべ</sup>ての有様<sup>ありさま</sup>や民情<sup>みんじやう</sup>等<sup>とう</sup>も柴棍<sup>さいこん</sup>と  
 格別<sup>かくべつ</sup>差違<sup>さちゐ</sup>あらざきは姑<sup>しば</sup>らく記事<sup>きじ</sup>を略<sup>りやく</sup>すべ  
 然<sup>しか</sup>るは一の記<sup>き</sup>をばさば即<sup>す</sup>ち安南<sup>アナム</sup>の歴史<sup>れきし</sup>なり  
 讀者<sup>しやくしや</sup>は巻尾<sup>まきび</sup>に記載<sup>きざい</sup>せる附録<sup>ふろく</sup>と参照<sup>さんしやう</sup>せらるべ  
 さて其<sup>その</sup>略<sup>りやく</sup>を記<sup>き</sup>せんは尚書<sup>しやうしよ</sup>堯典<sup>やうてん</sup>義叔<sup>ぎしやく</sup>ら  
 命<sup>めい</sup>じて南<sup>なん</sup>を度<sup>た</sup>せしめは南交<sup>なんかう</sup>の地<sup>ち</sup>即<sup>す</sup>ち交趾<sup>かうち</sup>と以<sup>も</sup>へど  
 深<sup>ふか</sup>く徴<sup>ちゆう</sup>すは足<sup>た</sup>らざるなり然<sup>しか</sup>せども交趾<sup>かうち</sup>と以<sup>も</sup>ふ名<sup>な</sup>は  
 此<sup>この</sup>故事<sup>こし</sup>より起<sup>おこ</sup>りて而<sup>しか</sup>して周<sup>しゆう</sup>の末<sup>すえ</sup>までは  
 記<sup>き</sup>述<sup>じゆつ</sup>詳<sup>しやう</sup>かならざる或<sup>ある</sup>る歐人<sup>おうじん</sup>の説<sup>せつ</sup>はては

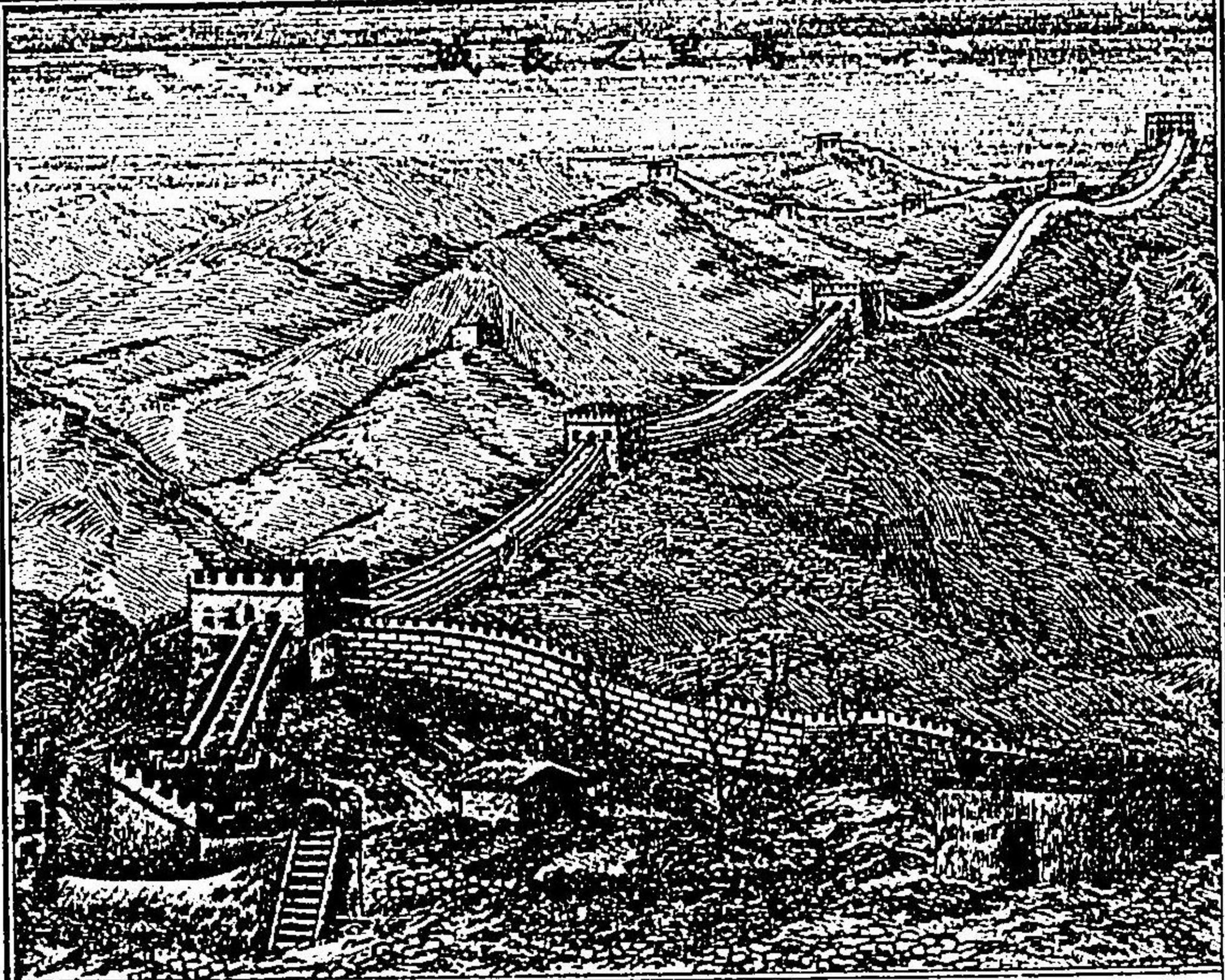
佛國領事駐在處



紀元<sup>きげん</sup>二百十四<sup>にひゃくしじゆ</sup>年前<sup>ねんぜん</sup>支那<sup>しな</sup>より植民<sup>ちくみん</sup>せりと以<sup>も</sup>ふ  
 其<sup>その</sup>後<sup>のち</sup>漢<sup>かん</sup>の代<sup>よ</sup>とふり始<sup>はじ</sup>めて交趾<sup>かうち</sup>郡<sup>ぐん</sup>を置<sup>お</sup>き  
 邇<sup>ちか</sup>來<sup>ら</sup>或<sup>ある</sup>は獨立<sup>どくりつ</sup>一<sup>いつ</sup>は附屬<sup>ふぞく</sup>一<sup>いつ</sup>は安南<sup>アナム</sup>の  
 國勢<sup>こくせい</sup>變化<sup>へんくわい</sup>一<sup>いつ</sup>から蓋<sup>けい</sup>し之<sup>の</sup>を要<sup>を</sup>するは  
 支那<sup>しな</sup>の附屬<sup>ふぞく</sup>となりたるも其<sup>その</sup>名<sup>な</sup>を存<sup>ぞん</sup>するのみよりて  
 尚<sup>なほ</sup>不<sup>た</sup>朝鮮<sup>ちやうせん</sup>や西藏<sup>しやうざい</sup>の今<sup>いま</sup>は屬地<sup>ぞくち</sup>と云<sup>い</sup>ふ如<sup>ごと</sup>く  
 明<sup>めい</sup>末<sup>ぼつ</sup>即<sup>す</sup>ち今<sup>いま</sup>を去<sup>さ</sup>る三百四十<sup>さんひゃくしじゆ</sup>年<sup>ねん</sup>頃<sup>ころ</sup>は  
 聯合<sup>れんごう</sup>國治<sup>こくち</sup>を定<sup>さだ</sup>めしが一<sup>いつ</sup>百十<sup>ひゃくじゆ</sup>有<sup>ゆう</sup>二<sup>に</sup>年前<sup>ねんぜん</sup>  
 國<sup>こく</sup>乱<sup>らん</sup>起<sup>おこ</sup>りて王<sup>わう</sup>及び<sup>お</sup>太子<sup>たいし</sup>を殺<sup>ころ</sup>し政府<sup>せいふ</sup>なき  
 七<sup>しち</sup>个<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>に至<sup>いた</sup>りしが佛蘭<sup>フランス</sup>西<sup>せい</sup>兵<sup>へい</sup>の援<sup>えん</sup>を因<sup>よ</sup>り  
 前<sup>ぜん</sup>王<sup>わう</sup>の次子<sup>じし</sup>王<sup>わう</sup>となり全<sup>ぜん</sup>土<sup>ど</sup>を統<sup>とう</sup>治<sup>ち</sup>し得<sup>え</sup>たまふも  
 爾<sup>その</sup>後<sup>のち</sup>政治<sup>せいぢ</sup>の狀<sup>じやう</sup>態<sup>たい</sup>は妄<sup>みだ</sup>り權貴<sup>けんき</sup>の者<sup>もの</sup>らより  
 王位<sup>わうゐ</sup>を奪<sup>うば</sup>ふ事<sup>こと</sup>となり其<sup>その</sup>弊害<sup>へいがい</sup>は邪惡<sup>じやくあく</sup>なる



檀制政治よりもな不・甚よ一々且つ佛國は擊又兼トて攻撃し或ひは之を占領し  
 又は保護地等と爲し・安南國の主權は終佛の手は落て王はあきども無き如く  
 六百余万の民住めど・無人の境異ならざ實又哀せの姿なり  
 余は前卷より亞細亞洲・大陸諸國を旅行して今日是國を來る迄國の國たる國なきは  
 讀者も熟知しあるべし其原因たる吾々が既又屢々述ぶ如く民の民たる民なきの  
 致す所なる事は是又通知しあるべし噫親愛なる同胞よ吾兄弟よ姉妹達  
 既又之を知るからは貴賤貧富を抱らず自家の事業を勵み乎平常心を愛國の  
 念慮を抱きて忘る無く膽又銘トて奮激し大和魂を以て能く亞細亞の兄弟救ふべし  
 不幸の姉妹を助くべし我國權を擴むべし  
 余は安南の情態も大略視察なりたせば東京等のお話には附録に譲る事として  
 今より此地を出立し馬鹿は大きく頑固なる支那へ渡航し昔より既又讀者の聞知せる  
 名所古跡へ案内し併せて古今の有様を聊か諸君に吐しせん蓋し順化府を抜錨し  
 支那の海を東航し左は海南島を眺て疾走する事七百英里其より針路を北は向け



澳門の港を西に眺て小灣は入り直進し  
 廣東省の大河なる珠江を行く二百余里  
 清國屈指の大都會廣東府に着し  
 編者曰く支那の部内に記載する里程は支那  
 の里法に從へり其一里は日本の五町十七間  
 五尺弱にして即ち日本の一里は支那の七里  
 と胸算すべし但し其面積を記するに限り  
 前の如く英の方里に依せり蓋し其便に從へ  
 ばかり  
**支那國之部**  
 支那は現今清といふ蓋し古來國帝の  
 改めしより夏殷周以來今の清朝迄  
 殆ど四千餘年間廿八代變革し  
 彼の漢といひ唐といひ皆其祖先が故郷なる  
 地名を以て其國の名とせしものよ近世の



元明及び清などは、良き字を選びて名附けし。尚、不右の外、國民は、自國を誇稱し中華といひ、中夏中國などいひ、又支那といふ名稱は、秦字の音より出たる。前には秦の始皇帝世に番名を轟かし、後ち姚秦の時代には、佛法傳習せん為め、僧侶類りて天竺へ往來する事ありて、國名大いに西方より弘まりたる因なるらん。總て地名の語尾等、アの音を加へつ、シニア則ちシナといふ音よりなりしものならむ。佛蘭西にてはシニアと呼び、荷蘭陀にてはチイナアといひ、英吉利にてはチイナアと云ふ。是を皆な元は同音より出で、あせども國々の訛りより依りて少し宛、變化したるものにして、其疆域は北方を西比利亞國に隣接し、宛は角支那とは其國の一定の名と知らるべし。

東は日本海及び支那海に濱面し、西の方は土耳其斯坦、南は印度に境して、支那海を環らせり。此面積は四百零八万八千方英里、並細亞の三分一を占め、歐羅巴の全土より大なる事一倍半、人口五億三千七百万、世界に無比の魯西亞國也。其人口は、約此半分なりといふ。之を六部と大別す。其一支那本部といひ、面積五十三万七千五百九十平方英里、人口三億六千九百六十万余。

二は滿洲、三は高麗、四は蒙古、五は伊犁、六は即ち西藏なり。第二滿洲の面積は三十六万二千三百十方英里、人口二千二百万、第三高麗即ち朝鮮の面積は人口は後葉朝鮮の部は詳かなり、第四蒙古の面積は百二十八万八千方英里、人口二百五十五万、第五伊犁の面積は十四万八千方英里、人口六十万、第六西藏は六卷に詳かなり。

支那本部は長城の以内即ち古來より中華と稱する處にて、堯舜以來歷代の帝王皆此部内にて興廢存亡せしと云ふ。然して右の域内を十八省と區別して、一省毎に省城を設置し、又附屬する多くの府城を管せしむ。府の下には縣ありて

段々政治を施せり。其十八の省名は、北より南へ海岸に添ふる部分は直隸省、山東、江蘇、浙江、福建省、廣東等として、中部に在るは山西省、陝西、河南、安徽省、江西、湖北、湖南省、貴州、廣西省といひ、西部に在るは甘肅省、四川、雲南等と為す。域内地勢西南は山嶽駢列、盤亘し、廣漠の地少々、其中央は茫々と沃野千里、綿亘し、民の糧食は多く、此部分よりして産出す。其東南より北邊は亦山嶽多く、一て山脈斷絶する處、往々彌漫の原野あり、然れども其地大略は乾燥して瘠地なり、又西北には沙漠あり、○域内高山五つあり、泰山、華山、衡山、廬山、恒山、嵩山、高河、等となす。即ち之を五嶽といふ。○右に示せる長城は本部と滿洲蒙古との交界に在り、東端は山海關に起りつゝ、直隸山西等を経て、黄河を越へ、復々陝西や甘肅省に走せ入りて、西嘉峪關に止む。長さ二千五百八十里、其間山河を横斷し、高き五百尺余の嶺に達し、或は又下て深谷を連亘す。此城壁は石を以て基礎と爲し、且土を以て壁心と爲し、圍める。悉な石磚を以てせり、高さ二十五尺余、厚さ十有五尺、其基は二十五尺あり、頂は凸凹形を爲す。胸壁有り、又壁中



弓形様の穴道と小門等を設けたり長さ三百尺毎に寨關を建て要害の土地に於ては寨壁を三重三重に築造す其工程の浩大なる其築造の堅固なる現今廣き世界中他國に比なきものにして洵と宇内の巨觀なり然せども固と異先代の暴虐政の遺跡にして今毫釐の利益なく又後世に微功なく是を宇内に比ひふき無用の長物なりと知せ此を無用の長物を何の時代か何人か之を建てしと尋るに今より二千餘年前秦の始皇が魏蜀の敵を防禦せんが為め創築するものにして邊民今も傳へ云ふ當時民人此役を了り或は命令を違へば即ち生ながら壁中に埋めりと其當時蒼黎の生を安んず能はざる亦察するに足りぬるし

○域内大河二流あり黄河及び揚子江又二流あり其名は淮水並ひて濟河にて以上の四流を合稱し四瀆と云ひ又更に三流あり婁江と東江及び松江とす國人之を三江と云ふ以上は著名のものにして其他枝擧を違まなし湖水の著名なるものは鄱陽青草丹陽と太湖洞庭等にして之を支那の五湖と云ふ景色秀麗渙利に富む

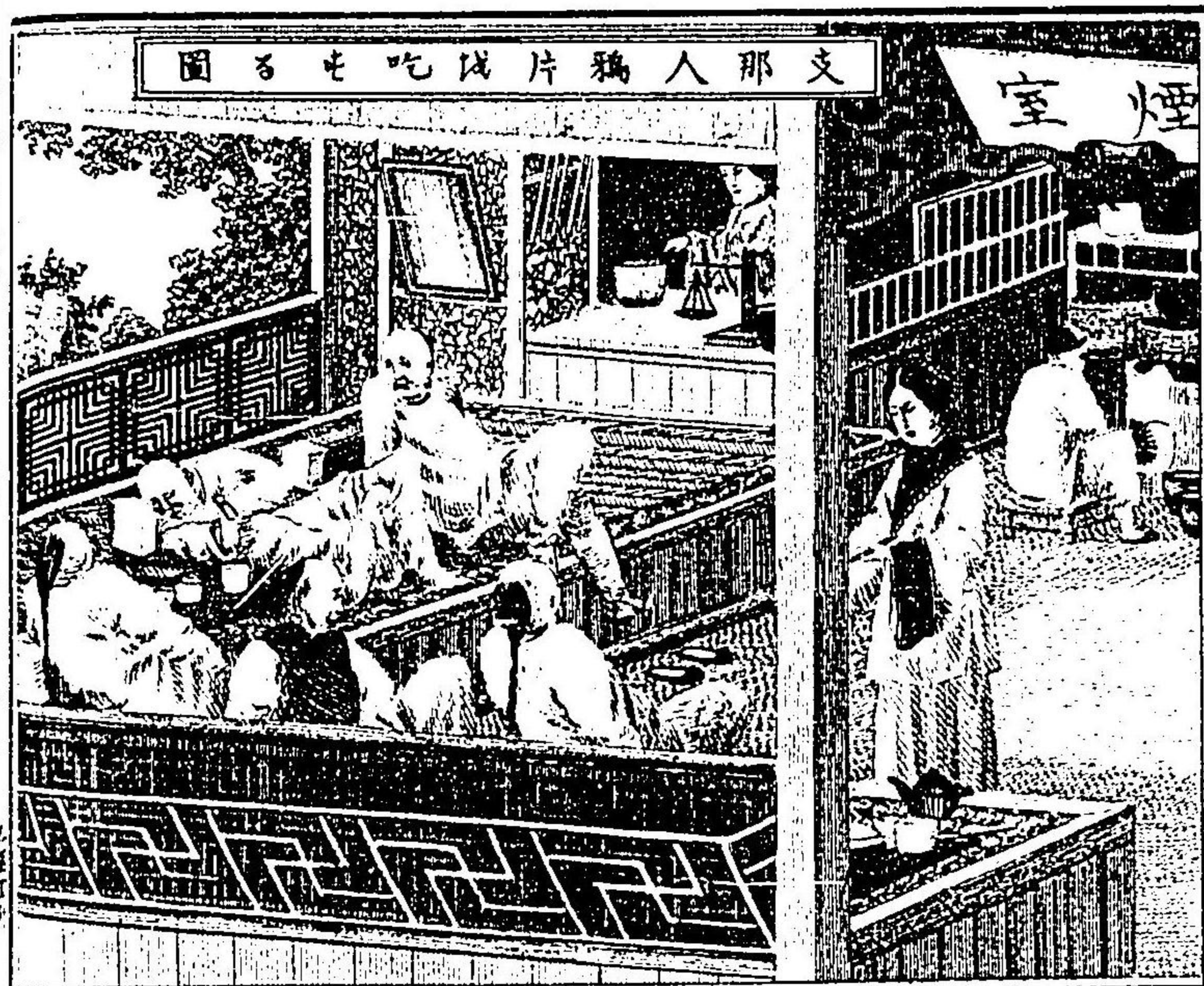
○又支那人の土工中運河は其利大にして白河黄河揚子江三河の水を引き以て

水道と為す而して沿道夥多の小河流亦此渠中に注入其長さ二百六十四里直隸天津府に起り南山東省を過ぎ黄河港を穿ちつ、南江蘇省を過ぎ揚子江を經過して浙江杭州府に止む廣隘深淺一ならず概ね隘く深くして最も廣き場所にて八十尺に過ぎざるなり凡る南方各地より北に輸する糧米は粟ね右の渠に頼せり此運河は今を距る一千四百六十年隋の時煬帝が創鑿するものにして當時挑掘せし人夫日三万を数へつ、十数年成功す費す所の金額は幾億を知らずと云ふ當時万民徭役に苦みたるは秦皇が萬里の長城築きしと同一かきと煬帝は後世に利益を與へつ、始皇の失を補へり其他大小夥多なる溝渠あせども遂に之を掲ぐる運まなし

○此國氣候は西南と東北方とは大差あり之を概して云ふ時は揚子江より以南の地暑酷寒嚴からざると黄河以北直隸省山西省を除きては寒嚴なせども酷暑あり而して揚子黄河間諸地皆か中和温にして大暑大寒ともなし

○生産物の主なるは金銀銅鉄錫珠玉煤鹽磁器茶生糸絹綿紙毡毯綢緞や





五穀砂糖麻類や香料藥材菓實等  
 天産物の人類は必要なるもの備はせり  
 輸出品の主なるは茶と生糸と磁器として  
 總高毎歳平均の一億万田前後なり  
 輸入品の主なるは鴉片金屬綿布にて  
 總高毎歳平均の一億二千余万田  
 然るに輸入品の内鴉片は大毒物として  
 能く勤者を惰者となし又強者を弱となし  
 厚者を醜とし廉者を貧ならしむるのみならず  
 身傷せて命損し産傾きて家破せ  
 兄弟妻子離散して結果一卿一村の  
 民力痿靡し其極は國の元氣を消滅す  
 然るに支那の人民は皆毒物と知りながら

貴賤貧富を抱ふ皆此毒を嗜好せり蓋し一度吃せば一時精神蕩盡し  
 愉快を覺へて忘る事能はざるに至ればかり鴉片は支那の産物と讀者は定めて記臆せん  
 余が六卷の天竺を旅行せし時美人が罌粟を廣く培植し鴉片を無量に製するを  
 第六卷百六十二ページに記す是皆支那の人民の賣る目的にて英人の不義は素より責むべきこと  
 を看よ其原愚鈍の國民が自ら求むる故にして年々輸入の金額は四千万田前後とし  
 輸入額を二億二千萬田とす輸入品の首位を占め關稅巨額を達すせば政府も之を愛着し  
 せば殆ど其三分の一に當る改て禁ずる事しかる其官民が愚鈍なる憫むべく又國際上悲むべきの至りなり  
 ○さて此無智の人民は皆蒙古種かきと而かも面貌形容や舉止行動に至る迄  
 南北各々不同あり蓋し之を概するに北省に住む人民は質より足りて文は乏き  
 其南省の人民は文饒にして質乏し故に中華の語は曰く北人南相南人北相と  
 以て福壽の徴と為さ蓋し其意は文質の俱に備はる義を要す此を又南北民情の  
 異なる一證なりと知せ而して言葉の種類は城内甚だ多くして相互ひに通ぜざる  
 言語七十餘種あり是を其國の大なると古今交通不便なる以て測知すべきかり



○又此國の風俗は男子は貴となく賤となく皆頭髮を剃去りて頂天と少許を遺つて之を糸を續ぎ足りて辨髮背後に垂下せり貴人は爪を蓄へつ寸餘の長さに至らむ



女子は足の小なるを別嬪と爲し愛せらる故に少より禁着大ならぬめぬ苦めり形ち馬蹄の如くして殆ど歩行すべからず世界に類なき奇風なり其他奇妙の習慣は後の記行に彈すべし

又國民は耕作や蠶桑取賣漁樵をば常に勤めまた殊に文學等を貴重して勉勵之を講習し經史詩文に通ず者尠なからず而して優等者を君子といひ

厚く之を尊敬を然るは是らの學問は所謂文章學より理學化學や其外の實用學に非ざるは開化を競ふ今日に實際役に立ち難し元來支那は往時より文化開け作業上機械工織等杯は隆盛なりし所にて古く紙を製造し書を印する等皆迥か西洋諸國に先ちつ其他火藥の製造や磁石の用皆支那人の發明に出で陶器茶砂糖の製等往古より甚だ盛んを製せしも最近國力衰頽し進益の功更なく百工技巧は趨々の智賢全く空りて今は西洋各國の文化と霄壤の差あり加之民情は詭譎狡獪とせず頑固一般俗を爲し刑法極めて酷なると罪人倍々多くして之を制する事を得ず又古へを貴みて今を賤み自づから尊大にして外國を夷狄禽獸視しつ屢々信義を失ひて外國人の汗辱を蒙りたきと依然とし唯旧習を固守して海外諸國の形勢を察して自ら旧弊を一變するを知らざるは國運次第に却步せり

○國帝を指し天子と云ふ政府の主宰者として其威權多る際涯なし政令法度皆民と咨謀せずして特裁す光緒帝名は載湉咸豐帝の弟なる醇親王の子として





直隸總督李鴻章之像

〔西曆一千八百七十一年生〕同治帝の崩ずるや  
 即ち位を継承す實年七十有五年  
 一月二十二日薨り蓋し光緒皇帝は  
 清朝九世の君主なり帝位世襲は定律なし  
 但帝者は皇族中年齡自己より少者をば  
 儲位と定む先帝は儲位を定めず崩じり  
 故に咸豐帝の寡婦西太后は醇王と  
 謀り以て今帝を擁立攝政したりしが  
 光緒帝即ち本年は十六歳となりまは  
 西太后の懿旨より清曆光緒十三年即ち  
 正月十有五日より親政せらるるに決せしむ  
 醇親王を始めとし百官更に上疏して  
 猶不数年間太后に攝政せらせん事を請ふ

是に因て太后は今帝二十歳迄は帝の親政もろとも訓政せらるるに決たり  
 蓋し訓政かるものは支那の関國せし以來未だ曾て聞ざるの名稱よりて太后が  
 訓政も亦往古より未曾有の事柄なりといふ  
 今其制度を尋るるに國の法は大清の會典に載せ全國の政治は清朝皇室の  
 政府に基くものとせり皇帝は又宗教の大教主にて獨り其欽明代人大臣等  
 大教禮を舉行せり行政權は内閣の總て統管する所其内閣の大臣は  
 滿州産の入二人支那産の入二人即ち都合四人なり然して之を補くるに  
 翰林院即大内閣員を以てせり翰林學士は施政の際大清國の會典と  
 孔夫子の經典と違背せざるや否やをば視察するを主任とし内閣の下六部あり  
 各部の政局滿支人各一人の尚書あり  
 又政府とは別立の都察院といへるあり即ち御史の都統局中央政府の上より立ち  
 各一人の滿支人之を統御し院僚は四十乃至五十員此國古來の習ひにて  
 御史たるものは皇帝を諫争するの特權あり六部の各局會議の際必ず一御史臨席す



○又一般の宗教は孔子、老子、道德の研究より成り新正の賀禮の外は儀式をば行ふ事なし然れども民は大概佛教を信奉しまし回教徒三千萬人以上あり羅馬教徒は五十万、教正二十五人あり他の耶蘇各派の宣教師近年諸州に布教せり

○陸海軍は常備兵二大部に分きたり其第一部は八旗兵是は滿州蒙古支那兵より成立てり一千六百四十有四年清祖の明朝に捷ちし以来其兵を白、紅、藍、黃四軍とし後ち鑲白、鑲紅、鑲藍、鑲紅四旗を増し且つ之を久ふし蒙古及び支那部の八旗兵を加へたり八旗兵は当朝の親隸として諸大府を分戍するの制規なり

其第二部は綠旗兵是は純粹の支那人を以て編し本部なる十八省に分属す右の外は勇兵と練軍と云ふものありて各省總督巡撫等之を統御す近年の調べに依れば陸兵は總て一百九万と云ふ○又海軍は北洋や南洋、福建、廣東の四水師とし一百零五艘の軍艦と八千の海軍兵を四分して四艦隊を編成す長江水師と以へるあり揚子江岸を防禦せる艦隊として江松は七百八十六艘と



廣東府河之景

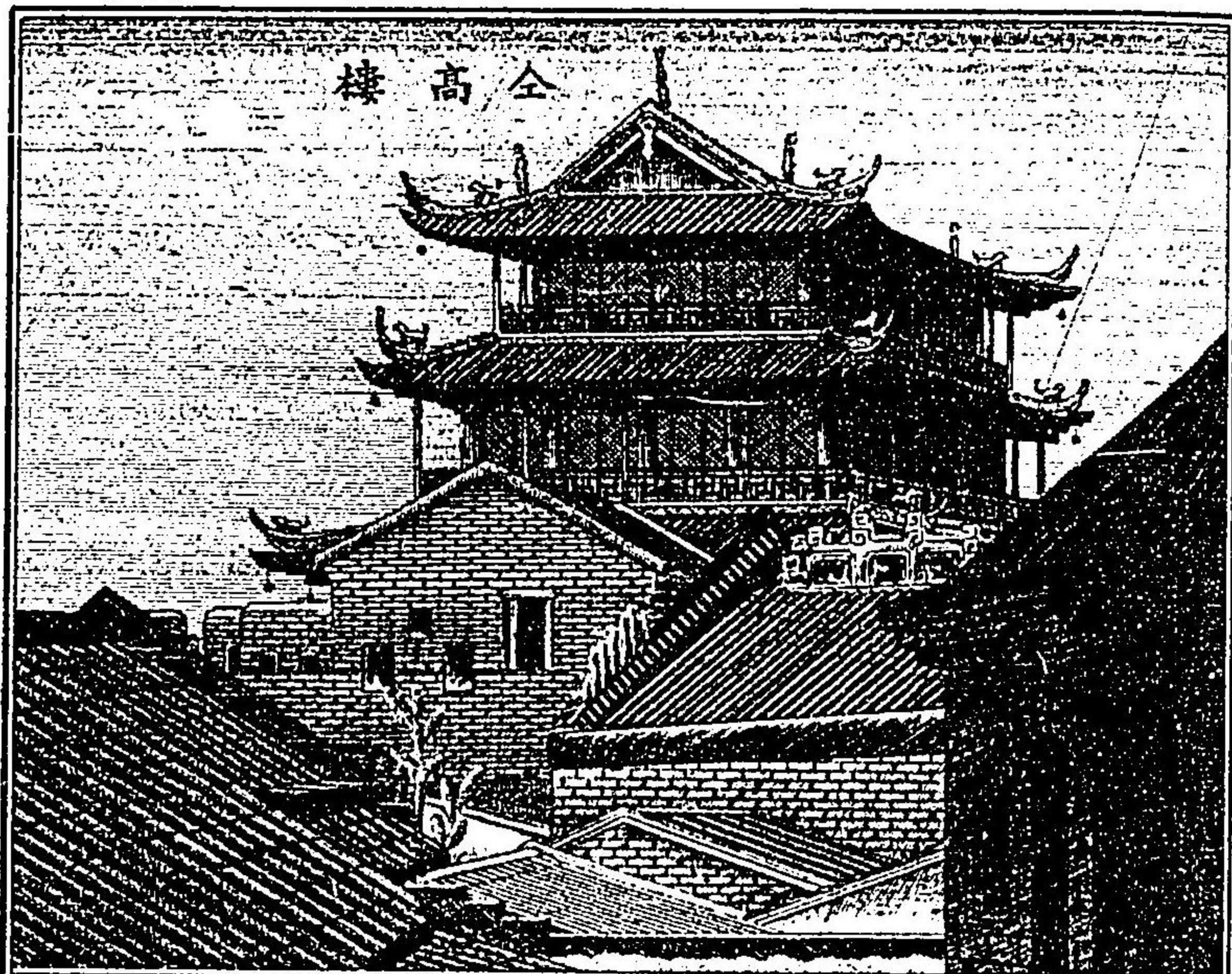
江兵六万余人あり右の如く立派なる軍隊兵艦等あきと兵士は節義あらずして軍の規律あらざれば其弱き車長城の名物とし世界の中其比を見ざる所なり

○然るに支那の人民は商業上の戦争に能く熱練し耐忍と卑屈及び狡猾の三主義を兼ね各國の諸隊商と戦ふて常は引けを取らざれば歐洲諸國の強商も一步を譲る所あり

○猶不総論中述ぶべきの條件甚かからざるを姑ら々後文に譲りつゝ今より余輩が着したる清國南部の大都會廣東府の事情より漸次記行を始むるし

〔安南國順化府より廣東府  
追海上凡ろ八百英里とす〕





全高樓

南の部分を新地とす。人家は平屋多くして街衢六百二十あり。此兩市區を圍繞せる外郭高さ二十尺乃至四十余尺あり。巨砲を備へ十二の城門ありて夜間之を閉鎖し人々の通行するを禁止せり。又市街中数條の溝渠ありて舟通じ。許多の石梁架設せり。市内に貧家多し。富商家も駢列し内外品を賣鬻ぎ。街上頗る繁華なり。此地に主なる建物は寺院一百二十四箇。學校十有四ヶ所。其他の小學等として絹帛織工場やまた金屬器具の製作等甚だ盛人の所なり。

○元來此府は支那國が古代羅馬に交通を



廣東市街

大盤街 舖地店

市衢丘陵に連りて東及び北方は山峰元出景致佳。就中越秀山などは聳拔二百英尺余上。越王臺跡あり。觀音閣や半山亭。何れも府民の遊地なり。又城堡あり。内郭は西より東に連亘し。市街を二つに區分せり。北部は則ち旧地とし

廣東府之記  
此地馬南越州の南境に在り。羊城と云ふ。元明清廣州府とす。  
 廣東府は本名を廣州府とす。其地形東江北江合流に來りて府中を貫けり。之を一名珠江と云ふ。水深々として千噸の漁船を泛ぶ。人口は二百万の上に出づ。其中大略四分一は舟を以て家となし。河中に浮住し。珠江の北岸に傍りて都府を建つ。





開きし頃より海外と交通するの口よりて猶不我筑紫の韓唐へ交通しとるに均しと事此の如く古代より海外諸國の貿易は当府に限りたるが故文化も早を開けつゝ爾来多少の興廢はありしと雖も今を距る四十四年以前迄歐洲諸國の商船と貿易非常な振ひし七鴉片の乱後清政府屢々歐洲各國と戦争を為し負る度各所を開港したる為此地は少しく衰へて古昔の如くよあざきと尚不貿易は盛んなり

○珠江一名廣東河居民常に水上に船居する者多くして大小船舶四万艘大なるものは十三間乃至五間余ありて

珠江之河街



船内数室に分ちつ、何せも一家の体を為し閩族奴婢をも栖まめつ花弁樹竹より鶏犬や豕羊等に至る迄一の備らざるはなく又往来する處は舟を多く編列し道路を為し且百般の貨物を賣ぐ店ありて全を一部の市街なり船居の人口三十万甚しきは一生涯陸地を踏まず死する者幾万たるを知るといふ

右らの奇觀を見終りて是より一小艇に乗り江を下る六十里、ワンプア島に着しつ、英國船又乗り移り其より下流大小の島嶼の間を走せ過ぎて（大小の島嶼中砲臺夥多あり今より四十五年前英人これを陥るなり）江口を出て海上の連島間を駛せて行く



諸島何せし山より大小錯落點綴し衆山青草生ずきと樹木等は更ななし  
 凡そ廣東地方なる峯嶺形状峻秀と皴皴の間は岩石の錯落たるは宛も  
 彼の點苔の状を為し始めて知る支那風の畫法は由来ある事を是らの景色を眺めつ  
 若干里をば東行し香港島に着たり

香港之記

さて香港と云ふ稱は葡萄牙の語にして海賊といふ義なり然るに支那人填するに  
 香港二字を以てせり腐木化して靈菌を蒸し出せりと謂つべし此地は即ち廣東省  
 惠州新安縣下なる屬島として鯉魚門の海峡以て大陸と相對立き面積は  
 總計廿九方英里全島純骨土少きを平地なくして港門は其北濱に開きたり  
 抑も此港は今を距る即ち四十五年前彼の南京の條約に因て支那より英國へ  
 與へしものにて該島の對岸コウロン半島も今より二十五年前英支互ひに條約し  
 香港政府の版圖とす此半島と港口の間は多くの岬角や大小島嶼點綴し  
 風景奇絶愛まふし英人此港を領するや直ちに阜頭を開きし地理は廣東海口の

香港埠頭之景



要衝を占め海深く東西南洋各國の  
 巨船檐下直泊し商業熾盛となりなせば  
 人口年々増殖し今は其数十六万  
 四百二人移住せり全島歳石のみをば  
 地は耕種の利益なき樹木も乏し然るに  
 水源乏しからざれば引て以て用水とす  
 然るに河流あらざれば鐵管を架し市に引く  
 用水甚多分なり山中一種の美石出で  
 グラツトといふ英人は採りて石屋材と爲す  
 皎白にして潔美なり曩も英人教士の  
 石屋を建て支那人は借し與へし故此府は  
 支那人甚多けきと市街は至つて潔美かり  
 家作は三層屋より前は虚廊を設けつ





往來と為す歐風は東洋兼ねたる建家なり  
 然るに玻璃窓ありまは玲瓏の觀更なし  
 其支那人の商店は多く漆器や陶器にて  
 金銀其他虚飾せる華光爛然たるを見ず  
 支那の人は喜んで朱を塗きり柵箱や  
 簾の類や記號まで何れも朱色焮然たり  
 蓋し記號や招牌や柱聯等は漢字にて  
 筆法甚多適羨なり  
 歐洲人は山を據り高朗美麗の館を建つ  
 園を造らし樹を植へて清潔殊に幽雅なり  
 此地は夏至規の南に出ず四時暑ありて寒はなし  
 地位南方に向ひつ新安縣の高峯は  
 峽を隔て此立南北の風温涼を欠きまは

炎熱酷々異卉秀葩四時之色を衰へず庭花も為め艷美なり府中修める公苑は  
 谷に臨みつ山より白石以て磴となし層々之を開きつ、奇木異草等を植へ  
 玲瓏王を布く如し、苑前太守の巨館あり白石造りの美館あり又近傍に兵舎あり  
 英より兵士を差遣せる常備八百余人とす此地に於ける制度は行政太守の手を歸し  
 行政院あり太守の輔佐を為せり該院は殖民事務長軍隊の指令長官大訟師  
 會計事務長検査長記録長より成立てり立法院は司法長殖民事務長大訟師  
 會計事務長検査長記録長と大英の女王陛下が命じたる無主務の立法官より  
 組織するものにして太守之が長と為る現時の太守サーギンゾルヂアアギンソウエンは  
 一千八百八十有三年此地に赴任せり年俸三万弗といふ  
 又前にも述べ如く此地は支那の貿易場實に主要の場処にして英米獨は最大の  
 通商を為し就中英は全輸出入の半額を占む官府より輸出入の報告を  
 発せざれば精細に之を知る事難けきと商賈の調査は據る時は昨年輸出品の高  
 四千萬弗前後にて此重要なる品々は鴉片綿布等と為す輸出しする金額は



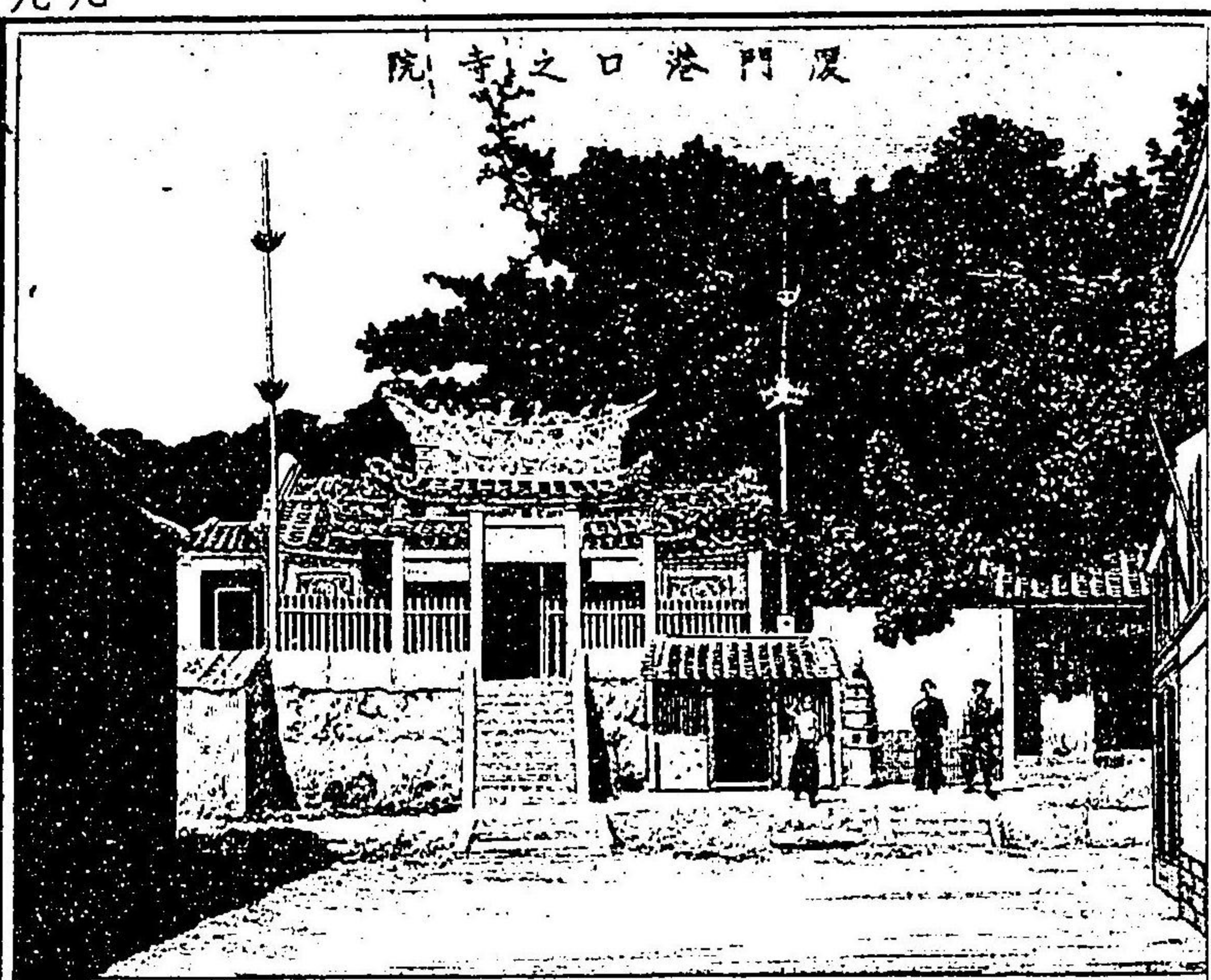
二千万弗前後にて茶と生糸を主とせり。此地は日本人民も二百餘人住まき、百中九十九は賤しき業を営み、生活を為す計りて日本國の商賈と云ふべきものは只懂か三井物産會社と日下部商社のみにして是を主とし又歐人を相手と為せり是故に清國人の需要する日本品の賣買は總て清國商人の手にあるもの如く、實は遺憾の至りなり。

さて埠頭より船を乗り鯉魚門の海峡を東に向つて進航す左りは一帯山脈の綿亘して峯々は海に向ひ奇容あり何れも岬あり樹木無く破法點苔其景色文人畫に異ならず支那は樹木乏して從來暹羅より輸入せり近年日本國より多少の輸入あるなきと其不足を教して我日本商人は注目す所あり既にして船は早六百清里を進行し福建省の一要港廈門港と着しなり

廈門港之記

廈門島は福建省漳州府の西南方團頭灣の中あり島の周廻三十里地味硠瘠耕利なき穀果蔬菜大半は臺灣島より仰ぐといふ全島人口四十万

厦門港之口寺院



埠頭は南の瀛小在り港を内外二部に分く外港西古浪嶼小抵り内港内小澳入き良港小して各國の船艦埠頭小蟻集せり市街は華美ならずと間々大厦巨屋あり蓋し内外豪商や富人多く居住して貿易非常小盛人あり。

此港は四十四年前(西曆一千八百四十二年)清曆道光二十二年)鴉片の乱小英人の要求小依り開港し爾来民口増加して現今人口三十有五万三千二百ありきて此港お解纜し東北方へ進航し左り一の島嶼あり金門といふ按ざる小即ち明の浯州小て浯州厦門小みふ俱小鄭成功が臺湾小



臺灣淡水港

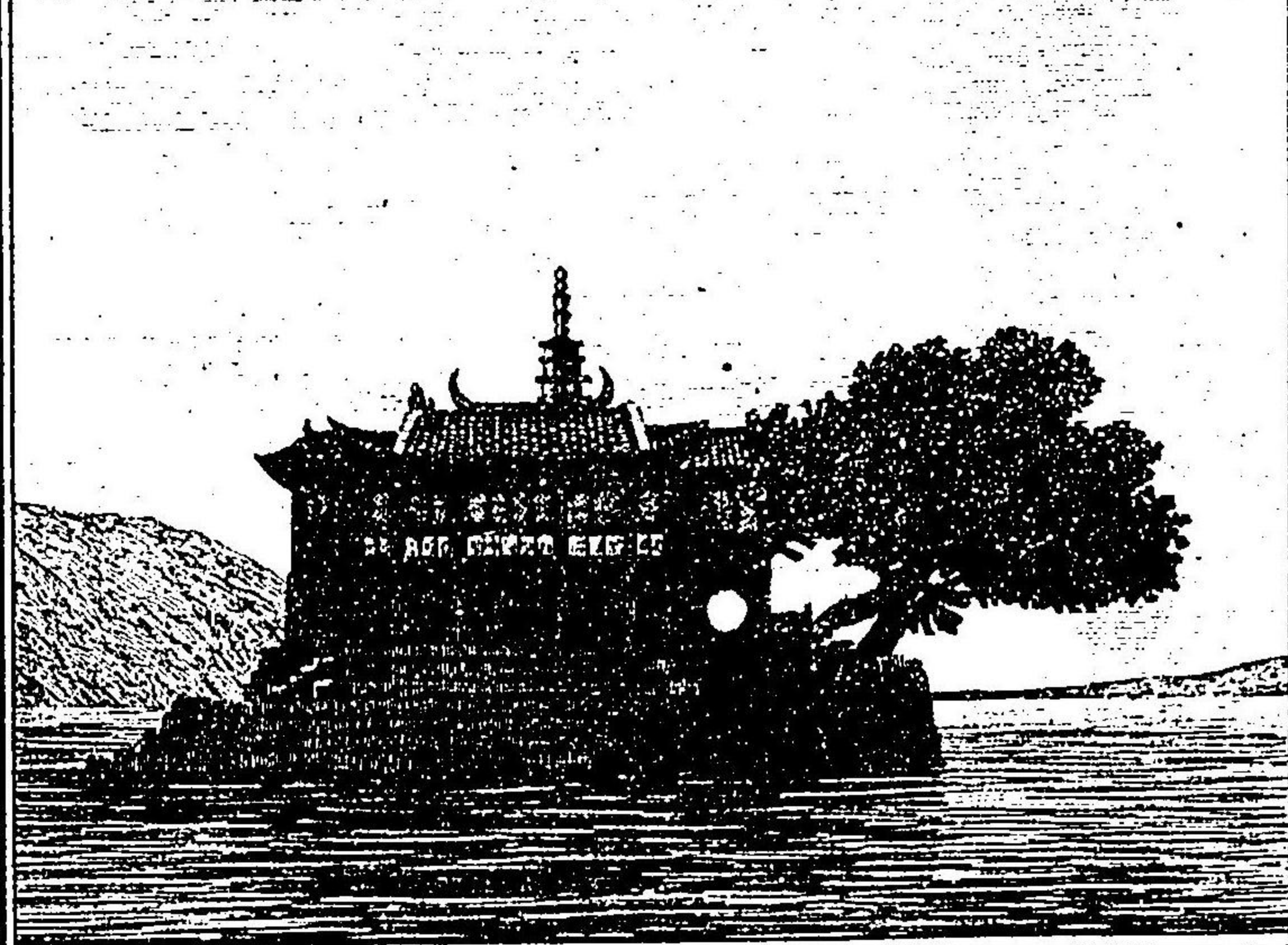


入りざる前小兵置き明社お存せし所とす  
 尚不此辺不連せりる大島小嶼を眺むるハ  
 何せも明季の古戦場古今の感お起しつゝ  
 直駛する亥四百余里臺灣島の西北岸  
 淡水港小着船せり

臺灣島之記

きて此島は福建省東南岸の沖小ある  
 大島にして全島の長き南北七百里  
 東西一百五十余里南北山脈蜿蜒し  
 此全島お中分き其山西ハ悉く支  
 支那小属し山東は土蕃小属する所あり  
 全島人口二百万其内支那人五万とす  
 氣候ハ暖熱なるが故草木繁茂し穀物や

福州閩河中之島



果物樟腦等産し又近年ハ良質の  
 石炭巨額小産出せり

此地明の時代不は和蘭人の據る所  
 後ち鄭成功内地をば全く失せ不及んでや  
 俄然此地小闖入き時小和蘭の國民ら  
 之を防ぐ小違きあく忽ち他処へ去りしつは  
 鄭氏替つて明朝の片土お存せし所あり  
 爾來清小属するや往年我師の問罪地  
 近くハ今より二年前佛蘭西東洋艦隊の  
 一将レスベイ来寇し劉銘傳らと雞籠小  
 奮闘劇戦せし莫は當時の新聞紙上小て  
 読者の知らるる所あり現今此島の首府おは  
 臺灣といふ山西の南部柴頭港小あり



人口十有二万と云、彼の老将軍劉銘傳、今仍不府廳小駐在し、島の政務を統理せり。又雞籠ハ此島の北濱に在る港にして、人口八万二千あり、即ち佛持レスペーが港口の臺場を破壊して、武威を示せし所と云、炭礦多し、此地あり、而して予輩の着しとる淡水港ハ雞籠の西方四十五里に在り、人口五万二千余、支那人最も多し。故小市街の不潔多し、筆紙小名状をべらざる、其地の利を以て福州、厦門、香港と通商貿易盛なり、市民の噂に依る時ハ、劉銘傳ら佛軍小頑固の迷夢を攪破せ、文化の利器小感心し、雞籠港より淡水へ、鐵路お布設せんとして、近日旗昌洋行へ之を委託し、りといひ、或ハ協議中と云ふ、蓋し現今清國小鐵路の設け更不無し。劉氏果して其之を實行するの勇ありバ、支那のため又氏の爲小、或は之を賀まべきら読者宜しく評まべし、さて淡水を抜、西北方へ駛る、支那の二百二十余里にして、福建省の一大河、閩江吐口の金牌へ到着し、此地小、水先案内者お備ひ江を派る六清里、眞江口小達せしが、江幅俄く減縮りて、終り小一里の瀨戸とあり、流勢激しく危険あり、尚不遡る半里余、閩安峽小至りし、一層狭隘瀨戸とあり。

福州府閩河之景



其兩岸は断崖の絶壁にして、峻小據り堅固の堡寨お建設し、夥多の巨砲お備へり、此天險の要害や、金城鉄壁音ふらむ、然る小今より二年前、佛國東洋艦隊の指令長官クルーバー部下の将士お派遣して、支那の兵士を追散し、難お陥せし所あり、其より進む六里余、江の中央小嶼あり、之を羅星塔といふ、即ち西岸寺塔あり、寺院の南ハ市街小、濱辺ハ外人居留の地、各國領事館もあり、諸大船の福州へ来るもの皆此岸小、投錨繫泊群集し、市街の北方丘上小、砲台址あり、是も亦佛の破りし所あり、此より一小艇小乗り



福州府全景



福州府お指し所なりし島の上流幅廣く  
 之が馬尾の灣といふ此所ハ即ち佛提督  
 クールミーが談旗艦ヴナルタ号の甲板上  
 指揮お爲しとる所あり此時名高き支那旗艦  
 揚武号を始めとし其他數十の軍艦が  
 微塵ふせらざし所にて東岸馬尾てふ岬上  
 廣瀾至大の殘礎あり之お造船場址とて  
 境内あき果て草生し見る影もなき姿あり  
 此背後小山あり右の戦時支那高官  
 張佩綸や何如璋が(張佩綸ハ欽差会弁福建海  
 軍大臣前日本駐在公使)公務を打棄て逃せつ、  
 何如璋ハ致命并理福建船政(張佩綸ハ欽差会弁福建海  
 軍大臣前日本駐在公使)公務を打棄て逃せつ、  
 互ひ泣きし所あり當時の支那情お回想し  
 是より進む又六里福州府遠しとり

福州府市街



福州府ハ福建の省城にして閩江の  
 北岸に在る名府あり市街を繞りて城壁ハ  
 総計七箇の門ありて壁上各處に衛所あり  
 各々巨砲を配置せり又城外に街衢あり  
 江外に跨りて通ざる堅固の石橋以てせり  
 一を万壽橋と云ひ一を鳳山橋と云ふ  
 二橋とも其長さ一千七百餘尺あり  
 前後肆店櫛比して上下帆檣林立し  
 船居まる心の亦多く各船瓶花お挿きみ  
 婦女皆頭髮花を簪き此城内にて觀るべきハ  
 衙署及び寺觀にて稍美あり而して

**福州府之記** 此地福州府の城郭の七箇の地素閩中と曰  
 小據り彰武と云ふ宋の成武元明清俱の福州府とす

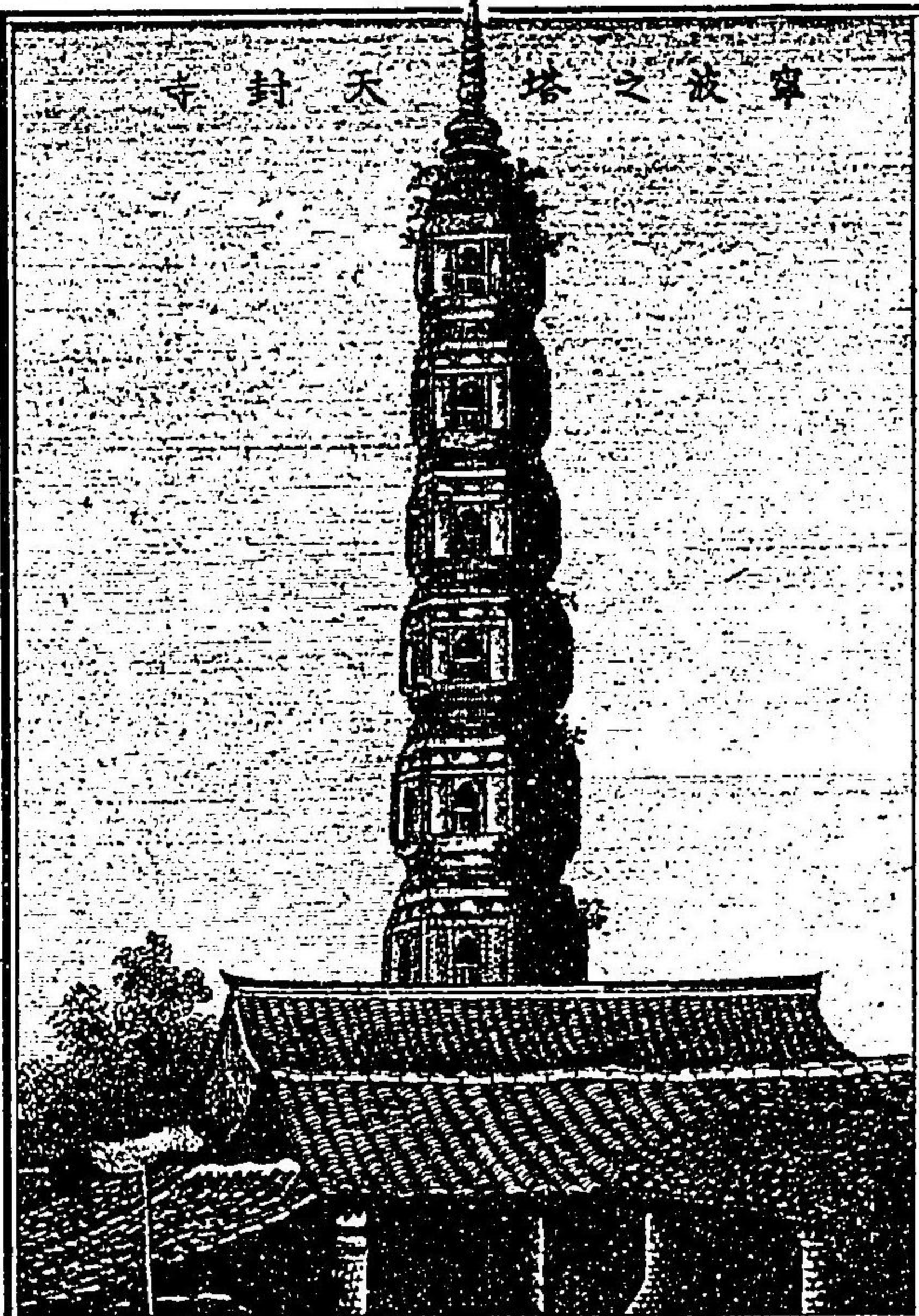


西小名高き西湖あり風景絶佳愛きべし北小望遠台ありて是ハ丘上小建つ旁ら小種々の危巖聳立き南小九仙山ありて巖面多くの文辞あり東門外小坊あり坊中温泉数ヶ所あり府李小名あるハ經史閣朱文公の記を所報恩寺ふて名高きハ松風堂の古跡ふて李忠定の寓所あり

さて此府内の人口ハ通計六十二万余概ね鴉片小沈溺し各産業小勤む无く乞兒徘徊群を成し醜状言ふ堪へざるあり蓋し此地も今お距る即ち四十四年前鴉片の乱小英國の要求小因り開きくる貿易市場の一ふして内外通商盛人あり是より前の艇小乗り羅星塔迫漕ぎ出して英國汽船小乗り移り閩江口小駛せ下り北々東へと進航し九百清里余ふして浙江省の東北部甬江口の直隸廳鎮海廳を通過して江を廻る九清里寧波府小着しとり蓋し江口の鎮海ハ廳城周廻二清余里城壁高き二十尺城東堅固の危巖あり則ち江口小聳峙して高さ二百五十尺巖上堡寨お建設し江小臨んで砲台ありふを江海の咽喉ふて誠小府治の門戸とり今より四十三年前鴉片の乱小清の師英國兵を此地ふて

防禦し敗りし所あり之を蓋し形勝の利を由るものと知らるるなり

寧波府之記 此地禹貢揚州の域三代皆越の地となり甬東と曰ふ素は鄞甌句章三縣を置き會稽屬隣越州と曰い唐明州と云ふ宗元の慶元明初明州府とかし尋で寧波府と改む清之は因る



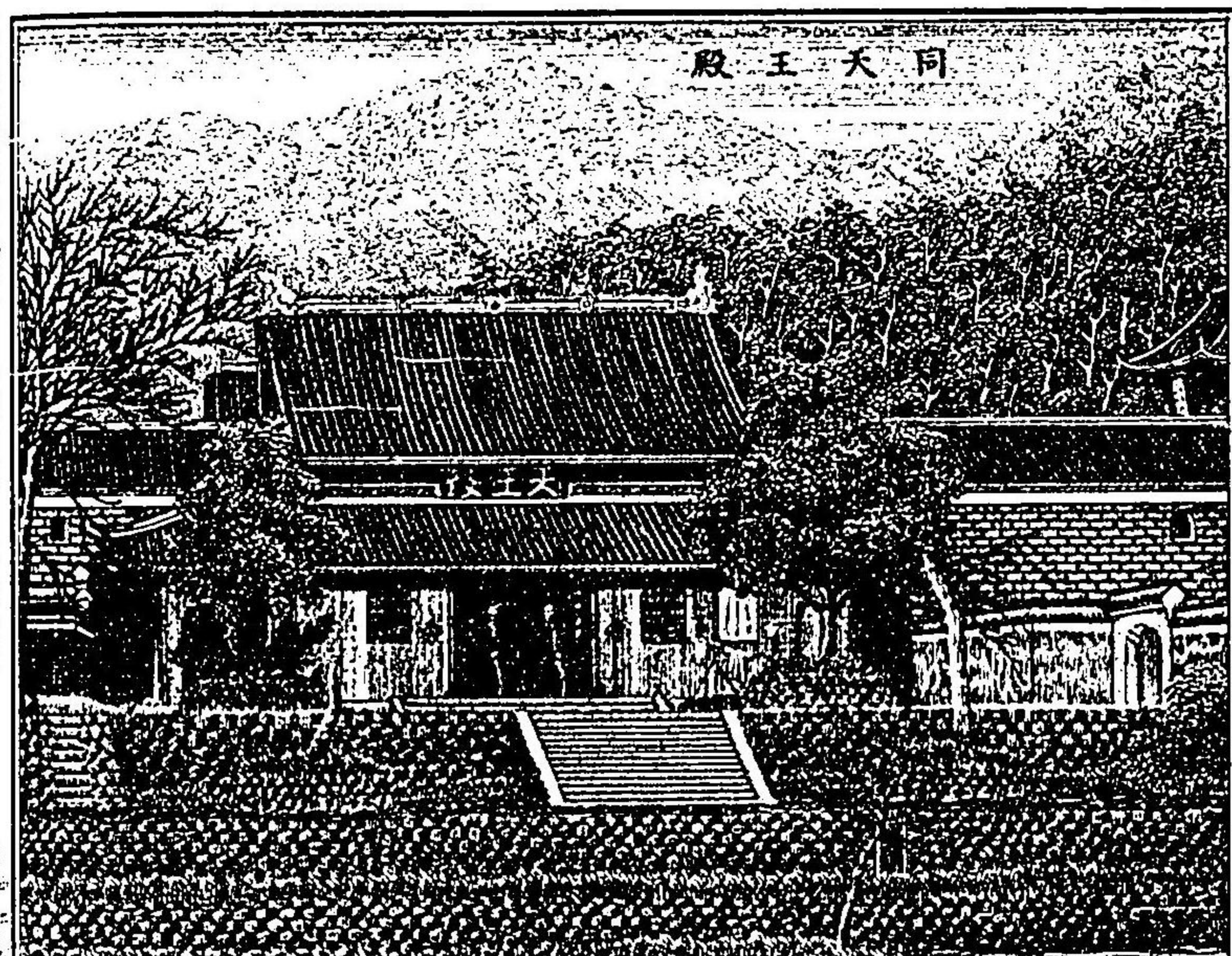
寧波府之天塔

府城は右の甬江の南の岸に瀕臨し城北全々江水にて東西南の三面は濠を以て繞ら一六門を鑿り各門は浮梁を架設し外坊は通じたり又甬江は四明橋あり府治の前幢々東西橋を架き市場は商家櫛比して熱鬧繁華他に比し市街は総て華潔又て亭宅頗る閑雅ふり人口四十二万とす

此地も鴉片の乱の爲め開きし貿易場とて甬來倍々繁昌

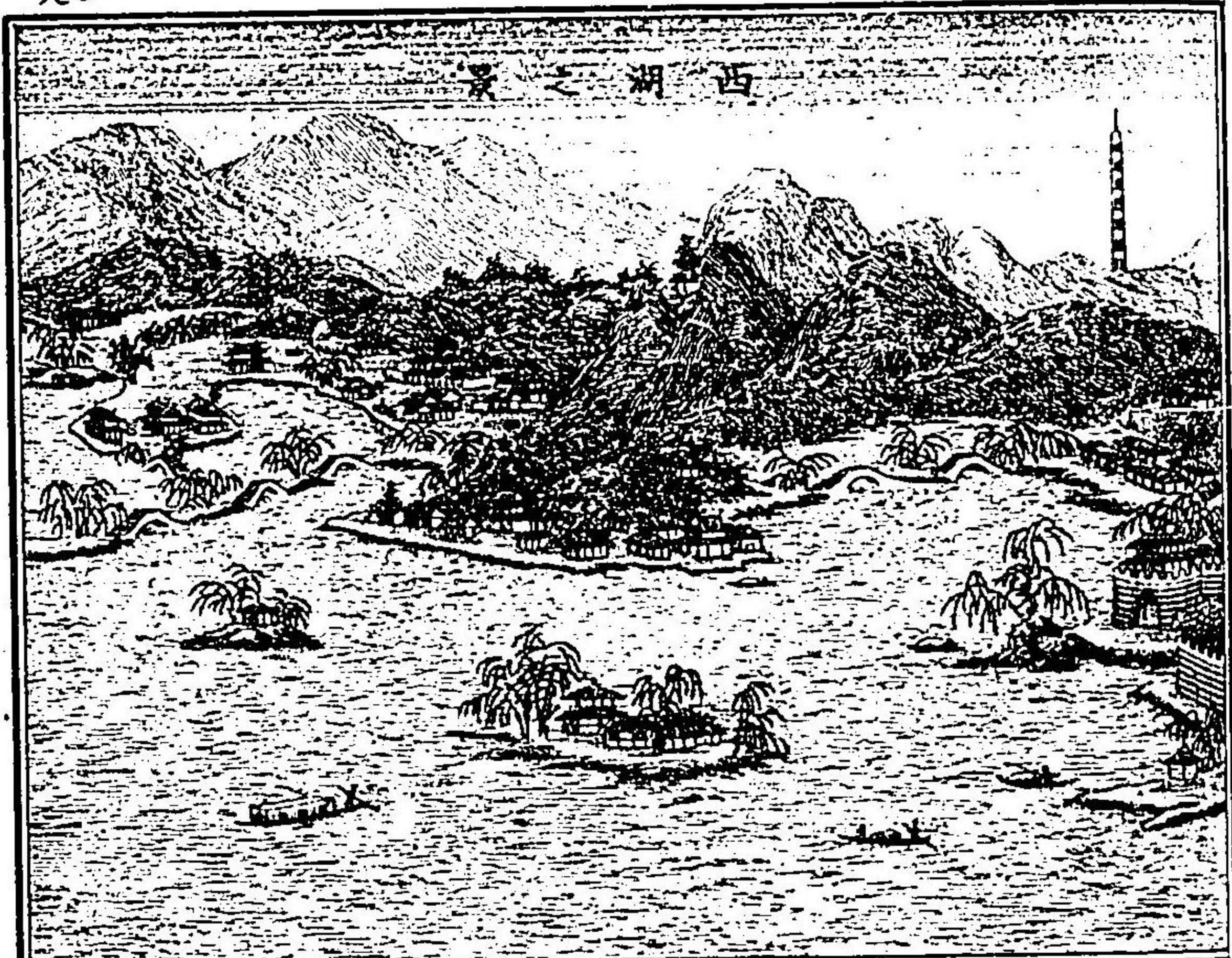


同天王殿



内外貿易熾んなり凡そ國の富商は  
 多を此地に占據して諸國に渡航通商す  
 府中に於て觀るべきは衙署並に學校や  
 商戦衆議所等にして古利に天寧境清あり  
 其中殊更觀るべきは名高き天封塔と為す  
 形は六面七層の高き一千六百尺  
 内には石燈設けつゝ其登臨の便となす  
 塔に登つて眺むるに全府の景色前在り  
 蔚々然として掬すべし府外は湖水二ツあり  
 其一を日湖と云ひ其又一を月湖と云ふ  
 皆甬江に通じり景致の多きは月湖にて  
 湖上即ち十景あり幽雅閑靜文人や  
 墨客多く棲居せり。

西湖之景

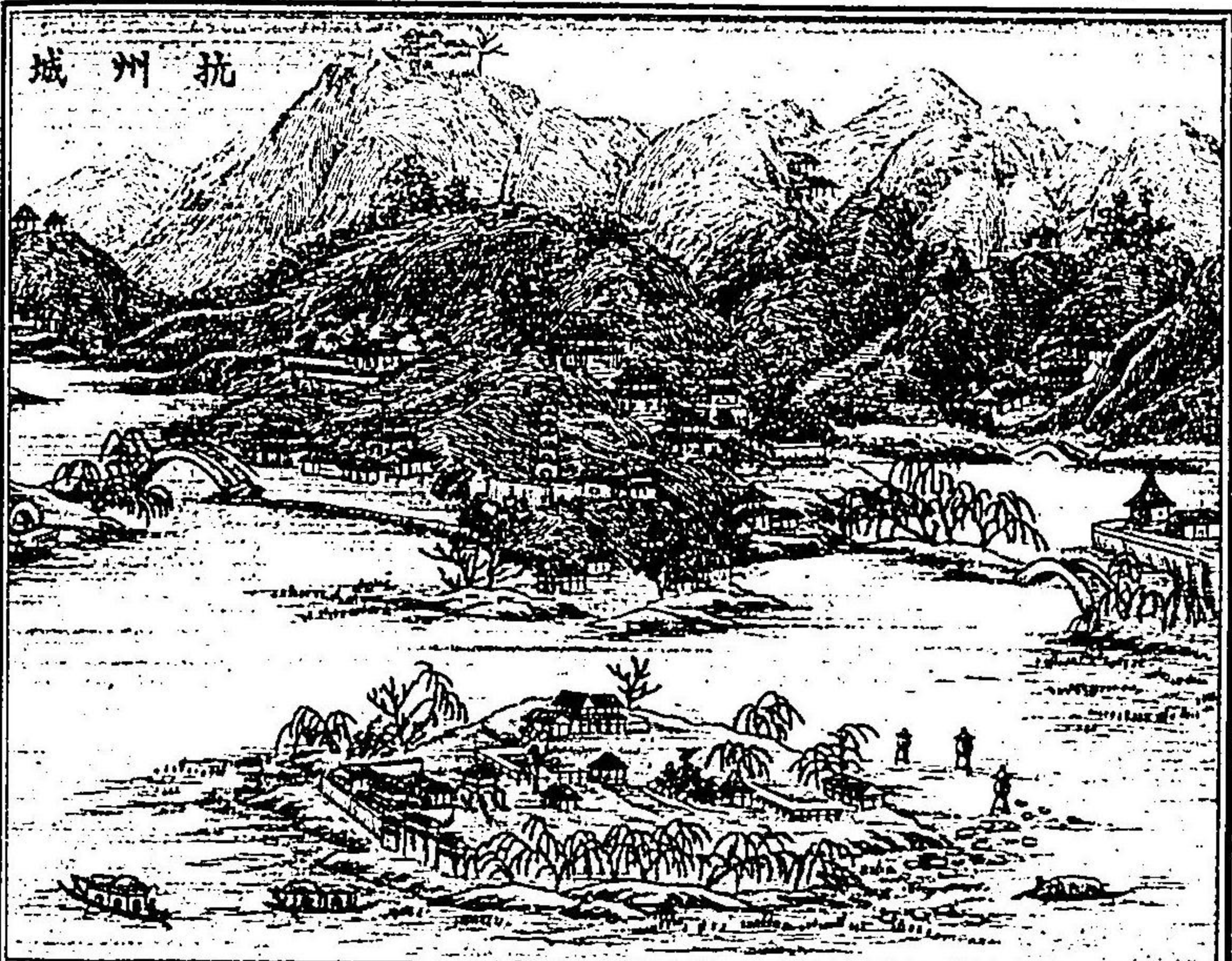


さて寧波府を出立し陸路を西北方に取り  
 奉化縣を過ぎりて四明嶺を北に見つ  
 上虞紹興蕭山の諸府縣をば經由して  
 彼の浙江を渡りつゝ浙江中流に居る能杭州府に達したり  
 杭州府は即ち浙江省城の在る處寧波府を距る凡  
 三百余里據するに此地元禹貢揚州の域にして春  
 秋の時長越を屬し秦に至て會稽郡を屬し其後漢  
 に至つて錢塘と云い隋は杭州と叫び唐は餘杭と  
 云ふ宋の高宗南渡の時此は都として臨安と其後元  
 杭州府と稱し清に至つて改めず

此地は即ち浙江の北岸に瀕する名府にて  
 居民約る一百万半は樓房なるものを  
 江上に架して浮住せり其地山水秀美にて  
 人文彙萃し繁華の象・美を蘓州に擬たり  
 故に支那の諺に上は天堂下蘓杭と



抗州城



信は然り而して水利甚た便なせば  
 亦高賈雲集の藪と為せり市街中  
 富商家櫛比して其各店の家号皆  
 金粉以て記する故灼々として光輝あり  
 行人雜沓すといへど北地の如く汚衣を着て  
 臭氣を帯ぶる者を見ず街路狭きも清潔して  
 衙門學校寺觀等見るに足るもの多しとす  
 今より府外有名の名所古蹟へ案内せん  
 ○西湖は五湖の一にして府の西にあり其水光  
 山容應接暇まなく又多禿筆の能く之を  
 形容すべからざるなり蓋し西湖の地たるや  
 周廻凡る三十里源武林泉又出ず  
 此國前來聖賢の賞詠したる所にて

内外之景



平湖の秋月、極隈の春曉、断桥の殘雲、雷峯の落照  
 南屏の晚鐘、麴院の風荷、花巷の觀魚、柳浪の聞鶯  
 三潭の印月、兩峯の挿雲、之を湖上の十景とす  
 又西湖佳話に載す如く葛嶺の仙、白堤の政  
 六橋の才、靈隱の詩、孤山の隱、西冷の韻  
 岳武の忠、三台の夢、南屏の醉、虎溪の笑  
 断桥の精、錢塘の霸、三生の石、梅嶼の恨  
 雷峯の怪、放生の善、之を十六古蹟とす  
 往昔盛人の時代には吟舸畫舫を泛べつゝ  
 騷客絶へぎ此中を醉舞したる所なり  
 傳へ以て漢の時に金牛湖上を  
 顯出したる事ありて或る人此を明聖の  
 祥瑞なりと言ひ一因り古昔は明聖湖と云へり



蕪東坡郡主よりし時、西湖を廢す可らざる理由を五ヶ條上言し、乃ち長き堤を築き、以て行人の便となし、且つ又右の堤上より六つの橋を架設せり。紹興帝都を建てしより、君主宰相皆競ひ、此地は嬉遊したりと云ふ。金に至りて或る帝は之を聞知し、羨みつ俄に鞭を投げ棄て、渡江の志を起せし。論者ありて設をなす。此西湖をば尤物の國を破るものとなし、之を西施に比すも亦過ぎたりと云ひし。今左より古今諸大家の名詩を借りて吾輩の拙き文を補はん。

樂天の詩曰

湖上春來似畫圖、亂峯圍繞水平鋪、松排山面千重翠、月點波心一顆珠、碧毯線頭抽早稻、青羅裙帶展新蒲、未能拋得杭州去、一半句留是此湖、

東坡の詩曰

水光欲灩晴方好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜、

清の飯野山人

西湖名勝繫人思、一切紅羊異昔時、我是武林舊游客、拈毫重譜竹枝詞、

西湖の竹枝詞

湖上春來沸管絃、東風粧出綺羅天、六橋烟水都無恙、不見當年舊畫船、

鄂王祠宇鎮湖濱

頑鐵何辜鑄佞臣、來往游人爭弔古、巍々高塚閱千金、梅花香裏路彎環、放鶴亭空鶴未還、女伴從來誇吉利、如何相約上孤山、

二曰

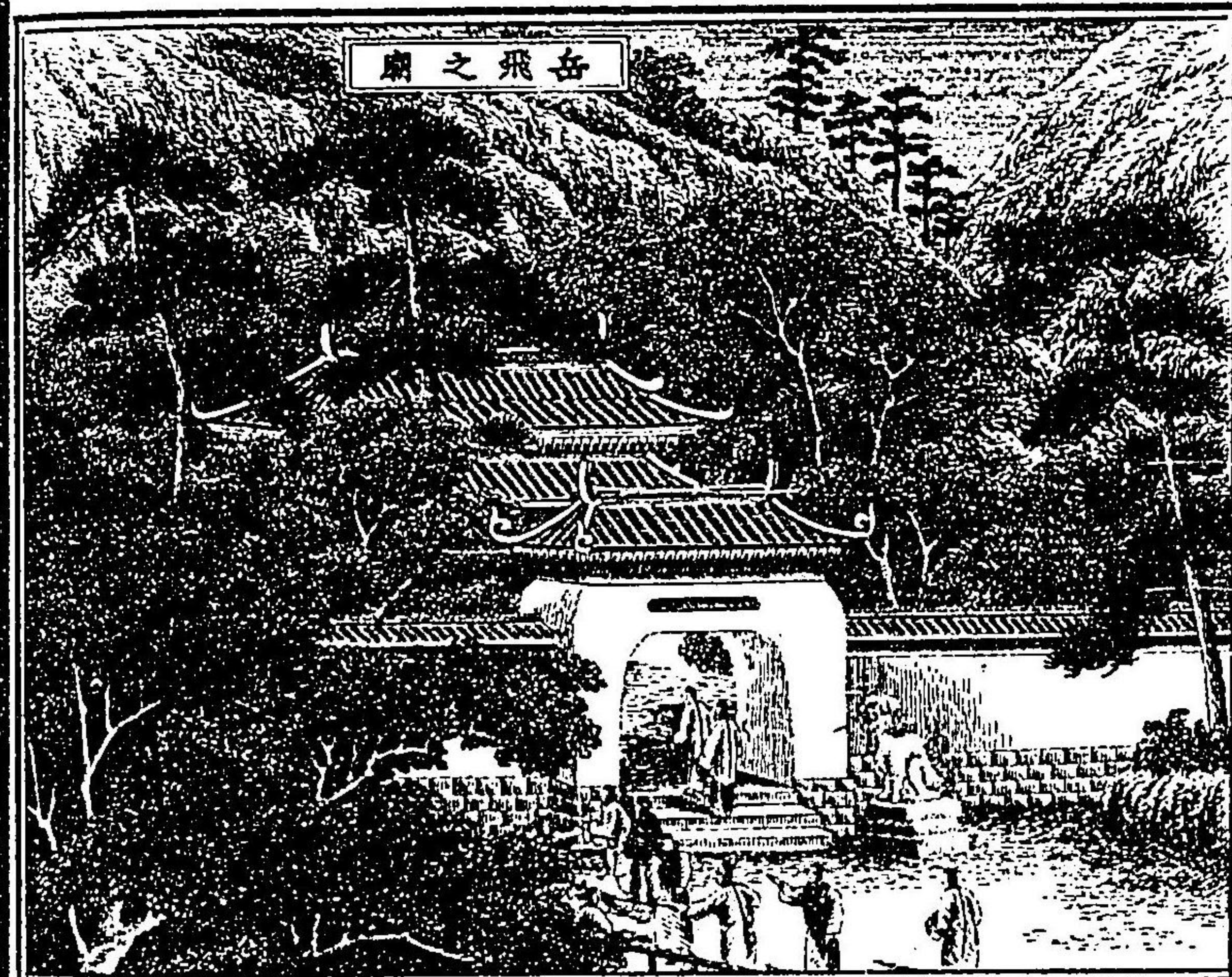
湖山再造樂芳時、名將風流想見之、樓閣玲瓏如畫裏、游人爭拜蔣公祠、逃名梅尉風流甚、罵賊常山死不休、却羨孤山一杯土、忠臣隱士各千秋、香車油壁此曾經、兩岸垂楊分外青、却羨錢塘蕪小、獨留芳塚在西冷、鳳林古刹劇崢嶸、花木扁饒物外情、擬為游人醒塵夢、勞他百人杵鐘聲、扁舟來去疾如梭、山色湖光入望多、繞郭荷花開已徧、惜無人唱採蓮歌、花下觀魚興欲顛、舊時名勝渺雲烟、金沙港畔迷荒草、恨我生遲二十年、余や小舟に棹して湖上を遊ぶ、其中の一島上は小寺あり、此を三潭印月の處とかせり、水面に三座の石燈建立す、鏡を以て基となし、水底に入る丈餘と云ふ、北高峯の麓には城壁ありて巍然たり、山に連り西方は山勢概して高からず、又卑からず、兩峯上各々一座の寺塔あり、磚瓦を以て築き、一は西北方に在り、兀然天に聳へたり、一は南方淨慈寺の門前小丘上あり、形狀六角、六面に谷々窓を開きたり、塔の高さ九十尺、是を雷峯塔と為す、吳山は城の良に在り、上は伍子胥の祠廟あり、故に一名胥山と云ふ、武林山は坤に在り、山中靈巖寺あり、



又龍山あり此山は東坡が表忠觀の碑を建立し居る處なり鳳凰山は其形勢  
 恰も鳳凰の飛ぶ如し所謂唐の望海樓宋の紫禁城等の旧趾皆此下在り  
 南屏山又は奇石あり孤山は湖上獨立の一峯として傳へ云ふ上は林逋が廬趾ありと  
 又天竺峯飛來峰など稱する峯ありて天竺峰は葛稚川が得道したる處といひ  
 飛來峯は竺僧の慧理なる者此山より上りたる時嘆じて曰ふ是を我天竺二名も高き  
 靈鷲山の小嶺なり如何なしてか此國へ飛來せしやと是に因り其名を附けしものなりと  
 靈鷲山は予が天竺旅行の時登りたる山よりて六卷二九頁真面目あり  
 其形狀は翠虹の俯せるに似たり翠微亭は飛來峯の下に在り韓世忠が早や車の  
 成らざるを知り素檜は忤らひ且つ將印の納還を為し歸りつ、驢も跨り又酒を  
 携へ湖上を遊びつ、此亭を建てしといふ湖心亭は宛かも波心より湧出せる如く  
 幽雅の景色他に比なし是は元朝の末代に明の劉基が諸友らと一日湖上を遊びし時  
 韻を分かち杯を擧げ胡元將を亡びんとす必ず一代の英雄あり遠からずして金陵に  
 起る處し吾當さる之を輔けて天下を平定すしと前兆を豫言し居る處なり

此より余らの扁舟は波に隨ひ西岸に到達したれば上陸し小石鼓橋を渡りつ、  
 西冷下に至りしが枯柳何れも絲を垂せ弱々風は靡きたり是處は前にも列擧せし  
 菴小山の祠あり此をなん六朝第一の名高き麗姬が香墳とて今に至るも芳蹟は  
 其名としも現存す是處より西南へ杖を曳く車數百歩岳武穆の祠廟あり  
 祠は忠懸白日或は碧血丹心等の字を題せる匾額あり入つて武穆を謁せしよ  
 塑彫生けるが如くして義膽雄心儼然と其面目は見はせつ兩瞳炯々奸佞を  
 睨死せんず勢あり余武穆を告て曰大日本の一商賈青木南枝遠く來て  
 君を欽す君よ如し靈あらば吾々の微忠を輔け細細をば宜しく振興せしめよと  
 廟の傍に堂宇あり武穆が眞蹟の書及び宋主の勅書を石刻す又堂後の左首には  
 岳飛及び其子たる雲が墓あり其容ち圓頭にして其高さ丈餘ありて石質は  
 青白色にて且つ羨び又門畔に堅固なる石の牢あり鐵を以て秦檜及び妻王氏  
 并に張俊萬候高等を縛せし狀を鑄て此中に居へ置けり凡そ汚穢の物あはは  
 之に投ず詣廟者の一往一來皆な之を踢り且つ面部に濁するを例となせり吾輩は



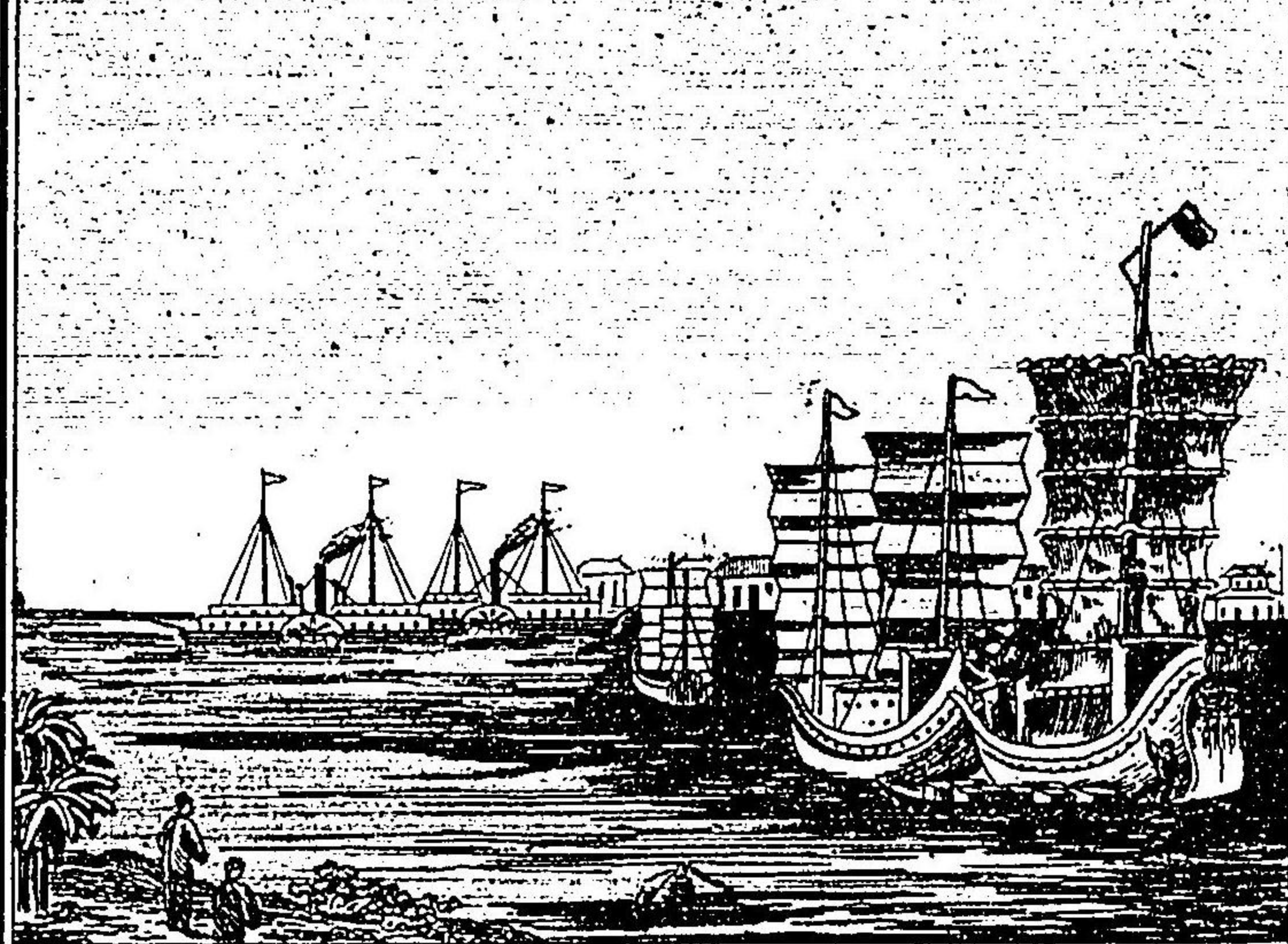


之を觀つて去らんとす時、老人走せ來り  
 教へて曰く、秦賊は我岳爺を害つ、  
 其を後世に遺し、此國賊を見て弱せば  
 其人必ず不忠ならず、其惡まきしや如此  
 然るに予らは此時、潮汛未だ至らねば  
 僅に秦檜の面部をば力の限り踢りたるに  
 老人及び他の者ら、拍手稱快已まざり、  
 是より湖水の西岸に出、小路を取りて行く數里  
 眼を轉せば、一旗亭、平湖秋月樓と云ふ  
 五字を題する處を見る、是を十景の一として  
 樓より四顧するに、南寛を北狭く  
 湖水遠く山麓を水に浸し、又近々  
 彼の城壁を泛めつ、鷺鷥翩翩々其風景

絶て佳なり是を去り、錢塘門より城に入る。  
 文星巷と云へるあり、是は范文正公の祠ありて、其前を五柳巷の外に出で  
 三橋邊を徘徊し、南城隍山より行き、嶺より上りて顧眺るに、市内に總督大衙門  
 萬壽宮や鎮海樓、學校及び將軍橋、湧金門や錢塘門及び滿支の鎮臺等  
 盡な望中入り且つ、湖山総ての景物は一瞬の中より集りて、東に見ゆるは錢塘江  
 其色青を又白く、西は即ち西湖にて、岸辺の柳絲搖々と風靡靡多なる  
 鷗群翩翩々烟に入る、蓋し是處より眺むるに、城内三分一餘は長髮賊の乱の時  
 燒害せられし跡にして、荆棘蕭索たるを見る。  
 因に曰く、長髮賊は巨魁を洪秀全と云ふ、廣東の人なり、蓋し道光年間、清朝昇平已久し  
 を武備全く廢し、人皆兵を知らず、惟だ當時の廣東總督林氏のみ大いに戒る所ありて  
 士氣を鼓舞せしが、為め外夷の輸入せる鴉片を焚燬せしが、英人海疆を侵し終に二千  
 一百万弗の償金を取り、香港島を占領し、加之廣東福州寧波上海等を開かしめたるに  
 因り、廟堂心を寒ふ、膽を喪ひ、國家列祖以來の紀綱大に紊せ、加之賄賂公行上下隔絶  
 森宄私利を管み、酷吏刑罰を嚴し、又稅歛を重ふ、民は生を聊せず、更に凶歳に遇ふ  
 是に於てか、草莽悲憤の士、臂を擡げ並び起りて、朝命を抗する者あり、  
 の師を稱し、益其黨羽を強大し、竟に逞兵を擁し、義を唱へ、竿を掲げ、民を水火の中  
 り、救はんと號稱し、西廣の土豪楊秀清、馮雲山、石達開、林鳳祥等と血を啜りて相誓ひ、遂

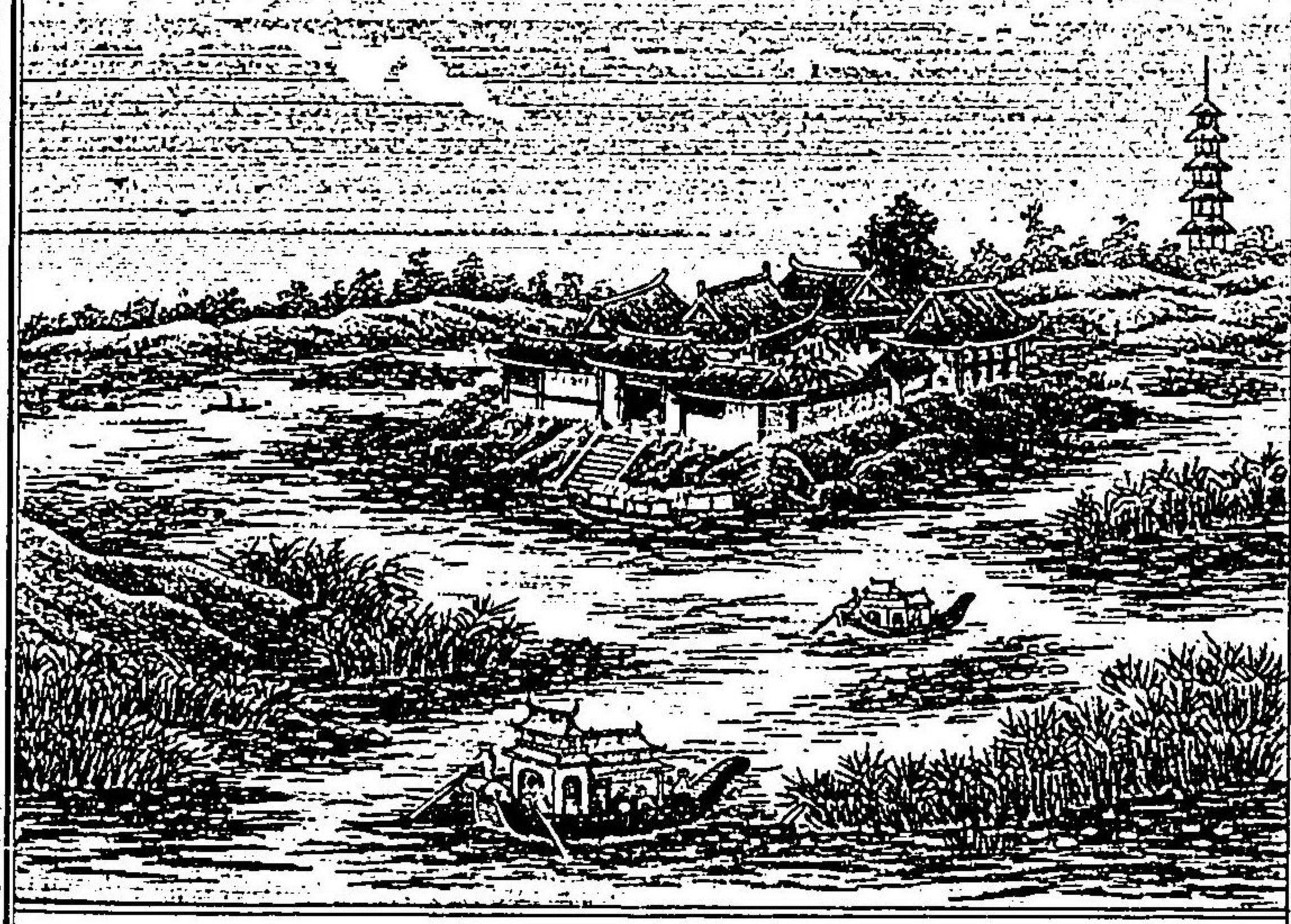


岸江之海上



登海門の外ふあり西湖離せざるを以て  
 之小名づく湖上小跨塘橋を架設せり  
 遠望をせむ画の如し橋南真如寺小通ぎ  
 湖上烟雨樓を置く夏月避暑の遊宴地  
 府城の西小運河あり府の北方望門外  
 北麗橋を架設して西麗橋と相通ぎ  
 城中水路縦横し通計七十橋を架き  
 重なる古蹟左の如し橋李及び由拳城  
 落帆及び女陽亭三過堂小烟雨樓  
 陸贄裴休が住みし遺趾徐偃王小陸宣公  
 朱買臣や嚴助の墓祠等ふして其餘ハ  
 観るべく記すべき者もふしよつて此地を出立し  
 東北方小路を取り江蘇省小進入し

樓兩烟府興嘉



道光三十年に於て兵を挙げ檄を草して天下を傳ふ是  
 より各省の人心大いに鼓動し争ふて洪軍を歸せ是を以  
 て謀士猛將林の如く百万の衆を擁し中國東南半壁を擾  
 乱する事十有八年十数省を蹂躪し六百餘城を陥没し勢  
 い四隣を震動して猛烈當るべからず是に於てか廟堂策  
 盡き竟る力を英佛二國に借りて従前の頽勢を挽回し髮  
 軍従つて衰へ竟る其志遂ぐる能はず洪秀全は中道より  
 て金陵城下の朝露と消へ果さる是を長髮軍の略記なり  
 噫吁嗟全の如き其志を終へず徒らに賊名を遺すも  
 亦一世の人物と云ふべし

嘉興府之記  
 当府は禹貢揚州の域春秋の時吳越の  
 境と稱り後越の地となる秦は會  
 稽郡後漢は吳郡隋は濮州五代は  
 杭州晋の天福三年錢氏始めて秦  
 秀州を置く宋は嘉禾郡而して明は  
 嘉興府なり清之は因る

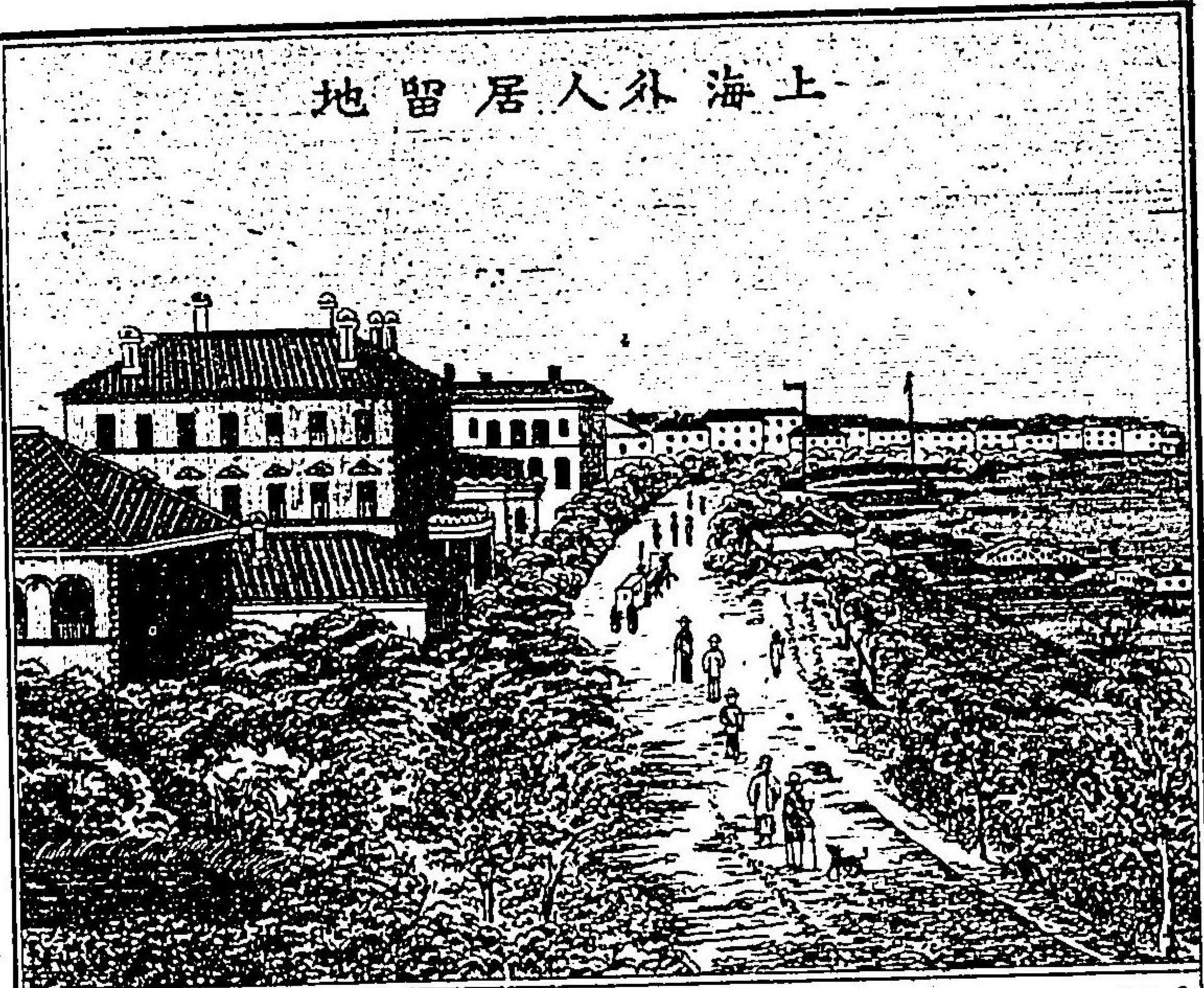
府を環りて湖多し天星湖と相湖とは  
 東北にあり滌湖は南にありて駕鶴湖は  
 其の行程二十五里

包林桐郷等を経て嘉興府に達したり

城皇山の觀終り長より路を北に取り

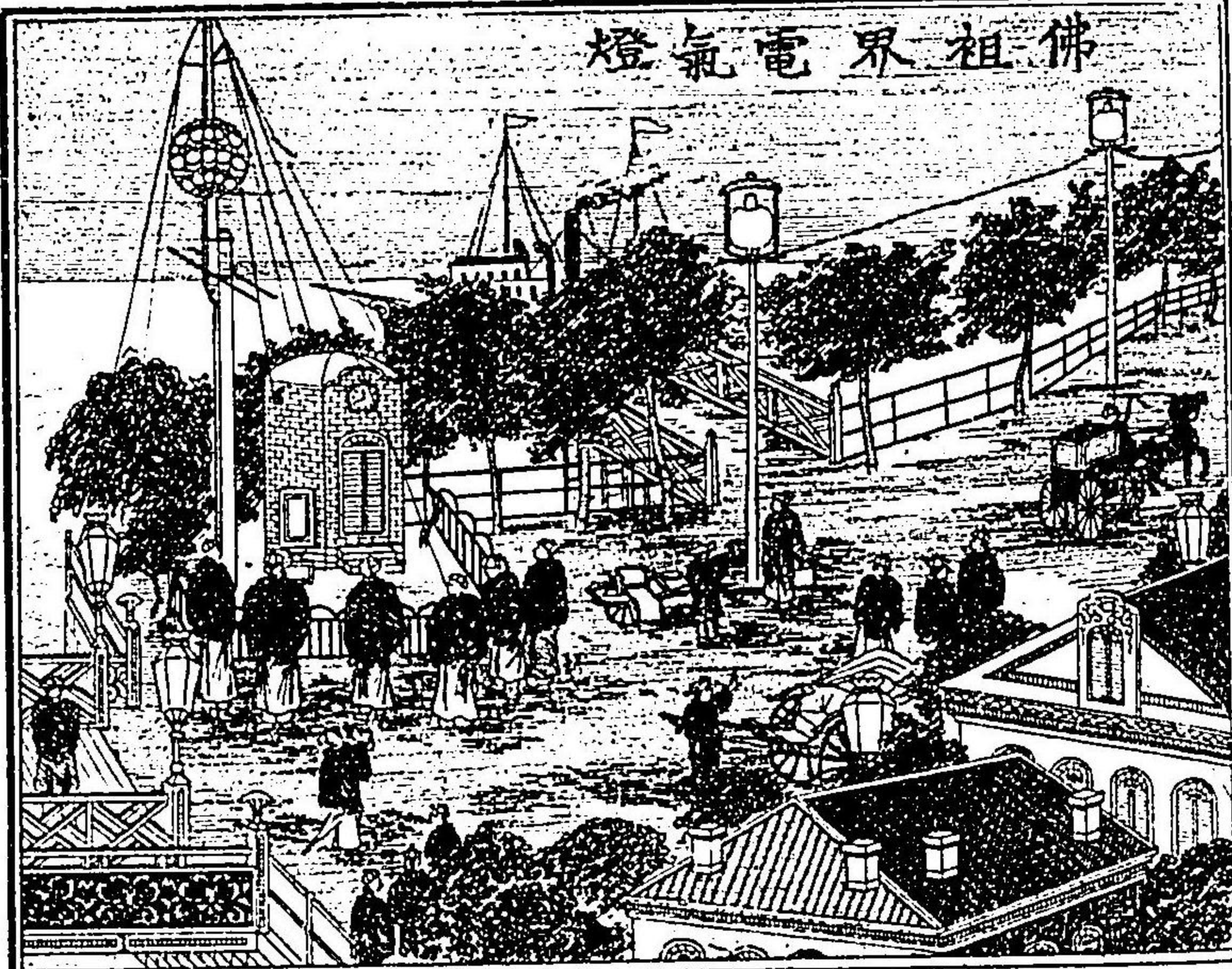


上海外人居住地



上海縣小達しとり行程凡そ二百余里  
 上海之記 上海ハ松江府の管轄ハ属セ  
 京今の江寧府ハ不在リ松江府ハ禹貢揚  
 州の域春秋の時呉ハ属シ后越ハ入り戰  
 國ハ楚ハ属シ五代ハ秀州元ハ華亭  
 府明ハ松江府アリ而シテ清之ハ由る  
 此地ハ即チ名も高き揚子江の一支流  
 吳淞江を遡る凡そ七里申江の  
 北岸ハ在る都會ハ今より四十四年前  
 英の爲めハ開きしガ當時ハ人煙稀薄ハる  
 一市邑ハ過ぎざりし然るハ爾来内外の  
 貿易非常ハ増進シ富商頻々移住シテ  
 現今人口五十万支那全國貿易場  
 第一等ハ位ハせり。  
 きて江岸の地を分ち三區とふせり其一を

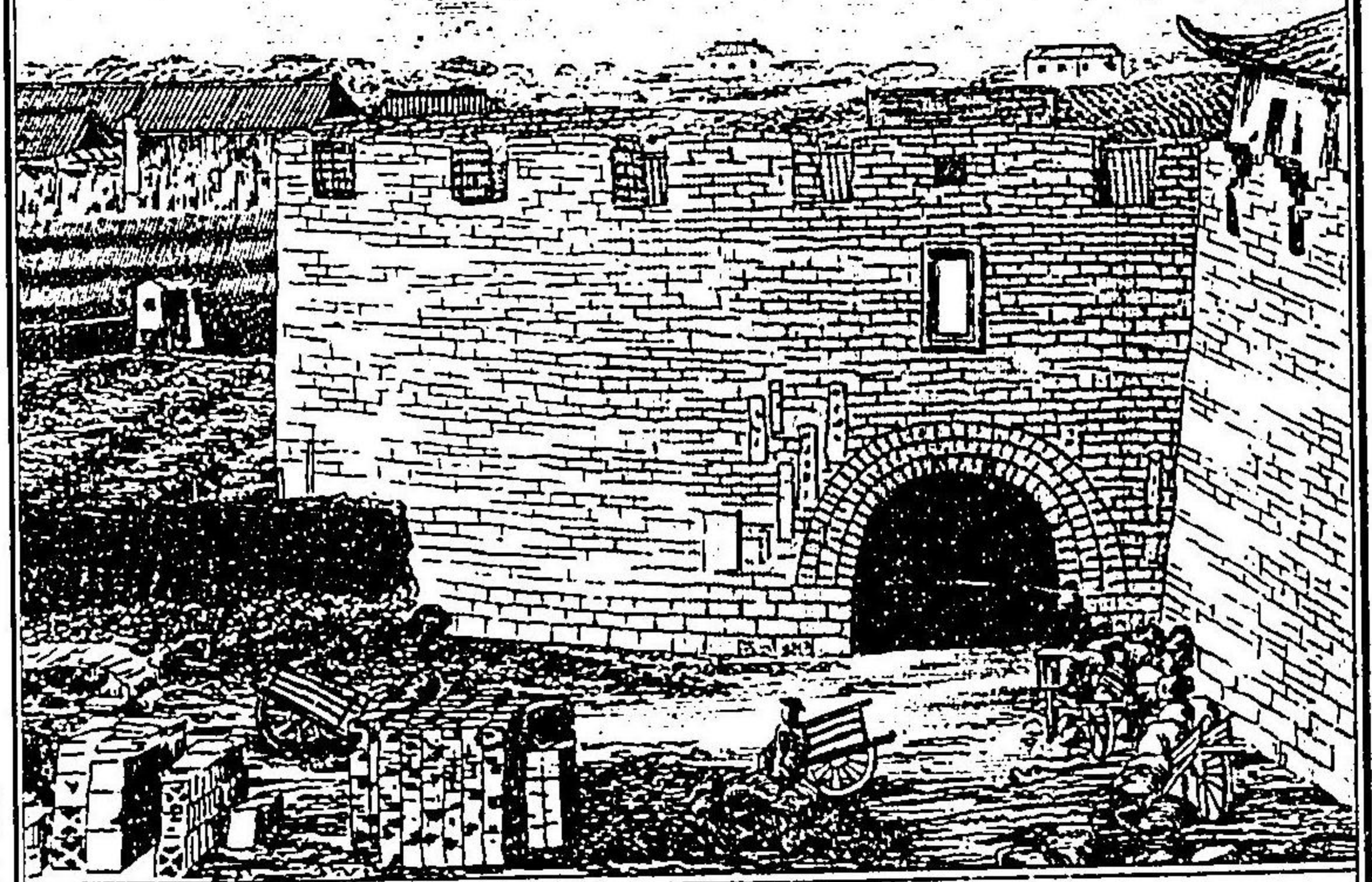
佛祖界電氣燈



英祖界とし市街中最も繁華の部分とせ  
 其二を佛祖界と云ひ三を米祖界と云ふ  
 繁華ハ即チ英ハ亞ハ何せハ街衢寛濶ハ  
 道路頗る華潔ハ大層層樓駢列シ  
 諸國の旗章繚々ト各々傲華を闘ハシ  
 各國領吏の駐紮館諸商行や會社等  
 皆此内ハ集リテ實ハ東洋第一の  
 商戰場ト知せり然して碼頭ハ各國の  
 商船軍艦連列シ帆檣林立天を突き  
 舶艇出入織る如し。  
 右居留地の西南ハ古来の所謂滬城あり  
 郭壁市街を繞りしつ六門ありて外坊と  
 相通じとり城内ハ市街甚ダ狹隘して



上海西部ノ門



家屋矮小汚穢なる臭氣爲め鼻を衝き  
 貧民乞丐群を成し中小富家も見請せど  
 人情狡猾卑屈ふて力役賤業者多く  
 恰も城外々人の奴隸の屯所も異ならず  
 此地の名所旧蹟は祖界小大なる公苑地  
 江海關稅や博物院造船局や演劇場  
 何せも新設しくるもの格別記すべき奇觀あり  
 滬城の内外觀るべきハ隍城廟氏小武聖官廟  
 法華牡丹青蓮院一粟庵小黃婆庵  
 靜安及び龍華寺や紅廟施廟等ふして  
 其中最も名高く且つ國人の尊ぶハ  
 滬城の西南隅に在る即ち孔子の文廟あり  
 今其記裏を掲げんハ廟前地域廣闊して

上海之市街



桃蔬花卉等を植ゆ敷石道より廟前  
 二大門に至りしに檐上額面與賢の  
 二字を大書し左門は育才二字を大書せり  
 蓋し門に入るるときは如何も貴顯の人ふても  
 履を脱せざるを得ず洗足内に入る時ハ  
 南に向ける三門あり其中門は大にして  
 之を極星門と云ふ右門の檐上額面ハ  
 德配天地と書し左ハ道寇古今とあり  
 亦不石道を行く程ハ洋と稱する池ありて  
 三箇の橋を架設せり既ハ橋を渡りハ  
 又敷石の路にして此兩側ハ古昔より  
 名高き儒者や官吏らの爲め設けし籠ありて  
 是より進む數十歩戟門ありて通ぎハ







孔子之文廟



是より奎星閣を出つ敷石道を進みしふ儀門ありてまゝを過ぎ庭に入ると北側は明倫堂といへるあり傍に尊經閣ありて内は文昌帝君と稱する神を安置せり之に隣るは敬一亭学宮に亞ぐ大字あり蓋し是は江蘇省各地に建てたる学校を監督せしむる所とす

抑も右の学宮は今より六百余年前唐詩措と云ふ人が建設したるものにして元は私立の微校なり然るに爾來此校ハ倍々盛んとありしにバ元朝至元十八年右文廟と合併し政府に代々保護を蒙り遂に太学院とあり現今生徒数千あり



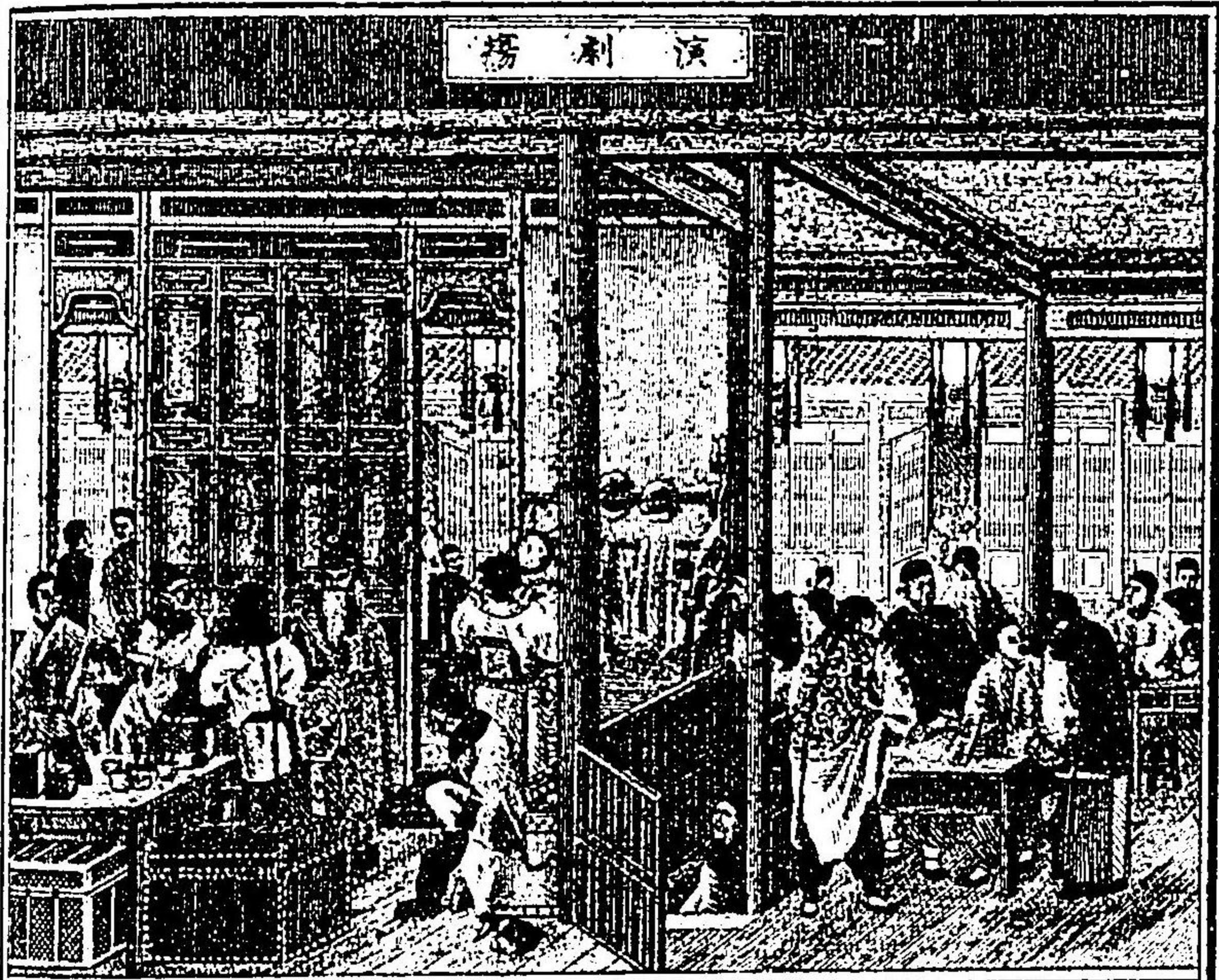
倂 優

教ある所の學問は所謂經史の類にして實用學課のあらざるは國民の爲め遺憾なり

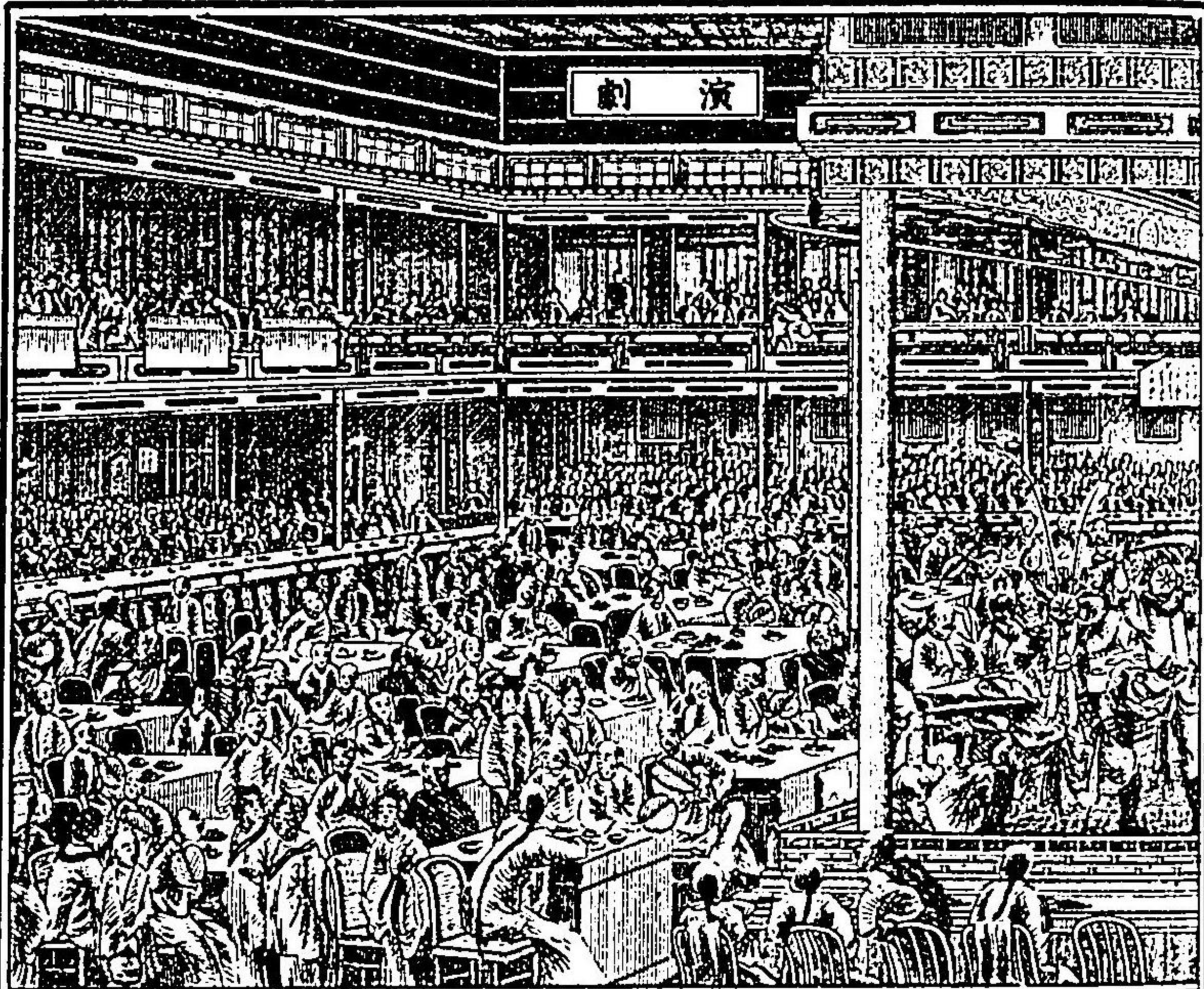
○さて是所を去り滄城の市街を徘徊しとりて音楽盛んと聞へつ門戸は諸人群を成す何事ならむと牌を見るに演劇場とありしかば一幕見んと入りたるに未だ幕も開かざりて樂屋に於ては銅鑼大鼓、鼓弓等を嘯し立て喧噪言語絶したり

時、左右の花道より多くの兵卒各手は鎗刀をば振り翳し大合戦の状を爲し舞臺に於て一方は遂に敗北したりしが勝ち誇りたる兵は勇み勇んで追て行此時唯し一變し此兵乱を避くる爲め





老少男女は慙きなる状態をなし逃ぎ来る  
 是場へ悪漢出で来り中の婦人を引執らへ  
 之を縛りて人買を賣渡さんとしたりしが  
 折し一方の花道より有徳の老人以て来り  
 此有様を見るや否不慙と思ふの容体にて  
 彼の悪漢を説諭し金を與へて婦人をば  
 伴ひ家へ歸りたり是を以て一幕済みけり  
 又七囃すと今度は婚禮式の場として  
 老翁吉日を選みつゝ右の婦人又良き婿を  
 迎ふ所を演出し大宴會を設けつゝ  
 席上種々の藝ありて自出度儀式を終りしが  
 又幕となり最後は右老人病附きて  
 種々醫藥を盡せども終に死去し親族の



愁傷一方ならずして殊更衰又老翁又  
 助けらせたる諛婦人昔しの事を繰りかへし  
 泣き悲みしが夜深更に閻王大王城隍ら  
 舞臺の上へ顯きて鬼や下官を呼び出し  
 汝ら何の故に因り此老翁の魂魄を  
 冥府に呼び取りたりやと問亂せしが下官らは  
 一の帳簿取り出し畏り言ふ此者は  
 何年何月誕生し命数既に盡きりりと  
 此時城隍老翁が兵乱の時斯々の  
 事情よりて婦人をば救助したるのみならず  
 種々良縁を求めつゝ世継を立てし陰徳を  
 頻々喋々賞譽し閻王と協議して  
 今より更に幾年の生命を與ふと言ひ渡し

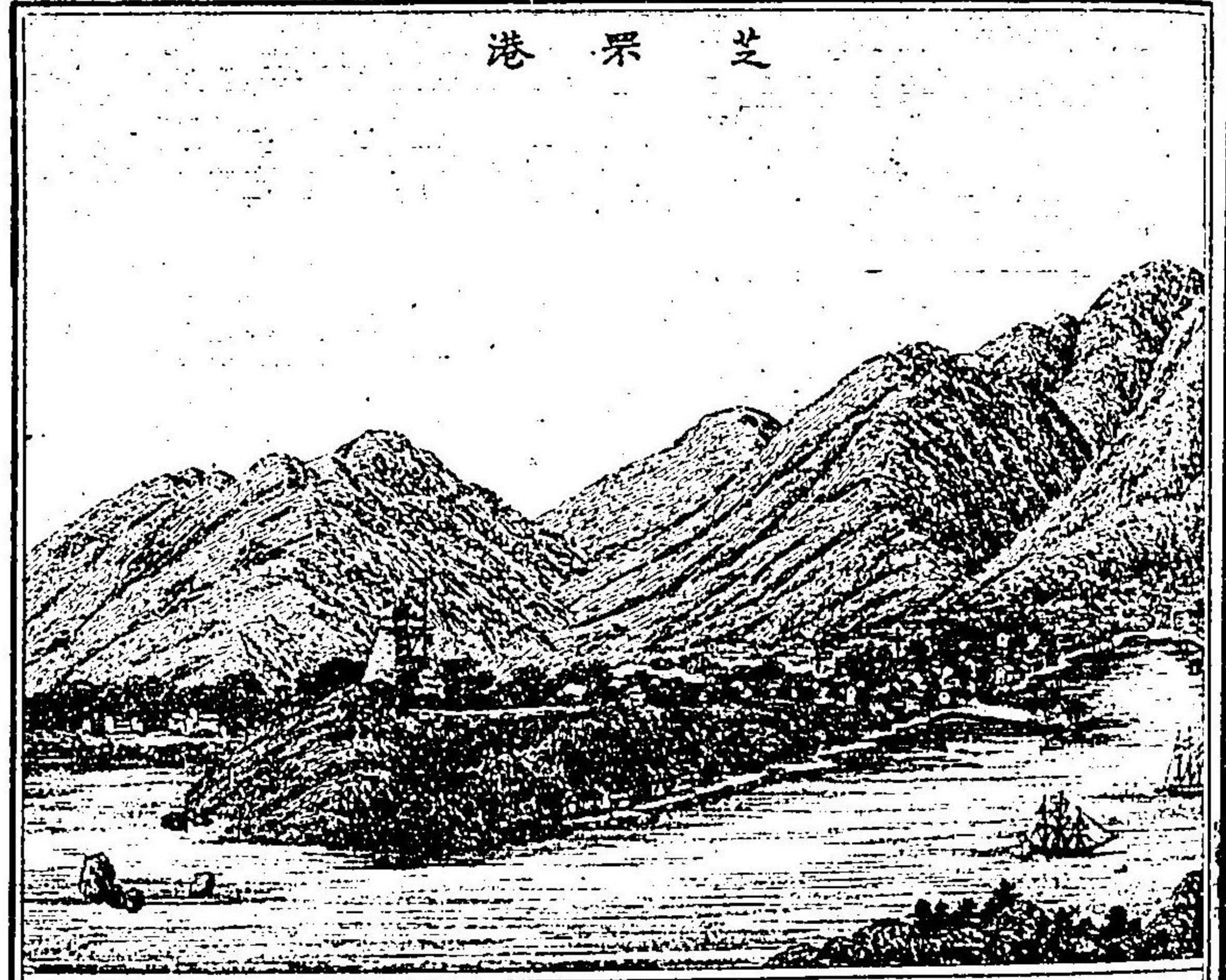


彼の帳簿を記入して、鬼らに命じ魂魄を取り来りて老翁の口の中に入れて返し、忽然消へ失せたるや否や、死人はアット叫びつゝ、蕪生せしが家族らは皆此所に出で来り之を見ては悦びて、俄かに酒宴を設けつゝ、種々の音楽合奏し、其日の千秋祭となる。蓋し勸善懲惡の趣向に相違なげせども、予らの眼より見る時は、恍惚よふの妙境も死を真の涙を催ふせる愁嘆場もあらざりして、國の開化に相當の演劇なりと知らせり。

○是より茲を立ち出て、人力車を僦ひつゝ、（人力車は我國より輸出せるものにして支那の乗物は一枚車の人乗車と不完全なる竹輿のみなりしが近年人力車の勢力非常熾んじて殆ど内地は普ねく従末のものは漸次廢滅し歸せり）居留地へと駛せ歸り、招商局の漁船を乗り、吳淞江を駛せ下り、是より針路を北に向け、黄海を駛す千百里、山東省の東端の西山角より西に折れ、渤海に入り又進む、一百五十余里にして、山東省の開港場芝罘港に着したり。

芝罘港之記

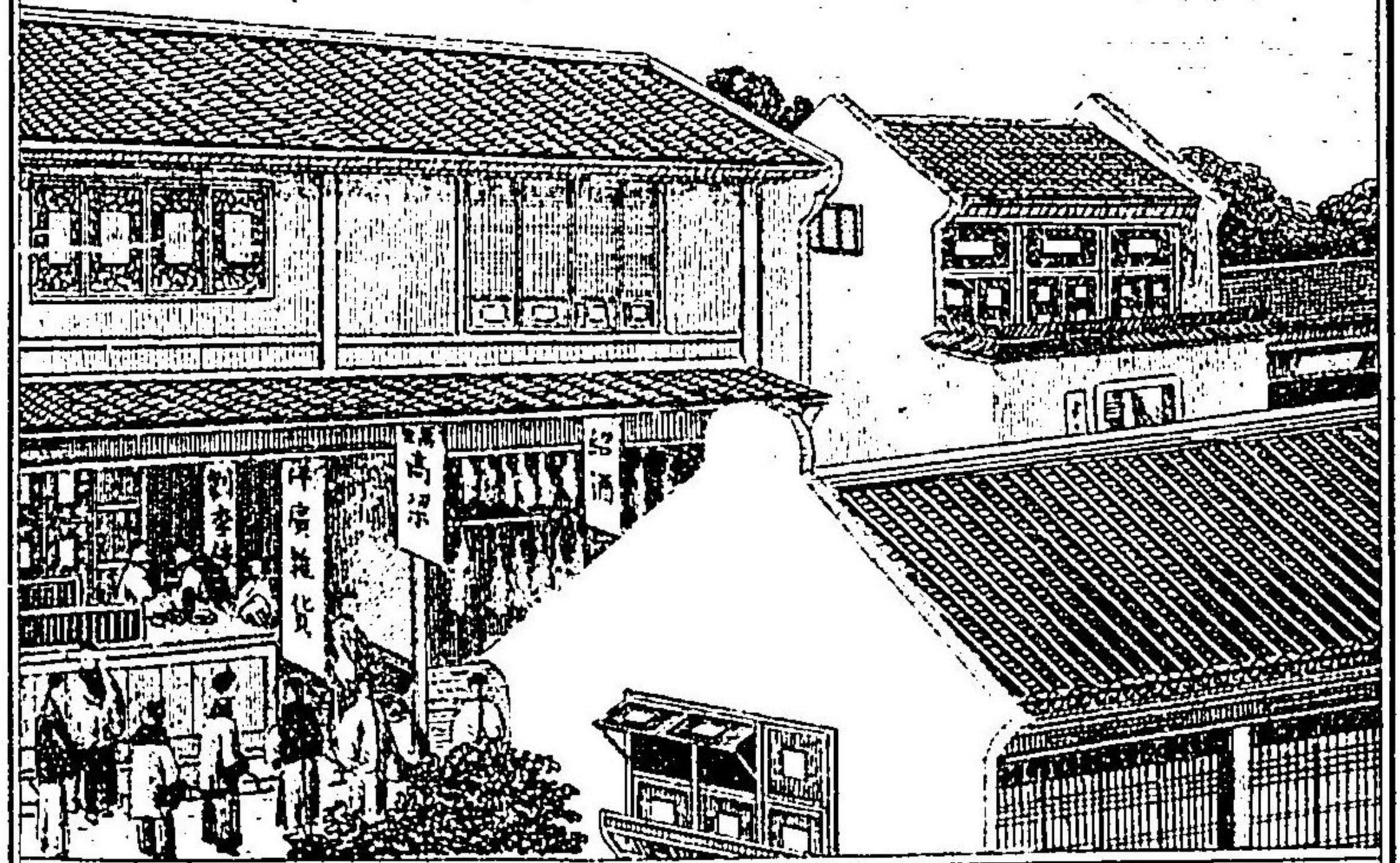
芝罘は登州府管轄の福山縣に在り、登州府は禹貢青州の域、古嶗夷の地夏の斟鄩氏此に國を春秋の牟子國戰國齊に属し漢は東萊縣に属す後魏は東牟と曰ひ隋は牟州と曰ふ唐の登州宋京東路となし元は益都路に属し明清登州府となす此地は海に斗出せる半島にして其狀靈芝の如く笠内の一、小灣を開きたり



是を芝罘の在る所、國人文を煙臺と云ふ此地は北七十年前（西曆一千八百五十九年）清曆咸豐九年あり、英の爲め開きたる貿易場の一にして、（此時は一千二百萬兩の銀を英に送せし）当初人烟稀るに然るは良港なるが故、諸國の船舶充ち満ちて大船小艇数知らざり、碼頭は上陸し徘徊するは、該市街は海岸に沿ひ道路みか狭隘汚穢を極むせど、何せも石を疊みつゝ、満市可なり、賑はへり、外國人の居留地は灣口あり、支那人の市街は灣の内在り、人口二万七千余、外人一百余にして、英國人を尋ねると、税關築地の上在り、其地位甚だ便利して、舢舨は是に輻湊す。

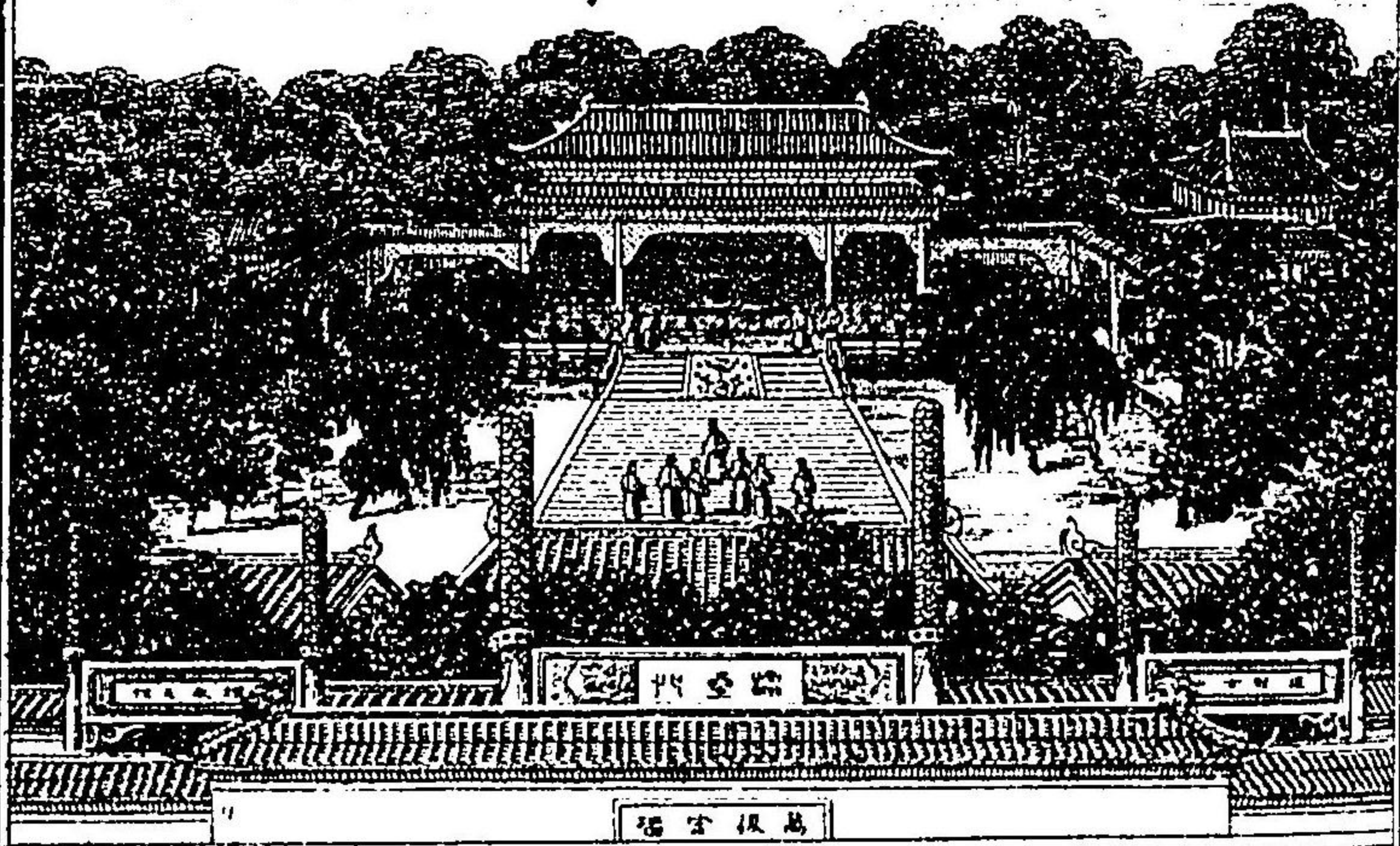


街市果芝



輸出入の関税は年々一千万弗余  
 魚類は鯧鯖等より野菜類は夥多あり  
 其他此地の産物は豆粕肥料薬種類  
 絹織物等より輸入品中歐物は  
 上海香港より來り或は歐米諸国より  
 直輸入のものもあり我日本より輸するは  
 海産陶器粗茶の類随分多く輸入すも  
 皆支那人の手より又現今同港より  
 住居を為せる我商賈僅か三名のみあるが  
 今後日本人にして右物産の外材木や  
 日本製の洋傘や洗濯石鹼木炭や  
 手拭及び紀州産子ルの類を直輸し  
 之を試みたらむは必至當の利益をば

廟之孔子曲阜



得らるべしと思考せり尤も支那の駈引は  
 狡猾よりて動かせば豚尾圍結恨力こ  
 他所より來り商店の妨害を為し事あきば  
 能々其之を制するの策を覺悟すべきあり  
 編者曰是より渤海を西に駛せ白河を洩り大沽  
 天津へ直航する等あきども山東省は孔子等の名  
 勝旧跡甚多を以て左に其概略を述べて後  
 順路を経て直隸に入るを請ふ之を諒せよ  
 孔子之廟  
 孔子の廟は山東省の西部兗州府の治下曲阜縣に在り曲阜  
 は元神農少昊の都せし所周の武王周公且を封し是を魯国  
 と爲せし地ふり縣の東二十里に防山あり孔子の父母防  
 邾在今其葬山北二十里に在り又尼山あり泗水邾縣の界に



連ふる一名尼丘山昔に叔梁紇顔氏と此山は濤つて孔子を生む今其麓孔子の廟あり西南  
 觀川岸の遺趾あり又顔母山あり尼山と相對せ上は聖井あり乃ち顔母廟の遺趾あり  
 孔子の廟は縣西八里魯城内に在り所謂闕里の故宅孔子の居所あり廟地廣濶長さ凡そ一里  
 半幅凡そ一里中を大成殿とす高さ二百尺許り蓋ふは黃瓦を以て正面幅凡そ五十間側面  
 三十間許り内柱は皆大理石を用申結構壯宏中は孔子の座像を安置せ高さ殆んど二十尺  
 容貂雄偉ふり左右は十哲の座像あり殿の四隅は匾額楹聯等を懸る事極めて多し  
 左りは泗水侯殿あり右は沂國公殿あり後又啓聖王魯國夫人毓聖侯の三殿あり其他門廡  
 齊宮碑刻の盛んある殫く紀すべからず孔子講堂は南北五里に在り又陋巷あり顔子廟  
 前は在り杏壇は孔子の廟前は在り即ち孔子講道の所又五父衢あり孔子射る所魯壁は  
 孔子の宅内に在り魯の共王宅を毀て古文を壁中を得は即ち是なり手植の檜は孔廟大  
 成門の北に在り高さ五十尺余圍十三尺宣聖手植の者ふり右は孔子が廟の略記かり然  
 るは本年三月刊行の上海申報を閱するは曰く曲阜に在る孔夫子の廟は陰曆二月六日  
 火災に罹り大成殿は藏する所の禮器樂器及び歷代の碑額御賜の珍器等一切烏有に歸

泰山之圖



たりとあり果して然らば實に惜むべきの至かり  
 ○ふは兗州府治の下多くの古跡あり其鄒縣は即ち魯の驕まて昌平山縣の東北五十里にあり  
 孔子魯の昌平郷に生ると即ち此を以て斷機堂は縣東に在り孟母が機を断つ所の泗水縣の東北  
 高陘山の陰に盜泉あり孔子盜泉の水を飲まざると即ち是を是かふり濟寧州の南城上は李白酒樓  
 あり唐の季白容城縣令に任す賀知章之を此に觴を今樓當時の碑刻と俱に存す○泰安府の北



五里は泰山あり東嶽岱宗是なり此山屈曲盤道あり絶頂に至る高き四十余里三峯あり東を日觀と曰ふ雞鳴日出を見る西を泰觀と曰ふ長安を望むべし此峯泰碑あり泰の丞相李斯篆する所最も奇古とせば又西を越觀と曰ふ會稽を望むべし又東西二大門あり又明月嶂登仙臺あり下は東西中の三溪あり白鶴水簾二泉は懸崖に在り又瑤池白龍池あり山麓明堂の趾あり秦松漢柏最も著名なり此山古昔帝王封禪の名と名士登覽の題詠勝けて記すべからば

○沂州府の北王祥河あり水源王祥廟後より出づ即ち臥水躍鯉の處又孝河と名く府の西南五十里費縣魯の季氏が私邑武城々あり孔子割雞牛の論ある所○曹州府の西南三十里は汜水あり漢の高祖即位の所姚墟濮州の東あり舜の生る所曹縣の東南部國南北二城あり其南部孝子村は孟昌宗の母疾ひあり股を割き以て進むの故地○青州府治は即ち周禮正東を青州と曰ふ太公望を此に封じて齊國と為せし處府の西北脩身坊は孟嘗君が旧第府西三十里臨淄縣は元齊の營丘の地景公牛山は登り其國を顧み君臣流涕して泣く晏子獨り旁らば笑ふ即ち此地又稷山あり愚公山あり東愚公の家あり北愚公谷あり韓非子所謂齊の桓公鹿を谷に逐て一老父を問ふ所○萊州府の東十里沙丘故城は殷紂の築きしものより秦皇の崩じたる處也

天津府之埠頭



右らの古跡を取りらば芝罘港を出發し渤海を馳せ六百里白河一名北江口太沽を通過し湖る二百七十余里より直隸省の天津府紫竹林に着しより紫竹林は外人の居留地よりて家屋皆煉瓦を以て築造す我領事館亦ありまゝ河端は五ヶ所此棧橋ありて各國の汽船直接繫泊し兼客貨物輻輳は但し太沽より天津迄の河流は淺瀬と屈曲多し大汽船の此河を上下するは甚だ困難なり然れども支那政府少し之を避くるの法を施行せざるを以て英國人は水先會社なるものを設け河の深淺を測量して浮標を設置し航海者の便を計り水先貨は船足一尺に付十六弗あり又此河流は冬月河水を結び船泊鎖して通せず氷の消する時貨船商船等入津す

聽て上陸馬車は乗り駛行する事若干里天津市街は遠しより



天津之北京路



天津府之記

此地は禹貢冀兗二州の地なり周は幽  
兗二州戰國は齊燕の地秦は漢陽上

谷漢は漢陽海晉は章武の國後魏  
は浮陽明は天津衛を置き河間府の  
地と馬平清雍正三年改めて州と為し九  
年又天津府と為す

市街は即ち北江の南岸に在り此地は  
東は北江航路あり以て海運すべき  
内地へ運河の便ありて凡そ河運海漕  
北京に入るもの悉く路を是れ取るが故  
實は南北水陸の要衝にして北京府の  
咽喉の地と云ひつべし此地は廿四年前  
開港場としよりが内外通商日昌へ  
月又盛んは趣きて人口一百余万あり  
昨年中は当港へ輸入したる物品の  
金高二千万兩輸出千兩ありて

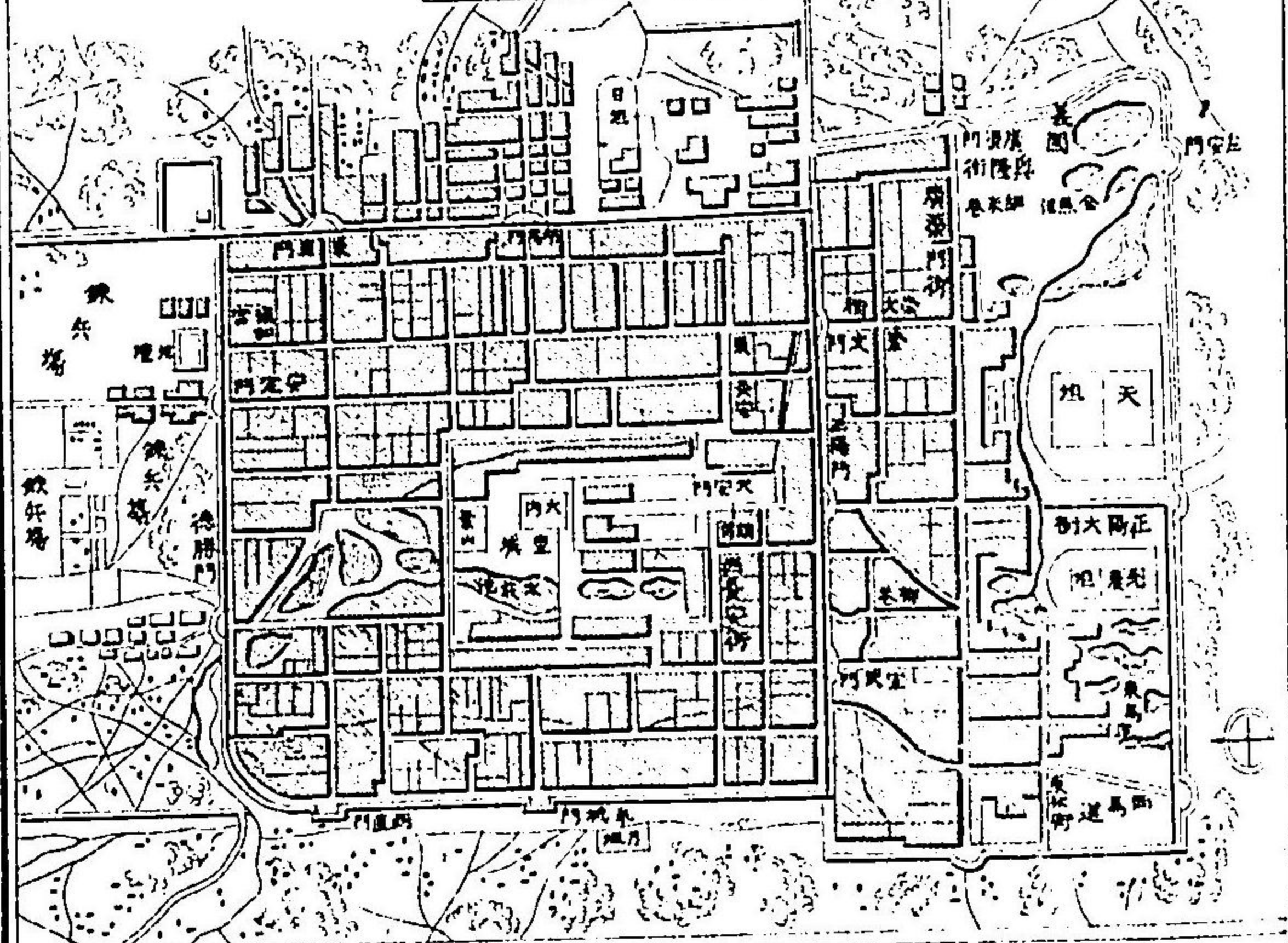
尚不税關を通過せず支那形松にて國産を出入しとる金額は幾千万兩ありしかを  
知る可らざる程なりき輸入品中日本より積み送りしは海産と下等の陶器を主とせり  
日本の陶器が此地にて賣捌けしは今を距る四五年前の事として是より先きは皆悉く  
九江焼のみ需要せり故に当初は彼をの爲め厥倒せらせて我品の輸入は莫ふに足らざりし  
然るに其後我國は物價一般安をかり陶器は殊更低落し現今彼をと比較せば  
我が低廉なる数倍あり之に因て本年は倍々多く需要して九江焼も我が爲め  
厥倒せらるゝ姿なり望むらば我國の諛商諸君は機に乗じ倍々佳品を製造し  
猶不奮發して直輸の路をも啓發せんことを又此府へ輸出して目的あるは材木と  
木炭等なり兩品は此地に缺乏なるに由る  
閑話休題市衢中は鍋店街と沽衣街は商業盛人の要所とす其沽衣街の對岸は  
総督李氏の衙門あり官宅とも美觀たり此前面は浮橋あり之を院浮橋といふ  
其構成は畝の如く馬船に似たる木船を繋ぎ合し橋板を横に列ねしものにして  
欄干等の設け無く甚だ粗造のものかきは人馬並に轎車等少し々雜沓する時は



河中墜る事もあり又大小の船舶が河中を上下する毎に一々鎖を解き放ち橋を断ちて其間往來止を為す如き實に不便を極めしが頃日總督李鴻章更之を鉄橋に改造せんとし佛人へ工事を委任したといふ。

○又頃日此府より四十余里を隔たる開平といふ炭坑へ鉄路を布設中にして近日竣工するといふ此鐵道は官民の株金より成るものとして既而會社を組織せり而して工費の見積りは廿五万兩なり。さきとも是より線路をば倍々延長見込みて今猶計畫中かりと蓋し支那の鐵道は今を距る事十年前上海縣より杭滬へ僅かる布設しりしも政府は之を買取りて多くの入夫を備ひ入せ態々之を破壊して甬來音沙汰かかりしが頑夢も今は醒るる。這回は政府率先し右の實施あるのみか既而前も述べ如く臺灣島は劉銘傳頻りに計畫中といひ遷時ながら清國も近々内地の各所は鐵路を見るに至るべし予は支那の爲め外所なら實に賀する所なり尚不人情や風俗上奇談なきあらざむと次の記行を譲りつゝ今より当府を出立し大八車又鬚髯たる馬車も乗り込み西北方北京を指して進み行道路路凸凹且つ狭く

北 京 之 圖



馬車の動搖劇しくて頭腦を爲め裂んとす之を堪へて進む事三百五十余里にして漸く京師に着したり。

但し天津より北京へ行く水陸二道あり水路は氷解の時より小舟を乘り通州迄漕るものにして此舟も四人の乗客と少しの荷物を持載し得るのみ既而通州へ達すれば又担造る馬車か驢馬か人力車か輪を乗らざるを得ず運輸交通の不便なる推して知るべし

京師順天府之記

順天府一曰北京と名く此地禹貢冀州の域古瀕項の時ここ在ては幽陵とを堯は幽州夏商は冀州周は幽州春秋戰國は燕國秦は上谷漢陽漢は燕國涿郡唐陽郡廣陽國三國は魏の燕都晉は燕國慕容苻苻は燕都隋は涿郡唐は范陽郡唐中劉仁恭の標る所と爲り石晉は契丹に歸し燕京折津府とす宋は燕山府金は燕京折津府中都大興府元は中都大都而して明は北平順天府なり清は之を因る

此府は即ち國都にて一之を北京と云ふ帝王の在ます處なり街衢方正巷陌は縱横甚整の如くして居民二百余万あり

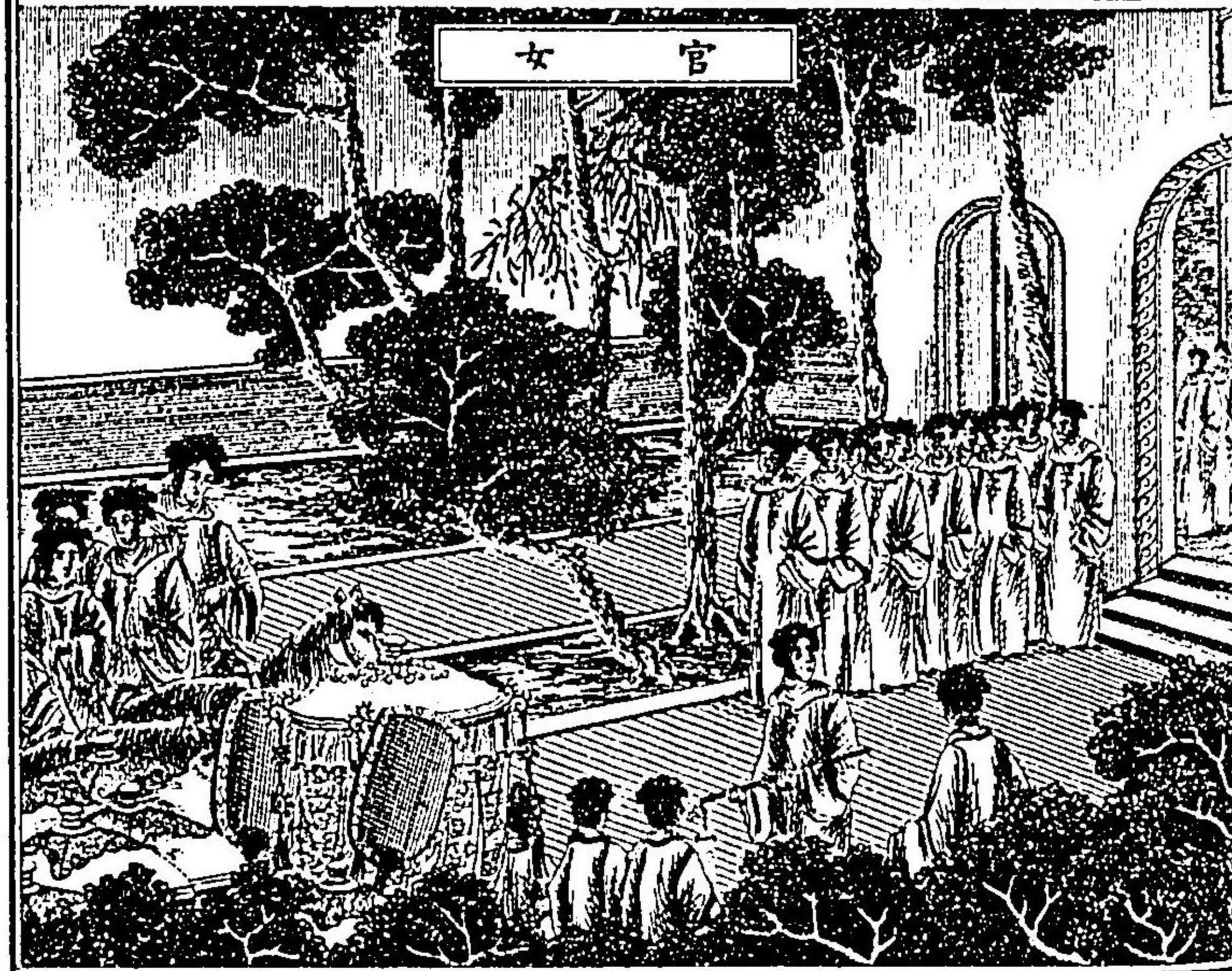


其戸口の繁多かる蓋し英京倫敦と並げる所の大都なり之を分ちて二城とす  
 北に在るを内城と云ひ南に在るを外城と云ふ○其内城は帝宮や官府の建てる所にて  
 周圍四十清里餘堅固の壁を繞らせり城壁高三十五尺五寸厚二尺一十鞭石以て之を築く  
 而して九門を穿ちて南面三箇の門ありて東西北の三面は即ち各々二門なり  
 又門上は樓ありて之に兵器を藏めたり

○帝居の城垣南北は二千三百六十尺東西三千二百尺四面に各々巨門あり  
 其正南を午門と云ひ東華西華の兩門は東西に在り而して北の門を神武と云ふ  
 以上帝居の域内を大内紫禁城と云ふ紫禁城中王殿や瑤宮峻宇高閣等  
 星羅棋列す其中に南に面する正殿を大和一保和と云ふ之に隣るは乾清宮  
 次を坤寧宮と云ひ次を養心殿と云ふ大和は百官の朝見を為す處乾清は百官引見の處  
 坤寧は神を祀る處養心は百官を召見する處なり  
 以上は最も壯宏な且つ秀羨なるところなり其他寧壽や景陽宮慈寧宮や内務府や  
 英武並に文華殿紫光及び内閣等逐一教ふに違まなく中にも多くの苑池あり  
 西華苑と御花苑は最も潤く且つ佳よて奇木異草を多く植へ間ま樓臺亭榭あり

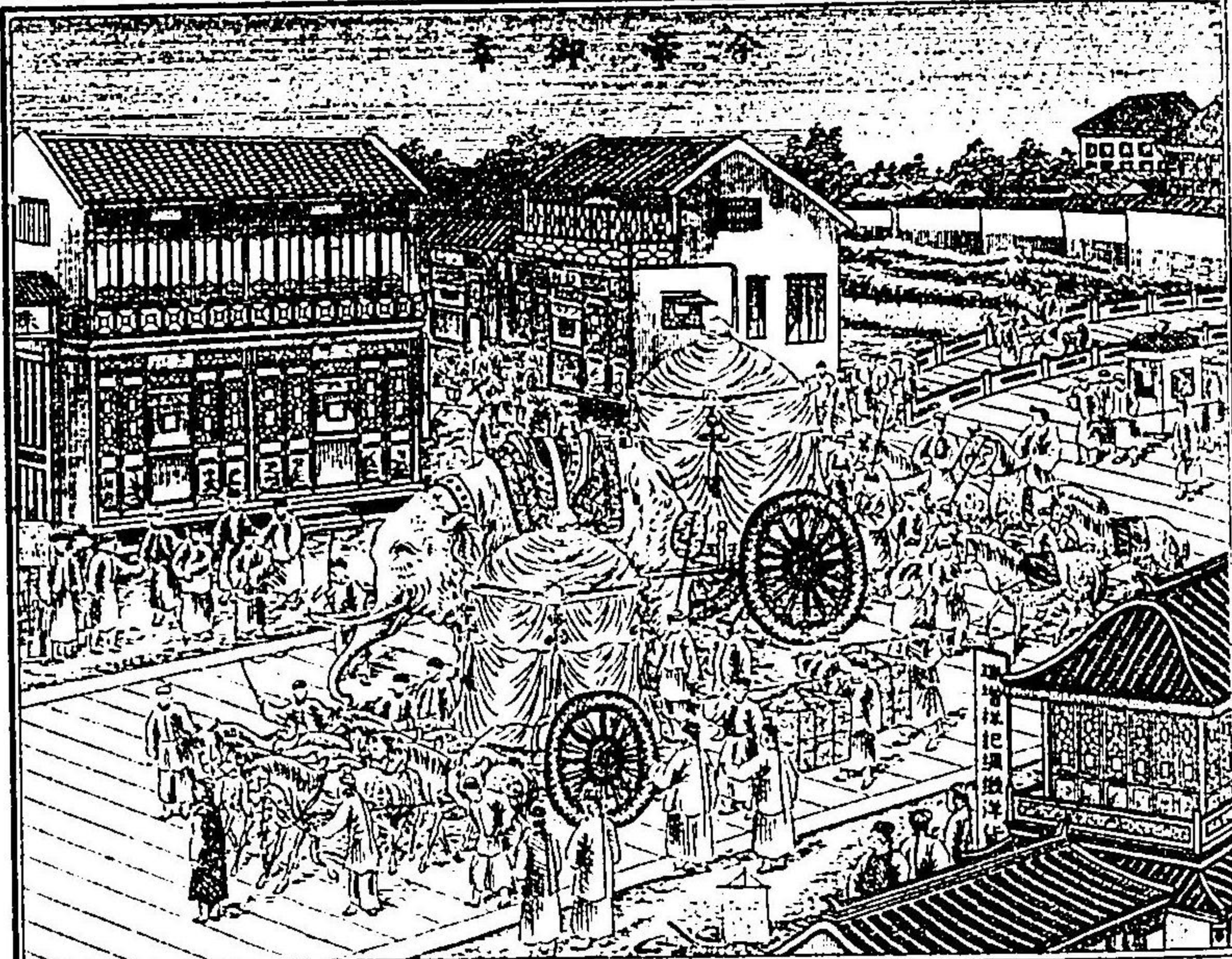


殿宮之后太西

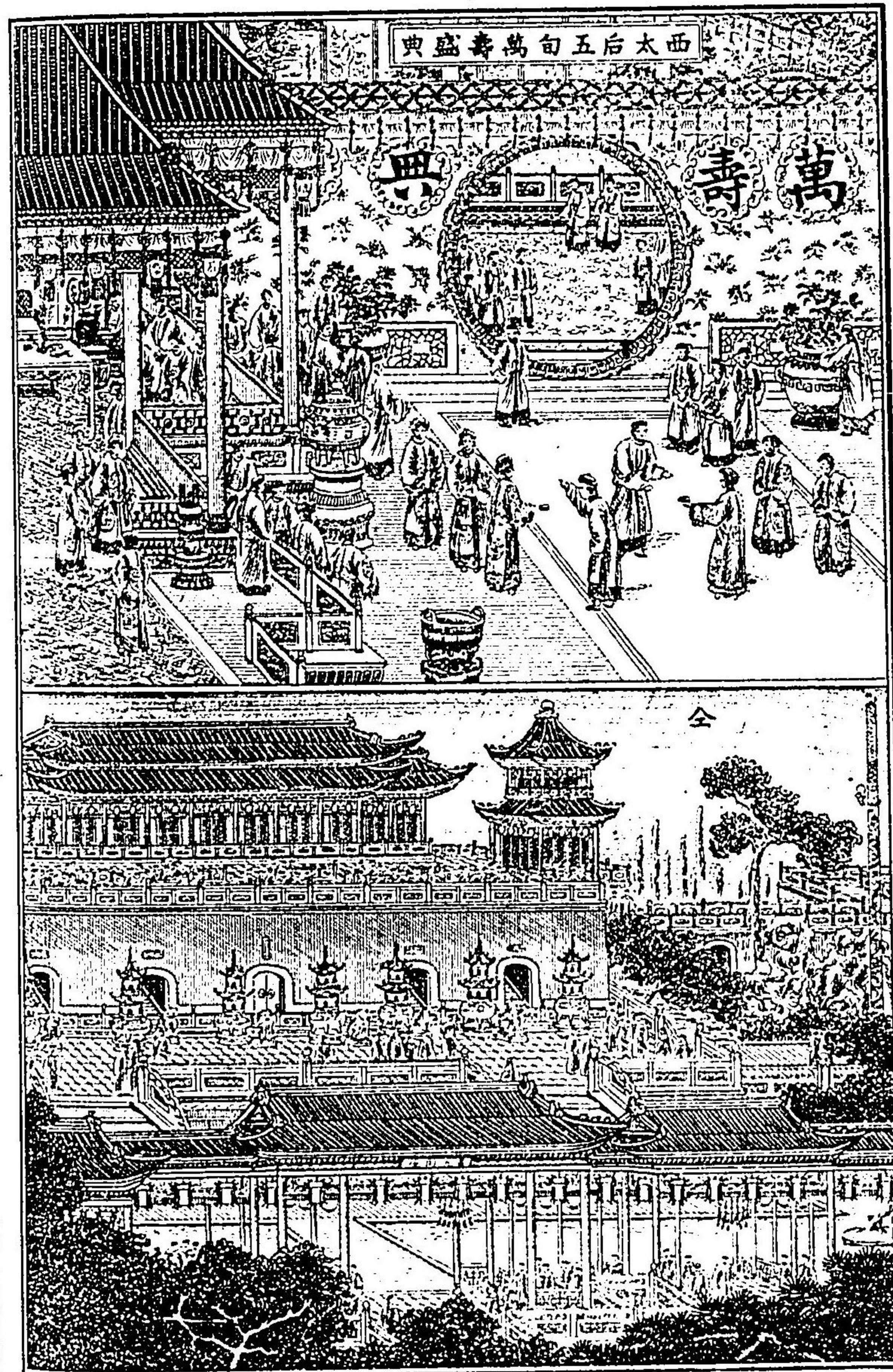


女官



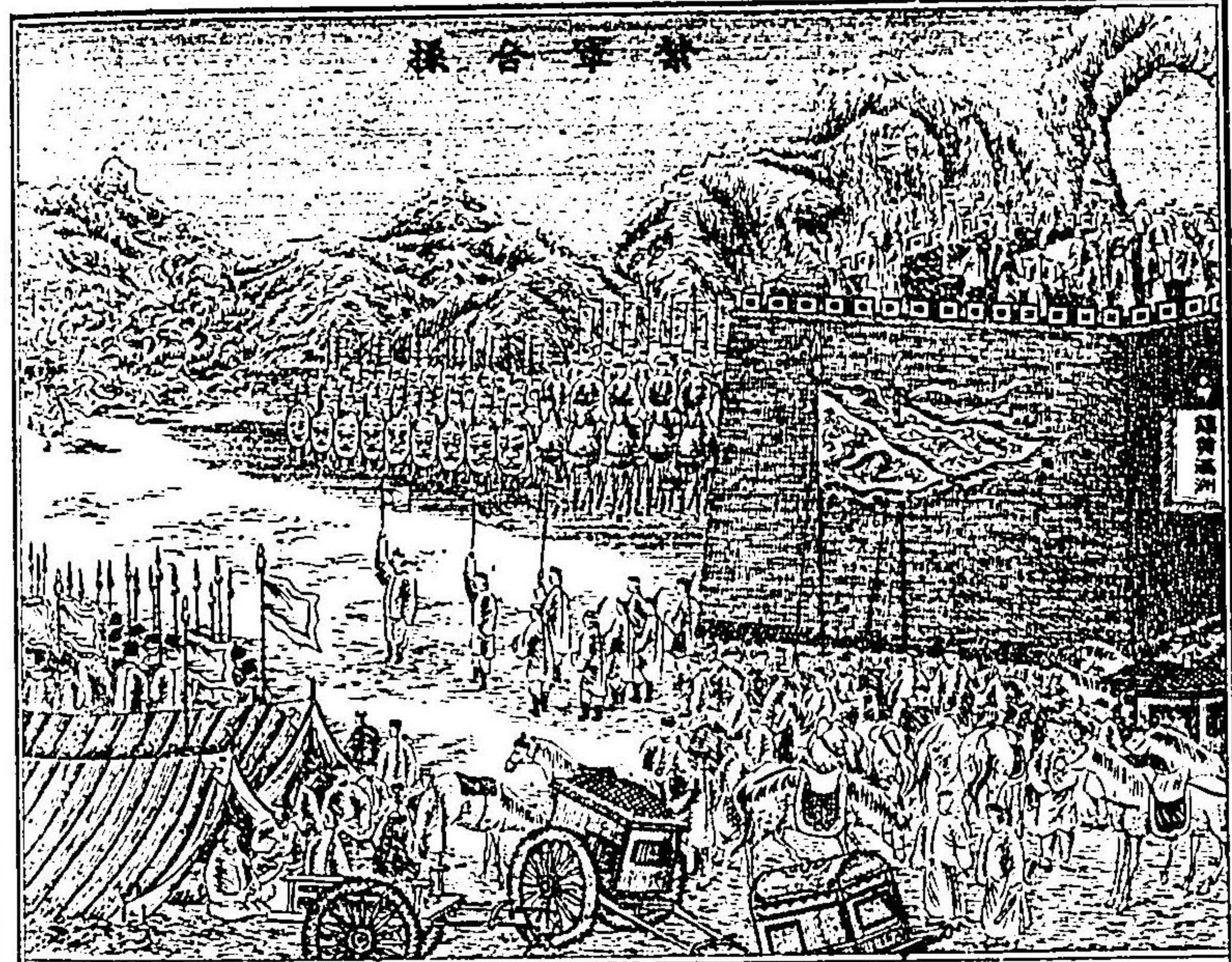


何きも金碧輝々として丹青洵は艶々たり  
 又太液といふ池ありて石梁一を跨りす  
 古名の所謂西海子揚柳及び榆槐は  
 岸を夾んで繁茂せり皆數百年のもの  
 風景頗る幽雅ふり苑外東に廟ありて  
 之を大高殿といふ禱神祈雨の処あり  
 天安門内清帝の甚と宏き祠廟あり  
 朱門丹壁美を盡す其西社稷壇ありて  
 遙々之と相對す  
 亦是城中北部は大丘ありて其名を巴  
 景山古名といふ彼の明季崇禎帝が煤山古名  
 縊まゝるは此地あり林木陰翳果花異種  
 山の高さ數丈まで之を登まば遠近の



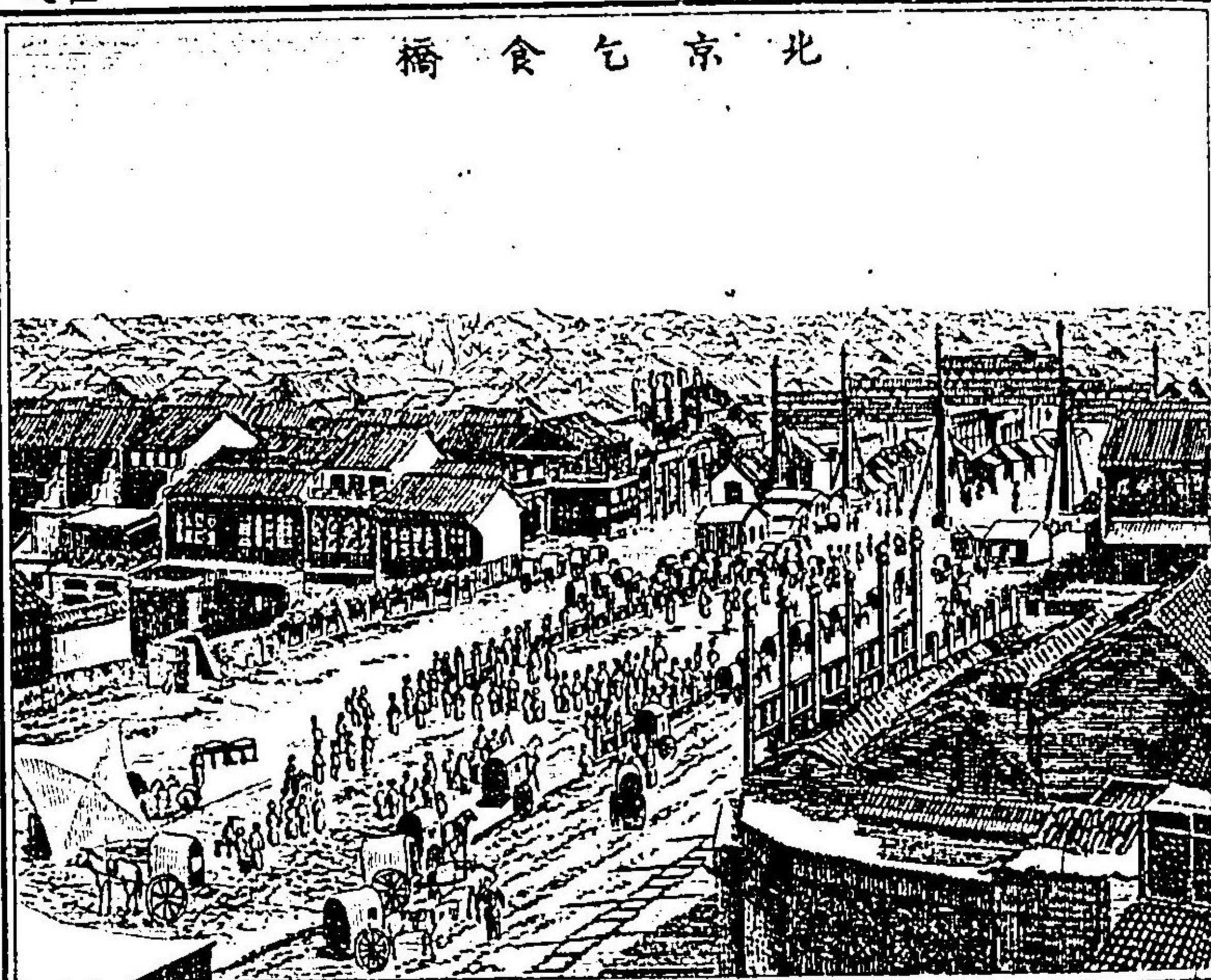


景各軍新



景象眼下に集まきり。  
 諸官署は帝居の南門即ち正面の  
 大清門外廣街の両側左右に羅列せり  
 然るに構造大ふきど間々門牆傾壊  
 瓦壁の墜落するありて觀るに堪へざるものあり  
 主なる衙門は大醫院・鴻臚寺並びに欽天監  
 及び詹事府等より翰林院は近年より  
 修理する為め外觀は他の衙門より較美あり  
 帝居の外部四周皆西民の住する処にて  
 市中大街八條あり皆城門を通りより  
 街路の濶さ四十尺中央凸起處をば  
 通路と為せり其寬さ十尺ありて車道と  
 其兩傍は人々の往來するに供しより

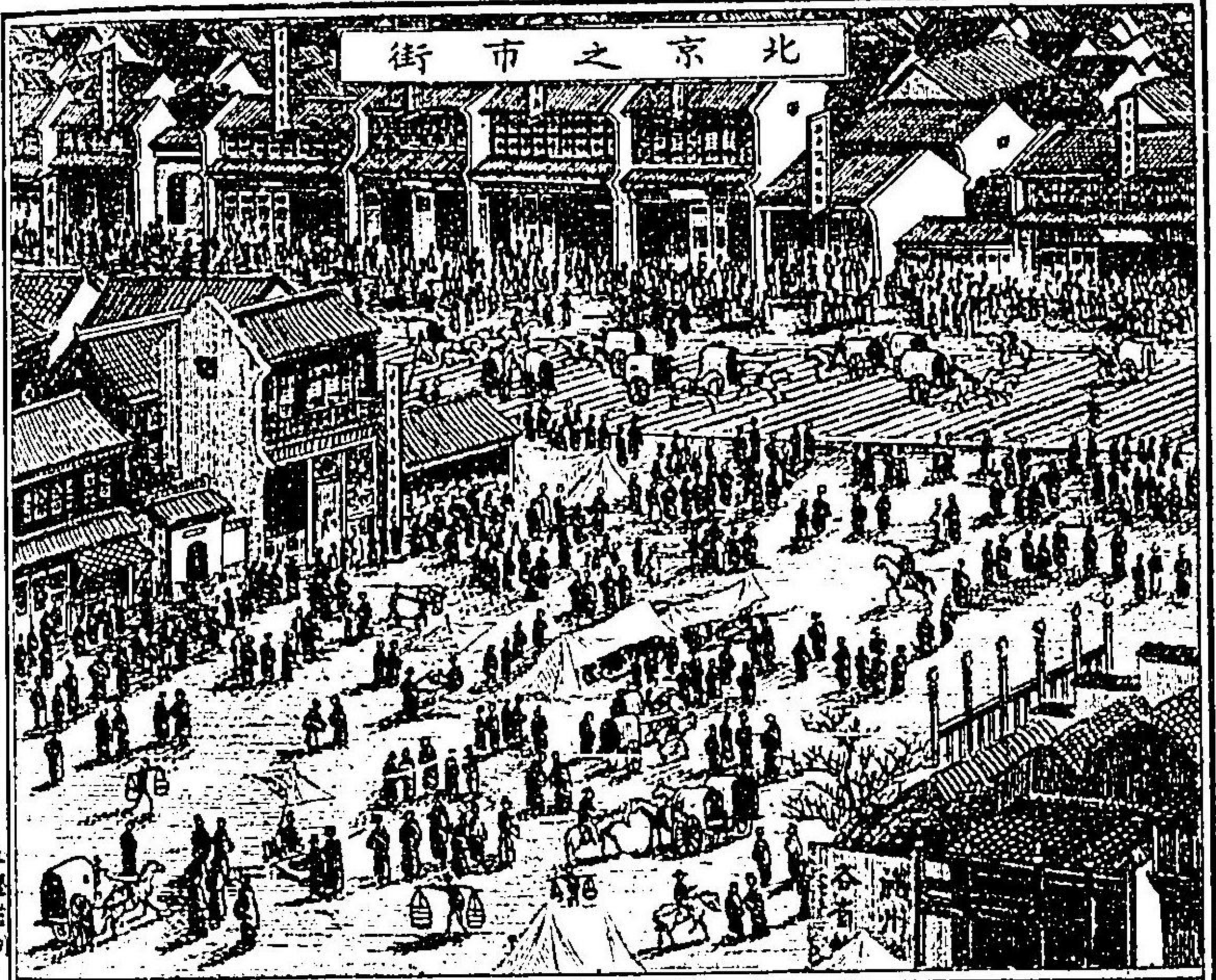
橋食七京北



各街肆店櫛比して人車路繹織る如く  
 路上各所に小商賈棚を架して幕を張り  
 日用雜貨古衣類鮮魚青菜糕果等  
 棚を攤して取賣し頗る熱鬧雜沓す  
 又大街の左右には小巷數條を通じつゝ  
 巷中亦櫛櫛あり二四九は三條街の南  
 人口稠密閭閻充ち滿蒙漢の軍旗人  
 多々之に居住せり軍旗人とは猶我土族の如し  
 ○又外城は一般に商業盛んな部分にて  
 亘り二十八里あり城垣高さ二十尺  
 羅城門は七戸とす南面三大門ありて  
 東西各々二門あり然り而して北面は  
 則ち直ち内城の南三門と相通せり



北京之市街



其大街は四條とす小巷衚衕又至ては  
 一々数ふ又違なし諸街巷は内城より  
 較や寔隘かり然きとて市場の雑沓する事と  
 商賈の繁榮する事は適か内市の上に出ず  
 内城南三門の中央又ある一門を  
 正陽といふ其外部左右に荷包巷ありて  
 東西各々一巷なり巷中肆店概略は  
 巾扇囊袋眼鏡や烟管玩具瓊珞や  
 男帽女飾を賣鬻ぐ巷外南又橋ありて  
 之を正陽橋といふ車馬紛紛行人は  
 肩を交へ脊を接す橋を過せば大街なり  
 是又一市場あり毎日市を開きつゝ  
 四時の菜果や鶏鴨や豚、鼠、猫、蛙等を賣る

北京冬季之景



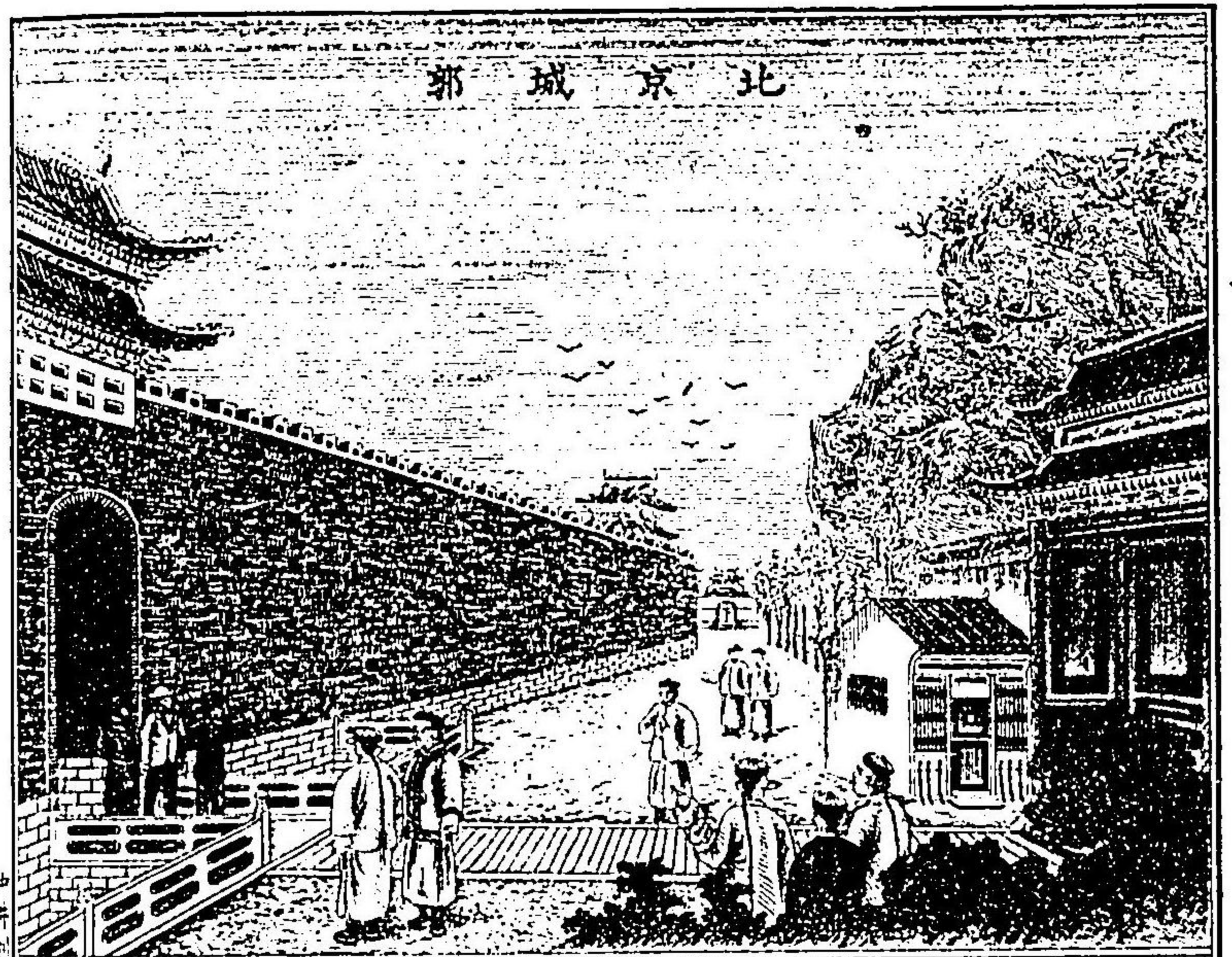
三茶衚衕街







字畫法帖牋紙の類筆墨并一切の  
 古玩文房具銅器磁器種々皆之あり益しこの  
 正陽門外左右なる一所の區は北京中  
 最大熱鬧繁華の地東京日本橋に似て  
 其逾る事數倍なり此一所を除く餘は  
 街行概ね蕭條な各巷貴顯の邸宅や  
 庶民の居なり南面の三門内は家稀  
 田圃園地墓塚等其間錯雜す  
 唯西隅の大街は菜市あせば賑し  
 街の西南一所は概ね外省在京の  
 官吏士人の寓所とす東陽大街花兒市は  
 亦商賈輻輳せり街花を四條街とす  
 卸賣の者多し此西端の稅務司は



乾あり鮮あり飲食の需め百物輾りて  
 雜沓囂喧他比ふ其大街の東西は  
 街巷蕃布一大小の肆店鱗比服飾や  
 器皿及び一切の用具充盈備はまり  
 又右肆店の間には客館酒樓や戲場あり  
 西河沿といふ巷は毎店多く金銀の  
 器物を鬻ぎ珠寶市は毎肆玉器や珠寶や  
 人參香料等を販る此二ヶ所は富商や  
 大賈の集る處あり大柵欄と云ふ巷は  
 細貨鋪多く戸々輝煌賈客蟻集繁華あり  
 巷の西南一所は歌妓流娼の巢窟とす  
 巷の西は琉璃廠とて長さ約そ六七丁  
 滿巷皆書肆骨董店凡そ新古の書籍類



貨物の北京に入るものゝ租税を課する所なり。

かほ内外両城中壇廟衙署や學校等甚多し其中の主なるものは左の如し

貢院 官吏登庸の際學力を試験する處あり中より一房一萬二千あり房の高さ六尺は過ぎず深さ四尺廣さ三尺僅か

文廟 孔子の廟なり御廟 雍和宮 北京喇嘛廟中の天壇 天を祀るの處なり(後)論あり(周)圓里餘

先農壇 農神を祀るの處なり(每)歲帝親之 釋迦堂 釋迦如來を祀る處なり其餘は枚擧げ難し

○又北京の地たるや四圍廣漠西方より一帯の山脈を見る氣候不順寒暑過度

盛夏は華氏の寒暖計九十度を昇降し甚しきは百度を逾る事あり而して

冬日嚴寒雪稀に溝渠河水氷結し橈を駕して往來す時零度遠すなり

土質は一般乾燥に地は礫石なを風吹けば塵土濛々天を蓋ひ咫尺を辨せず雨降せば

道路浹溽歩し難し故に此地の諺に風かければ三尺の土雨有せば一街の泥と

實に証言に非ざるなり其道路の不潔なる各街巷の隅角は塵埃汚物丘を為す

各處地下に溝を鑿り河に道し雨汚水の流泄するに備ふせと但近年修理をせず

溝道壅塞通ず先く春夏其氣蒸發し臭氣最し厭ふべや瘟疫流行絶ゆるを

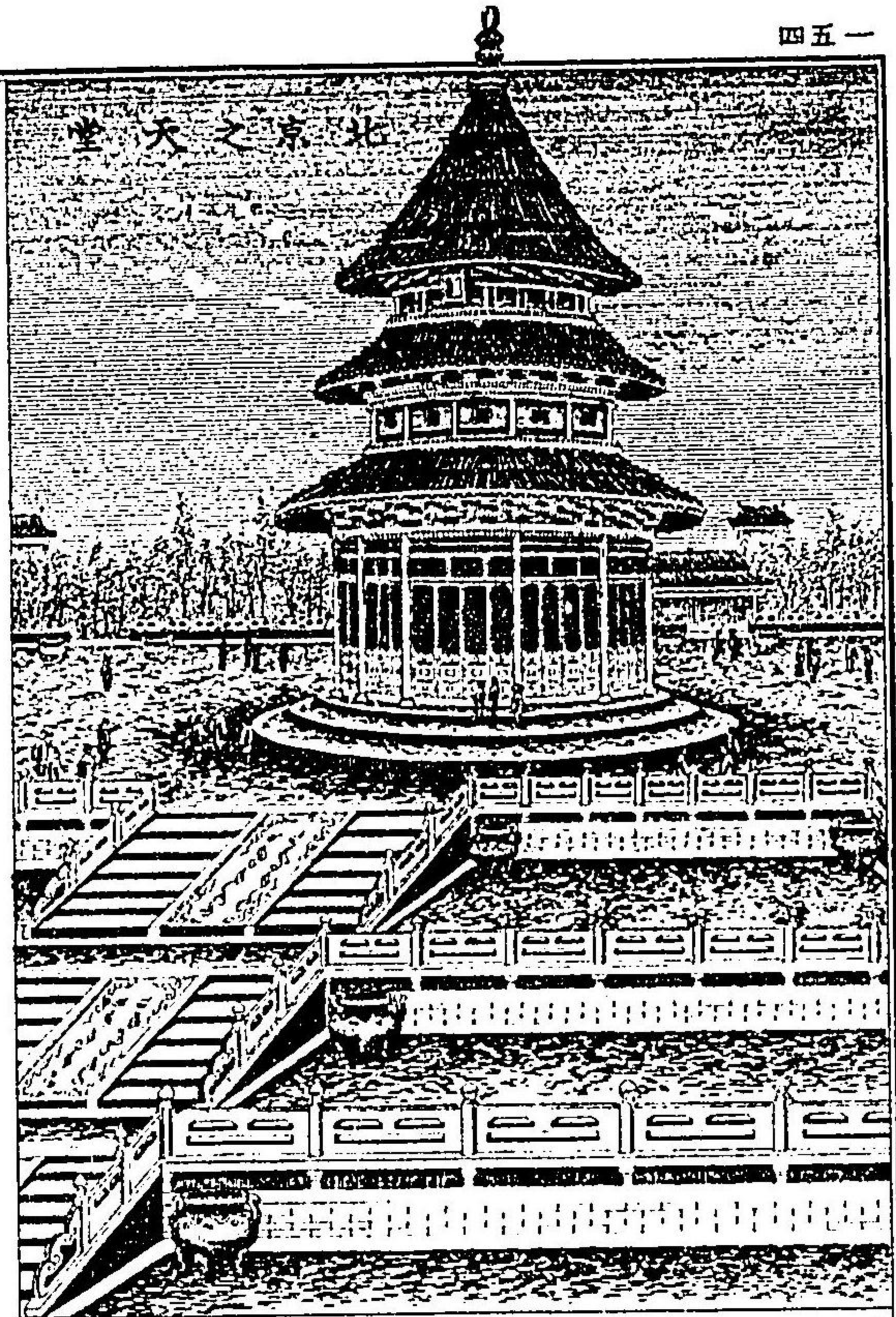


屋宇矮小四壁みふ磚を用ゐるもの多く柱棟のみは木を用ふ大臣貴顯の邸宅は何れも朱門魏戟にて粉牆鮮妍驕奢の風自ら外に顯然し又富商や臣賈の家店頭多く人物を彫畫し且つ金装や彩繪焯灼目を眩せ獨り平民細賈の居往々摧頽圯破をふ貪窳の象掩ふ可らむ人々浮華を尚びて遊逸事として生業を罷勉するもの更な無し故に却つて北京は學者士君子富豪の輩乏乏ありあるも外省より來る者多し而して無頼の惡漢や乞丐腫至群出し驅騙竊盜搶擄や小掠至らざるは無く其最も夥多





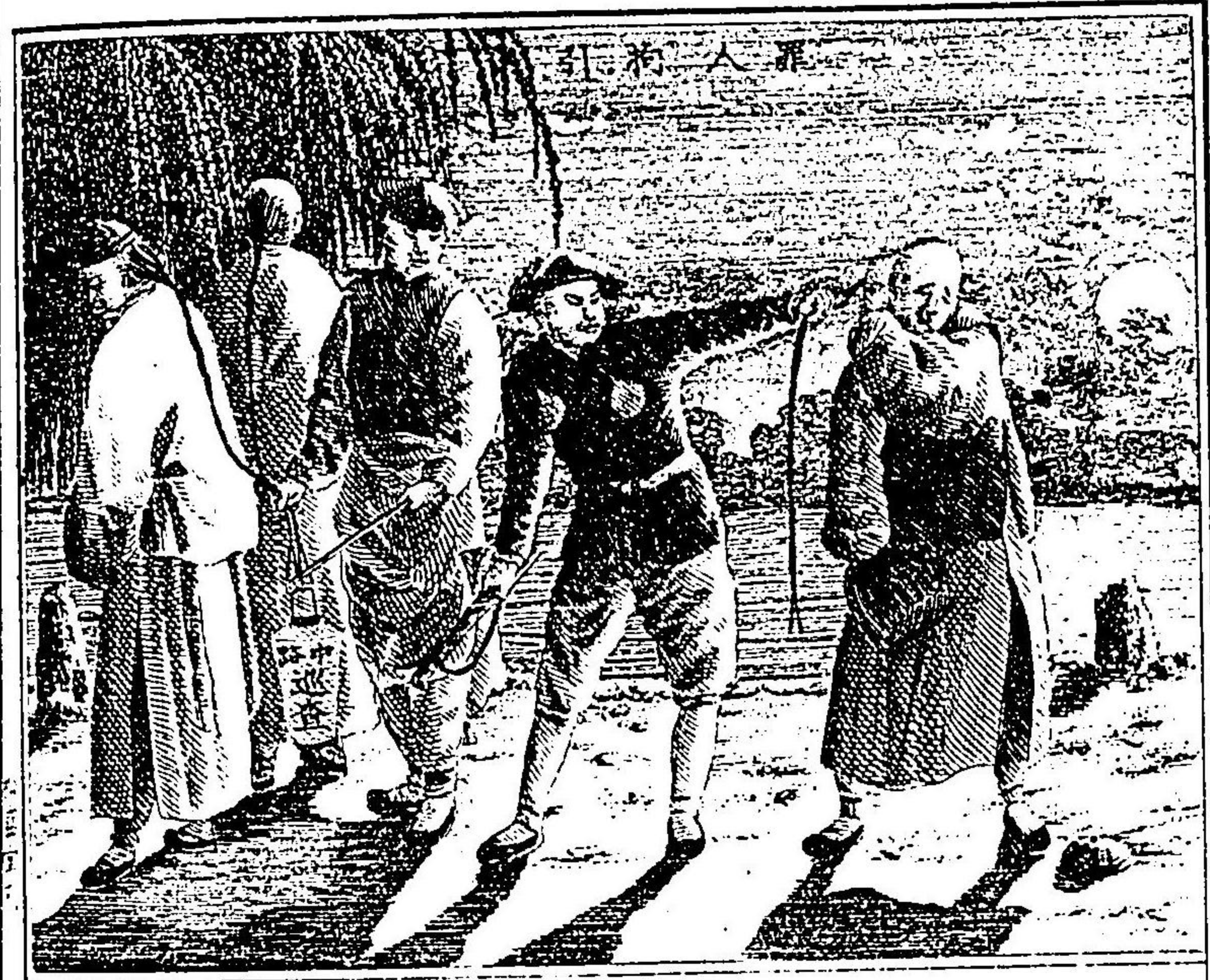
懲罰堂



財貨を強奪するありて・俗に之を明火と云ふ。○市街警署の設けあり・夜間は巡査銅羅を打ち  
 喇叭を吹て廻きども・烏の案山子も異ふらば・偶々賊を捕ふるも・賄賂の多寡も随ひて  
 自ら軽重為し得べく・刑法あれど名のみみて・其実警吏が金銀を貪る所の具も過ぎざ

悪むべきは乞丐あり街上商賈  
 の店頭・必ず乞丐跪坐をふり  
 泣き踊りて哀を乞ひ或は錢を  
 典へねば・朝より夕に至るとも  
 敢て去らず而して・其中慄慄  
 ふるものは・少く錢を典ふまは  
 更受けず罵詈雑言・其極店頭  
 を騷擾し・無頼の匪徒らは行人を  
 搶却して財を奪り・或は同類  
 を哨集し・夜半人家に押入りて





強盜の刑夫せ然り況んや民事に至りては  
 理非曲直權理義務皆賄賂の多寡より  
 官吏の定むる処なり故に支那の套言は  
 凡そ富者は非ざるは訴訟を起す能はずと  
 是は一般の事にして獨り北京に止らず  
 民の不幸察すべし  
 ○さて此北京の西北に三つの山あり其一を  
 萬壽といひ其二を王泉といひ其三を  
 香山といふ三の山相並び立つ其高き  
 皆教犬に過ぎざると國帝避暑の処なり  
 満山樹木蒼鬱し禽鳥嘯鳴繞らす  
 園圃池水を以てせり殿宇亭軒山に倚り  
 水に臨み星羅棋布風景頗る幽美なり



萬壽山の東下は園あり圓明園といふ  
 周圍垣牆巍峩として中は大なる殿宇あり  
 正大光明殿といふ即ち帝の行宮とす  
 此園外の左右は大厦高屋連列し  
 文武官の宿房とす園内瓊樓瑤閣や  
 珠闕玉塔みかとしは棧道以て相通じ  
 蜿蜒曲折満堂八千紅萬綠間は在り  
 唯惜む今を距る二十有六年前  
 英佛北京を攻めし時兵を遣りて之を燬く  
 火三日絶えずして宮殿臺榭大半は  
 灰燼に歸し而して珍奇宝物皆兵の  
 掠むる処となりりき  
 王泉山ハ萬壽の西に在りて一名を



嵩山圓明園之景



静明園とも稱しより泉あり之を玉泉といふ  
 源石罅間より出で涼々聲あり又之を  
 噴雪泉とも別稱す味極めて甘美なり  
 故に北京の宮中へ毎日之を運搬し  
 其飲料に供すと云ふ又香山ハ玉泉の  
 西に在りて一名を静宣園と云此山は  
 杏花楓樹等おほし山下の廟ハ碧雲寺  
 泉水清冷樓塔ハ甚だ雅致なり其の故に  
 夏月遊人閑客のあつて避暑する者多し  
 予今より北京を出立し西南河南省に入り黄河を渡  
 りて洛陽に抵り其より西陝西省に入り咸陽を経て  
 彼の棧道の險を越え漢中を過ぎて西南四川省に  
 入り成都に到着し其より東重慶府に抵たり

楊子江に松を渡り流せし隨ひ湖北省より江西省に入り洞庭湖に遊び再び楊子江に  
 出で漢口を経て赤壁を過ぎ湖西省の九江廬山白鹿洞等杖を曳き次で安徽省に入り蕪  
 湖を經由して江蘇省に入り南京鎮江等を経て蘇州府に遊び又江を下り上海に着して  
 支那の記行を終らんとす然るに此行程殆ど九千餘里にして日数一百十五日を費すべ  
 其間名所古跡甚多くして如斯一小冊子の書彈し得べき所にあらず況て内地は交  
 通不便なれば從來普く旅行したるもの死く偶まあせあるも馬真の正確なるもの極め  
 て鮮し故に予は今日迄得たる所の写真を上欄に掲げ只道程の順序並に物産及び其  
 名所古跡の概略を示すのみ讀者請ふ之を諒せよ  
 北京外城西北隅の西便門を出て白雲觀を過ぐ即ち元の大極觀の遺墟盧溝橋に抵る橋の長さ二百餘歩  
 石欄獅子を刻む頗る壯麗燕都八勝の一盧溝曉月是なり潭河一名黑水河といふ新店を過ぎ良鄉縣に抵  
 る縣南三里樂毅の墓あり琉璃河を渡る松船輻輳一重要津と稱す橋側鐵竿あり長さ三十尺許何代の物  
 たるを詳かよせず涿州に到る即ち涿鹿にして黃帝の故都州の西南十五里樓桑村あり蜀漢昭烈帝の誕  
 生地なり定興縣を経て易水を渡り北河雷河を経て安肅縣に抵る此より西絶えて杭稻無し麩を以て食



橋 濟 廬



〓 充つ野東二百五十里大城縣の北子牙村の黄又河に類する  
 処太公望釣臺の遺址あり荆軻の故里を過き徐河を渡り保  
 定府に抵る京師の南三百五十里保定は即ち隋時清北代晉  
 之を契丹に割く府外蓮花池あり池中看花亭あり柳塘蓮花  
 景趣あり大抵東北の民は懶惰にして土地荒蕪然るは此地は  
 至せば田疇井然老幼皆生業を勉む  
 方順橋に抵る即ち祁水の下流光武の故城を過ぎ帝  
 堯の廟に謁し望都縣に抵る縣城の東隅堯母の陵あり  
 陶唐氏の故都を過ぎ唐川を渡り定州に抵る碑あり  
 題して中山靖王國と曰ふ明月店を過ぎせば則ち  
 鮮虞の舊都既にして一小祠あり祠前の碑に伏羲聖  
 里の四大字を刻す明萬曆中立つる所祠は則ち佛像  
 羅列を新樂縣に抵る直隸の地多く榆椿及び栗を植へ

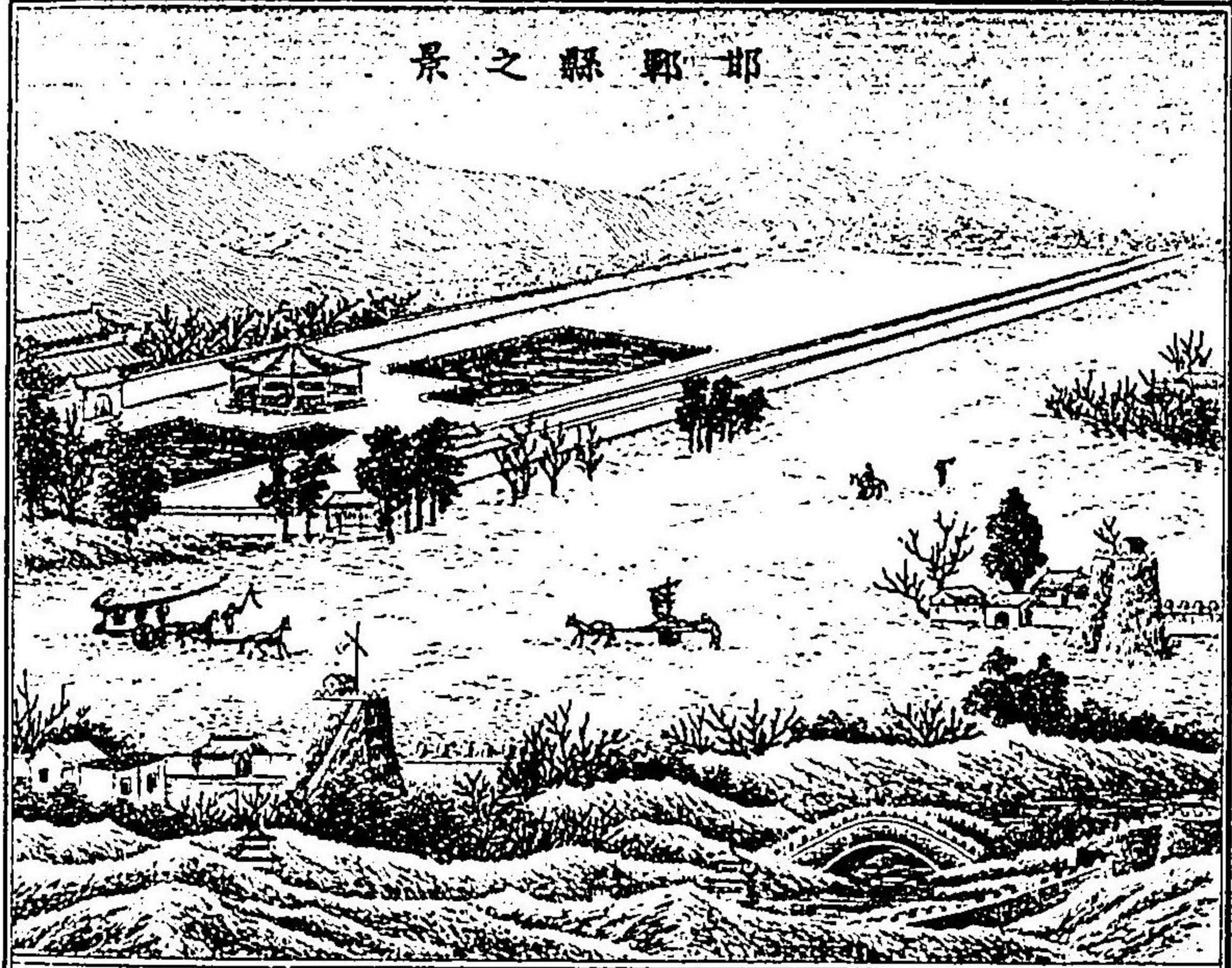
農 民 之 車



其葉を採り穀と和し粥と作す此地は來せば則ち四面荒蕪耕種  
 の施すべきふく民の食は専ら木葉に在り沙河を渡り伏城驛を  
 過ぎ又滋河を渡り正定府に抵る府ハ京師の西南六百三十里即  
 ち漢の常山唐の鎮州とく粟梨を産す滹沱河を渡り棠城を經  
 て趙州に抵る即ち古の趙國なり固城店は即ち郡城其北王莽の  
 城あり千秋臺を過ぎ蓋し光武が位に即き處柏鄉縣を過  
 ぎ泚河を渡り内邱を經て順德府に抵る京師の南千里此間東に  
 任縣泊寧普泊あり凡京師西南の諸流此二泊に入るもの二二皆  
 古大陸澤の地順德府ハ漢の鉅鹿常山晋石勒の據る所地位  
 四方の衝に當る民皆農を勤め多く黄梁及び綿花を産す  
 府中天主教の會堂二十餘宇あり佛國宣教師來り駐す府  
 の南三十五里沙河縣は蘆泰亭あり又府の東四十里南和縣  
 圓通寺あり塔ハ十七級雲間は從中府の東平鄉縣の沙



邯鄲縣之景



五臺殷紂の築く所其北鉅鹿八項羽が釜を破り舟を沈む  
 の所宣務山山路一万五千八百尺堯登りて洪水を瞻し  
 順徳を發し沙河を経て臨洛關を踰之黃梁夢鎮を抵す  
 盧生が祠あり棟宇峻起簷楹華彩門を入せば帝痕拭  
 ふが如く塵ふこ池水灣曲腰鼓の狀を成す上は石橋を架  
 せ橋を過せば即ち傑閣三間皆塑像を安置せ前を呂仙  
 と爲こ次を盧生其次ハ盧生が睡像ふり壁上詩を鐫せ  
 觀る可きものぞ邯鄲縣を抵る即ち戰國趙の故都なり  
 廉頗墓を過ぎ車騎關に入る關ハ小丘を倚せり蘭相  
 如が故里杜村店を過ぎ磁州を抵る多く石炭を産せ  
 肆上土塊を齧ぐ其色灰白于子と云ふ土人麪と和こ  
 餅と作して之を食る州の西曹操が疑冢あり壘々たる  
 七十二高邱滏陽河を渡りて豐樂鎮を抵り今より

河南省に入り彰徳府を抵る

遺拾

直隸省の中部河間府の治下獻縣の西ハ紅杏園あり河間獻王日華宮の遺址あり  
 縣南三里蓮花泊あり多く水族を産せ夏秋の交採蓮の樂境趙北口ハ縣北五十里易水  
 會する諸水此口より注ぐ萬柳堤あり十三橋を架せ虹の如く連りて行人を渉す景州の西北開  
 福寺あり隋代の古塔あり廣川先生の董家里あり詩佛の賈島村あり○省の南隅大名府ハ往  
 昔商の都ふりこ其治下長垣縣ハ蒲城と稱し所謂子路が宰たりこ処あり

彰徳府ハ京師の西千二百里即ち商の河壘甲相居すとハ即ち此ハ漢魏郡と云ひ曹  
 操封を受くるの後名けて鄴都と云ひ前燕後趙皆都し中原の要衝と云ひ畫錦堂址ハ府の北  
 東坡此記を作せり今址たも先こ府の東北ハ韓陵山あり東魏の高歡爾朱榮を此破る山  
 下碑を立て温子昇文を爲る陳徐陵曰く北朝の人物たゞ韓陵一片石のみと即ち是ハ府  
 の東北百十里臨漳縣ハ古鄴の地魏の曹操が銅雀臺址あり趙の石虎が九華宮の墟あり皆  
 華麗を極めし所今化して荒煙蔓艸とふる縣西二十里ハ鄴城あり即ち戰國魏の鄴邑三國



魏後趙前燕東魏等の都せし所なり既にして彰德府を發し滿野綿花は宜し韓魏公の故里を過ぎ田間唯一小祠を存せ魏家の營曹操兵を屯する處美里城八路の右方は在り基址極小蓋紂が文王を囚へし處なり湯陰縣に入る

此地ハ岳武穆が故里なり後人祠廟を建て之を祀る畫棟雕甍林表は聳飛し四邊豐碑森列其公書を鐫する大なるもの經尺餘小なるもの即ち二三寸皆筆力適美其他名公碩儒の題識勝て數ふべからず明人最も多し門外ハ秦檜夫妻及び張俊反接鐵像を安置し詣廟者の之は唾し或ハ溺して過る事又西湖は看とる如し光村鋪は抵る愁紹の墓あり血帝衣は灑を則ち此地宜溝駅を経て端木子の故里を過ぎ淇水を渡り淇縣は抵る南關外三仁の故里あり衛水を渡る衛水ハ天津運河の上流なり衛輝府は抵る曹魏朝歌といふ絹及び綿せし朝歌の地戰國魏は屬し秦河東郡は屬し漢ハ河南は屬し曹魏朝歌といふ絹及び綿紬を産す府の西北蒼山は珉石を産す遼馬陂ハ府の西南は在り後魏の爾朱榮朝士を此に殺す比干廟ハ府北は在り府南朝歌の南は牧野あり周の武王紂を伐ち師を牧野は陳を即ち此地南關ハ即ち孔子磬を撃つ處衛輝を發し新鄉縣は抵り武王の同盟山を過ぎ

南陽卧龍岡



獲嘉縣を経て小丹河を渉り修武縣を通過し造店は抵る脩董幄の如く又柿樹多し路傍至る所乾柿を賣り或ハ柿霜を刮り搏ち以て糖を作る味は頗る美なり又斑竹の産野頗る蓋し河南の地桐漆桑栗皆地は適せざる無き到る處土壤概ね肥沃なり清化鎮を過ぎ丹沁二河を渉り懷慶府は抵る此府ハ禹貢冀州懷慶の地商畿内周初の三監地とす戰國ハ魏衛鄭三国の地と漢は河南とす後魏唐懷州といふ多し蠶絲棉花を産す蓋し河南省棉花の産は富むと虫心之を構る事を為さざる概ね商賈を委ね速く江南は輸る府の西七十里河内縣あり漢の光武赤眉を此に撃つ又藥櫃山ハ藥草を産する又唐の李愿が歸隱せし盤谷の地ハ縣北二十里は在り韓退之が序尤も著る懷慶を發し麥隴の間は初めて水田を瞻め孟縣の北門外は在る韓文公の故里



を過ぎ孟縣を出せば則ち黄河なり河幅十里濁浪洶涌人をして心悸せしむ宜かり秋潦一至数十里汎濫し復涯涘を辨せば東南遙き嵩山を望む形盆の如し相距る百里群山前も當つて能く之を蔽ふ莫し其高峻知るべきなり黄河の水八千里直瀉商旅險を避け舟行を見む各港口唯一二の渡艘あるのみ帆を揚げて濟る中流洪波舟を蕩し揺撼して已まず漸く岸に達すきバ則ち鐵謝鎮あり其西を孟津と為す古の所謂河陽の三城一ハ北岸に在り六南岸に在り六河中の灘に在り三城輔車相倚る今城湮み灘亦水に没し遺址のみ知るべからず鎮を出せば則ち光武陵線す垣墻を以ては老樹鬱々蒼然より陵を過ぎ西に走るを北邙山とふは嶺に登れば漢以來帝王名臣多し此に葬る今何人の陵墓たるを詳かませば陵墓の間開壘して田疇と為す延袤十数里西北に則ち汝野千里嵩山ハ西南に虎踞も緑林一帯前も當り烟霧縹緲の間は隱見するものハ河南府即ち洛陽の市街なり河南府即ち洛陽ハ〔京師及南京を距る八百里〕禹貢豫州の域武王商克て鼎を郊廓に定む周の成王洛を嘗みて王城と為す秦は三州と曰ひ漢は河南と曰ひ東漢此は都に三國魏は司州と曰ひ晋亦都す後魏は洛州と曰ひ後周東京と曰ふ隋の煬帝徙りて亦都に豫州と曰ふ唐は東都と曰ひ五代梁又東都



洛陽天橋

を曰ふ宗は西京金は中京是なり元河南と曰ひ明清河南府とす蓋し禹域の中央に居る其他穀を産する最も多く又絹布及棉花を出す其西辺の木材亦全省の用に給するに足る近時は鴉片の産日々熾かり府を洛陽と曰ふは洛水の北に居るを以てなり天津橋は即ち府外の洛水に架す橋下皆平沙秋潦は水至る橋石を疊み構成之を望めば圓月の如し之に就て埭類修めず行人皆沙中より過ぐ橋上後人跡なし唐時詩人口を極めて誇稱すと雖も今は則ち満月索觀るに足らず白馬寺は府の東に在り漢の明帝の時摩騰竺法蘭始めて西域より白馬経を駄して來る白馬寺創置す即ち僧寺の始め洛陽故城は府東洛水の北に在り周公の嘗する所成周即ち是なり夾馬營は府東に在り宋の



大祖が生る、所々陽亭は晋の賈充が密語の地、魏秦の古宅は旧仁名里に在り、府東七十里、偃師縣は帝學の都する所、西北首陽山あり、伯夷叔齊此に隱る、鞏縣の西南夏臺あり、夏の桀王湯を囚る處、西に洛口倉あり、隋の煬帝東遊を此に聚め、李密據て霸を圖る所、登封縣の北十里嵩山あり、五嶽の中嶽より其山三夫峯あり、東は大室、西は小室、嵩とは其總名なり、之を室と云ふ者、其下石室あればあり、中嶽は西方の中嶽、高し故に嵩高と名く、詩に曰く嵩高維嶽是なり、縣の東南古陽城內に測量臺あり、周公此地を定め、中土と為す、小林寺は小室山の北麓に在り、即ち達磨の故居、

洛陽を發して孝水鋪に抵る、此地は王祥が氷に臥し、奠を求めし處、甘羅墓を過ぎ、澗水を渡り、函谷新關に入る、地險にして石多し、關上を新安縣と為し、去つて鐵門に抵る、此間往々險に憑り、聖寨を築づくを見る、蓋し内地古來群盜あるものあり、慄慄無頼亂を喜ぶ者、或は兵士の罪を犯して放逐せらるるもの、皆集まりて盜を為し、良民を害する事極めて慘酷あり、民の之を畏る、事虎狼も管ならず、官府之を知ると、或は如何とも為す能はず、故に庶民自から驍勇の徒を募り、兵勇と號し、壘を據りて之を防ぐ、彼の黃巾の賊の如き、近きは黒旗兵の如き、皆群盜中の最む、殊驚るものなり、

鐵門を發し石河橋に抵る、此遺往々穴居を見る、居は概收崖腹に在り、高きものは地を去る數十尺、崖を鑿ち級と為し、以て升降に澗池縣に抵る、城西は即ち秦趙會盟の處、英豪を過ぐ、古の三嶺地是なり、南高を経て磁鐘鎮に抵る、沿路多く土煤を産す、陝州石橋鎮及び靈寶縣を過ぎ、弘農澗を渡り、函谷關に入る、此より西一千餘里、關に至るまでを關中と號す、其山甚だ高峻からむ、重疊相倚る、弘農其東に在り、黄河其北を帶る、古天險と稱す、宜ふり山を鑿り、路を通じ、每里崖を闢き、馬道を設く、既にして太子營及び關郷を過ぎ、陝西省に入り、潼關に抵る、

遺拾 河南省中東南部の陳州府は古昔伏羲の都せし處、府南は孔子糧を絶ちし所、厄臺を立つ西南部の南陽府の西南七里に臥龍岡あり、即ち諸葛孔明が草廬の在りし所、其下平地掌の如きものは所謂孔明の耕地にして、歷代祠を修し、奉祠す、北部の関封府下陳留縣の南空桑と云ふ所は伊尹の誕生したる地なり、縣城內には張良の廟あり、而して其関封府の西北には宋の大内たりし汁の故宮跡あり、潼關は河南陝西の界、昔禹貢に於ては豫州雍州の境たり、山上には即ち關所あり、官吏の行旅を檢する極めて嚴かり、關下は街衢甚布、關を出せば即ち華山突起す、壁立萬仞、絶て依傍なく、連華を霄漢に挿むが如し、衆山千葉を為し、其趾を環繞す、蓋し五岳の中は在り、最も奇絶人を以て願望久うして去る能はざらむ、揚震の墓



を過ぎ其講學の處を見西岳廟渭南縣を経て臨潼縣に抵る縣城の南門外に驪山の温泉あり即ち唐華清宮の遺址結構華麗男女室を異にして浴を一室最後は在る者御泓と云す碑を疊み之を覆ふ穹窿橋の如し泓底白石を敷く方三十尺許堂徹鑑すべく寒温體は適を去つて灞橋に抵る古昔長安行を送る者此に至り柳を折り別を為す今猶老柳数株を存す其續載するもの亦珍々愛す蓋し河底皆白沙水其上を行く環珮鳴か如し西安府に抵る西安府は即ち古の長安周より秦漢及び晋西魏後周隋唐並此に都を遺跡の尋き何ぞ限らん未央宮址は西北十四里に在り武帝の柏梁棟梁朽ち呂氏が宣室草仍不紫あり石渠は圖書を藏し天祿の書を校し麒麟凌煙功臣を畫を今雲烟と化して飛ぶ又長樂建章の二宮址あり建章宮の北太液池あり井幹樓は宮南に在り俱は漢武の奢趾興慶宮は唐の南内内に沉香亭趾あり今誰か欄干を倚る石經は府學に在り希世の異宝雁塔は慈恩に在り唐時の古刹杜曲は府南に在り韋曲は樊川に在り俱は古遊賞地曲江地は其水迂回菰蒲葱翠李唐に盛んふり樊川は漢の樊噲が食邑又渭水あり府北に流る渭橋三箇を架す唐の李晟が勤王地渭水樊川の間六十里龍首山此は蜿蜒山は隋長安の狭きを以て築く所府南又樂遊原

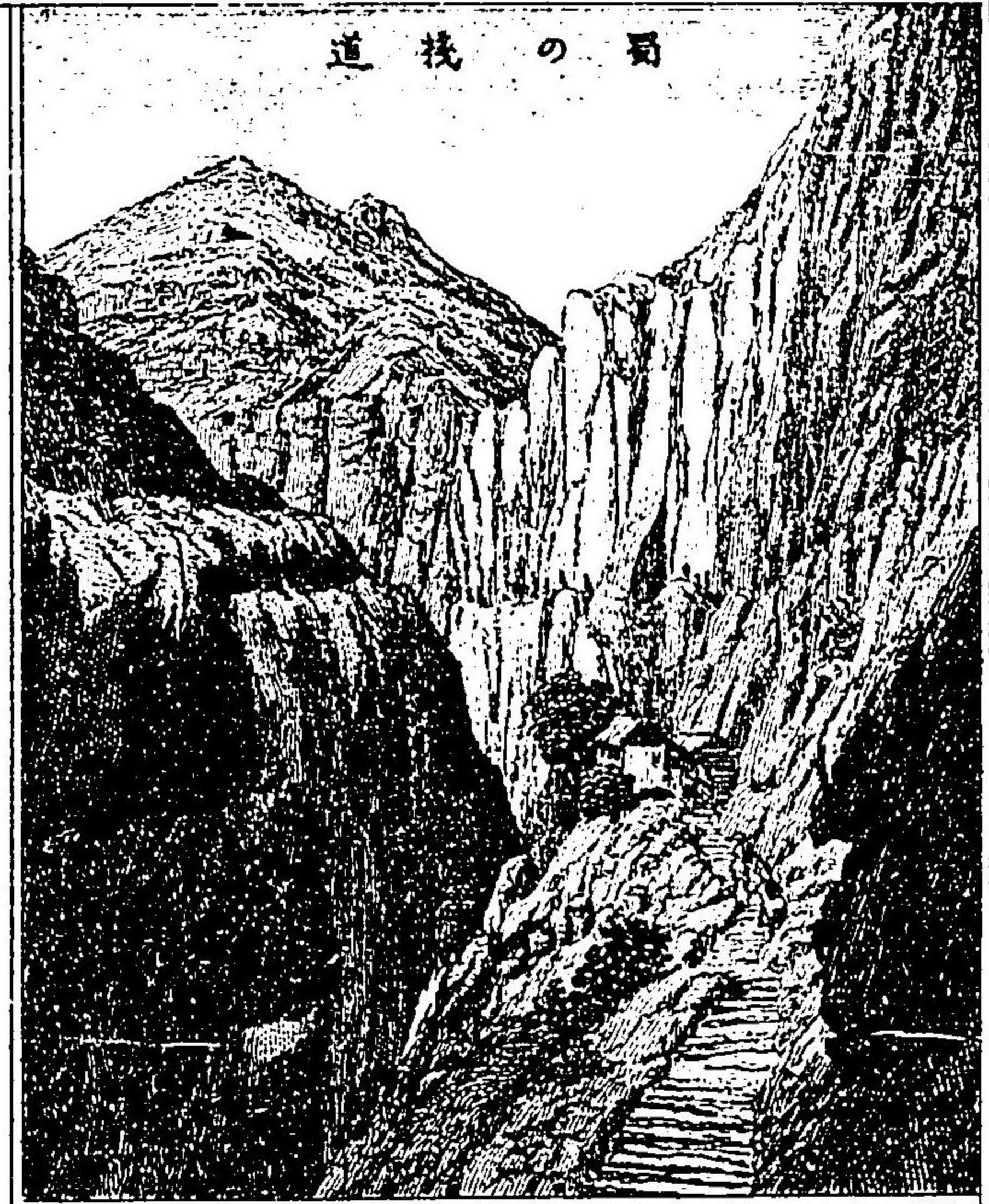
あり杜牧が昭陵を望む所其南子午谷あり諸葛武侯が兵を進めざる所又臨潼縣の西南抗橋谷の址あり即ち始皇帝が備を坑する處其縣東鴻門坂は高祖が項羽を會せし處たり元來長安府は山を被ひ河を帶ぶ所謂沃野千里五穀豐饒して蠶桑の業又盛なり

さて長安を發し渭水を抵る帆樁相逐ふ諸船石炭及び米穀を格載するもの甚だ多し水を涉り咸陽縣に入る即ち漢の渭城なり縣の東廿五里阿房宮址あり即ち始皇が築きし西渭南上林苑中に在り苑中又昆明池あり去りて興平縣に抵る土民糲粉を獲て之を食す馬嵬坡を過ぎ楊太真の墓を道の右に見る所謂楊貴妃が殞せし所僅に一龍を存す祠あり蕭然長寧殿武功縣杏林殿を經由し扶風縣に抵る長伏波の故里あり岐山縣を過ぎ南四十里五大原に抵る一深谿あり廣さ十里可り水溪中より行く即ち渭水の上流一見諸葛武侯が勞處の古蹟を知る水北一丘あり即ち司馬仲達が壘を設けし処なり蓋し陝西省の地たる水田少く獨り沿渭兩岸皆秔稻を種するを見る相傳諸葛孔明の遺法かりと渭水を渡り底店鎮を経て又渭水を涉り益門鎮に抵り初めて蜀の棧道に入る

溪水萬山の中より來り亂石相排して出づ溪を涉り危崖を踏みて行く一路羊腸山は橋を盤紆仰て天光を覆ふと井底に在るが如し一里關を踰る古の大散關あり山益々峻路益々險下せば則ち深谷千仞奔流激射雷を轟かせ雲



蜀の棧道



平鳳縣に抵りて鳳嶺を踰え孔道迂回乃ち捷徑を取る極めて峻峻後人前人を載きて上る既く難きは關あり  
 俯して衆軍を瞰るる皆府腋の下に帖々こり乃ち北棧中鳳嶺の最高なるを知る唐虞中費中丞漢復棧道を修治す凡  
 る山崩石嘴之を煨植すべきものは工を施こし路を通じ名けて礪路と曰ひ其層巒棋峙中巨流

を鑿す關を下る十里民多く木器を製す其法我  
 國の箱根駅に爲す所と酷相肖なり東河橋を  
 過き紅花鋪に抵せば山基高峻ならざる角鬼  
 峽動すすまば傾跌せんとす其石無き處則ち泥  
 滑白居店を過ぎ石門關に抵せば陡崖壁立之を  
 望めば門の如し蓋し其を以て名を得山の右に  
 登するもの空に騰して下り蛟龍の如く左邊  
 の一峯石を載き虎形を作す者と過ま相抵り治  
 る鎖鑰の如し故く又雙鎖の名有り關は龍背の  
 路す實棧道の咽喉なり此を過せば地勢稍々

を夾み山断崖懸るものは則ち溪に縁り木を架し或は石を疊み橋を爲し名けて礪橋と曰ふ  
 後人碑を嶺上より立て以て其功を頌す三岔駅に抵せば路始めて坦夷廢丘關を経て南星街を過  
 き行く五里道の左に碑有對面陳倉道の六字を題す柴關嶺を踰へ阪を下る十里紫柏山に抵せ  
 ば留侯の祠あり相傳ふ侯が穀を辟く處と山邃水匯氣象深奧庭中芍藥及び他の草卉を種せ道  
 士延きて堂に升せば茗飧を具す堂後又磴道あり盤曲白石を琢し欄と爲し以て嶺に達す嶺に  
 樓あり侯が書を受くるの像を安す授書樓と曰ふ松竹青を交へ清淨唾すべからず低徊の間塵  
 情頓に消え眞清修の佳境かり大留壩を過ぎ畫眉關を踰せば乱石聳起人を壓して墜ちん  
 とす青羊鋪青龍寺を過ぎ三文城の遺跡を経て武關驛に出で武曲鋪に抵る道旁の大石に  
 千古烟霞の四字を題するを見る山間瀑有り轟々馮下風來つて之を颺すきは明珠を撒すが如  
 く褒河の水瀦則ち藍を蘸し奔せば則ち雪を翻し奇巖怪石蟠龍の如く又奔馬の如し棧道一綫  
 其間を通じ行旅皆圖畫の中に入りんとす水あり樊河と曰ふ水勢迅疾橋梁  
 を架すべからず横に鐵鎖七條を施し兩頭を石に繋ぎ上る木板を排せ亭々空に懸り徐行處撼  
 已まざ疾歩則ち否なり駅中の薪樵賤なる事草の如し



青橋駅を過ぎ新開嶺に抵る蓋し棧中第一の勝境なり山皆巨石砌成の如く風箏露條罅隙を彌縫し垂々として墜ちんとす其下は則ち廢水迂曲匯して潭を為すしの青を漾し碧を蓄ふ深き測るべからず沿岸皆平沙一白雪の如く山嵐水藹と相映帶し水西の山懸瀑あり流きて廢水に入る石橋を架し卧龍橋といふ橋西を閻王碓と為す所謂賈中丞が石を煨し路を闢く處是棧中の險かり然る中丞之を闢きしより險變じて夷と為り石棧碓の如く佛像を安置し更觀音碓と名く危巖あり像昔より聳え横劃數百尺日光至らば水滴々下り幽陰凄冽夏秋の如し廢奴鋪に抵る相傳ふ褒奴此に生ると沙河を經將軍鋪に抵れば一大石水中に屹立す其狀壘參の如し將軍石と名く面は屹然砥柱の四大字を鐫す此より一蹊旋轉して上る七盤嶺と曰ふ嶺下二大石溪に臨んで對峙す所謂石門かり天心橋を渡せば路益々高峻又樹林の陰すべきしの無を一步一喘登渉の艱難極まされ嶺に關あり雞頭と曰ふ關前の大石狀雞頭の如し故に名く關上關帝を祀り羽流茶亭の旁に設け行旅咸就て憩ふ溪を隔て山腹白石あり瑩然と照映す相傳ふ漢時山神の化する所と道光中二煉師あり關西偏に就き山に依り木を架し像を設て之を奉す過者香を進め白石土地の廟と號す廟を出せば即ち眼取豁然襄中縣邑皆履鳥の下に集まる

棧道此に至つて盡す

山を下る七里褒城縣を經て東十餘里漢中府に抵る蓋し此地は漢の高祖が漢王とかり初めて都せし處去つて黄沙鎮に抵る鎮は元諸葛武侯の開く所或は曰ふ候此に木牛流馬を製すと舊州鋪を過ぎ何家宮に抵れば沔水管南より過ぐ水を隔て定軍山あり山腹蒼蔚の間は諸葛武侯の墓あり未だ沔城に至らざる五里處又候の廟あり古柏數十株四面翠を垂せ畫簷朱棟と相掩映し廟中候の塑像を安置す葛巾羽扇嚴然たる儀型より旁ら石琴あり長さ一尺六寸径一尺上は章武元年の四字を刻す古翠燉すべし廟の右數十歩馬超の墓あり沔水に沿ひて東す十里可り怪子坪の遺址あり即ち諸葛武侯が旧壘かり迴水青龍の二橋を過ぎ又墓門に入る門中小祠あり亦武侯の像を安置す門を過ぐ數十歩一土堆隆然起る是を實に武侯の墓なり塙垣之を圍み墓上草冷々として常に濕ひ松柏天を參し日光を遮り蔽ふ其枝下は垂る數十尋翠色滴らんとす墓後二桂樹僅かに地に出つ則ち皆六七の岐を為す皆數圍明朝の萬曆中趙健と云ふ人來り地勢を相し候の墓に詰り偽と為し遂に墓後數歩に就て更に一碑を建つ此碑東北に面し題して漢の相丞諸葛忠武侯墓といふ邦民の候に於ける飲食必ず祭り水旱疾疫必ず禱る墳を命



墳と云ひ廟を爺廟と曰ふ歴代相浴い以て崇敬を致す山下又一水を環す其内萬軍を容るべし  
即ち黃忠が夏侯淵を斬る処去つて沔縣に抵り青陽大安柏林寧美黃壩等の州縣を經由し四川  
省の神宣駅に抵る

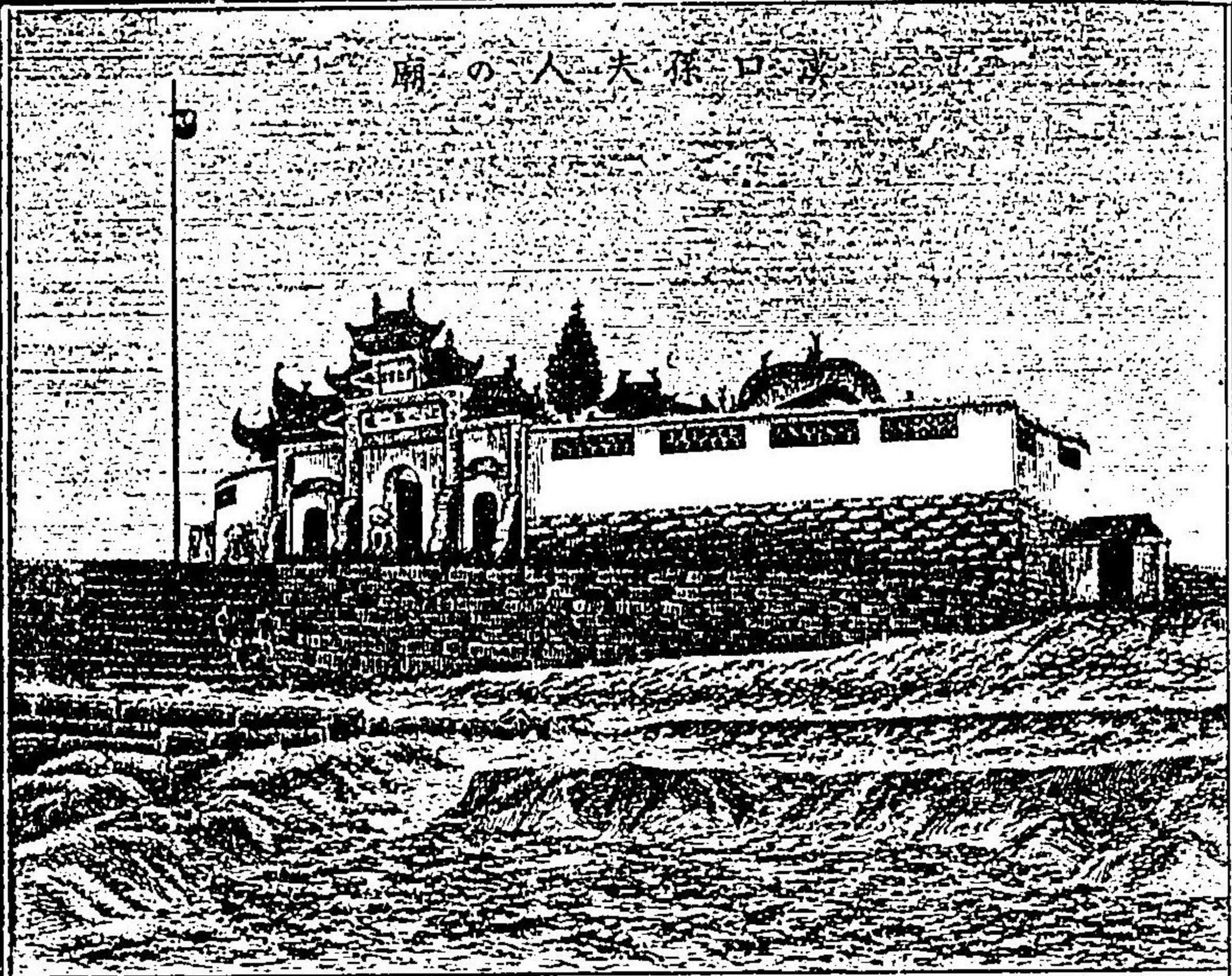
既而四川省に入り神宣駅を發し西棧中の高峯朝天嶺を踰え廣元縣榆錢鋪を過ぎ桔柏渡を踰  
え昭化縣に抵り費禕の墓に詣り牛頭山上關壯繆の祀を拜す關あり劍關一に劍門又劍閣と云  
ふ關を過ぐ數百步姜伯約が軍を駐めし処其下一水澗々と鳴り水を隔て丘上伯約の祠あり  
去つて劍州に抵り柳池溝を過ぎ武侯坡に抵る諸葛武侯師を出せば常は此に憩ふ後人因て祠  
を立つ武連驛上亭一名琅瑯駅を過ぎ七曲山を踰まれば即ち送險亭にして西棧の險此に至つ  
て盡く故より以て名く次で梓潼駅に抵れば老柏道を夾み大なるもの十圍相傳ふ蜀漢の時植ゆ  
る処と宿化鋪坑香鋪を経て茶坪河を渡り行くと數里石あり水崖に屹立す大さ一茅屋の如し  
面は飛雲轟鶴の四大字を鐫む皂角鋪羅江縣を経て白馬關に抵れば翠柏山に滿ち龐靖侯の祠  
あり綿陽河を渡り德陽縣に抵れば此より西南廣袤千里土厚く水深く眞は沃府なり又水を渡  
りて小漢鎮漢州を経て彌牟鎮を過せば八陣の壘あり四旁城門を象り中は土壘を置を高さ約

三尺序を逐ふて羅列せ今猶七十有一を存す廣輪蓋三十六畝諸葛武侯の祠あり八陣の壘は回  
す其背則ち鎮城なり祠旁雜貨を攤し以て客を待つ者店相屬し往來市を成す聞く蜀中八陣の  
壘一あり其夔州夙復浦に在る者蓋し行營布陣の遺制江路を防ぐ所以なり駟馬橋に抵る即ち  
古昇仙橋司馬相如が柱に題する処橋を過れば又諸葛武侯の祠あり祠前より過ぎ成都城に入る  
蓋し成都は禹貢梁州の域古の蜀國秦は蜀郡といひ漢は廣漢益州と曰ふ三國の時蜀之は都し  
晋は成都を錦城と曰ふ唐は劍南南京又四川といひ宋益州といふ元明清成都となす古蜀國  
は人皇の際に闢け黃帝の子昌意蜀山氏の女を娶り帝嚳を生み其支庶を蜀に封ぜり夏商周を  
經て久しく中原と通ぜず即ち秦に至りて伐山開國始めて路を通ず所謂沃野千里別は一天地  
を為せり成都久しく錦城の名を擅す陸放翁曰ふ七年夜雨曾て知らず名豈は虚傳せんや中  
和門外萬里橋あり諸葛の語に因て名く橋南錦宮古城あり西南浣花溪あり百花潭と名く都甫  
草堂は溪上に在り都人の遊賞地府内の洗墨池は揚雄文を草する所府北の武擔山は昭烈即位  
の地威鳳山は後主劉禪が射を學し処又天回山あり玄宗回鶻の所支機石あり成都賣卜の人  
問へば相如宅あり當爐今尚文君に逢ん府南龍泉山あり頗る巒岷岷江あり則ち四瀆の一俗に



汝江と名々江路成都は達するを以て舟府下は通ず又二渠あり一を外江といひ一を内江といふ蜀人此水を以て錦を濯ふ故に錦江と名く王壘壘二關は灌縣の西に在り俱に青海西藏の通衢なり、市内臥龍橋の近傍骨董舖書畫玩具書肆等最も多く青編縹帙度閣の間は紛綸たり而して成都は現今四川省の治所にして全省の百貨皆集まる蓋し蜀の地方数千里多く金銀茶石炭蠶絲等を産し近年又地大ひに闢け秬稻及び他の諸穀を種え利を獲る事甚だ大なり

市街の南門を出て、萬里橋を過ぎ行く事三里先主元徳の廟あり廟宇南向昭烈の塑像冕服中に當りて立つ北地王及び關羽張飛及び其他の教子左右に倍侍し文武諸臣皆東西二廂に羅列す諸葛武侯は則ち別は祠を廟後置く廟の左に一池あり菡萏正華清香人を襲ふ池は活ひ右折する數十歩歸然一丘あり翠柏蒼竹四面を圍繞す即ち惠陵かり廟門を出て西北に行く五里浣花橋あり橋を過ぐ數十歩草堂寺に入る殿閣巍然像設莊嚴殿西より左に行けば慈竹路を夾み翠眉字に徹し愈進めば愈遠く清流屈曲修廊相属し杜工部の祠あり像の崇三尺許衣冠にして坐す其左辺像を石面に刻し祈祀するものは陸放翁たり祠の西渠を引き池を成す壑有り數十、青羊宮を過ぐ宮の規模極めて大なり中は劇場を設け又商賈雲集百貨山積人雷汗雨殊に厭ふ可し蓋し蜀地張獻忠の乱を経文物蕩然遺跡旧蹟の考究すへきかき其今



保存するもの際後人の模倣を属すと云ふ、今より成都を發し東に東安府に趣かんとす水陸二道あり陸路を取り大面舖龍泉山泉舖石橋舖簡州林江寺取資馬縣等過ぎ雁江を濟り資州を経て唐明渡即ち珠江を涉り銀山鎮を徑由し内江縣に抵きは路旁鹽井多あり硃砂約を三千尺廣さ僅々尺は過ぎず民衆を抱み以て食糧を製す蓋し禹域塩を出す數種あり其海水を煮て成るものは鉤鹽山東南淮廣南閩浙及び井を抱む者蜀及び滇黔最かり水土は沃し或は兩過鹽池自然に成るもの階成鹵風最り若夫巴東胸膠井水缺て鹽を成し中は當りて成起し西邊漸く平舖金を張る狀の如き解州則ち廣南よりせば一又即ち鹽を成す此其大略也蓋し地方海を距る遠きは則ち必ず鹽池鹽井あり神の人を患む又鹽を



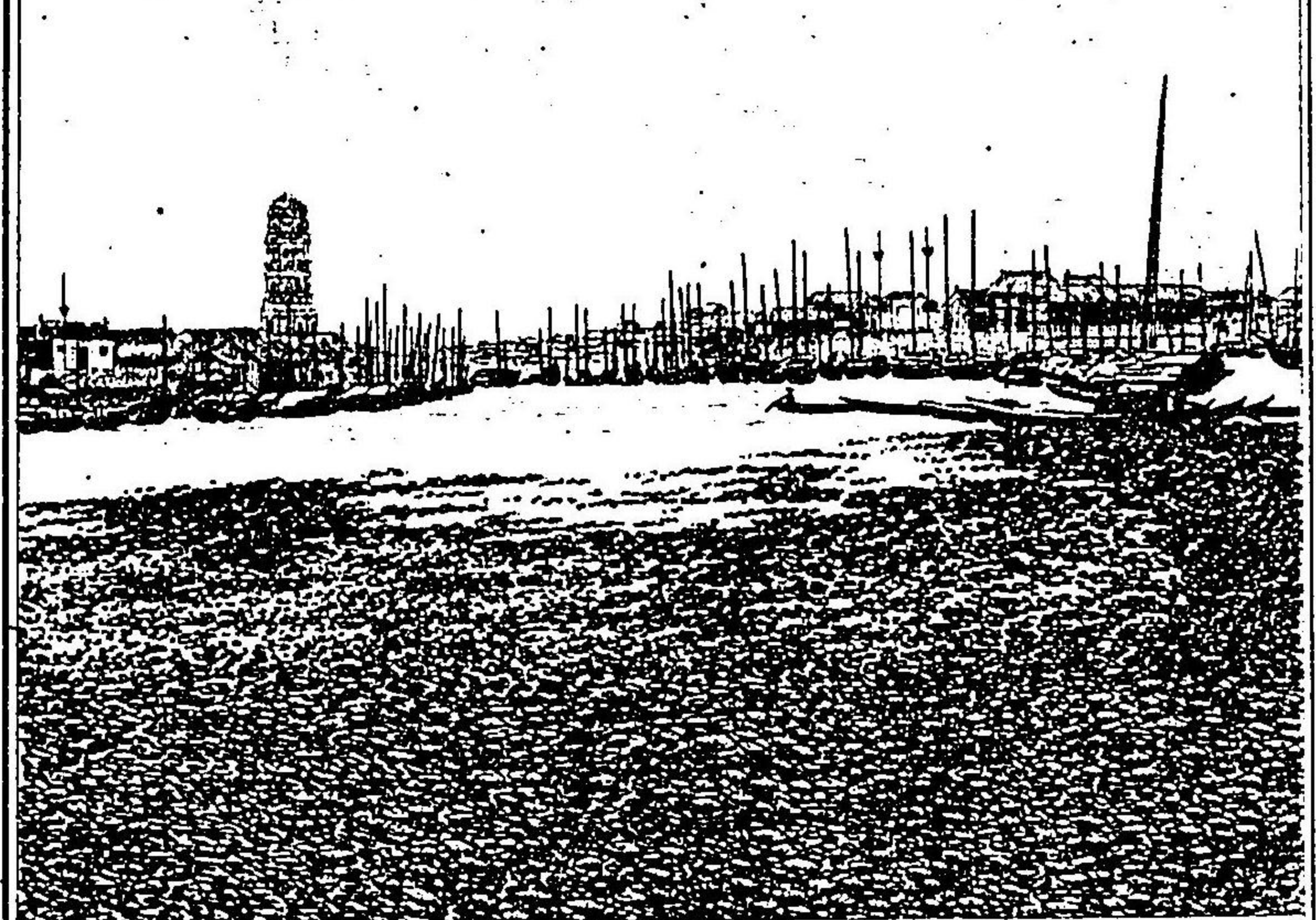




の居る所と山下は則ち城市烟火依然として人間の世馬唐灣を過ぎ鉄門坎に抵せば急湍激流忠州は其の南岸に在り瀟湘荒涼觀るに足るものなし石寶塔を過ぎば一大石あり四面削成し聳立三百餘尺趾より閣を起し層々級を爲すもの十二以て巔に屬し一梵宮あり聲聲隱々雲際より出づ舟行程を食るを以て登る事を得ず港むべし武林關雙溪子胡難を過ぎば奇石江に滿ち大なるもの大旗を飄へす如く層樓を築く如く長かるもの數里を跨り橋梁の如く堤防の如し兩岸の山亦坑如慈如愈出て愈奇舟行迅疾左右顧眄は暇まな々萬縣に至り巴陽峽を経て雲陽縣に抵せば城市矮陋獨り南岸新多の張飛翼徳の祠あり金碧爛然入目を眩す舟半邊灘鞠泥子三塊石靈姑洗安平歌漫里三沱等を経て夔州に抵る街上の人家多く并法瓦屋僅かよ十の一は居る同治九年江大漲し城上水深く大餘は遠く南門漂ひ居民の水を門上を避くるもの皆魚腹に葬る今未だ旧觀に復する能はず蓋し城壁の江に叩する高さ八十尺にして水其上に出でしなり

小舟を僦ひ往て奥腹浦八陣の面を觀るに方水底に在り見る可らず舟人云く天寒く水落つせば則ち六十四絶猶其髮髮を見る夫の衆々の石渦回浪湧の間は在り數千百年を経未だ曾て轉移せず奇と謂ふべし一山の江に臨みて起るあり之を白帝城の遺墟と爲す舟を舍り山後より螺旋して上ぎは殿宇巍然旧公孫述を祀る明時之を廢し更は昭烈を祀る庭中仙人掌樹あり皆高さ十尺に過ぐ空に觀る所なり

景之湖蒸



殿を繞り老樹多之徘徊時を移し舟の上つて聖唐口の抵せば絶頂堆く江心に屹立し鐵塔を岬之を望めば乱石層累して成るもの如く其實一大石なり是を大瀧潭と爲す二三の絶頂あり舟曲折其間を緩て行く大瀧潭勢甚だ急疾舟人必ず瀧に隨ひ番曲して過ぐ頗る危険なり

蓋し峽口入ぎは則ち兩岸懸崖立石破天驚の勢あり其水色粉壁なる者あり赤甲なるものあり色は隨て名を得又巖數十級を成し拾て上る可きが如き者あり之を孟良梯と曰ひ象鼻下向江に飲まんを欲する者の如きあり之を香鼻と曰ひ頭を圓石を戴き摩訶と欲する者あり之を描鼓臺と曰ふ巖腰洞あり日月の並ぶ懸が如き者あり之を男女乳と曰ふ其他形を成し舟を取る各同じが字畫畫のよき所ありなり



南 京 府 孔 聖 殿



又懸巖凸處或いは一椽の土を蓄あり種々の穀を以てい苗  
 皆倒生頭髪の髮髮垂する者あり風稍峻の巖上居する者數  
 戸木客と相距る著し遠き無大溪谷を經て巫山縣に抵る縣城  
 北岸の山腹に在り麓地を去る一百二十里市蕭條亦同治の水  
 災遭り近々巫峽の諸山を著し秀翠畫の如く神魂爽越て十二  
 峰の上の在り  
 行く半里將巫峽に入らんとす北岸神女廟あり范陸二記に據る  
 廟本峽山嶺真觀に在り蓋後人之を遷せたり已峽又入瀨  
 勢瞿勇如くならされども亦險惡なり江を疾むの山皆峻絶  
 摩し草舟挿生間憩由と為すもの理唐に比すはほゞと水青  
 石洞に抵る人家十戸可り聚りて邑居をなす北岸は則ち巫山十二  
 峰前後峻嶺其傳るもの特に六七峰而已最東の二峰唐白雲如  
 細絶刺畫頂は雙玉筍を挿み點玲瓏雲光相掩映し最西の一

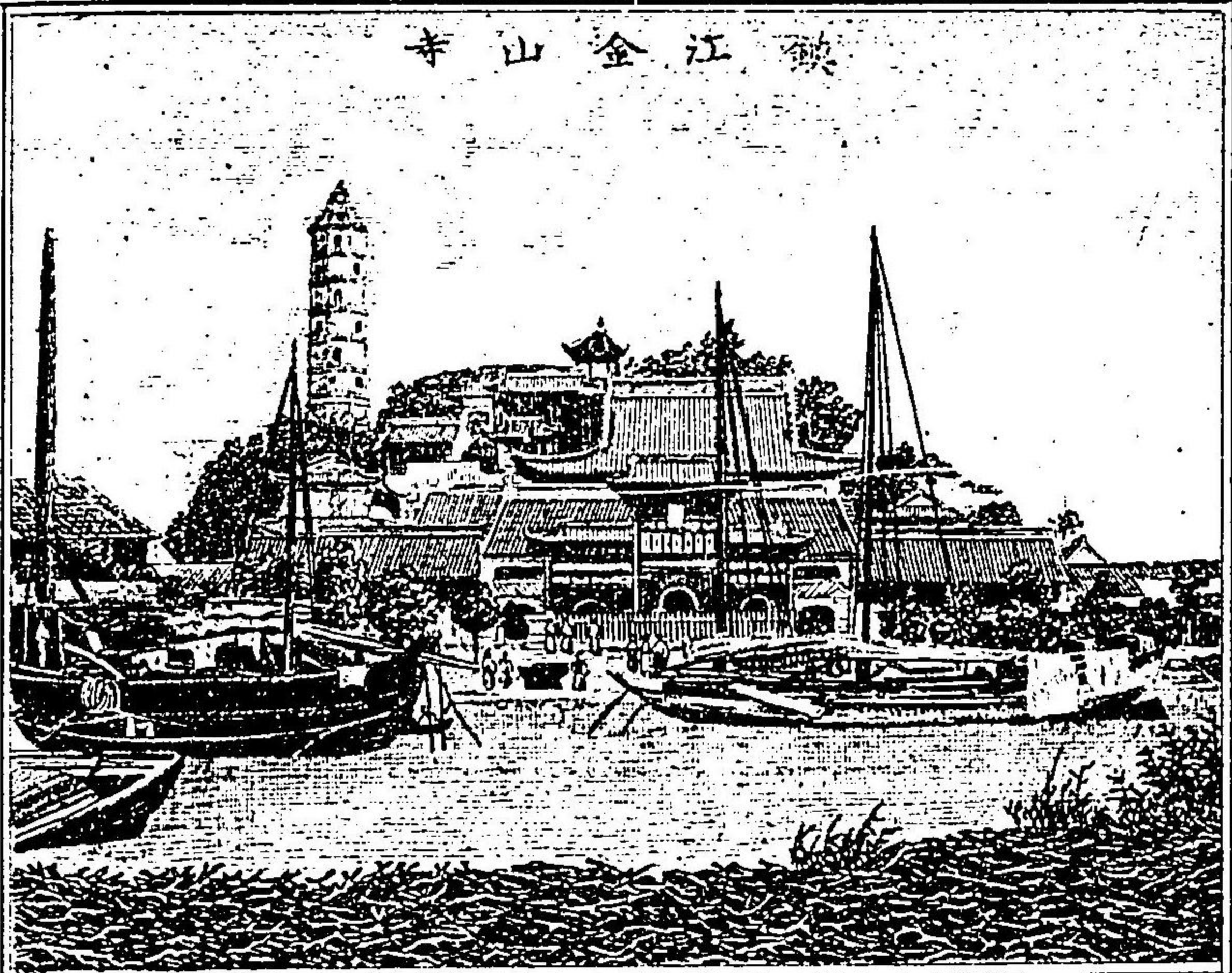
南 京 府 明 塚 古 跡



峯其形亦相肖る諸峯皆峭秀明眉黛紫嵐霧の態や他山の現  
 奇巖怪石自雄を為す者も剛柔相制し主賓相得以て絶大の奇觀  
 を成す宜乎古來騷人韻主を圖畫に載せざるを諷詠興推し  
 て名山第一と為すや巖間寒く懸泉あり其多き數ふべから  
 ず謾々聲あり松風を聞かか如し皮石に抵る即ち楚蜀過脈の  
 宛南岸不聚あり殆合を屋相問み頗る楚漢就て醉を買ふべき  
 あり舟行一轉忽ち奇巖を得鐵棺峽といふ形の似たるを以て  
 名を得り南木園を經て廣東池に抵る巫山縣を去る百十五  
 里巫峽此に至りて蓋大低峽に上るの舟皆風を候し帆を挂  
 或は數十人之を導き懸崖を蹄て行路絶せざるは輒ち皆舟に  
 上り槳を導推し數刻を待て舟を進むる然るに灘を下る舟は則ち一  
 瞬重快なる事焉の如し但覆敗の患常舟楫に在り  
 是より江省入り巴東縣に抵る亦水は地す城郭未だ修築せず

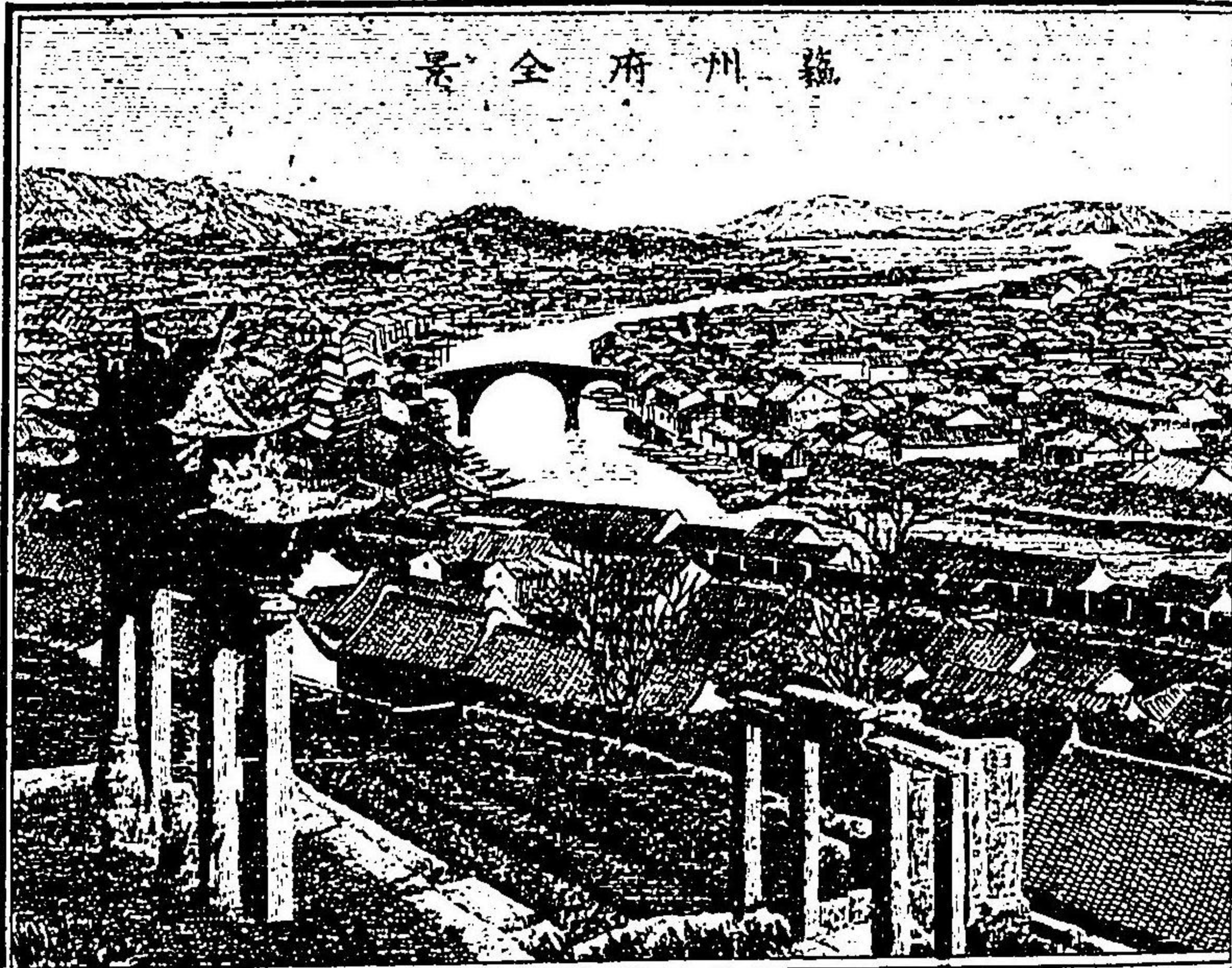


江金山寺



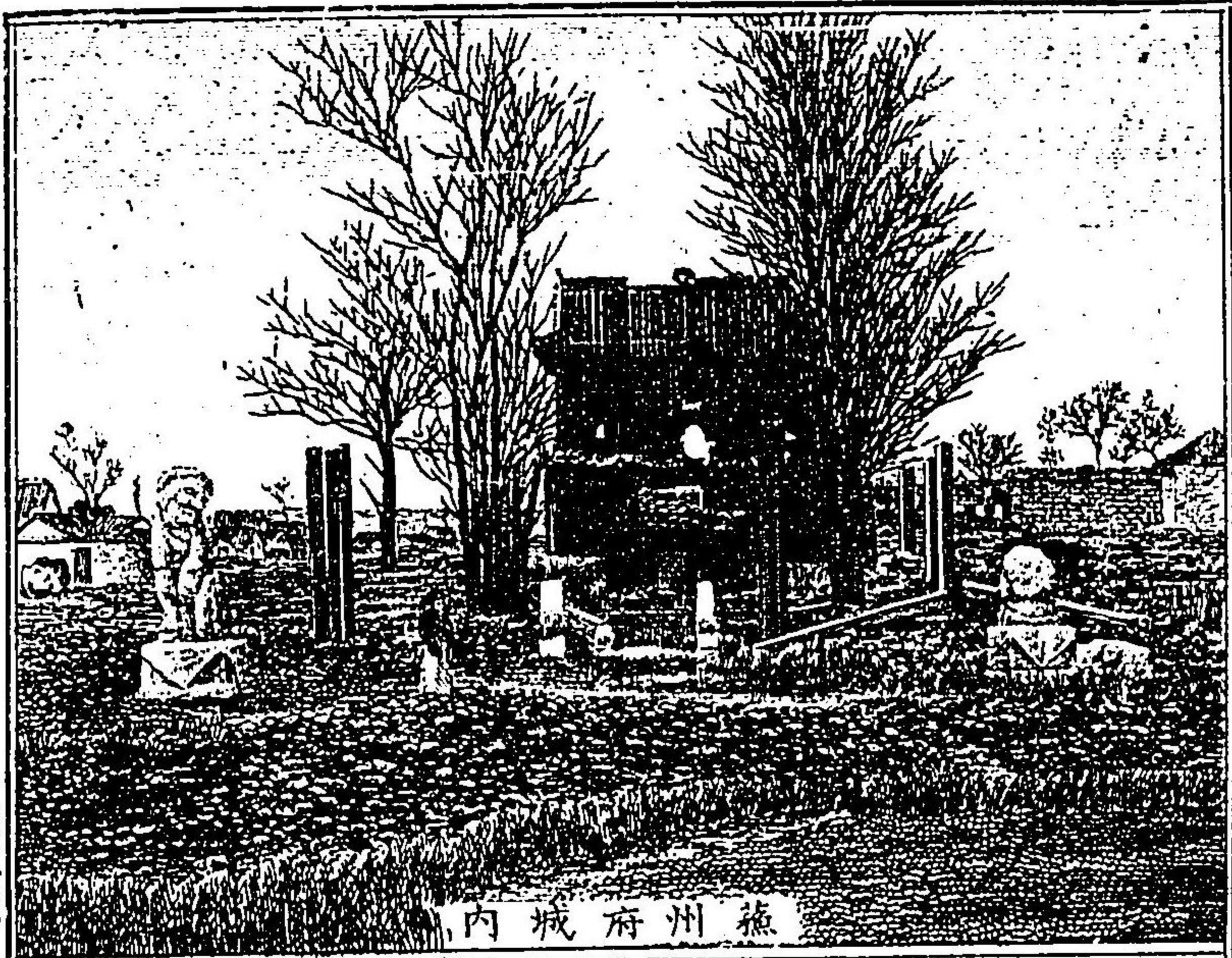
尤も荒寂なり、寇來公祠及び白雲觀皆翳し、茂草となり、遺跡考ふべからず、獨り秋風亭僅かに基址を存す、牛口を経て石門關に抵る關は、岸に在り、崖を攀り登道と爲す、道傍の土皆深黒色、類乎崩る者あり、巋然として崇きしものあり、一望壘を激する如し、之を詢ふ、泥炭なり、蓋し巴東の東多く泥炭を産す、右炭は比せば火力劣劣り、又烟氣無し、水を注ぎ之を行筒に填り、橋賣して之を出せば圓塊狀の如し、重さ一斤價一文、業雖吐灘を過ぎ、人醉巖入り、灘險を出づれば北岸に歸州城あり、關關頗る殷盛を覺ふ、香溪の江に入る處を過ぎ、兵書峽及び新灘の險を徑馬肝峽を過ぎ、遠洞灘に抵る、巨浪重疊、舟楫多として大洋に就するが如し、此より水稍濶く亦灘險多し、黃陵廟は南岸に在り、廟背大峰峻壁の上、黃石の如く、又一の黒石あり、人之を牽が如し、黃牛峽へ入るは所謂假の十二峰、争て齊漢、巽、奇峭清麗、真の

蕪州府全景



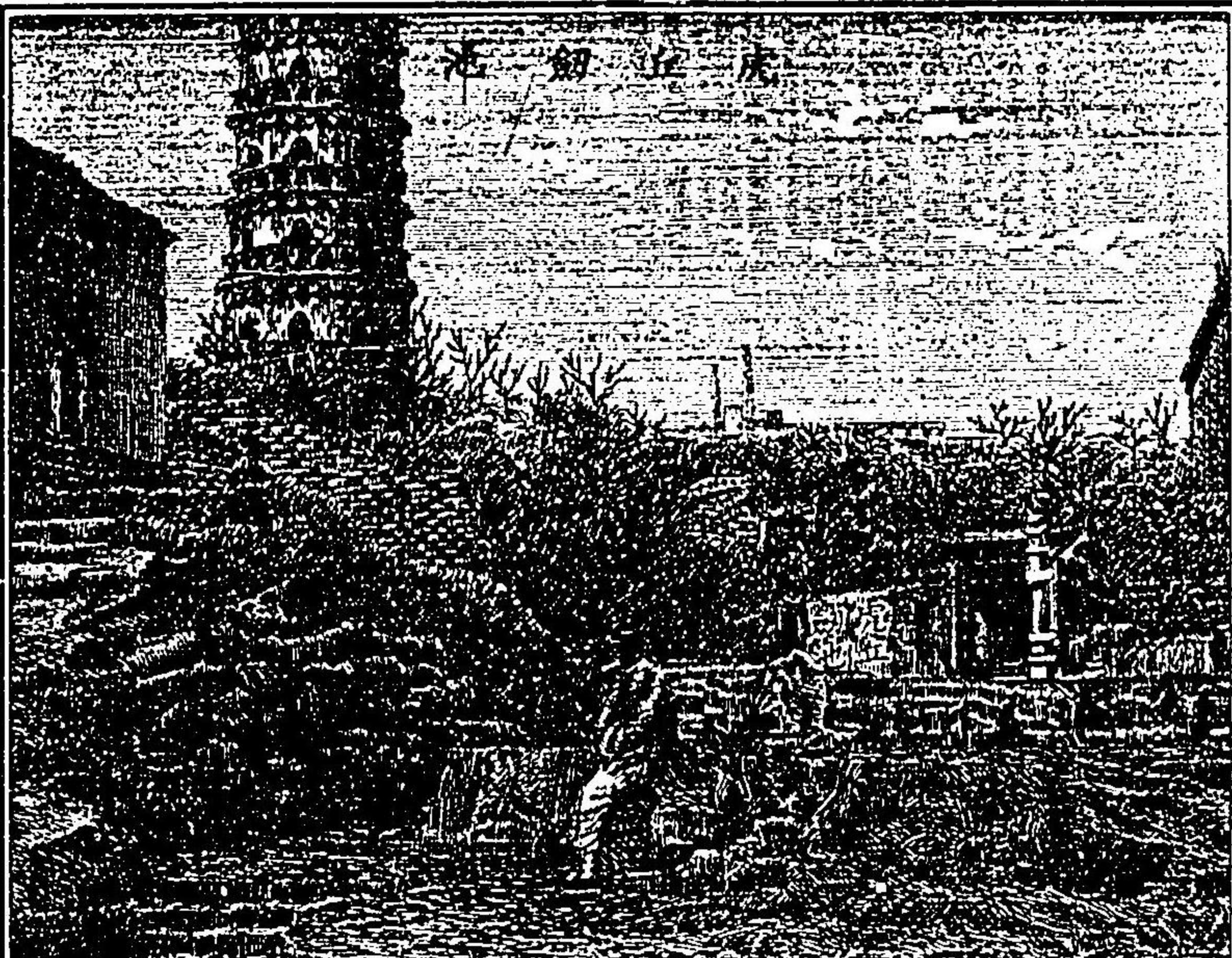
者、讓らば舟、舟前のかく山舟、逆ふて來る、愈來り愈、故二之を名狀する能はず、徒目送賞する、可憐秀峯をして聞かざる、らし北岸の山頂大孔、豁開孔上條の大石、横臥し、橋を架する如きものあり、之を天橋橋と云ふ、南岸は別ち怪石山、腹に羅列し、老猴人立相戯むるもの、如し、其數、五石猿子と云ふ、蓋し、聖唐の山は、僅かに能く毛を生じ、巫峽は、則ち毛を帯び、稍蒼々、黃牛、三峯、は、樹木、陰森、柯を交、翠を積、し、瀑水、其間、こけり、断つが若く、續くが若く、盡を巧みする者、を魚と云ふ、其真を傳す能はず、扇子峽を経て、平善壩に抵る、は、則ち、峽漸く盡く、蓋し、聖唐、黃牛、巫峽と所謂三峽、は、其、峰巒、巖、崖、雄、偉、奇、狀、の、觀、凡、天下の、山水を、擧げて、優、其、右、に出づるもの、無し、鄧家、注、は、抵る、平田、淺渚、柳、柳、映、秀、是、於て、神、意、綺、綺、重、萬、馬、の中、に出、て、燈、紅、酒、綠、の、場、に入る、如し、宜、官、府、は、此、を、距、る、十五、里、





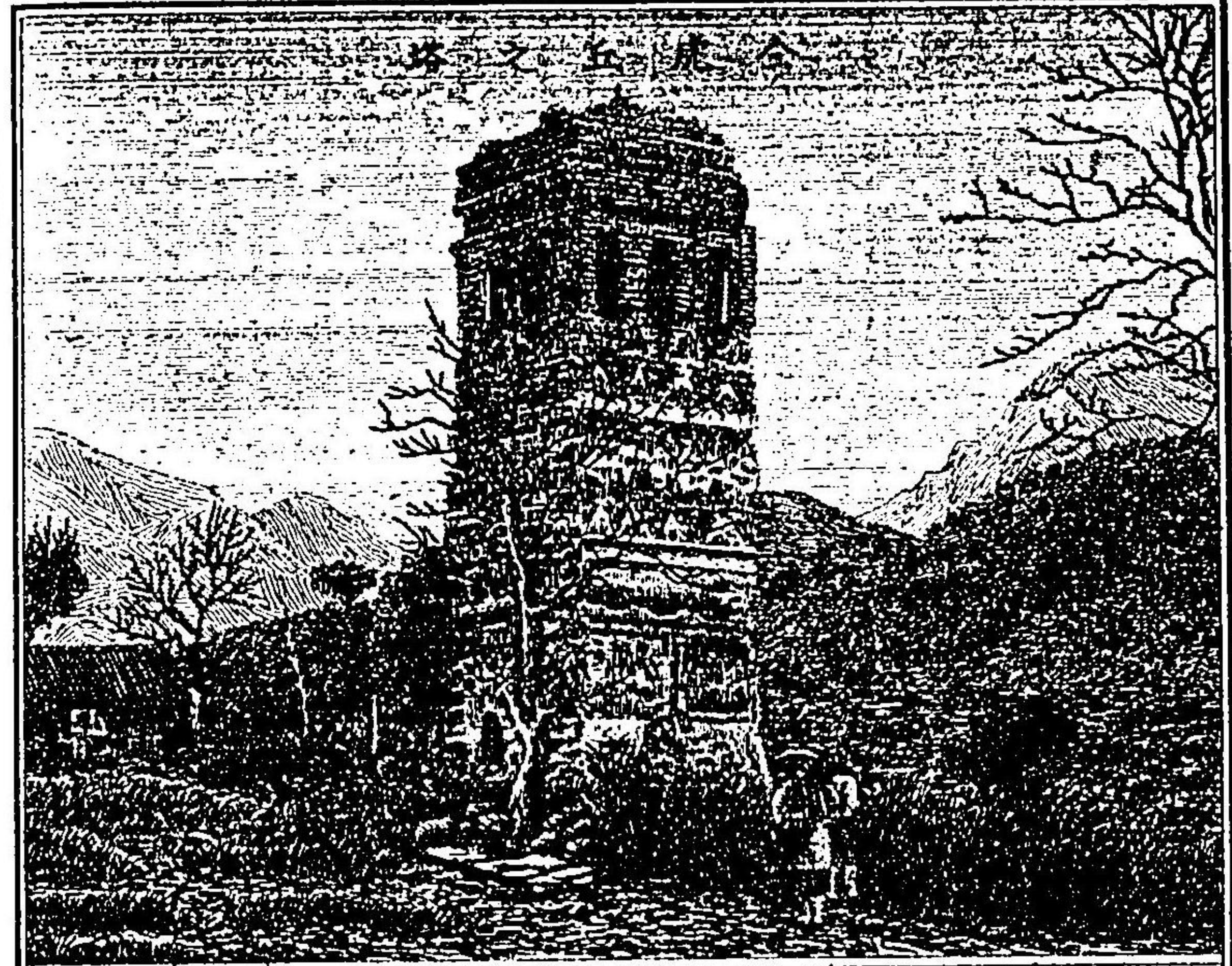
内城府州蕪

鹽船を下り更ニ小船を賣ひ宜昌の城下ニ抵る此地は即ち夷陵  
 古以て重鎮となす三國の時兵の西陵たり街衢殷富城南江  
 水がれき一大坂を成す帆船集益上海の一都會なり歐陽文  
 忠嘗て此ヲ論せらる遺跡其ノ識るべからず  
 蓋し直隸其他北地ニ於ては國圖の設けか人皆豚栅の内ニ矢し豚  
 常ノ矢を以て食をなし種削背を露は唾を腎邊ニ聚り之を驅せ  
 じ去るヲ殆ど堪る能はず西南長安ニ至り始めて國圖設け  
 潔からずと責し亦無き勝今此府ニ來せば別ち人皆潔を好み  
 物美からざる光ノ葡萄酒亦京師ヲ讓り紹興酒の如き則ち其尤著者  
 なるものなり又舟より纜を解く南岸の山恒然地横して峽中の  
 山脈南を走り其背に出ず者懸相聯り東雲の勢動湧走するが如し  
 南岸判門士碇有り碇面大なる穴を洞開す徑數丈崇々之碇其  
 頂入行通すし名は仙人橋と云ふ北岸虎牙山あり判門と相對す



公孫述が浮橋を作り以て漢兵を拒ぐ処山下の灘亦虎牙と名水平席  
 の如く唯波流湍激小獸を成す見るとみ枝江縣楊溪口を過る東市小  
 抵北川省の木材ヲ聚る木材の川省は出るもの縛りて大筏を作り  
 上ノ又屋ヲ構へ資生ノ具皆備り舟もの六七戸小至る或は圃を作り  
 菜蔬と種も者あり水長と候流ま頻て下る蓋し東坡が所謂魚鱗  
 子の類なり江口小抵る地ヲ茶と摩市屋棚茶と號する者皆餘戸は  
 下り亦舟ノ廠と云ふ木材を售る和滋と過る虎渡口を抵る江水の洞  
 庭湖小注を処り沙市小抵る沙市小沙頭と名く客舟の岸小泊する  
 者相排し相倚り岸を見ず枝江を過る西望復然無く唯帆影烟水  
 森茫の間に出没する有のみ沙市の北十五里荆州府より春秋の時楚の  
 郢都より梁の元帝都也此小定も周師を至國を擧げて保と爲す古より  
 荆州守難し稱す其地平衍沮洳北は則ち峻嶺巖閣之が阻と爲  
 す無く長江之小流は沿岸皆舟を載す故小呂蒙白衣櫓を搦して





蘇芳と覺るもの智の定ちるものより蓋し備南此と  
 并て日夕守壁方と給す小暇まらば勢い固より然るより沙市と出で  
 匣子溝祀穴石首縣等と過れば西岸皆岸く江面と距る殆ど尺も盈たず  
 甚きは則ち水と平なるもの宋穴舖と過ぐれば前は當りて華上縣の  
 諸山と望見す江流曲折舟往復すが如く山亦左左右定る所有る無  
 洪家灘と過ぎ踏市駅監利縣中港干口池箱等と過ぐ兩岸水は没  
 して人家皆波光激漚の中に入り既して岳州の諸山蜿蜒として出ず  
 賈船の帆と掛け洞庭より至るもの鷓鴣の群飛すが如く山翠と相映  
 下舟も青く舟も白く變幻常無 蓋し洞庭は大江と衣帶地を劃し江  
 の大波も會て没して水底は在り行樹微か小梢末と露は一點々蘇の如  
 く湖面則ち皎然一白と際なきに至ると云ふ行く數里岳州の山湖と導  
 き北小走せ湖の江に注ぐ処に至りて盡く是は於て播鼓山中小出て播  
 鼓小由り流と廻る千里洞庭湖に入り東岸の都會岳州府に抵る

岳州府は禹貢荊州の域周三苗の地春秋は麋羅戰楚國の地秦の長沙郡呉の重鎮晋は建昌劉宋は巴  
 陵梁は巴州唐隋は岳州宋に至りて岳陽曰ひ九は岳州路とふ 明初め州と為し尋で府とふす清即ち  
 之小因る街衢清潔肆鄺柳比湖岸第一の都會あり洞庭湖は則ち府の西南小在り沅漸元辰叙酉澧澧湘  
 の九水皆此小會す故も又九江と名く九江中沅澧湘最も大なり皆南より荆江に入り洞庭より過て瀟  
 其澗五瀟と名く毎歳七八月の間岷峩雪消えて暴漲し水荆江より洞庭は逆入し清流之が爲小色を改  
 む杜甫謂ふ所氣は蒸す雲林澤波は撼す岳陽城と即ち是なり岳陽樓は府城の門樓(表紙)真図有り登  
 せば君山前より朝暉夕陰風雨晦冥俯して洞庭と瞰るべく真は宇内の大觀又青艸湖あり北洞庭小  
 連り南瀟湘は接し東汨羅の水を納る夏水長ずる毎小洞庭と一あり水涸る時は此湖先づ乾き青艸生  
 ず又洞庭の西赤沙湖あり秋夏泛々洞庭と一あり水涸る時ハ赤沙を見る舟小上り湖口播鼓山の前  
 小出づせば二水相會す即ち北は渥丹の如く南は滄然藍と蘇し而して中間一道清濁相持ち滾々とし  
 て東に珊瑚樹を成す揚林磯は抵る江勢彎環征奮を開く狀の如くとく南邊の藍色變りて黄色とふる蓋  
 し洞庭の水此に至り漸く江と相混和するより日南磯及び新堤を過ぎ行く六十里南岸一大阜と得前  
 面削立色渥赭の如し即ち嘉美の赤壁なり北岸の烏村は即ち周瑜が曹操の船と焼きし処石洞司は抵



る江益々濶く嘉興縣下口金口を過ぎ鸚鵡州に抵る人家擲比炊烟湧くが如く復芳草萋々の景致不非  
 帆と揚げ東南に轉り武昌の城壁は循ふて行く武昌は黃鶴山包み城と為す規模大此地禹貢不在  
 ては亦荆州の域と為す春秋は夏内と曰ひ漢は江夏といひ三國の時吳人都を遷り名けて武昌といふ  
 地最も肥腴多作物を産す蠶絲茶綿花石炭米穀を主とす北岸は則ち漢陽府所謂春秋の鄖地三國の時  
 魏は屬し後又吳は屬す唐は沔州と曰ひ又漢陽と曰ふ大江は北流して漢水を控へ南北の要衝を扼す岳  
 陽と皆鄂渚の門戸たり咸豐中髮賊已に岳州を陥せ水陸並び下り奪ひて之を據る府城の東北隅は小  
 阜あり樹木森蔚曾肅の墓あり漢水の對岸漢口は現今支那外國貿易内地の要衝人口六十万を過ぎ商  
 賈雲集通商日小月は熾ふり我日本人の直輸不熱心なる者殊に注目せべし府内孫夫人の廟あり前漢  
 蓋し宜昌以東江路平漫以て汽船を通ずべく英人近年航路を開けり黃鶴山を望む其西磯は江を劃  
 して起る磯上の層樓あり所謂黃鶴樓なり前漢真圖らり山は因て名を得黃鶴樓は始め齊梁の間に見  
 る厥後興廢一ふらば今の樓は國治中更に造る高き三層八面軒敞尤も遠矚し宜し武昌漢陽皆秋漲を  
 一包裹する所乾達婆城海上に變幻するもの如し碧瓦粉壁魚鱗雜選商船四集桅檣林立南北則ち廣  
 原天は際し蒼々蒼々目盡て止む樓上乞食多々客を擁し錢を乞ふ之を麾くとも去らず匆々衣を拂ふ

て樓を下り更に北岸晴川閣を上る閣大別麓に踞し亦大江の濱に在り蓋し晴川歷々の句は取り名と  
 為す崇々黃鶴も及ばば邀瞩亦能く相若かず山上禹廟あり山後月湖あり湖中の小洲伯牙琴臺の遺址  
 たり汽船は乘り黃州府に抵る坡遊の赤壁實は北岸に在り一小岡江に臨み削るが如く赤色なり因て  
 名く一名赤壁磯は蘇子が遊びて赤壁二賦を作る即ち是なり賦中の所謂斷岸千尺要する小文士の虚  
 夸不過ぎざるのみ又周郎が瞞老を破りし處と為すは非なり三國の火攻は武昌府樊口上の南岸より  
 り即ち前記す府治の東東坡の故居あり宋の元豐三年蘇軾黃州に謫せらる臨臯亭を寓居し後此地  
 と得て雪堂を立て自ら東坡居士と號す江西省に入り九江に抵る

遺拾

江西省中襄陽府の西二十里隆中山下諸葛亮の宅あり宅西避暑臺あり昭烈帝草廬を三  
 顧す三顧門あり又東南鹿門山あり漢の龐徳公唐の龐温孟浩然皮日休俱に隱居せし処西  
 漢の檀溪あり昭烈帝の廬を乘り一躍して過ぐ是より鄖陽府の西白兆山あり上は李白の讀  
 書堂あり荆州府城龍山門の西北擲甲山あり漢の將軍關羽甲を此に棄つ其石首縣の西南  
 繡林山は昭烈帝が孫夫人を娶りし処繡林の如く因て名く宜昌府下歸州城中楚雲山あり楚の襄陽王を此に建つ  
 昭君村は東南千里あり白雲秋風の二亭は西東縣に在り楚雲山の建つ所陸放翁稱して天下の幽奇絕境と為す